

---

# 目が覚めたらシンジになってた

マチュピチュ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

目が覚めたらシンジになってた

### 【Nコード】

N3067U

### 【作者名】

マチユピチュ

### 【あらすじ】

主人公が目覚めた場所はどこかで見たことのある光景そして何故かいつもと違う制服を着ていた。よくよく考えたらそこはエヴァの世界。そして現れたサキエル先輩。シンジに憑依した主人公はこの先をどうやって生きていくのか。そんな感じです。200万PV? 見間違いだろ? この小説は東方成分多数とその他作品のクロスオーバーがあります。それらを理解できる方のみお読みください。なお、その事を理解できない方の感想、メッセージへの文句はお答えしかねますよ。注意が遅れて申し訳ない。

1・まずは冷静に青い車に乗りましょう(前書き)

色々不安な気がしますが何とか書いていこうと思います。  
続かなくなったらごめんよ！

1・まずは冷静に青い車に乗りましょう

「……あれ……こじって……」

気がついたら……

「えっと……どじっ？」

目の前に映るのは何の変哲もないただの電話ボックス。  
そして何故か俺はその受話器を耳に当てている。

『現在特別非常事態発令中の為、全ての回線は不通となっております』

「特別非常事態って……やばいんじゃないの？」

なんかエヴァっぽい雰囲気……この都会なのに荒廃した光景。  
そしてうだるような夏の暑さ。そして俺を何よりも驚かせたのが

「車が…横転してる…？」

ガードレールを飛び越して車がボロボロの状態で壊れている。  
一体ここで何があった……化け物でも来たのか？

「……やばいんじゃないの…これ…」

しかし…よくよく考えたら、ついさっきまで大学生だった俺が何でこんなところに？

そして何でこんな碇シンジみたいな服装……

「あれ？リュック…カッター…黒ズボン…細い腕……うっ！！？？」

突然耳を劈くような轟音が耳を襲う。とつさに耳を塞いで辺りを見回す。

付近の店のシャッターが激しく揺れ、地響きが轟く。電線が鞭のように風を切る音を鳴らす。

奥には…幻覚のように薄く見える人影。ホント…一体何があった。

「……って……ん……」

戦闘機のようなエンジン音が聞こえ、後ろを振り向く。

…あれもエヴァのVTOL機？それもずいぶんたくさんいる……

「……って……ええ……」

山の陰からさらに大きな物体が現れた。

…間違いない『使徒』だ（ゲンドウ風）

「サキエルさん。ご苦労様で……うええい！！？」

目の前をメビウス1か？ガルム隊か？とりあえずすごい早さで何かが通り過ぎた。

よくよく考えたら巡航ミサイルでした。すいません。

「使徒相手に通常兵器じゃ役に立たないですぜ」

案の定石をぶつけられた大人のようにのけぞるだけのサキエルさん。

いや〜3Dも進化したな〜こんなリアルタイムで映画を見ることが出来るなんて…

「ん？…なんか落ちてきた。え？ちょっと…こっち来てるこっち来てる…」

一機のVTOL機がこっちに向かって落ちてくる。

ああ、序でもこんなシーンが…って考えてる場合じゃない！…さっさとすたこらさっさ！

「いやあああああ！…！」

さっきまで私がいたところは見事にVTOL機に押しつぶされていた。

嘘でしょうが…ちょっとやばいですね。

あれこれ逃げようか見てようか考えていると、サキエルさんがVTOLを踏んだ。

そう、踏んだのだ。墜落して起爆性の高い飛行機を踏んだらどうなる

答えは簡単、どっかーんだ。

「ひびるあああああ！…！」

恐らく残りの燃料が少なかったのだらう。基本的に燃料が爆発す

るのは燃料が少ない場合。

燃料が満タンのタンクローリーに火種を投げ込んでも燃えるだけだ。

しかし残り少ない燃料の場合、なんやかんやで爆発するらしい。親父情報だ。

で、その残り燃料云々で爆発したVTOLEさんの爆発にもれなく巻き込まれたわけでした。

「ぎゃー！！かみのけが かみのけが！！もえている！！やけどはからだじゅうに ひろがっていく！！」

「ごーめん おまたせ……え……」

わたしは くるしみ もだえすえ いのちたえてしまった。

「いいから早く乗って……！！」

「死神が！死神が見えるうう……！！」

「くっ……！！」

とまあ、こんな感じでホイホイと誰かの車に乗せられたわけです。ちなみにその間その運転手さんが頭の炎を消してもらった。

ええ、ミサトさんです。葛城ミサトさん29歳。

ここですと気づいた。ここはエヴァの世界。何らかの理由でここに来てしまったのだ。

現在ミサトさんと俺は都市部から離れた空き地的な場所で待機している。

「えっと……あの……」

「ちよつとまさか……N2地雷を使うわけ!？」

「マジでか!？ちよつちみせて!」

「見ちゃ駄目!伏せて!!」

「ぬほっ!いい胸っ……」

お決まりパターン、N2地雷の使用。これでミサトの車もパーだな。

今頃発令所じゃ歓喜に包まれてるだろう、無駄な足掻きだが。

ちなみに俺たちは車の中でゲツダン状態。つまり大回転している。トミカを裏返して机の上で回したような感じだ。

「ぐうっ……!!」

「ぐぬおっ!!」

これは……酔う。



爆風が収まり、赤かった空が再び青くなる。

口の中がシャリシャリするが。まあ生きてるだけマシだ。

「大丈夫だった？」

「大丈夫なわけないっしょだいた」

「そいつは結構〜じゃあ…行くわよ〜」

「俺の意見は無視かよ」

「せ〜の〜」

「せいや!!--」

「よお〜っ!!--」

「ふぬぐおお!!--」

「ふぬぬ…!!--」

「ばああくねっゴツドオオ!!--フィンガア!!--」

「やめて!!--」

車が傾き、どうにか走れる状態になった。いや、まだ走れるかは分からないが

序でもアニメでもしっかり走ってたし、まあ大丈夫だろうと信じたい。

「ふう〜どうもありがと、助かったわ。ちょっと手形ついてるけど」

「ふふん…この日のためにゴッドフィンガーの練習をしたのだよ」  
「連れて来る人間違えたかしら…まあいいわ。私は葛城ミサト。  
改めてよろしくね」

「俺は…碓シンジ、童貞だ」

「何でそこを言う」

ここで本名を言ったら後々面倒になる。それくらい俺だってわきまえてるぞ。

ここは原作どおりネルフに入隊するしかないかな…

車の中で家族のように笑いあいながらネルフ本部へと向かった。

「さっきの化け物って、一体なんなんだ？」

「あれは使徒、正体不明の生物よ」

「しっかし派手にぶっ壊れたなあ…ローンとか大丈夫なの？」

「実は十二ヶ月分も残ってるのよ、大変よねえ」

「無理して高級車買うからそんな風になるんだよ」

「（…報告書と違うようだな…）」

「あ、あれが親父さんの働いてる職場か？」

やっとネルフ本部に着いた。車が隔壁つばいドアの前で止まり、  
隔壁が開く。

ずいぶん嚴重な扉だな、しかもでかかどネルフマーク描いて…  
ホントに秘密組織なのか？

「特務機関ネルフ…」

「そう、国連からの非公開組織」

「にしちゃあでっかくエンブレムが書いてあったが…そんな組織で  
大丈夫か？」

「大丈夫、問題ないわ、ところで、お父さんの仕事知ってる？」

えーっと…たしか…

「グラサンかけたホームレスでしたよね？」

確かそんな感じだったよな。色々職を転々とするが続かず結局は  
ホームレスになったよな。

「指令が…ホームレス……ぷっ……くく……」

「ww お？すげえ！本物のジオフロントだ！」

車の窓から外を見下ろすと、そこには夕焼けに染まった空にピラ  
ミッドのような建物

そして目の前には裏返った建物が広がっている。

これ一個にどれだけ税金使う気だ。

「そう、あれが私たちの秘密基地、ネルフ本部、世界再建の要、人  
類の皆になるものよ」

「へえ〜でっけーな」

「あつ…：そつだ、IDもつてる？」

「あ？」

「ほら、お父さんの手紙に挟んであつたでしょ？」

…：そつだ、俺は碇シンジ。ゲンドウから手紙をもらつてこつちに来たんだよな。

たしか…：序ではバッグに入つてたはず。

「えーつと…：あつた」

汚い字で『来い』とだけ書かれた紙、そしてその紙にクリップでIDカードが挟んであつた。

ぶつきらぼうのクソ親父ということだけは分かる。なんかアニメ見ても腹がたつたし。

「ん、ありがと。さて…：と、ついたわね」

車から降りて、電車に乗つて、次はベルトコンベア的な奴に乗る。  
ええ、案の定迷いましたよ。

「えーつと…：駅西口を出て…：北3番ゲートを」

「ボソツ（やっぱエヴァは載つてないか…：）」

機密中の機密。そりゃ載ってないわな。  
だがこんな本があるのに何で全職員はエヴァの存在知ってるんだ  
よな。

ってか…なんでこの本に機密って書いてあるのに機密情報載って  
ないんだよ。

「なんかやたらと複雑に出来てるのよね…」

「迷ったなら進め、人間の常識さ」

「そうよね！まっ…そのうちつくわよ！」

「こいつに任せて俺は大丈夫なのか…」

そういえばこの人って一尉だったよな……いまさら考えるのもあ  
れだが、

こんな奴がいる組織で本当に大丈夫なのか？

ゴミ捨て場やら焼却炉やら色々と迷って  
なんやかんやでエレベーターに乗った。

閉鎖された空間に二人のつかれきった表情。他者から見たらまさ  
に死人。

双方死んだような目で現在位置を示す力チ力チする奴を見ている。

「ミサトエ…あと何時間したら着くの？」

「もっ…すぐよ…」

するとエレベーターが止まり、扉が開く。  
死んだ目を生き返らせて扉の先を見ると

「…」

リツコ、赤木リツコだ。

特に説明すべき事がないコンピュータの天才。  
ゲンドウを愛してたが捨てられる中古品だ。

「…到着予定時刻1時間30分オーバー、どこで遊んでいたのかしら？」

葛城ミサト、人手もなければ時間も無いのよ

やべえ…サキエル修復完了したんじゃないのか？

まあそんな事を考える気力もない状態で…

「えへっゴメン！」

「はあ………礼の男の子ね？」

「そう」

「技術局一課、E計画担当責任者赤木リツコ。よろしくね」

「はい、よろしく、赤木さん」

「リツコでいいわよ」

ミサトと会った時とは全く違う緊張感を感じて思わず敬語を使ってしまう。

これが…カリスマか。ミサトには無縁の存在だな。

「ってかなげえなこのエレベーター。ミサト、アフターバーナーでも作動させてくれよ」

「無理に決まってるでしょ!」

「ずいぶんと陽気ね、報告書とは違うみたい」

こんなフレンドリーな雰囲気が続いてくれたらいいがねえ…

そんな雰囲気はこの先の目的地でぶっ壊される羽目となった。

1・まずは冷静に青い車に乗りましょう(後書き)

一応結末は考えています。

ついでに感想募集中です。感想が来たら作者が性的快感を覚えますので。



2・落ち着いてコクピットに座りましょう。暴れてはいけません。

赤い水しぶきを上げて、ボートが進む。  
そしてついに、あの放送が流れた。

『総員第一種戦闘配置、繰り返す。総員第一種戦闘配置。対地迎撃  
戦用意』

「おっぱじめたのか？」

「分かるのね、意味が」

「んなガキじゃないですよ」

「ふふ…そうね」

「……………」

ボートを降り、俺たちは暗い部屋の中に入った。

「シンジ君、あなたに見せたいものがあるの」

初号機か……そう考えている間に電気のスイッチらしき音が聞こえて、  
目の前に大きな顔が現れる

「んぬおあ!？」

「人の作り出した、汎用人型決戦兵器人造人間エヴァンゲリオン」

こいつが本物の初号機『EVA-01』…想像をはるかに超す大きさだ。

今はエントリープラグが挿入されていないただの大きな像。しかしコイツにパイロットの入ったエントリープラグを入れるとムスカが操作するラピユタの如き強さを発揮する。

やべえ、超乗りてえ。早く乗せてくれ。

「こいつをあのマダオヤジが企画したってか、男のロマンが分かる奴ジャマイカ」

『男がロマンを求めるのは、悪い事ではないはずだが』

スピーカーから静かに、しかし威圧されるような声が聞こえる。

初号機の頭の上部分を見ると、一般人から見たら絶対に引かれるくらい派手な服を着た、

しかし無駄に似合っているのが腹が立つホームレス…

もといネルフ司令官の碇ゲンドウが仁王立ちしている。

「ホームレス『殺すぞ』」

いや、某漫画、もしくはアニメを見たものなら一度は言う。マダオ。

「まあ…茶番はこのくらいにして、なんだ？俺に何か用か？まあ大体想像はつくが」

『お前の想像してる通りだ』

「おk。乗ろう」

「「え？」」

『…』

え？じゃないだろ。大体アニメで見たロボットに乗るなんて普通の人は歓喜だぞ。

しかも説明書による操作いらず。ただ考えるだけで動くなんてお前……惚れてまうやるー……！！

『ふっ…聞いての通りだ、赤木博士、出撃の準備を』

「りよっ…了解しました。シンジ君、こちらへ」

「了解しました！赤木博士！」

「シンジ君…本当に変わってるわね」

俺はリツコさんについていき、別室に連れて行かれる。

ゲートが開き、暗い部屋に入ると、そこには巨大な座薬：ではなく白いエントリープラグが2本、傾いた状態で設置されていた。

エントリープラグのパイロット搭乗場所にはそこに乗るためのタラップが取り付けてある。

まるで戦闘機だな。

「こいつは…」

「エヴァンゲリオンのコクピット部分となる部分、エントリープラグ」

すると、プラグが突然動き出し、パイロットシートが顔をのぞかせる

「あの部分にシンジ君が乗るのよ」

「すっげ〜」

まるでおもちゃを見てはしゃぐ少年のように、エントリープラグの中に入る。

しかしそんなふわふわ雰囲気は、ジオフロントにまで響き渡る轟音によって壊された。

「！！…時間がないわ。シンジ君、これを頭につけて座りなさい」

「ん？…カチューシャ？」

アニメでシンジがエヴァに乗ったときのカチューシャを渡される。これって…なんの役に立つんだっけ…

「インターフェイス・ヘッドセット。それを使ってエヴァをコントロールするのよ。」

「…ハッチを閉めて」

「あっそうだった…閉まっちゃった。相変わらず話を聞かないんですね、ネルフの人ら」

リッコさんがエントリープラグから離れると、ハッチが閉じ、オレンジ色の空間に閉じ込められる形となった。

『第三次冷却終了』

『頭蓋グリル完了停止。接続を解除』

『了解、停止信号プラグ、排出終了』

「あつ今のマヤさんの声だ」

オレンジ色の空間で、色々な人の声が聞こえる。全て通信音か？  
やけにはつきり聞こえるが…

あれかな…結構音漏れ激しいんじゃないのかこのプラグ…こんな  
薄い装甲でいいのか？

まあエヴァの握力でつぶれるし、ゼルエル先輩の触手的なものの  
衝撃でヒビ入るくらいだしな

薄くて当然っちゃ当然だが…やっぱり不安だこの欠陥ロボット。

『エントリープラグ挿入。脊髓連動システムを解放、接続準備』

エントリープラグが若干動き出し、止まる。

何かが接続されたような音がして

回ったのだ。

「うおるあ！？」

恐らく半回転も行ってないが…何も見えないだけあって何回転  
もしたように錯覚される。

確かにエントリープラグの接続は回るが…少しは何か配慮してく  
れ！！

「うおえ……目え回った……」  
『エントリープラグ、注水』

さらにエントリープラグ下部から、オレンジ色のリリスの体液、  
LCLが注水される。

これって…血なまぐさいんじゃないのか？

全身から血の臭いがするのはカンベンだぞ！？ちよっ！！

「やめろおおおお！！！！ちよっ！！来るな！来るな！！いやあ  
あああ！！」

なんか来る！オレンジの水があああ！！血の臭いがするうっう  
うっ！！！！」

『パイロット、精神汚染！半狂乱状態です！』

『パイロット、エントリープラグ上部に移動、LCLを完全に拒否  
している模様！』

『シンジ君落ち着いて。肺がLCLに満たされれば、直接血液に酸  
素を供給してくれるわ。』

だから落ち着いてシートに戻って、いいから戻りなさい！！』

リッコさんの一喝で少し正気に戻った。確かにこの状態では戦う  
どころかシンクロも出来ない。

……踏んだり蹴ったりだよ畜生……

我慢してLCLを飲み込むが……自分の血を大量に飲んでるみた  
いで吐き気がする。

「……きもじわりい」

『我慢なさい！！男の子でしょ！！』

「…………はあ」

『シナプス計測、シンク口率…………39.4%、活動可能範囲です』

少し低いな。まあ警沢できないか。

『発進準備！』

発進準備へと取り掛かる。まあ移動するだけだがな。それでもすごい。

カメラを通して色々な施設が見えるだけで…やべえ勃起してきた。

『進路クリア！オールグリーン！』 『発進準備完了』

『了解…………「こらああ！早く出せえええ！！」……………かまいませんね』

『本人がそう望んでいる「うおー！はやくしろー！」』

『そのようだな「はやくだせって〜じらしは駄目だぞー！！」』

『大丈夫なのかしら…「おーい！早くしてくれー」…発進「使徒が来ちま（ブチッ）ブチ？」』

グン！と、頭を抑えられるような衝撃で舌がブチッ！！

2・落ち着いてコクピットに座りましょう。暴れてはいけません。(後書き)

ただエヴァが発進するだけのとてつもなく遅い展開です。



3・使徒相手でも慌ててはいけません。何事にも冷静に対処しましょう。

「人が戦う理由は些細な事だ。

自分のため、国のため、家族のため。

しかしそれはただの戦争の事。

今俺は…全人類の存亡のために戦うのだ。

よく考えたらそんな感じ

「ふざけては…いられないか…」

そうあれこれ考えていると、突然回りが暗くなった。

そして目の前にはサキエル先輩…いや…第4使徒サキエル。

「来たか…ううゝ緊張してきた…」

『最終ロックボルト解除！エヴァ初号機、リフトオフ！！』

背中についているロックがはずれ、初号機は地面に降り立った。

これで…自由に戦えとな？

「まずは…（歩く）…」

エヴァが第一歩を踏み出す。若干ぎこちないな。まずそれ以前に敵の目の前で歩くのはあれだろ。

基本的感覚はこれで大丈夫だ。モビルファイターのように自分が動いてる感じで大丈夫かな。

「早速本番だ！行くぜえええ！！」

頭の中でドモンの戦いを想像する。すると初号機がいきなり全力疾走で走り出す。

そう、これだよこれ！！

「うおおおおおおおおおお！！！！」

自分の運動神経は最悪だ。しかし所詮は自分で考える事。自分の妄想ならどれだけ派手に暴れても大丈夫だ。

『初号機！右腕部に強大なATフィールドを展開！』

『腕が…光っている…？』

『勝ったな』

『ああ』

「俺のこの手が真っ赤に燃える！！！！勝利を掴めと！！！！」

初号機をジャンプさせ上空からパンチを叩き落とす。

「轟き叫ぶ！！！！！！」

先輩のATフィールドを叩き潰し、左腕部を同じようにATフィールドで強化する。

「ばあああくねっ！！！！ゴッドオオ！！フィンガアアアアアア

！！！！！！」

コアに向かって左腕をめり込ませる。これで止めは決まるが…最期の一発を忘れている。

そのまま左腕を高々と上げてさらに力を入れる。めり込んだコアからは青い血がどばどばと…

気持ち悪っ！！

「ヒイヒイイト！！！エエエエ…！？」

突然先輩が再起動し、初号機に抱きついた。

「待て！そういうことはまだ段階を踏んでか…！」

しかしそんな事はお構いなし、カメラにはどんどん大きくなっていくコア……

先輩！何してるんですか！！やめてくださいよ本当に！

サキエルさん！ちよっと、まずいですよ！

『自爆する気！？』

「あっああ…アッー！」

めり込んだ腕を引き抜こうとするも引き抜けない。

蹴ろうとしても足が動かない。

神経接続されてる上にどんどん頭が押しつぶされていくような感じだ。

「ぐっ…あぐあ……いだって……洒落になんねえぞ……」

【ギユアアアアアア！！！！ガアアアア！！！！】

雄たけびと共に先輩のコアと体は爆発、その直後に自分を巻き込

む大爆発が俺を焼く。

あの時の死神が見える焼け方とは違い、全身がこんがり焼けるよ  
うな、そんな感じだ。

「ぎゃあああああ！……！焼けるううう！……！腕がああ！！

閻魔が見えるうう！……！あれ！？なんか妙にこの閻魔可愛いぞ

！……！

ってかあづいあづいあづい……！！」

『シンジ君は？』

『無事です。気絶しましたが……』

『了解、パイロット保護最優先。プラグを強制射出』

『了解』

「はっ！」

目が覚めたところは……これは言うべきか？

「S」……気がついた？」……ああ

『知らない天井だ』くらい言わせてくれ、と怒鳴ろうと思ったが……何せ相手が相手だった。

俺の真横で座っているのは、第二使徒……もとい綾波レイ。14歳  
処女。

男のロマンの塊、ゲンドウが作り出した汎用人型決戦兵器だ。

「えっと……綾波……だったよな」

「そう」

「怪我……大丈夫か？」

「いいえ」

「……」

はっ……話が……続かん……シンジの奴はこんな奴と会話していたのか……  
さすがシンジ……コミュ能力が半端じゃねえ。

「そついやなんでお前がこんなところに？初対面のはずだぞ？」

「碓司令の命令だから」

「マダオヤジが？なんか理由があるのか？」

「（まだおやじ…？）パイロット同士交流をして来い、との命令よ」

なんだ…なんだかんだ言っただけであいつも結構いい奴じゃんか。

というか…俺が退院するころはコイツかなり重傷じゃなかったか？

……あつそうか、レイがベッドから落下しなかったから一応歩ける状態だったってか。

歴史がちと変わったな。……いや、変えるべきだったかな。

「成る程ね……俺はこの通り全身火傷…お前は何でそんなフルボッコ状態なんだ？」

「（ふるぼっこ…？）零号機の起動実験で異常があったから、そのときに…ふ…ふる…ぼっこに」

「」

「ごめんなさい…意味がよく分からないわ」

「ははは、分からなくても死ぬわけじゃねえから大丈夫だ」

ちっ…録音しとけばよかった。綾波のフルボッコって単語…

CDで売ったらいくらで売れるだろうな…破竹のお値段かも。

「だが…他者との交流は確かにいいことだと思うな。マダオヤジもいい事考えるじゃないか」

「あの…まだおやじって…」

「ゲンドウの事だ、俺の見てるテレビ番組の中にあのオッサンの声にそっくりな奴がいてよ

しかもまるつきりゲンドウにそっくりで、しかもホームレスだ」

「司令が…ホームレス…？くすっ…」

「なははは」

やりましたー！綾波笑わせましたー碇選手最高の笑顔！  
ホームレスネタはネルフには改心の一撃の模様！

「さてと」

「？」

「ちよつとオツサンのところに殴りこみに行くか」

「私も行く」

これからきのこるためにもオツサンの評価を上げとかないとな。

司令室…の前は…何故かレッドカーペットが敷いてある場所。

税金…使い道考えるよな。

「おいオヤジ」

「…司令」

「入れ」

自動ドアが開く、また税金の無駄遣いか。

豪勢に作りすぎだったの。ダンボールハウスでおとなしくしとけよ…

「なんだ」

「ホームレスを笑いに来た」

「帰れ」



3 ・使徒相手でも慌ててはいけません。何事にも冷静に対処しましょう。(後書

感想、イラスト、アイデア何かと募集しています(主にイラスト)  
質問などもどうぞ、集まり次第番外編などで答えようと思います。

#### 4・夕焼けに染まる山から見えるビル街は幻想的です。

退院した。といっても…退院しても別にやることがないのが現実である。

今現在足となるミサトが迎えに向かっている。

で、今俺はUCCブラックコーヒー1分間早飲み、21本目に挑戦している。

……一人で。（代金はミサト名義で払わせている）

「ぎっ…苦え…まだまだ!!!」

口の中の感覚がもはやない。だが…俺は飲む！自分の自己満足のために!!

「ぐあっ…22本目!!!」シンジ君!!!」「はい!!?」

「どうしたのよ!?何か嫌な事でもあったの!?ヤケコーヒー!？」

「俺自身の自己満足のためだ。他者は黙っていたほうがいい」

「意味が分からないわよ!!!しかも全部ブラック!？」

「男のロマンさ」

「はああ!?!」

所詮女には男のロマンは分からぬ生き物だ……

ドリル、巨大ロボット、最終兵器、巨大砲台、戦車、そして…コヒー。

全てはロマンなのだよ、ミサト君

とかなんとか言っている間に、エレベーターに到着した。

エレベーターが開くと、恐らく上に行きたいのであるうマダオヤジが威厳たっぷりの表情でお迎えしてくれた。

「ホームレス中高年、どうした？」  
「……………」

エレベーターを閉められた。え？なんか悪い事言ったか？  
まあ…いいか、ホームレスだろうと男のロマンが分かる同志の一人だ。

「シンジ君、彼は仮にも司令よ…」

「まあ…いいんじゃないの？マダオヤジのほづが似合っし」  
「どこが!?!」

エレベーターに乗り、上層部のところへ行く

上層部のあの部屋、ジオフロントが見下ろせる場所だ。  
こんな場所が何で必要なのかは謎だ。本当に謎だ。  
来客用なのか…それとも税金の無駄遣いか…

で、俺はその上層部の部屋でオッサンの話を聞いている。  
どうやら俺は一人暮らしを強いられている。

「一人…ですか？」

「そうだ、居住区は、この先の第六ブロックになる、問題なかつ」

「別にいいけど」

「それでいいの…シンジ君」

「別にどこに暮らそうと俺の部屋があるんなら問題はない」

部屋とキッチンとテレビがあればそれでいい。

「……………」

「だーかーらーシンジ君は、あたしの家で引き取ることにしたから」

まあ…そうなるわな。中学生のガキが一人暮らしなんざ許されるわけがない。

今俺の目の前でリッコとミサトが電話で会話している。

「心配しなくても子供に手を出したりしないわよ」

『当たり前でしょ！！何言ってるのよあんたって人は一体…』

「冗談の通じない奴…」

典型的なオバサンとはこのことなのか…

リッコも年をとったもんだ…

「シンジ君、終わったわよ。さっいきましょ」

「はいよ」

ミサトの車に乗って、俺は助手席へと座る。

……このファイル、なんだろうか…

「さーって！今日はパーツと行きましょうか！」

「ほう…パーツと行くのか。そいつは楽しみだな」

「そうそう！同居人の歓迎会よ！」

「あっそうだ、携帯貸して」

「え？はい」

俺はミサトから携帯を借りて、アドレス帳からある人物を探す。

…あつたあつた。綾波レイ…おし

赤い携帯が3回コール音を鳴らして、電話に出た音が鳴る。

『レイです…葛城一尉』

「オウ綾波。もうすぐ退院だろ？」

『碓君？…ええ、今日中には退院できるわ』

あれから数日、綾波と結構コミュニケーションをとり続けた結果。幾度か彼女の部屋に行く機会もあった。相変わらず包帯は取れていないが、体は動くそうさ。

マダオヤジとも仲がよく、昨日はりんごを貰ったそうさ。ちなみにその礼としてアマゾンのダンボールを渡したらしい。

しかしこんなにも早く退院か…この治療は半端じゃねえな。

「おう退院か、おめでとうさん。ところでミサトの家は知ってるか？」

『ええ』

「じゃつ7時半ごろに来てくれや。ちよっち時間とるが。」

『…何をしにいくの？』

「なあに、ただの退院祝いだ。お前と俺の。めでたい事にはパーティーもひつようだらう？」

『パーティー…わかったわ』

おっ素直に聞いてくれた。どうして？とか聞きそうなんだけどな。マダオヤジンパクトが強かったかな。とりあえず次の目標はレイにビンタされないことだ。

「おっ、ほいじゃーな」

電話を切つてミサトに返す。

「レイと仲良くなったの？」

「まあな。マダオヤジが色々仲介してもらった結果だ」  
「へえ〜マダオヤジ司令が。さっ着いたわよ。ちよっち荷物持ち手  
伝ってね〜」

ミサトが車を止めた場所はローソンステーション。ちなみにロー  
ソンストア100もオススメ。

安いしうまいし。だが少しばかり通常ローソンと品揃えが違う。  
賞味期限も短い。

早めに食べるのがいい。ついでに店によっては日用品も売ってい  
るところがある。

「いらっしやーせー」

店員の気のない返事が聞こえる。ミサトはそれを気にせず、ホイ  
ホイと弁当やらなんやら詰め込む。

まあ3人分だからたくさんいるだろう。

おびただしい量のコンビ二弁当やパンなどが押し込まれてレジ  
に持っていく。

「いつ…17150円になります……」

「はい」

「17150円ちょうどお預かりします。レシートは」

「いいわよ」

「ありがとうございます」

店員…どん引きじゃねえか…大丈夫なのかミサトさん…

「さて…ちよっち寄り道するわよ」

ミサトのマンションを通り過ぎ、名称はよく分からないが、山のてっぺん辺りまで行く。

そこから見える景色は、先ほど見た第3新東京市とは違い、ビルが少ない田舎だった。

「…なんつーか…畑もないのに家が少ないな…はっきり言って寂しい…」

「模範的な批評ね…時間だわ」

空襲警報のようなサイレンが響き、町中に木霊する。

そのサイレンがなり終わると、町中のいたるところのハッチが開



き、

その下からビルが文字通り生える形となって、町に出現した。

1本2本どころの数ではない。10本…いや、それ以上の数だ。

映画やテレビで見るよりも100倍迫力があり、幻想的だ。

「これは……」

「これが、使徒迎撃用要塞都市、第3新東京市。私たちの町よ」

夕焼けに染まるビル街、屋上に光る赤と白の電灯。

何の変哲もない街だというのになんて綺麗に見えるのだろうか…

「そして…あなたが守った街…」

「…ミサト」

「何かしら…」

「7時半過ぎてるぞ」

「あ……」

「碇君……遅い……」

4・夕焼けに染まる山から見えるビル街は幻想的です。(後書き)

こぼれ話

ゲ「冬月」

冬「なんだ碇」

ゲ「エヴァの新武装を検討したい」

冬「言ってみろ」

ゲ「ドリルだ」

冬「ドリルか、すばらしいじゃないか。」

ゲ「ロマンを感じないか」

冬「ああ」

## 5・女に対するデリカシーは大切にしましょう。

ミサトが車を飛ばして、マンションにドリフト駐車を決める。かっけえ。

だが俺の心は傷だらけ。それもそのはず。N2でベコベコの車。それがものっそいスピードで飛ばしてみる。吐くか精神崩壊だ。

「うい…」

「あら酔ったの？」

「うにゅ」

「そいつは結構、さてと…待ち人を待たせちゃ駄目よん」

「おk」

げんなりした表情で、マンションのエレベーターに乗り、目的の階に着く。

4階ね。覚えとこつ。

「…」

「レ〜イ、おまたせん」

「…」

「おっす。すまないな」

「…」

ほーら黙っちまった。お前が余計な所連れて行くから、とミサト似合いコンタクトを送ると

いいじゃない、景色がきれいだったんだし、とウィンクを返された。

「えっと、とりあえず中入れや。こんな暑いところで一人で座って

たら日射病になるぞ」

「…太陽は出てないわ」

「ははっ違いねえ」

「さて、シンジ君にレイちゃん。行きましょ」

「うーっす、かえったぞーい」「……」

オッサンのごとき伸びと欠伸でミサトの家の玄関に入る。

「シンジ君…あなた何歳？」

「まあちよーっち散らかってるけど、気にしないで」

「……不潔」

「これどっかのドキュメンタリーで見たことあるわ。えっと確か…」

「ゴミ屋敷」

俺とレイが見た光景は、文字通りゴミ屋敷。玄関前はあれほど綺麗だったはずだが

……レイ、何かリアクションしろ。ただめを丸くしているだけじゃ何も反応できん。

と言うか、思っていたよりレイの表情と言うのは変わりやすい。

嬉しい時は、硬い表情が少し緩み、ほんの少しだが笑顔が見られる。ほんの少しだが。  
今の場合、多分驚いているのだろう。目が無表情のときよりほんの少し見開いている。

うれしい、びっくりと言うものは教えてもらうものではない。  
こうい生活の変わりようによって身に着けていくものだ。

そんな時、俺は何か決心と言うものがついた。

アニメや映画を見れば分かるが、例の部屋は電気の通っていない  
暗く、寂しいところだ。

あんなところでは芽生える感情も芽生えない。

……一緒に暮らしてやろうか（ニヤリ）

「…どうしたの？」

「いや、なんでもねえ…とりあえず片付けようぜ。臭くてとても住めやしねえ」

「分かったわ。碇君」

「おし、決まり。大掃除だ、ミサト!! お前は風呂入っとけ!!」

『えー? まずご飯食べましょうよ』

ミサトの自室から少し大きな声が聞こえる。

「たたく…コイツはどこまで無神経のバカなんだ…」

「ぶつ殺すぞグータラ三十路!! んな汚ねえ部屋で誰が飯なんざ食うか!!」

『はあ!? 誰が三十路よ!! 私はまだ20代よ!!』

「20代? 29の30目前だろうが。そのまま20代卒業まっしぐらだろうが」

『言っただわねえ〜!!』

自室からからでたミサトが俺の頭を掴む。

「女に対するデリカシーってのがないのよアンタには！！オブラートに包んで物事を言いなさい！」

全く！あのマダオヤジはこのぶあかにどんな教育してたのかしらねえ！！！」

鬼のような形相で俺にヘッドロックを仕掛ける。

コイツは仮にも軍人的な女。こんな奴にヘッドロックを仕掛けられた私は…

「いだいだいだい！俺を殺す気が貴様アーー！！！」

顔をゆがめ、本気で痛がる羽目になってしまった。

「碇君……」

何かしら……この感じ、司令と話しているときと違う、何かが暖かい。

体…違う、心が温まる。

「こんのおお！！！！あんたが！！泣くまで！わたしは！絞めるのを！やめない！！！」

「ぬおおおお！！！！貴様アアアア！！！！ちよっカンベンしてくだ  
さい！！死ぬって！！」

これは…面白い？心が温まって、とても面白い。嫌じゃない。  
明るい。人の心が明るい。今までとは違う。

「ふふ…面白い…」

思わず笑い声が出る。これが…面白い？

「「ふえ？」」

「オイ…今…」

「レイが…笑った？」

ミサトがヘッドロックを止め、俺は床に崩れ落ちる。  
だがそんな痛みなど気にしてられない。レイがホームレスネタ  
以外で笑うのだ。

確かに今、くすつと笑ったのだ。

「…ごめんなさい」



何を思ったか分からないが、いきなり表情が曇り、謝りだしたが、んな事は気にしない。

これは…更なる成長が期待できそうだ。よし、善は急げ。

「レイ、ちょっと耳を貸せ。提案がある」

「…どうして？」

「実はな…」

俺はレイに耳打ちする。ミサトもそれをニヤニヤしながら聞き耳を立てる。肘打ちで撃退。

「フン!!」

「グハツ!!??」

こうかは ばつぐんだ!

気を取り直して、レイの耳に小さな声で話しかける。

「レイをミサトの家に住ませようって計画」

「…!」

流石にこの企画にはレイも赤い目をびっくりさせたように見開く。当然だが可愛いと思ってしまった。

「内緒だぜ、まだ企画段階だからな」

「…分かったわ」

「し〜ん〜じ〜……」

「やっべー！」

鬼が来るのを視認して、アムロもびっくりの反応で回避行動へとうつった。

「まっちなさあああい！！！！！」

「ぬわああああ鬼だあああああ！！！！！！レイイイ助けてくれええええええ！！！！！」

マウントポジションを取られ、文字通りフルボッコにされた。

「…あれが…ふるぼっ」…」

葛城一尉の潜在能力は計り知れないものだと言う事を実感したレイであった。

「じゃあ！レイの退院とバカの入居を祝って、カンパ〜イ！」

「はは……かんぱ〜い……」

「…乾杯」

もう二度とコイツに逆らうのはやめよう。下手すりゃ殺される。まあ…楽しいからあまりそういうことは気にしないがな。

「いや〜！ほんととデリカシーの知らない男はダメ！シンジ君も少しは学習しなさい！」

「確かに。俺も少し浅はかだった。だからもうヘッドロックはやめてくれ」

「ならよろしい」  
「…」

綾波が先ほどのヘッドロックの図を絵にして書いている。妙にうまい。ってかお前は使徒に何をする気だ。

ちなみに野菜しか食べてない。

「ぬああ〜…食った食った…」  
「ご馳走様でした」  
「お粗末様」

お前が作ったんじゃないやねえだろ。

「私は…そろそろ帰ります。夕食後馳走様でした」

「そう？じゃあねえん。シンジ君は送つていかなくていいの？」

「送つていくにしても家が分からないんじゃない？ただの足手惑いだ。俺は行かんぞ」

「いい、一人で大丈夫です」

そう言つてレイは靴を履いて部屋から出て行つた。

しばしの沈黙が流れる。

確かに無表情かつ無頓着なレイがあそこまでぺらぺら喋るのは不思議だ。

顔で笑っていたが確かに不思議…いや、謎だ。

なぜそこまで喋る事ができ、感情をあらわに出来るのか…。

「シンジ君」

「あ？」

「レイの事だけれど……」

やはり聞かれるか…たしかにホームレスだけであれほど成長したとは思えない。

とか聞かれるのか？俺はただ、入院中しつこく話してただけだ。

「友達になつてやりなさい。彼女は昔より若干話せるようになってる。」

「あなたが入院中に何を吹き込んだかは知らないけれど、あなたが彼女を支えなさい」

ミサト…やっぱ分かる奴だ。 作戦企画は最悪だがこつやってみる  
とかなりいい奴。

人間として最高の野郎だな。

「任せる」

5・女に対するデリカシーは大切にしましょう。(後書き)

こぼれ話

レ「司令」

ゲ「なんだ」

レ「これを」

スツ(銀魂『長谷川泰三スペシャルDVD』)

ゲ「……」

レ「碓君からです」

ゲ「……どこから手に入れたと聞いた」

レ「アマゾンです」

ゲ「……」

レ「……失礼します」

青「司令室内部に高エネルギー反応……」

ミ「何ですって!?!」

ゲ「ぬおおおおおおおおおお!!……シンジイイ……!!」

長谷川さんスペシャルDVDなんてそんなものはありません

6・人に褒められる事をしたと言われてもうぬぼれてはいけません。

夕食後、俺たちは家事決めのジャンケンに参加することとなった。

「じゃあんけえええん!!」

「ポン!!」

ま…また負けた…だと？

馬鹿な！新入生歓迎じゃんけん大会3回連続優勝の俺が！？

ミサト…貴様何者！？

「へーん！悪いわねーシンジ君！これで…公平に決めた生活当番表もこれオールOK！」

「おっけーね！って誰が言うかああ!!!!」

俺の魂の叫びは誰にも届くことなく、風呂に入る事になった。

「風呂は命の洗た。まずはお前の汚い部屋を洗濯しろ…」

つとまあそんな事は置いといてだ。服を脱ぎ、

バレットライフルが露になった状態で脱衣所に立ち尽くす。

そう、目の前には葛城ミサトのブラやパンツ。…一個持って帰ろうか。

いや、三十路前の女の下着など興味は…いや、中の人にはセーラー

ムーン……いやそんなの関係ない。

いや待て……この世にはBBAと呼ばれる美人妖怪や500歳児の吸血鬼もいる。

と言うことは三十路前の女の下着もアリなんじゃないのか？

「いやいやいや！下着ドロなんぞ人間の恥！すっぱり諦める！！」

「くわー？」

「お前もそう思うだろ？ペンペン」

「くわー！！」

「……………」

「……………くわ？」

「……………くわっ」

「くわー！！！！」

「くわあ！！」

「くわっくわわ！！」

「くわーわ！！」

「……………なにしてんのよあんたたち……………」

「見てのとおりコミュニケーション……………」

「……………元気ね」

みつみられた……………私のビームサーベルが……………阿修羅すら凌駕する存在のビームサーベルが……………

……………馬鹿な！何故だ！図ったな！！ミサト！！！！

「トランザム！！！！」

粒子化して一瞬で浴室の扉を閉める。



ちとわざとらしくはしゃぎすぎたか…見透かされてるのはごっち  
かもね

「…くわー？」

「ふふっ…」

カポーン……

いや、別にどうでもいいことなんだが…

リアルにカポーンって音ってなるもんなんですな。

アニメの話だけだと思ってました。

結構広い風呂の中で洗面器を落としたら中々いい音が鳴る。

「……風呂か…」

いやなことしか思い出さない…か。果たして本当にそうだろうか

ね？

風呂はただ単につかり、一日の疲れを癒す。

ただそれだけでいいもんだ。余計な事はすっぱり忘れるのが基本  
つてもんよ。

「ふーんふんふつふふーんふん たつたららたんたんたー」

しかし何で俺はエヴァの世界に来る様なことがあったのだろうか  
ねえ…

………まあいいか。別に結末がわかっててもどうということはない  
し。

無気力…って奴かな。こういった疑問には全くと言っていいほど  
興味を持った事がない。

いや、無気力と言うより細かい事は気にしない性格なのだろう。

むっかしからそうだったな。細かい事は気にせず重要な事を見落  
とす。

直したほうがいいとか言われたが、俺は反省しない。

「おっと、のぼせちまう。さっさと上がるか」

のぼせる前には上がらないと、俺がのぼせたらエライことになっ  
ちまうからな。

風呂の扉を開け、トランクスを一丁、紺色のシャツを一枚着る。

「ミサトエーイ、風呂空いたぞーい」

「はいはい。シンジくんはもう寝るの〜?」

「おう」

「そっじゃあ、明日の学校に備えなさい」

「あのなあ…俺は単位…分かったよ。」

ここは大学じゃない。単位制ではなく義務教育だった。  
つたく、下らん決まり作りやがって…。

これほど学校が妬ましく感じるのは小学校のころ以来だ。

「じゃあな」

「おやすみー」

寝室に入ると、おびただしい量のダンボールが置かれていた。  
その中はティーチャーから届いたがんばれのエール付きテープ、  
はつきり言って誰だよコイツ。

あとお小遣い。洋服、制服。色々あった。

「えーっと…タンスタンス…」

とりあえずたたまずに洋服類は全てタンスに突っ込んだ。  
テープは廃棄処分。お金は財布に…  
で…空ダンボール約15箱は……………

適当にマジックを取り出して、あて先を書く。

『NERVネルフ本部 司令室』

……明日ホームセンターでブルーシートを買えば問題ないな。  
さっ寝ましょ。

「シンジ君、入るわよ」  
「……」

やっぱり寝てるか……。部屋を片付けるのは関心ね。片付けない私が  
いえた事なじゃいけど。

しかし、やはり変だ。報告書とは全く違う言葉使い。不真面目な

目つき。

そしてその不真面目な目つきとはうって変わって、時々悟りを開いたような顔。

レイが帰った瞬間、彼が考え事をしていたときの表情がいい例だ。

「一つ言い忘れていたけど…」

「……」

「あなたは人にほめられる立派な事をしたのよ。流石と言える事だね」

「……」

「お前もな、三十路」

「あら？おきてたのね」

「うるせー戯言聞いてりゃ誰だって目くらい覚めるに決まってる」

戯言って…

「それに…」

「それに？」

「ゴッドフィンガーかましただけで人に褒められるんらいつでもどこでもぶっ放つぞ」

「いや…それだけはやめて」

やっぱりこの子をこっちに引き取るのは間違いだっただのかも…

この子のせいでローン何年分使う羽目になるのかしら…

Next Day

目覚ましがかかっていないと言う失態に気がついてしまった。  
しかし…うだるような暑さのせいで全く持って起きる気がしない。  
ちくせう!!何だこの体のだるさ!

「ちくしょう!!…ふぐぐぐ…起きろ…起きるんだ俺!!」

自分に鞭を打ちながら、ゾンビのような足取りでリビングへと向かう。

昨日ミサトが片付けたのか、中々綺麗だ。

今にも目玉が落ちそうな目つきで時計を見上げる。

8時…20分…後5分か…

「まだ慌てるような時間じゃない」

と、うだうだ飯を作っていると、インターホンの音が聞こえた様な気がしたが気のせいだった。

「枝豆ファイトオオ!!!!レディイイ!!!!ゴオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

レンジで暖めた朝飯の枝豆を狂ったように食べる。これしかないのだ。

そして再びインターホン。まったく…誰だよ。至福の30秒枝豆早食い大会を邪魔するのは。

「誰だ? …… ってレイイ!!???」

玄関の自動ドアが開くと、少々不機嫌そうに、しかし無表情のレイが突っ立っていた。

「碓君、迎えに来た」

「いつから」

「8時」

「はああ!?!」

お前はバカか!! もしくはアホか!!! いつまで待ってた!!

「碓君も葛城一尉も起きなかつたから……」

「お前な…そういう時は素直に置いて行ってくれたらいいんだよ。

お前電車乗ってわざわざ逆回りしてきたのかよ」

「問題ないわ、学校の成績は完璧だから。少し下がっても大丈夫」

「ぐうう……」

俺はふと腕時計を見る。現在時刻9時13分。授業開始時間は8時40分…… オワタ。

「さあ、急ぎましょう。遅れるわ」

「もう遅刻だ。ゆっくり行こうじゃないか」

ちよつとふわふわした雰囲気になりながら、綾波と並んで学校へ  
と行く。

## 司令室

「レイの状況は」

「相変わらずダンボールを溜め込んでいるようだ。諜報部からの情  
報によると一日数十個。

多い日は百単位を超えるそうだ。どこにそのようなスペースがあ  
るのだろうか…」

冬月コウゾウがダンボールの山から将棋版を引っ張り出しながら  
話す。

「シンジの家はどうなっている」

「空のダンボールが数十個。全てあて先は司令室だ」

ゲンドウが部屋の隅を見ると、古紙回収に出すであろうダンボ―



ルが

あふれんばかりに積み重なっている。

全て側面にはamazon.co.jpとプリントされている。

息子のあだ名のせいで、レイから毎日届けられる。

後数日もすれば司令室の半分はアマゾンのダンボールに埋め尽くされるだろう。

「冬月：私はどこで間違えた」

「ダンボール以外は全てシナリオどおりだ。問題なかるう」

「…そうだな…」

「もう一つ気になることがあるのだ。碓、シンジ君は、向こうで嫌なことでも合ったのか？」

ゲンドウは首を振らず、出来る限り無表情で話す。

「いや、それなら事前に報告が来るはずだ。どこかで人格が入れ替わっているようだ。

昔のシンジを思い出せば分かるはずだ。あのような事はありません」

「そうだな…どこかで人格が崩れたような、

そうでもしなければ父親をいきなりマダオヤジなど言わんだらう」

「マダオヤジのあだ名はネルフ中に広まっている。これは大幅な修正が必要だ」

「そうだ。それと碓」

「なんだ」

「ダンボールが崩れかかっているぞ」

「いかん!」

ゲンドウが席を立った刹那、司令室を埋めるダンボールの山は雪崩のようにゲンドウと冬月を襲う。

「ぬおおおおおっ……」

6 人に褒められる事をしたと言われてもうぬぼれてはいけません。(後書き)

こぼれ話

レ「アマゾン…このサイトは私の絆だから」  
ゲ「やめるんだレイ」

## 7. しばかれたら仕返ししましょう。3倍くらい

綾波は遅刻回数が少なかったせいかな俺たちは軽く注意されただけですんだ。

ってかあのジジイ先生は怒るといふ概念がセカンドインパクト共に飛んでいったのか？

俺が反抗的態度をとっても笑顔だった。

「ですが、遅刻をするのはよろしくはないですよ」

「…はい、すみません」

「はいよ、次からは気をつけさせていただきます」

「よろしい。席に座りなさい。碇君。君は綾波さんの隣の席だ」

「マジですか？いや、薄々いやな予感はしていたが…。」

まあ…いいか。俺はあらかじめ支給されたノートパソコン…っばい奴を取り出す。

アニメが放送されたのは20世紀。まあこんな古い奴使ってもおかしくはないが…

と、そんなこんなで授業が始まる。今日はセカンドインパクトの話だ。

「えーこのように人類はその最大の試練を迎えたのであります。」

二十世紀最後の年、宇宙より飛来した大質量の隕石が南極に衝突。氷の大陸を一瞬にして融解させたのであります。

海洋の水位は上昇し、地軸も曲がり、生物の存在をもおびやかす異常気象が世界中を襲いました。

そして、数千種の生物とともに、人類の半分が、永遠に失われたのであります…。

これが世に言うセカンドインパクトであります。経済の崩壊、民



いや、プライベートチャットがあった。なるほど。ちゃんとあるのね。

別に今はどうでもいいが。

一時間目が終了し、おれは案の定ジャージに呼ばれることになった。

本家のゴッドフィンガーをかまされなきゃいいが…

校舎と校舎の間にある車が通る連絡通路。しかししっかりと砂で補正されている。

そしてそこに立っているのはドモン…ではなくジャージ姿の鈴原トウジだ。

中の人ネタはやめておこう。

「転校生…一つ聞くで、なんでもっと周りを見て戦わなかった…」

俺の目をまっすぐ見て怒りを堪えるかのように声を震わせる。

妹か…死んではないんだよな。早とちりの激しい馬鹿は嫌いだ。

「あ？自分の命が大事だつてのになんで周り見て戦わなきゃならん」  
その怒りをあざ笑うかのように自分でもふざけた答えを出す。

「……………！！！」

そういつた矢先、トウジの鉄建が俺の顔面に向かって襲い掛かる。だが所詮は中学生の気のない拳だ。

パンチをキック蹴り上げではじき、トウジをよろけさせる。

「やれやれ、これだから気の楽な中二は嫌いなんだ」

蹴り上げた足を下ろし、トウジの股の間にぶち込む。

金属バットののような音が聞こえ、トウジは砂場に倒れこんだ。

「あっ…おおう…‥‥‥わしの金玉が…ゴールデンボールが…‥‥死んでしもつた…」

「安心しろ、まだ一つある」

「すっごいよ！さすがネルフの一員！！あのトウジを一発で倒すなんて…！」

は？こんな奴高校のDQNに比べりゃただの悪ガキだろうが。特に言う事もないのでさっさと先生に適当な理由出して帰るk…

お？ケータイからメールが届きましたぜ。

『訓練のため早退しろ ゲンドウ』

しかしまだ続きがある

『追記 ダンボールを送るのはもうやめろ』

半笑いになりながら、携帯を打つ。

『了解 追記部分は断固お断り シンジ』

と言う訳でレイと並んでネルフ本部へ行った。  
ちなみに本部内部の知識は皆無に等しい。  
だがレイはこの本部知識のみならず、ダクト内まで把握している。  
レイがネクロモーフ化したら要注意だな。

「1111」

「サンクス」



俺が来た場所は男子更衣室。結局ここまで案内される羽目になったのか俺は。

「じゃあ、後はエントリープラグに入るだけだから。大丈夫だ」

「ええ。じゃあさよなら」

「おう」

更衣室の扉が閉まり、生まれたままの姿になる

「別れ際にさよなら…本当だったんだな。まあ出会いがしらにさよならよりマシだろう」

ぶつくさ言いながら初めてのプラグスーツに着替える。

白と黒をベースにした密着性が尋常じゃないくらい高いスーツ。

ちなみに下は全裸がデフォじゃないと駄目だ。シンクロ云々の関係ね。

そのプラグスーツを適当に羽織って、ジッパーを閉める。

そして手首部分にあるスイッチを押す。これで中の空気を抜くのだ。

プシュー…と音とが聞こえ、服と体が密着する

「うおええい!?!」

感触はもはや全裸でいるときとほぼ同じ。サーベルが…サーベルがスーツにへばりついてる…

「まあ…着心地は最悪だ」

着替えが終わり、恐らく出口があるであろう更衣室の隔てであるカーテンを開ける。

「あ」「…」

閉める。そして、男子専用出口に出る。

更衣室を出た次の部屋は、なんとエントリープラグの格納庫だった。

俺のエントリープラグもしっかりと完備されている。

「さて…と。訓練開始としますか」

エントリープラグに入り、ハッチが自動で閉まる。

『プラグ注水』

「……フン!!」

意を決して血を飲み込む。これも訓練だ。しゃーないしゃーない

『エントリースタート、シンク口開始』

『シンク口率、47.2%』

『やはりまだ低いわね……私の予想が正しければ……』

「あ？リッコさんなんか言った？」

『いいえ。さあシンジ君。訓練を始めるわ。』

『まず、用途には必ずコアと言う部位があります』

「ああ」

知ってる

『その破壊は、用途を物理的に破壊できる、唯一の手段なの』

「ああ……」

知ってるってば

『ですからそこを目標をセンターに入れて』

照準機がCGのサキエル先輩のコアに向けて自動ロックする。

『スイッチ』

「ほい」

トリガーを引いて、サキエル先輩を狙撃する。  
たったの数発でダウンか。下らん。

『これを的確に処理して、感覚で覚えこんで』

「もう少し刺激的な奴はねえのか？」

『何事にも基本が大切なの。この射撃訓練が終われば、自由戦闘の練習よ』

「へーいへい」

ずだーん、ずだーんどかーん。

『結構、そのまま続けて』

「何回？」

『何回も』

しっかし…これもこれで面倒だな…そうだ。原作シンジモードでやってみるか。

「目標をセンターに入れてスイッチ…目標をセンターに入れてスイッチ…」

『大変です!!初号機のシンクロ率がどんどん下がっています!!』  
『何ですって!?!』

『20...16...13...9.....信じられません...それでもなお動いています!』

『シンジ君!?!』

「え?」

『シンクロ...回復しました...』

『なんなのこの子...シンジ君、次は自由戦闘よ。ターゲットを50個用意するわ。』

それを出来るだけ早く、的確に破壊して頂戴』

「待ってましたあああ!!!!!!」

『初号機!シンクロ率上昇!!シンクロ率92.4%!!』

『何ですって!?!』

あっリツコ通信切った。まあいいか

「ヒイヒイヒイハアアア!!!!ATフィールド全開いい!!」

「!」

「やはり彼…格闘向きのようね」

「この世には玉を消費しないと困る奴らもいるというのよね」

「税金を無駄遣いしなくていいんじゃないかしら？」

「いや……」

『マスターアアアア！！スパアアアアアアク！！！！』

モニターにはATフィールドの流れを変え、波動のように撃ち出している。初号機。

絶対領域（ATフィールド）の応用に長けた、正に模範的パイロットだ。

「それにしても…ATフィールドの展開方法が分かるや否や…応用が利くわね。彼」

「どこでそんな技が思いつくか、聞いてみたいもんだわ。何よゴッドフィンガーって…」

ミサトがため息をつきながらモニターを見る。

ちょうど50機全ての仮想敵を倒したところだった。

「ご苦労様、1分21秒。レイは12分3秒よ。さすがね」

リッコが驚いた顔でシンジを褒め称える。

通常ではありえない数値だ。マジの模範戦闘でも11分50秒かかるというのに

彼はそれを10分以上更新したのだ。

「最高シンクロ率、98%です」

「パルス正常」

「ハーモニクス異常なし」

「戦闘終了」

「ご苦労様シンジ君。上がっていいわよ」

リッコは思った。彼は元々エヴァの存在を知っていたのではないか。

ATフィールドの張り方を教えただけであれほどの動きが出来るのはありえない。

彼の戦闘方法を解説すると

まず加速時に脚部に神経を張り巡らせている。

そしてサイドステップの際、自分の真横に展開したフィールドを蹴って

より早い移動を実現していた。

そして格闘は、どこで学んだかも分からない格闘術でコアを一撃。攻撃後も隙を見せずに次の敵に迷わず向かう。

一列に並んだ仮想的には、目の前に巨大なフィールドを展開し、一気に撃つ。

これにより、槍のように飛ぶフィールドがコアを貫いたのだ。

「全く…意味が分からないわ…人間技じゃない…」

彼は一体何者なのか…そればかり考えるしかなかった。



7.しばかれたら仕返ししましょう。3倍くらい(後書き)

今日はこぼれないよ。ネタがないw

## 8・シヤムシエルは得策が見当たりませんので多少の痛みは我慢です

次の日、サキエル先輩撃破から4日後  
今日は第4使徒シヤムシエル先輩、略してシヤム先輩がやってくる日だ。

「あゝ…あぢいゝ…」

直射日光の当たらない体育館裏で音楽を聞いている。  
屋上は嫌いだ。暑いし、まぶしいし、地面熱いし。  
影の下でのんびりしているのが一番いい。  
プレーヤーの音楽が耳に入り、太陽で暖められた熱風が発汗を促す。

地軸が乱れて云々だったよな。常夏になったのは…

「あゝあ…一番嫌いな季節が常にそのままたあ…俺に死ねるか？  
つたくよお…」

ブツブツと文句をたれていると、突然携帯がバイブを鳴らす。  
ポケットから携帯を取り出し、画面を見ると新着メールが一件。  
ネルフ本部からか。

「……………使徒出現…か」

確認後、すぐに携帯を閉じ、校門まで走る。

シヤム先輩、触手プレイ好きの変態使徒、原作ではトウジとケン  
スケを乗せて特攻したが…

エントリープラグのシンクロに異常を発生させるわけにも行かな

いし

ましてやあんな奴らをエントリープラグに入れるのは気に食わない。  
い。

初号機ママを困らせるわけにも行かないからな。

「最悪な事態に陥る前に片付ける。これ得策よ。早いことに悪い事なし」

それなりに急いでネルフ本部へと走っていった。

プラグスーツを着用し、エントリープラグに座る。  
プラグ内にLCLが注水され、我慢して飲み込む。  
もう慣れたよ畜生。クソツタレ、血を好き好んで飲む馬鹿がどこの世界にいる。

『移動物体を光学で捕捉』

『E747も対象を確認』

『分析パターン青…。間違いない第五の使徒』

「5体目の使徒……ねえ」

シナリオを全て知っていると言うのも…キツイものだな。

この世界じゃ前の世界の一般常識を話しただけで殺される。

少しの失言が命取りだ。楽しいっっちゃ楽しいが、その分リスクも  
でかい。

83

『日本政府から、エヴァンゲリオンの出動要請が来ています』

『うるさい奴らね、あの子なら喜んで出撃するでしょ』

【エントリースタートしました】

「準備完了だ」

『よくて？敵ATフィールドを中和しつつ、ライフルの一斉射』

「はいはい（どーせ成功しねえだろうがな）」

生返事だけしておいて、操縦桿を握る。

感度は良好だと思う。知らん。

「んじゃあ、行ってきますぜ」

『了解…発進!!!』

Gが掛かり、地上に向けて一気に上昇する。

今度の敵は接近戦も遠距離銃撃もさほど効果なし。

原作シンジも効率的な戦闘はしていない。

こりゃ、自分で作戦を考えるしかないな。

あれこれ考えていると、地上に到達、モニター右側にバレットライフルが設置される。

ATフィールドを展開し、準備万端。バレットライフルを手取る

『いいわね？シンジ君。練習通り』  
「わーてる」

初号機をビル影から顔を出させ、3点バーストで3発つつ弾丸を射出する。

しかし弾丸が当たる前に大きなフィールドが展開され、弾をはじく。

「やっぱだめか。通常兵器は役に立たん」

『チツ…シンジ君！零距离からもう一発！触手に注意して！…！』  
「はいよ」

お前は劣化ウランをどこまでばら撒くつもりだ

「ったく…うおっ…！」

目の前に現れた触手をATフィールドではじく。ビルをみじん切りにする触手だ。

こんなものがケツにぶち込まれたらいくどころじゃすまんぞオイ！

大体なぜ射撃にこだわる。格闘で直接コアをぶち抜けばいいだろうに…

ったく。こんな作戦には付き合ってもらえん。

「ミサト！！接近は不可能だ！自由戦闘を要請しますぜ！！」

『……了解、どうするの？』

「決まってんだろ！！」

バレットライフル破棄。

ジャンプして、ATフィールドを足元に展開、それをジャンプ台にして、山の上に着地する。

『すごい…』

『初号機、シンクロ率上昇！！現在シンクロ率97%！！』

周囲を確認する。トウジとケンスケはいないな。

「ここなら自由に戦えそうだ。よし、そうと決まれば…」

「アンビリカルケーブル排除」

アンビリカルケーブルを外し、タイマーが作動する。  
残り3分だ。

『シンジ君！？何を…（ブツン）』

通信切断。これで邪魔はいなくなった。さっさと片付けるぞ。

「ATフィールド全開！！」

初号機の周りがATフィールドによってオレンジ色に輝く。

これが全開か。相当な出力だな。初号機は。

「行きますぜ、初号機い！！！！」

勢いをつけて、シャム先輩に向かって飛び込む。

先輩の弱点は武装が触手のみ。これを攻略すればすぐにでも倒す事が可能だ。

つまり触手を潰せば後はやりたい放題、と言う事だ。

「ほわたああぶるあ!?!」

だが現実には甘くない。2本の触手は初号機の腹を貫き、腹に激痛が電撃のように襲い掛かる。

シラムさんの触手は1本追加で初号機のATフィールドを貫くのか…すげえ…

って考えてる場合じゃない!

「くそつたれ!!!痛いではないか!!!」

歯を食いしばり、それでもなお走る。いや、走らんと死ぬ。

こっちは命かけて戦ってた。死んでなるものか。

「ほおおお!!!」

1歩2歩と足を動かし、コアの目の前にたどり着く。

「痛いって…言ってるだろうがあああ!!!」

拳に力を込め、コアに向かってパンチを繰り出す。

コアに拳がめり込み、さらに押し込む



「うぐっ！！…つてえ…だが…これで終わってくれよ…ニサト！！」

『シンジ君！？』

「兵装ビルの砲台、ミサイル、全部コイツに叩き込め！！！！ATフィールドは全て中和する！」

『……了解よ。全弾砲撃開始！！！！』

ちと調子に乗りすぎたか……意識が朦朧としてきた。

活動限界までのこり1分弱……練習どおりには行かないものだな

……

しばらくすると、ミサイルと砲弾の雨が、シヤム先輩を襲った。

シヤム先輩は悲鳴を上げ、形状崩壊した。

「あっ……あるえ〜？力が……はいらねえ……なあ〜…」

目の力が完全に抜け、目を閉じる。

いや〜まさかこんなところでこんなまともに気絶するとは思いませんでしたよ。

次こそは知らない天井だって言えるかなあ〜？

『パイロット意識不明!!! だめです!!! 生体反応微弱!!!』  
『脾臓破裂の恐れあり! 救急班急げ!!!』  
『心肺停止!!! 心臓マッサージ!』  
『シンジ君!!! しっかりして!!! シンジ君!!!』

8・シヤムシエルは得策が見当たりませんので多少の痛みは我慢です（後書き）

やっつけで書いたバトル編です。

見苦しいところお見せして誠にすみませんでした

## 9 ・入院した場合、誰かとコミュニケーションをとりましょう（前書き）

かなり短い上に内容も薄いです。嫌なら見るな。この一言に尽きます。

まあ見ないと嫌かどうかなんてわかりませんがねw

## 9・入院した場合、誰かとコミュニケーションをとりましょう

Next Day

ここは…病院？また気絶したのか？あっそうだ、したんだった。まあ死んでないだけましか。重い瞳を開け、辺りを見回す。左腕には点滴、服の下から大量のコードが延びていて心電図が規則正しい音を鳴らす。

「…神経の異常で入院沙汰か。辛いねえ……」

「……気がついた？」

「あれ？レイ、何でここに？」

「……………／／」

照れるでない。

「まっ…それはいいとしようじゃないか、そっぴや学校は？」

「今日は休み。碇君は2週間ほど気絶してたわ」

「そりゃ…とんでもない事ですな……」

「後…鈴原君、碇君が退院したら言いたい事があるって……」

殴ってすまんかったイベントか。……………（ニタアアア

「へえ、なんだろ」

「妹さんの事だと思っ」

「妹か（ボキボキ……）」

「碇君……？」

「トウジに言っつけ、マタンキに注意しろってな」

「マタ…ンキ？」

「チ　　の事だ」  
「…そう」

まだ羞恥心は芽生えていないか。まあそりゃそうだろう。  
毎回毎回素っ裸になってカプセルの中に入ってるわけだから。  
うれしい、悲しい、腹が立つ、この感情だけが全てじゃないから  
なあ。

「まっいいや。お前はこれからどうすんの？」  
「…何が？」

レイが少し不思議そうな顔をして聞き返す。

「俺が退院して、お前が俺と同居するかどうかだよ。  
確かお前、廃マンションみたいな場所に住んでるんだろ？」  
「ええ」  
「なら、心のご健康のためにも、明るくていいところに住むべきだ  
とシンジ君は思いますよ」

新劇場版では倒壊寸前だったあの家に人が住めるわけがないだろ  
う。

マダオヤジはそんな事も考えられないほどド低脳だったのかねえ。

「でも、碇指令が承諾してくれるかは…」  
「心配無用。俺が何とかしてやる」

簡単な事だ、俺がダンボールを送るのをやめる条件として、レイ  
の同居の許可。

今のマダオヤジならすぐに承知するだろう。

「さて、今日はもう帰りな。明後日には退院してやるよ」

そう言っただけで空いている手でレイの頭をなでる。

なんだろうか…感情はほぼ皆無に等しいくせに、芽生えるのは早い。

赤ん坊のような成長だな。

「…約束…」

「オウ、約束だ」

「約束したら、人は必ず守ってくれるって、碇指令が言ってた」

「ああ、全く持ってその通りだ。約束は人との絆とっていいほどだからな」

今、いい事言ったよな？いい事言ったよな？

「……絆……」

「YES、KIZUNA」

「絆…？零号機……」

「お前と零号機は…何で結ばれている？」

「絆……」

「それと同じ。人とコミュニケーションをとることは、絆で結ぼうとする、第一歩だ」

コミュはストーリーを進行させたり、ペルソナ呼び込んだりと、すっぱー物んだ。

たとえ隠キアラでも同類が集まる事でコミュニケーションが生まれるってもんよ。

コミュニケーションの世界がない世界はどこにもない。

たとえ死んでも美人な閻魔が強制的にコミュニケーションとらせようとするからな（主に説教）

「おk?そーゆーことでお約束。絶対お前をこっちに引き込…同居させてやるから」

「分かった…早く良くなつて…サヨナラ」

「おう、またな」

サヨナラ…慣れないねえ。

ラミちゃん戦が終わったら正すか。

なんやかんやで4日後

「今日で退院してもよろしいですかね?」

「ええ、昨日でリハビリは完璧です、なんなら今日退院手続きをしますか?」



「頼みます。友人待たせてるんで」

「それは大変ですね。………終わりましたよ、これからはあまり無茶なさらぬように」

「さーせん。ありがとうございます」

バッグを背負って、病院を出た。

目指す場所は司令室。エレベーターに乗り、最上階のボタンを押す。

「さて…と、どうするべきかね…なんつーか…」

エレベーターが上昇する。いい口実を考えてはいるが、中々話せそうな雰囲気じゃなさそうだ。

ゼーレの会議的な奴にもたびたび出席してるし、居るのか居ないのか…

どこぞのゲンドウ和解でゲームオーバーとか嫌だぞ。

「まあ…その場しのぎで何とかなるだろう」

制服のポケットに手をつ突っ込んでため息をつく。

これで結構気持ちが悪く落ち着くものだ。

チーンと音が鳴り、扉が開く。

「おしつ重大イベント、一丁決めるか！」

意気揚々と司令室に向かい、でっかい扉を叩く。

『誰だ』  
「俺だ」  
『帰れ』  
「嫌だ」

扉を開け、中に入る

「オヤジ、ちと話を」

「帰れ」

「まあいい、どうせ噛み合わないから強制的に進めるぞ」

「帰れ」

「ダンボールがきれた。まあすぐに買えば何とかなるが、ここでお前に朗報」

「かえ…」

「レイと俺の同居を認めろ、そしたらダンボール供給は中断しよう」

「…」

「仮にここでお前が認めなかったとしよう。さあどうなる？ 答えは、これだ」

俺は指を二本立てて、マダオヤジに見せる

「それがどうした」

「30倍、30倍の量のダンボールを」分かった、好きにしろ」お  
「k

計画通り…



9・入院した場合、誰かとコミュニケーションをとりましょう（後書き）

こぼれ話

ミ「シンジくん、報告レポートは？」

シ「ほれ」

ミ「何々…」

『使徒に対する報告書』 1年2組5番 碓シンジ

今日、僕は使徒に会いました。

僕は、道に立って、ずっと迷っていました。

そこで、ミサトさんが来て、車に乗せてくれました。

楽しかったです

ミ「大切な部分全部楽しかったで省略するんじゃないわよ!!」

シ「えー…」

ミ「書き直し!!」

テイク2

『使徒と私』 碓シンジ

この文章を読んでいるということは…もう私はこの世に居ないだ

ろう。

私は知ってしまったのだ。使徒という存在、エヴァという存在、そして…綾波レイという、不思議な人物の存在を。

ここで私が生きて、戦い、得た事は、来世であっても忘れることはないだろう

どうかこの文章を読んでいる者よ、上層部に伝えてほしい。

この言葉で、誰かが救われ、生きることが願う。

……「愛すべき人のため生きる」……

来世でまた会おう。戦友よ。

ミ「…よく…かけているじゃない……うっくっ…うっくっ…」

シ「さあ…彼の死を無駄にするな。冬月副指令に、提出して来い」

ミ「ええ…、ありがとう」

キール「碇、何だこの報告書は」

マダオ「いえ…報告書の確認は…」

キール「ふざけているのかね、息子殺し」

マダオ「え」

キール「え、ではなからう。このような遺書を書かせて…

息子の死をはぐらかすつもりかね」

マダオ「え……いや……」

キール「そのような人物に人類補完計画は任せられん。

この計画は中止だ」

マダオ「……………もうしわけありません」

GOODBYE!

## 10・同居する場合は、家を掃除しましょう。

「入院が2日も長引いちゃったからな……レイに謝まらねえと」

快晴の空、30度台の温度が俺を襲う。相変わらずの暑さに涙が出そうだ。

そして入院が長引いたせいで、気持ちも重い。  
これも全部ゼーレの陰謀か……

「……」

ゼーレめ……俺とレイの接触を避けさせようとするとは……

なんとという奴だ。今頃キール・ローレンツの奴が左様を連呼しながらニヤニヤしてるだろう……

性格どころか、口調も最悪だ。左様ばかり言って……

「だが左様マン、これでお前の陰謀も終わりだ」

俺がたどり着いたのは、廃屋に等しいレイのマンション。  
工事のゴーンという音が響き、寂れた雰囲気を出している。

「しつれーしまーす」

PINPONは作動しなかった。  
なら強制的に入るのみだ。

「殺風景極まりないな」

アニメで見ると当然殺風景だが、実際見るとさらに殺風景が際立  
ってますね…

緑の匠に任せたら風通しのいい開放的かつ日光が当たる部屋に早  
変わりするってのに…

「さて…何で俺ここに来たんだけ…」

たしか…ん？

「……………」

おっと…ここはレイのプランターだったかな？

生まれたままの姿の綾波レイさんがこっち見えます。

「おう、レイ、お兄さん向こう向いてるから着替えなさい」

「…」

無言で着替え始める。するするといふ服を着る音だけが静かな部  
屋に響く。

男は見ない。痴漢ダメ、ゼツタイ。

「レイ、同居が決まったぞ」

「…」



「反応しろや」ラ。

「荷物は？」

「ないわ」

「へ？」

「ない」

……「冗談はその無表情だけにしろよ……」

「ないのね、おk」

「じゃあ、行きましよう」

そう言って、レイはマダオヤジの眼鏡と鞆だけを持って、外に出た。

みーんみーんジー…とセミが鳴き、汗を滝のように流しながらミサトの家に歩く

「レイ…何でお前は汗かかないの？お前は犬なのか？呼吸で体温

調整してるのか？」

「そんなに舌は出していないわ」

「じゃあ何故貴様は汗をかかないのだ？」

「体質だから」

「……」

再び無言になる。聞こえるのは大粒の汗が地面に落ち、点線を形成している音だけである。

よくみると、レイにも若干額に汗がにじんでいるのが分かる。

これが慣れというものか、くそっ！

「やっと着いたか……わが生涯に一片の悔い」

「死んじゃだめ。電車に乗るわ」

倒れた俺の両足を掴まれ、引きずられながらホームへ向かう俺であつた。

どういふ光景だよこれ……と呟き、白目をむいた。

「…」

重い目を開けると、夕焼けに染まった空が広がっていた。そして引きずられるような感触、少し荒い息遣い。

「はっ…はぁ…はぁ…」

まだ引きずられてるのか俺は。いい加減頭の面積が減るぞ。そんな事はお構いなしに、熱せられた地面を頭にこすり付けられる。

とかどうとか考えている間に、ミサトのマンションに到達した。

「はぁぁ…はぁぁ…着いた…碇…くん…」

駐車場前の日陰でレイが壁に背中を預けて座り込んだ。顔を上げ、息を整えている。…白か。

「いや、仮にも14の女の子が同い年の男子運ぶとは思わなかった  
」  
「よ」

煙が出ている頭を押さえ、息を切らしたレイの手をとる。

「おら、大丈夫か？ヤムチャしゃがって…」

バッグを背負っているからおんぶは不可能、なら…

「お姫様抱っこだ」

レイの鞆を自分のデコに乗せ、お姫様抱っこをする。

「…?」

「男の礼儀さ。借りは返す」

予想の数倍軽かった。1? もないだろこれ、空気だ空気。

「…?…?」

お姫様抱っこされているレイは終始戸惑ったような表情だった。辺りを何度もきよろきよろ見回して、ブツブツと呟いたり

嫌じゃないやら、初めてのことやら…

「よっころ、着いたぞい」

まあレイの戯言は置いといてミサトの部屋についた俺はインターホンを舌で押し、

しばらく待つと、ミサトが出てくる。

「おかえ…あらあら〜ご夫婦でめでたくゴールインかしら?」

ニヤニヤしながら、俺の髪をわしゃわしゃと撫で回す。

三十路め…母性本能まで目覚めたか…

「レイが疲れたから抱っこしたやつただけだ。言わせんな恥ずかしい」

「あらあら顔を真つ赤にしちゃって……退院おめでとうシンジ君」

「ふん、うるせえやい」

ツンとした態度でレイを下ろし、家の中に入る。

「……」

レイと俺は玄関を出た瞬間絶句した。

あふれ出る死臭、辺りを這い回る黒い三連星G。絶望的にくすんだ照明と、散乱するビール缶。

「碓君」

「…どうした」

「私は死なない？」

「お前は死なないさ。俺が守るもの」

「…こういう時どうすればいいか…分からないの」

「掃除すればいいと思うよ」

「  
……」

無言の団結。キン ヨールとゴミ袋を取り出し、ジオン量産型害虫を始末する。

「レイはオフエンス！俺はバックアップ！」  
「了解」

レイがGにキン ヨールをかけ、落ちてきたGをゴミ袋に入れる。再びソーラー・システムを照射、一斉に撃破したのだった。

「任務完了」  
「よし、残存兵力を排除せよ。私も向かう」  
「了解」

「えいさ、ほいさ、えいさ、ほいさ」  
「……えいさ…ほいさ…」  
「レイ、もういいぞ」  
「……了解」

レイと俺は綺麗になった机に座り、突っ伏する。

「レイ、お前も疲れることはあるんだな」  
「……」

「率直な意見を聞こう。掃除はどうだった？」

「……嫌だったわ……」

「正常だ」

「ここ数日は掃除をやめておこう。過労死する。」

「あら、シンちゃん お掃除終わった？」

掃除が終わった直後に三十路が現れるものだから困る。

コイツは都合の悪いときにだけ逃げる引きこもりか。

「さあて、レイの同居とシンちゃんの退院を祝って、今日はパーティーと行くわよー！」

「パーティーって…まさか」

「碇君、嫌な予感がするわ」

「ああ、間違いない。コンビ二弁当だ」

「」名答！今日は楽しみなさい！！」

「まあ、不味くないからいいか」

「…」

コイツもこいつで一生懸命に俺たちを楽しませようと必死なんだよな。

全部空回りしてるが…

案の定ローソンのコンビ二弁当で入居退院パーティが始まったのであった。

今日はサラダもそろっていて、疲れが溜まっていたレイは無表情ながら

まんざらでもなさそうだった。ミサトもよく見てるじゃねえか。感心感心。



10・同居する場合は、家を掃除しましょう。(後書き)

こぼれ話

レ「何だかんだと聞かれたら……」

シ「答えてあげるが世の情け！」

レ「世界の破壊を防ぐため……」

シ「世界の平和を守るため！」

レ「愛と真実の悪を貫く……」

シ「ラブリーチャーミーな敵役！」

レ「レイ……」

シ「シンジ！」

レ「使途を倒す、ネルフ本部のみなさんは……」

シ「エヴァンゲリオン！新パイロットを待ってるぜ！」

マリ「なーんてにやっ！」

11・人を兵器にたえてはいけません。(前書き)

更新が遅れました。テストが終わったので出来る限り更新を早めようと思います。

11 人を兵器にたとえてはいけません。

「…ん？」

「お風呂…空いたわ」

風呂から上り、襖を開けて入ってきたのはミサトのパジャマを身にまとった綾波レイ

まあ…いいか。とりあえず俺は風呂に入ったことを伝え、少しばかり雑談に入る。

「そういえばレイってリツコからどんな風に言われてたっけ？」

「碇指令によく似てるって言われているわ」

「マジか、それって遠まわしにダメ人間って言われてるんだぜ」

「!？」

まあそれはいいとして、もう少し深く入ってみるか。

「レイって…なんでそんなに無頓着な事が多いんだ？」

「…どうしてそんな事聞くの？」

「いや、なんとなーくかな？あの、それ食っていいから」

テーブルの中央にある野菜サラダ（せんべい）をとって少しうれしそうに顔でかじる。

なんか心がぼかぼかした。

「あれ？お前せんべい好きなの？」

コクコクとうなずくレイ。

「へえ〜意外だな」

「…どうして？」

「女の子ならケーキとかケーキとかケーキとか好きなんじゃないの？」

「ケーキ？」

「重症だこりゃ…」

いまだきケーキを知らない女子など居たのか…？

味噌汁も知らないんだから当然っっちゃ当然だが。

「まっいずれ食べさせてやるよ、んじゃな〜俺寝るわ〜」

「ケーキ…」

自分の部屋の襖を空け、ベッドに寝こんだ。

次の日、朝は無言で歯を磨き、飯を買い、学校に行ってトウジを殴った。

ついでにトウジと仲直りさせ…した。

「これで貸し借りなしや、いや……これ以上キンタマ蹴るの止めてくれや」

「……………わーたよ、確かに毎日一発はやりすぎた」

「ホンマけ!？」

「だからこれからは周一のペースで……」

「お前はわしのタマに恨みでもあるんか!？」

「まあいいか、オラっ次体育だぞ。着替えようジャマイカ」

「せっ…せやな……」

体操服に着替えて、グラウンドに出る。今日は外でバスケットか…レ  
イは水泳。  
塩素はちゃんと落とせよ。

軽く準備体操をして、前半の試合に出る。どうやら俺がジャンプ  
ボールをするようだ。

「プゲラッ!？」

案の定この細い体だと押し切られるのがオチだ。  
ボールを相手に取られ、トウジがリーダーシップを取り、ボール  
を追いかける。

「碇い!!!!」

「まかせえい!!!!」

ボールを受け、ドリブル突破でゴール前に着く。  
ダンクは出来ない。それどころかシュートもロクに撃てない。  
どうする?ケンスケが居るじゃないか。

「ケンスケ!」

「ええ!？」

ボールをケンスケに渡し、シュートを放たせる。  
これが入ったら奇跡……え?

ネットにボールが入る音が聞こえ、ホイッスルが鳴る。



その後、全くやる気が起きず試合終了。  
俺らはグラウンドの端で休憩を取る事になった。  
ふと上を見ると、プール側で女子がバスケットを見ている。

中学生の癖にナイスバディではないか。けしからん。

「ヤダー碓君が見てるー」

「碓くん!」

「ステキー!」

「イケメーン!」

「……俺ってモテキャラだっけ?」

「みんな…ええ乳しとるのお」

俺の隣でトウジが鼻の下を伸ばして呟く。

馬鹿者、鼻の下を伸ばさず、無表情で視姦するのが通ってもんだろっが。

トウジ、貴様初心者だな。

「確かにそれは同感だ、どうやったらああ可愛らしく育つのかねえ」

「先生!誰を熱心な目で見とんねん!」

「無論綾波!」

「綾波か!?!」

突然トウジの頭にケンスケが乗っかかり、話に割り込む。

「そう、綾波、あのスナイパーライフルのようにスリムな体型…」

「…はあ?」「おお!」

「そして戦車砲弾のような大きすぎず小さすぎないあのちょうどいい



いバスト……」

「おおおお!!」「???」

「そして銃身が冷却されるようなあの冷たい無表情……」

「おおお!!!!」「さっぱり分らんわ」

「スリムな体に小回りの効く性格!!まさにF・5タイガーの擬人化ではないか!!」

「すごい!!すごいすぎるう!!」

「人を兵器にたとえるのはどうかと思うで……」

と、欲望全開の最高の気分で体育の時間が終了した。

真夏にマラソンはカンベンしてくれ。あれ本当に辛い。

午後はハーモニクスとシンクロのテスト。  
最初ハーモニクスと聞いてハーモニカを吹くのかと身構えたが違  
った。

簡単に言えばエヴァとの神経接続が云々らしい。

「座ってりゃいいって言うけどよお……あれ？眠くなってきた……」

「ハーモニクス、および……シンクロ率大幅低下！！パイロット熟  
睡中！！！」

『起きなさい！！！！』

「どっせい！？」

全くといっていいほど眠れないのが難点である。

まあ確かに寝てたらエヴァとの同調もクソもないけどな。

『シンクロ、かいふ……シンジ君起きて！！』

「ZZZZZZ……」

『シンジ君！！シンジ君！！指令！！』

『LCL圧縮濃度の限界に挑戦しろ』

『了解！！』

突然、LCLが真っ赤になり、全身が締め付けられるような痛み  
を全身に感じた。

「ゴバアアアアアアアアアアアアアア！……！……ほぼぼ……」

『真面目にやれ』

「ゴボツ……ハイ………」

『シンクロ開始、シンクロ率90%キープ』

「ったく……何度やっても同じだったのに……」

『シンジ君がもう少し真面目にやってくれたら……指令が見ていると  
いつのに……』

マダオヤジが見てるのか……

『シンジ君、あからさまにシンクロ率下げないで』

「はいはい、マヤさんがそういうなら」

『……解せぬ』

11・人を兵器にたとえてはいけません。(後書き)

こぼれ話

レイ「何を望むの?」

ミサト「何を望むの?」

アスカ「何を望むの?」

シ「スーパーサイヤ人になりたい」

## 12・零号機の起動実験は必ず立ち寄りましょう。

レイが同居開始してから数日がたった。相変わらず無頓着ながらも感情は出している。

今日もレイと学校帰りにリンゴを買つと、心なしかつれしような顔をしていた。

心がポカポカした。

で…只今地獄に出くわしているのですが……

「なあによこれ〜……」

正にリツコの言う通りである。インスタントカレーとインスタントカレーを融合させ、

さらにまたインスタントカレーを融合させ、そこにインスタントラーメンの素を叩き込んだ

真の料理「カレーのような物」ある。

「カレー…のような物だ。ミサトのマニュアル通りに作った結果がこれだ」

「…どうしてこうなったの？私の知っているカレーと違う…」

「キッチンで何があったのか説明して欲しいわ」

レイとリツコが驚愕するのも無理はない。見た目は悪くない。

しかしおいがカレーじゃない。確実にラーメンの素がおいを引き出している。

「お呼ばれされていて文句を言わない」

「…駄目…この臭いは…駄目…」

ヤバイ…レイが鬱になる。料理をほとんど知らない彼女にとってこれは地獄だろう。

「レイ、我慢してくれ…後でリンゴあげるから。ミサト、お前は？」  
「ああ、私はね〜」

ニヤニヤしながらカップラーメンを俺の前に見せて

「ココに入れちゃって！どつぶあ〜っ」と

「ちよつと黄色い救急車呼んでくる」

「遠まわしに精神病院に連れて行かないで！！」

仕方なしにカレーをカップラーメンに入れる…いや投下した。

125

「最初っからカレー味のカップ麺じゃね〜この味は出ないのよ〜」

「鬼畜っ…正に…鬼畜っ…この小さな食べ口につ…カレーをどつぶあ〜っ…」

「……………」

「味覚を疑うわね…」

「ひひっ…いっただっきま〜す」

何のためらいもなくカップラーメンを食べるミサト。大丈夫なのか？

「スープとお湯を少なめにしとくのがコツよ〜ん」

「それが正しいのなら…私も」

「やめるバカ、とりあえず…食ってみようぜ二人さん」

「……」  
「じゃあ……」

恐る恐るカレーを口にする俺たち被害者3人組。

「ふぁー!?」

「っ!?」

「うっ!!!?」

永遠のトラウマを植えつけられたのであった。

「シンジ君、レイ。やっぱり引越しなさい、がさつな同居人の影響で一生を台無しにする事はないわ」

飯を食い終わった後、リツコが俺たちにもっとも正常な提案をする。

しかし俺たちがいなくなれば一体どうやってこのバカを抑制するのか。

「そうしたいんだが…俺にはこの産業廃棄物の処理をする義務があるのだよ」

「私は碇君についていきます…」

「ちよっと待てシンジ、今なんつった」

するとリツコはため息をつき、何かを思い出したような顔をする

「そう…でも、今度呼ぶときはシンジ君が当番のときにして頂戴、あっそうだったわ…」

鞆の中から、一枚のカードを抜き出す。IDカードか。

「レイの更新カード。渡しそびれたままになっていたの。ごめんなさいね」

「…はい」

「へえ〜カードって更新タイプだったのか…：…ちょいと見せてくれ」

レイからカードを受け取り、自分のと見比べる。

「なんでこつも俺の写真写りは最悪なんだろうな…：…」

「それ、前の中学校の写真だからあ〜なぜか目が半開きなのよ〜」

酔っ払ったミサトが軽く説明してくれた。なるほど、原作シンジの写真か。

…：…腹立つ顔してるなあ…

で、こつちがレイの写真…：相変わらず無頓着な表情だが…

「どーしたの〜？レイの写真をじ〜っと見ちゃって〜本物なら隣に居るじゃない」

「なっ！？馬鹿者！俺はっ！…！」

「…？顔が赤い…！」

「ななな何を言うだあー…！…！」

「くふふっ向きになりやすい性格ねえ〜からかい甲斐のある奴っ」

「ミサトと同じね」

「なっ…！」



俺は再びカードを見て、呟く

「フラグを折ったか…ちくせう…」

N e x t   d a y

「零号機の再起動？」

休憩所で偶然鉢合わせした子安…もとい青葉シゲルに聞いた。

「ああ、シンジ君も一度は聞いたことがあるだろう？ 零号機の暴走。その修理が完了して、今日もう一度再起動を図るらしいぜ」  
「へえ〜マダオヤジも必死ですねえ…」

UCCブラックコーヒーを無料の職員用自動販売機で買い、口に含む。

眠気を解消するにはブラックが一番いい。

「お？ブラックか、シンジ君大人だねえ〜」

こや…青葉が背中を叩いて褒めてるのが馬鹿にしてるのか…だが嫌って訳じゃない。

いわゆる社交辞令って奴だろう。

「へへっ中学生は背伸びしたがるんですよ。青葉さんはブラック派？」

「いや、ミルクコーヒーで頼む」

青葉はロン毛の癖に性格がいいからな。ロン毛の癖に。

「はいよ」とミルクコーヒーを渡すと、「サンキュ」と受け取る。

これも社交辞令。

「零号機か…あの黄色のエヴァですよね？」

「ああ、俺ももうすぐ行かないとな」

「大変ですな、お互い」

「全くだ、パイロットもオペレーターも大変なもんだよ…おっ時間だ。じゃあな」

「ばーい」

青葉が実験場へ向かう。

「俺も…見学に行くか」

休憩用のソファから立ち上がり、実験室的な場所へと向かう。

実験見学用の別室に到着した。ここなら誰にも邪魔されず、おとなしく見ることが出来る。

……ぱつと見なぜか零号機にガタが来ているような感じがするが…あれで完璧らしい。

あれだ、ボロそうに見えて結構完璧だったりするんだよ。  
アポロ13号もその場しのぎで帰還したからな。

「シンジ君、始まるわよ」

「なあミサト、たとえ起動したとしても実践には耐えられないだろ？」

「起動するのが先決なの。たとえば実践に耐えられなくてもね」

「ふ〜ん…その場しのぎが一番いいって奴だな」

「分かってるじゃない」

俺は再び小窓を見て、実験を見守る。

結果は知っているが一度生で見てみたいものだ。

全国のロボットファンが歓喜する瞬間だからな。ふへへへ…

『これより、零号機再起動実験を行う。第一次接続開始』

マダオヤジの声が聞こえ、零号機の起動が始まる。

こうやって見ると機械の起動は大変なものだ。

最近のパソコンはパワーボタンを1プッシュで全部起動するが

「起動…初号機も起動可能で発進まで物凄い時間がかかるってのに、零号機はそれ以下のスペック…」

コアがなく、機械と同調する…相当難しいことなんじゃないのか？

いや…俺の零号機知識は皆無に等しいからよく分かんが…

「初号機と零号機じゃ…わけが違ってたか…」

とかどうこう考えていると零号機の再起動は最終段階に入った。

『絶対境界線まであと、2、5…2、4…』

……あつ今日ラミエルことラミちゃんの日だ。

まあどうでもよくないけどどうでもいいか。

『…0、3…0、2…0、1…突破。ボーダーラインクリア、零号

機起動しました』

「ふう〜よかったよかった」

見学していた俺は肩の力を抜いて、安堵の表情を見せた。  
するとコーヒー片手にミサトが近寄ってきた

「今日は起動記念でパーツとしましょう」

「レイはコンビニ弁当嫌いだぞ？」

「そーなの？じゃあシンちゃんの手料理でもいいんじゃないの？」

「…知らんぞ？どうなっても…」

「いーのいーの、私よりかはマシだから」

当たり前だ。お前の壊滅的な飯は化学兵器と呼ばれる物に等しいぞ。

「おや、起動記念ではなく祝勝会になりそうだな」  
「そうねっ！行きましょー！！」

ミサトと別れ、俺は更衣室へと向かった。

12・零号機の起動実験は必ず立ち寄りましょう。(後書き)

こぼれ話

零号機エントリプラグ内

レ、LCLとカレーの味が混ざっている……気持ち悪い……」

13 ラミエル様に見とれていないでさっさと攻撃しましょう。(前書き)

今回はあの神々しい天使、ラミエル様のご光臨です。

皆さん崇めなさい、そして跪きなさい！！



13・ラミエル様に見とれていないでさっさと攻撃しましょう。

プラグスーツに着替え、手首のボタンを押す。  
顔に風が吹き、自分の髪の毛をなびかせる。

「ヤシマ作戦は絶対にやりたいが…熱いのは嫌だなあ…」

何しろアニメでもレイとの仲が深まる重要なイベントだ。  
このプラグを折ったら多分立ち直れないだろうなあ…

「まっ悩んでも仕方ねえ、行くか！」

自分に湯を入れて、エントリープラグへと急ぐ。

エントリープラグに入り、LCIを飲み込む。

そして初号機の中にエントリープラグを挿入し、発進準備に入る

『初号機、発進準備に入ります、第一ロックボルト外せ』

日向マコトの声と共にロックボルトが外れる。  
モニター前方にロック解除確認と表示された。

「外れたぜ」

『了解、第二拘束具外せ』

「おk、解除確認」

するとエヴァが動き出し、射出位置へ着く。

「ミサト、発進したとき、すぐに安全装置を外してくれ」

『え?...どうして?』

「奇襲の可能性があるからだよ。初戦も目の前に使途が居る状態だったからな」

『ええ、了解よ.....発進!!』

ばしゅーんという音と共に地上に向かって一直線に向かう。

『目標内部に高エネルギー反応!!』

『シンジ君の言う通りね!最終安全装置を事前に解除!シンジ君!』

「おうし!まかせい!!」

天井部分のハッチが開き、引つ掛け部分となる棒が出ていない。

用意周到ってわけですよ。向こうもこっちも。

「垂直飛びい！！」

地面に到達した瞬間、垂直に飛び上がる。

その刹那、ビルを貫通し、自分が居た場所は粒子によって焼き尽くされていた。

「おー怖い怖い…ってのわああ！？」

フィールドの壁を作って、それを足場にしながら素早く地面に着地する。

そして再び加粒子砲がその部分を襲った。

「勘弁してくれ…あつぶ！！うおっ！ヒイイ！！？」

今度は地面に向けて連続で加粒子砲を撃ちだして来た。学習能力が半端じゃないな…

「うっ防御防御」

今、射程範囲外に全力疾走している僕は、ネルフ所属の巨大ロボ  
ット。

強いて違うところをあげるとすると、魂は女性って所かな  
名前はエヴァンゲリオン初号機。

そんなわけで、加粒子砲を避けながら近くの兵装ビルにやってき  
たのだった。

「はあ……っ……っ……!!??」

ふと見ると、ビルの目の前に一つの正八面体が浮かんでいた。  
ウホッ！いいラミたん…

そう思っていると突然そのラミたんは僕の見ている目の前で  
八面体の側面を光らせたのだ…！

【ラ…】

『シンジ君避けて!!』

「えっちよつと待つ…アツ……!!!!」

僕は加粒子砲とその熱によってあっけなく共に果ててしまった…

気がついたら、俺はまたベッドの上で寝転がっていた。  
なんだろう…俺は何をしていたんだっけ？  
何故か男として大切なものを汚された気がする。

「……………」

「気がついた…?」

「それ聞くの3回目だよ…」

「そう…」

男は場所が変われば気絶回数も増える。これ、俺が実感した教訓ね。

と、しみじみとした顔をしていると、綾波がメモ帳を取り出す

「碇君、明日の午前0時、ヤシマ作戦が決行されるわ」

「ヤシマ作戦…」

『ヤシマ作戦』：ラミエルをぶっ潰そうぜ作戦。

二子山に要塞を建設して、初号機の陽電子砲でラミエルを貫く作戦だ。

ぶっちゃけ初号機使わないで自走砲の射撃で撃破したほうがいいと思うが…

「今日の午後5時30分に起きてケイジに集合。後の事は後で伝えるから…それだけ」

後、使えなくなったプラグスーツから新しいスーツに着替えて…」

なんか結構気遣った説明だな…アニメだと一言で伝えて新しいスーツ渡してはい終了だったけど。

ふーむ…評価が高いのか…自惚れじゃないぞ。

「寝ぼけてその格好で来ないでね…」

「は?……………おや…元気な息子……………って…パジャマはなかったのかよ!…」

「緊急治療だったから、パジャマはなかったわ」

「ちくせう……ん？飯か？」

「ええ」

飯を見ると、ポテトサラダと、パン、牛乳に……何だこの茶色いものは……

「病院食か……まあいい。初号機は大丈夫なのか？」

「応急処置だけど、何とか間に合っているわ、G型装備で出撃」

「G型？」

「狙撃に適した装備よ。それ以外の能力はほぼ皆無、携行装備はプログナイフだけ」

プログナイフはレイ救出用ね。分かります。

「じゃあ、葛城一尉と赤木博士がケイジで待っているから……」

扉が閉まり、一人になる。

「……………」

無言で制服に着替え、飯を見る

「……この茶色いの……なんだろ……」

口に含まと、固形のカレーだった。

「ミサトのよりかは美味しいな」

日本時間午後17時30分

「来たわね、シンジ君」

「あつたりまえだろ、レイを任された身として、あいつに危険は冒させねえよ」

「いい覚悟ね、じゃあ今回のヤシマ作戦の概要を説明するわ」



ミサトから本作戦、ラミエルのコアをぶち抜こう大作戦もとい、ヤシマ作戦の説明を受ける。

「以上よ、エヴァを二子山に搬送するわ、乗って」

「へい」

「はい」

日本時間午後18時00分

外に出ると、学校側でトウジを含む複数の生徒が手を振っていた。

「がんばれよー！」「頼んだぞー！」「碇ー！」

集音装置が働いて、はっきりと音が聞こえる。

「おつよ！任せろ！！」

手を振りかえしてやった。ああいつのを見るとほほえましくなる心を持てるのはいいことだ。

「レイ」

「…何」

「お前も手を振りかえしてやれ」

「…ええ」

レイもひかえ目に手を振りかえした。

男子生徒立ちは歓喜した。

「綾波いい！！」「綾波さああん！！」「がんばってくださいあああ  
い！！！」

「……………嫌じゃない」

「なーに顔赤くしてんだ」

「……………」

無言で通信がきれた。照れてやがるW

13・ラミエル様に見とれていないでさっさと攻撃しましょう。(後書き)

こぼれ話

ラミエルのボーリング速度が信じられないほど速かったら

メガネ「敵はこのネルフ本部へ直接侵攻を図るようですね…」  
ミサト「じゃらくさい…で？到着予想時刻は？」

モブ男「3分足らずですね(どや顔)」

メガネ「白旗でも揚げますか？」

ミサト「そうね…」

#### 14・ヤシマ作戦、節電にご協力をお願いいたします

日本時間午後20時10分

『精密機械だから、慎重にね』

「わーてる」

初めて触る『EVA専用改造陽電子砲』通称『ポジトロンスナイパーライフル』

もつと略すと『ポジトロンライフル』ずっしりとしてロマンあふれる武器だ。

そのポジトロンライフルを発射台に設置し、俺たちは一旦エヴァから降りる。

「しっかしまあ……よくこんな汎用性の低い自走砲を使う気になったな」

「仕方ないわよ、間に合わせなんだから」

リッコがため息混じりに返答する。確かに自走砲の上に180000000kWの大出力だ。

反動も相当なもので、再装填にも膨大な時間を要する。当然汎用性は皆無に等しい。

「理論上は大丈夫だろうが……銃身に加速器、こいつらは撃たないと分かんってか」

「そうね、確かにリスクは大きいけど、それでもやらないといけな  
いのよ」

「兵器としちゃあ、ナンセンスだな」

「ふふ…確かにね」

少し間が空いて、ミサトが口を開く。

「本作戦における、各担当を再確認するわ。シンジ君、あなたは初号機で砲手を担当」

「だろうな」

「レイ、あなたは零号機で防御を担当。出来るわね？」

「はい」

シンクロ率が高ければ高いほど命中精度は上がる…まるでレベル式のFPSだ。

「これは、シンジ君と初号機のシンクロ率が高いからよ」

リッコが再びライフルの説明をする。

「今回はより精度の高いオペレーションが必要になるわ。

それに陽電子は地球の自転、磁場、重力の影響を受けて、直進しません。」

その誤差を修正するのを、忘れないで。正確にコア一点のみを貫くのよ」

FPSで言うヘッドショットだけを狙えって事だな…本当に大丈夫なのか？

「…俺はシーカーの真ん中を狙えばいいんだな？」

「よく分かっているわね。細かい事は機械がやってくれるわ、安心して」

「…私は…私は碓君を守ればいいのね？」

「そうよ」

「…分かりました」

あいつには危険な目にあわせたくないな…下手すりゃ…俺が犠牲になればいい。

だが…ネガティブになるのはいけねえ、ポジティブポジティブ。

鬱ENDは絶対に避けるぞ。

「時間よ。二人とも着替えて」

「おk」

「はい」

日本時間午後21時00分

更衣室の中、シンジはブリーフ派だが俺は無論トランクスだ。ブリーフなんか幼稚園以来全くはいていない。カヲルはどうなんだろうか…

「あいつは…どうだっけな…まあいいか」

「碇君」  
「ん？」

「あなたは…碇君は…私が守る。無茶はしないで」

なんだ？いきなり…俺を守る？…キタコレ…心の成長がまた見られたー！

つといけねえ…返事返事。

「合点承知」

「…」

レイは更衣が終わり、プラグスーツのスイッチを押す音が聞こえる。

俺も行為を終え、スーツのスイッチを押す。

「さて、行きますか。お互いを守りに」  
「ええ」

ラミちゃん、みんなのアイドルを傷つけないが…その人気は  
レイに劣る！

悪いが撃破させてもらいますぜ！俺もラミちゃん好きだけどな！



日本時間午後22時30分

作戦時間までまだ余裕がある。そこで俺たちはエヴァの搭乗口付近ですわり、待機している。

初号機と零号機が月夜に照らされて、鈍く光を反射している。はたからみればとても幻想的な光景だろう。

「……………」

「……………」

「碓君は何故エヴァに乗るの？」

「俺？」

「そう」

突然の質問に戸惑いながらも、俺は答える。

「俺は……まあ……成り行きだな。成り行きで人類を守ってるだけ？」  
「成り行き？」

レイが言っている意味がよく分からないといわんばかりに瞬きしながらこつちを見る

「そう、成り行きだ、どうひっくり返っても俺は初号機に乗る運命だったんだろ。」

だからその流れに逆らわず、ここまで生きてきた。ただそれだけさ。

お前は……どうかな？」

「私は…絆だから、みんなとの絆…」

少し恥ずかしげに、ひざで顔を隠し、横目で俺を見る。

「そして…碇君との絆…」

あ、デレた。

「ははっ、俺との絆ねえ、その理由で十分だ。戦う理由があるなら、それでいい」

「そう…時間だわ…行きましょう」

そういつてレイは立ち上がり、昇降機のスイッチを押す。

「じゃあ…サヨナラ」

「……………」

「相変わらずだな…その部分のそっけなさは」

俺も昇降機のスイッチを押して、エントリープラグに搭乗する。

……………いよいよ…だな。エヴァ本編の第一関門。



日本時間午後23時59分50秒

『只今より、午前0時00分00秒をお知らせします』

ドワンゴも顔負けのジャスト時報をお知らせし、作戦が開始される。

日本時間午前00時00分00秒 作戦開始

『シンジ君…エヴァに乗ってくれたこと…それだけでも感謝するわ…』

「それは、作戦が終わった後に聞く、時間が惜しいんだろ？」

『そうね、ヤシマ作戦スタート！第一次接続開始！』

『了解、第一から第八 タンクまで接続開始』

『各発電設備は全力運転を維持。出力限界まであと0.7』

『電力供給システムに問題なし』

『第3対地攻撃システム、蒸発！』

やはりミサイル攻撃は聞かない、所詮周りで飛んでいるミサイルは陽動。

……税金の無駄遣いだな（冬月風）

『第2砲台、被弾！』

『第2対地システム、攻撃開始』

『第7砲台、攻撃開始』

通常兵器は全く役に立ってないな…その上ライフルはまだ使用不可。照準機も使われていない。

まだ俺は不要ってわけか…

『第四次接続、問題なし！』

『最終安全装置解除！』

『撃鉄起こせ！』

おっ出番出番、といってもヒューズ装填だけだが。

ガシャコンと撃鉄を起こす。

「おっし！！照準機起動！…動くんじゃねえぞ！！」

ここからは機械と俺のシンクロナイズドショットティング（意味不明）だ。

照準機が少しずつラミちゃんのコアに向けて照準を合わせる。

「大丈夫だ…俺なら出来る…俺しか出来ない。いやそれはない。」

他の人にも出来るが現状では俺に任務を任されている。

だから俺にしか出来ない。代わりはほかにいな…『発射！！！！』

え？

「のおう！」

反射的にトリガーを引く。

その時集中力が途切れていたのか、射線は大きくずれ、中心を大きく外れたところに命中した。

『ミスった！？』

「ダメだこりゃw」

加粒子砲が真横を通り、熱と共に俺は吹き飛ばされた。

14・ヤシマ作戦、節電にご協力をお願いいたします(後書き)

ミ「…着替えに何分かけてるの？」

シ「……………」

レ「……………」

## 15・盾のご利用は計画的に。

「のっ！ばっ！ー！うほっ！ー！いい男！ー！」

転がりながら2〜3km吹っ飛ばされ、地面に倒れる。

「あー熱かったあゝ…どれくらい熱いかって言うと熱湯甲子園の熱湯風呂だ…」

『シンジ君！大丈夫！？』

「おーらい、もちろん健康体ですぜ」

『了解、初号機を狙撃ポイントに戻して』

「あいよ…！？」

起き上がれない。腕に力を入れても肝心の初号機の腕が動かない。ええい！機能不全に落ちたのか！ー！エヴァ初号機いい！！！！！

『初号機！右腕神経回路破損！狙撃は困難な模様！』

「やっぱ駄目か…神経が破損しちゃ痛みも感じない、だが腕は動か  
ず。」

腕が動かなきゃどうにもなりませんね。

『零号機、ポジトロンライフル装備！』



「は？」

遠くで、レイの零号機が盾を破棄し、ポジトロンライフルを手に取っているのを確認した。

「レイ、早まるな。死ぬにはまだ早いぞ」

「……」

「無視…か。お前が死んで困らない奴がいなくても思ってたのか」

しかし恐らく冷静なレイがここまで大胆な行動をとるとは…  
相当な焦りが見られるでしょうな。

さらにラミちゃんの再射撃までの時間はあとわずか。

シンクロ率の低いレイの射撃精度では照準が合うまでかなりの時間を要する。

初号機は右腕破損、照準を合わせるのとは不可能。

暴走によって右腕を復元するという方法があるが暴走はほとんどしない。

「ちっ…八方塞はっほうさいまがりじゃねえか…」

ならどうすればこの状況を乗り切る？

暴走に似た状況を引き起こし、右腕を復元させ照準を合わせる…  
いや、右腕を復元した地点で第二射が来る。それは出来ない。

そうすると、右腕を復元させて防御に転ずる…それしかないな。

そして最大の問題、暴走に似た状態とはどういったものか…

式号機零号機初号機、どれも暴走が可能だがその可能性は極めて低い。

碇ユイが俺を守ろうとする心で暴走が起こるが、そもそも俺をシ

ンジとして認識しているか…

それが分からない。なら自発的に暴走に似た状態を作る。しかしどうやって？

「くそっ…これが分からないんじゃない…！」

そういえばエヴァの破でメガネっ娘のあの子が弐号機を覚醒させていた…

確かあれは裏コードを使っていた『ザ・ビースト』エヴァの獣化第一形態。

弐号機に使ったモードだが、初号機には存在するのかわい、もう時間がない。さっさとやるしかない。

初号機を左腕で起き上がらせ、体制を整える。

「……モード反転、裏コード…ザ・ビースト…！」

……。

「……………」

膨大な思考時間が全て無駄になった瞬間を実感した。

「やめとけ、レイ」

片腕でライフルを奪い取り、レイの盾を押し付ける。

「俺に見せ場を取っちゃやーよ」

『でも…』

「俺のプライドを守れ、命令ですよ」

『!…了解』

恥ずかしい事を言って虚しい気持ちになりながら片腕でライフルを構える。

しばらくしてG型装備を排除される。

まああんなオンボロ装備つけてるだけで邪魔だからな。

いずれ第二射がチャージ中に来るだろう。盾が持つ時間は確か17秒。

14秒辺りでレイ本人にも熱が加わるはずだ。多分。

そうならないためにも彼女が俺を守る時間は10秒、残された3秒は退避時間だ。

最悪の場合：ATフィールドでレイを跳ね飛ばす以外他ないだろうな。

「……俺はアヤナミストですから。死んでも守ってやりますよ。アスカもね。」

『ヒューズ交換、砲身冷却終了!』

『射撃用所元、再入力完了。以降の誤差修正は、パイロットの手动操作に任せます!』

「…了解だ」

ちったあ真剣にならないと、そろそろ本部にぶつぶつで卑猥なピンの棒が入ってくるだろうし。

真剣かつ丁寧に…

照準機がラミちゃんのコアを映し出し、下画面が固定される。

そして上画面は俺が調節しなければならぬ。初号機のシンクロとレバーの微調整で調節する。

「くっ…クソ…照準が合わねえ…」

微調整はFPSと同じと言ったな? あれは嘘だ。FPSの数百倍の難しさだ。

わずかな思考のぶれでもコアからずれる。あっ…またずれた。

しかし…コアの中心部分がなんか鈍く光ってるような…なんか激しく嫌な予感が…

『目標に、再び高エネルギー反応!!!』

『まずい!』

突然目の前が真っ白になり、加粒子砲が俺に向かってダイブして来た。

「ひぎいい!？」

『シンジ君!』

そしてダイブしてきた加粒子砲を俺は全身全霊をかけて受け止める…

事にはならなかった。

「っ……眩しっ！って……レイ！？」

『くっ……うづう』

やべっ目瞑ってて時間数えてなかった……だが恐らくこの声からすると、14秒以上……

あるえ〜？照準合わせてたっけえ〜？っって言ってる場合じゃねえ……！

「レイ！！もういい！退け！！もしくは逃げる！！」

『だめ……だめ……早く……早く撃って……！』

無理です。照準合わせてないもん。

「アッー！！もういい！！なら無理やり引っ張り出す！！」

左腕を離し、局地的なATフィールドを発生させ、なんやかんやで零号機を吹き飛ばす。

大体俺の望んだ事は何でも出来る。ATフィールドばんの……

「うわっちゃあああああああああああああああああああああ！

！……！！」

『シンジ君！！』

『くっ……………碇君！？』

加粒子砲が初号機を直撃し、LCLが沸騰する。

確か沸点って100度以上だったよね、ってあっちゃっっちゃっち



すると、突然心臓の鼓動音が聞こえ、LCLが冷える。  
頭の中で何か暖かいものを感じる。これは…ユイさん？  
いや…他人の母親見てあまりうれしくは感じないんですが…

「そう、あなたは他人、でも体はシンジ…そのシンジを守るのが親の仕事…」

「ごたごたいいから加粒子砲何とかしてください。そのシンジが死にます。」

「ふふ…そうね、それじゃあ…あなたの好きな戦い方をして頂戴。  
私はその力を最大まで引き上げるわ、これが昔のシンジなら…私が戦ってただけ…」

え？じゃあ…ユイさん、ゼルエル食ったの？サードインパクト起こしたあのユイさん？





15・盾のご利用は計画的に。(後書き)

こぼれ話

冬「碇」

ゲ「なんだ」

冬「完全に置いてけぼりだな」

ゲ「ああ……」

冬「どうする」

ゲ「ああ……」

冬「碇？」

ゲ「あ……あ……ZZZZZZ……」

冬「……ZZZZZZ……」

16・瞬殺技は最後まで取っておくのは主人公の勤めです。

『右腕の修復は終わったわ…後はがんばって…はぁ!』

ユイの力の入った声と共に加粒子砲が弾き飛ばされる。

「はっはい…こええ…だがもうやるしかない…!」

シンクロ率も上がり、ATフィールドの汎用性も高まっただろう。ならばもう、怖いものなし!暴走状態になったエヴァに勝るものなどない!…!

「おっしゃ!フィールド全開!」

するとモニター越しからも確認できるほど巨大なATフィールドが張られ、周囲を包む。

…さっさと終わらせるか…

ラミエルは再発射まで時間がかかるようだ。

この時間が勝負!!

「行きますよ！」

初号機が雄叫びを上げ、走り出す。

それに反応したラミエルが形状を変形させて、加粒子砲をチャージしてきた。

形状変形…序と同じか。と言う事は中心のコアがむき出し…！

「つまり大チャンスってわけですね…！」

走りながらATフィールドを両腕にまとわせ、ラミエルの目と鼻の先の距離まで接近させる。

そして向こうが加粒子砲を放った瞬間、ATフィールドをまとった両腕を前に出す。

すると一瞬魔方陣が出現し、オレンジ色の球体が大きくなっていく。

そして加粒子砲が直撃した瞬間、それは周囲にリングを出現させ加粒子砲4倍の太さの波動となりラミエルに直進する。

閃光と轟音が第三新東京市を包む。

「カウンターってか？元ネタはマスパ。と言うよりほとんど魔方陣出してる地点マスパのパクリ」

無論マスタースパークもどきはラミエルを貫き、衝撃波で周囲の建物、山を全壊させる。

ラミエルは悲鳴を上げ、爆炎をあげて地面に墜落した。

「おっ……終わったあ……はあ……」

それと同時に暴走が解除され、初号機は地面に崩れ落ちた。通信も回復し、作業員やミサトたちのあわただしい声が聞こえる。

『碓君！』

砂嵐が多いモニターから黄色の機体がちらに走ってくるのを確認した。

「レイ……」

すると初号機のエントリープラグが強制的に引き抜かれ、モニター  
の電源が落ちる。

『くっくっく……』

外でレイの声が聞こえ、すこし非常用扉が水圧に押され、少しばかり開く。

エントリープラグ内のＬＣＬが減っていき、今度は人の手で非常用の扉が完全に開く。

中に入ってきたのは今までにないほど怯えて、そして涙目のレイだった。

「碇君……」

「おう、わしがそんなんで死ぬとも思ってたのかね？」

フラフラになりながらも立ち上がり、レイのほうに向かおうとするが

座席に押し戻された。そしてレイが涙声になりながらも喋る

「駄目……！今動いては駄目……！動いては駄目……！」

「え……おいおい、泣きなさんな」

しかし一度溢れ出した涙を止めるのは不可能である。

目に異物が入った様な不慣れな行為をしながらあふれる涙を拭い

ている。

「ナミダ……初めてのこと……私……う……ないてる……の？」

「ああ、だが俺……そこまで心配かけるような事してないけどな……」

少し呟くと、レイが俺の目の前にやってきて顔をうずめる。

レイの手は俺の体をぼかぼかと叩き続けている。

「どうして……私が守るのに……私が守っていたのに……」

あーなるほど。シールド防御の仕事を強制的にはがされたのが気に入らなかつたのか。

だがな……

「それは悪かつた、しかしお前に死なれるのは私にとっては目覚めが悪いものでして……」

レイの頭をなでながら弁明するが、レイの手は止まらない。

「碇君は……いつも無茶ばかり……」

「へ？」

「全部一人で背負い込んでいる……」

「んな事はない」

「だから、いつも使途と戦って気絶して戻ってくる……」

「それは実力の問題」

「もっと誰かを信じてあげないと……駄目」

「信じれるんならもうとっくに信じてる」

「……」

エントリープラグの中で沈黙が続く。

しばらくすると、レイが顔を離して、こっちを見つめる。

「馬鹿……」

「うっ…ひでえや」

先ほどの声、涙顔、すべて脳内メモリに保存しました。  
多少ニヤニヤしながら、肩を借りて外に出る。

『綾波……』

「（ピクッ）」

「…どうしたの？」

「いや、何も」

空耳だろうか…一瞬俺の声が聞こえたような…



「うわ〜こりゃひでえや」

外に担ぎ込まれて初号機を改めてみると、その容姿はもはや初号機にあらず。

装甲が見事に融解し、塗料がつららのようにただれている。肩の突起部分は吹き飛び、脚部は素足がえぐれ、骨が露出している。

「損害は相当なものね…次の用途まで持つかどうか…主に私の給料」  
ミサトが困った顔で頭を上上げる。

「やってみるっきゃないしょっ!」

と俺はどや顔しながらミサトの背中を叩き、励ましてやる。  
すると死んだ魚のような目をしたミサトがデコにしわをたてながらじりじりと詰め寄ってくる。

「あーんーたーねー……」

「ちょっ…おばさぎゃあああああああ!…!…!」

マウントポジションを取られ、初号機の暴走の如く重いパンチを何発もぶち込む。

「誰のせいでこんな事になったと思ってんのよ!…!このぶあかは

底なしのぶあかねえ!!」

「葛城一尉!？」

「ミサト!子供相手に何やってんの!!!!」

「ああ…レイ…時が見え」……」

シンジはめのまえがまっかになった!

16・瞬殺技は最後まで取っておくのは主人公の勤めです。(後書き)

精神世界

シ「君は誰」

シ「僕は碇シンジ」

シ「それは僕だ」

シ「俺も碇シンジだ」

シ「僕も碇シンジ」

シ「私も碇シンジだ」

シ「俺も碇シンジ」

シ「僕も碇シンジだよ」

刹「俺はガンダムだ!!」

## 17・日常くらいはしっかり楽しめよう。

数十日後…

ラムちゃん消滅から…ってか俺使徒の原型残した事ないが大丈夫なのか？

まあいい。とりあえず使徒撃退から数日後。

「レイ、おはよ

「…おはよう…」

朝7時ごろ、レイとシンジが起床。軽く弁当を作り、朝飯も作る。つたく…昨日の当番はミサトだろうが。まあいいか、いつもの事だし。

「ひょいっと、ほおれ、そいや！」

フライパンの目玉焼きをカウンターからレイの皿に向けて投げる。

「……………」

しっかりと白い皿に黄色い目玉焼きが収まった。  
うーむ…少し角度がずれたな…

「ペンペーン、ほい、朝飯」

「くわ〜！」

ぺんぺんの飯はそのまま焼き魚を丸飲みするように、口の中に放り込む。

餌の皿を洗うのを節約するためだ。面倒だし。

「どや？焼きたてはうまいかえ？」

「くっくわ〜！」

「そうかそうか、よっしゃよっしゃ」

「さて……俺も食うか」

食パン（生）を口の中に押し込み、その上からクールコーンスープを流し込む。

はい朝飯終了。

「さて……行くか」

すると襖が開き、何故か腹を押さえたミサトがおきてきた。

「どーしたミサト、ついに三十路が腹まで侵食したか？」

「うっさいわねえ〜…ただおなかの調子が悪いだけよ」

「……三十代は辛いですね……」

「ひっどーい〜！」

あっそうだそうだ

「そっぴや今日進路相談だったよな？行くの？」

「行くわよ〜これも仕事だしね」

「……私も？」

「もっちろんよ」

ですよねー…また男子の視線が…

「碓君、行きましょう」

「ああ…」

するとインターホンがなり、出るとにたにたした表情のトウジとケンスケが居たので

無性に腹が立った。いや、ケンスケに恨みがあるわけじゃないんだ。

ただトウジが居ると蹴れと誰かが呟く…一体何故？

「ああ…」

あつ無性に蹴ってしまったw

もうトウジ…蹴るで方程式だったね。やったねトウちゃん！

「で…何のようだ？」

「碓を迎えに着たのさ…綾波もか？」

「いいえ」

「じゃあ…なんで碓の家に居るんだ？」

言ったらキレるかな…

「同居さ」

「へえ…同居…なん…だと？」

「なんやて…綾波とセンセが…同居やて…？」

やべえ…すげえ殺意…これはヤバい。

恐らく今コイツにもっと話しかけたらサードインパクトが始まるであろう。

キレる前にさっさと行きましょつか〜

「そう、同居…私は碓君と一緒に寝食を共にするよつに命じられて  
いるから…」

「碓、少し頭冷やそうか…」

「レイイレイイイ！…！きさまアーーーーッ！…！…」

「いつてらっしや〜い」

「行って来ます！ミサトさん！」

「行って来ます…」

「逝って来ます…」

その後の進路相談は満身創痍でやる羽目になったのは言うまでも  
ない…

午後、俺はネルフ本部で初号機の修理を見ることにした。

回収作業が終わったばかりではあるが、方の突起は修復が完了している。

「酷い状況だな…ん…マヤさんどうしたの？」

自動ドアの向こうにすこしもじもじした表情の伊吹マヤさんがいた。

ちなみに彼女にも敬語で離す癖がある。

「あの…ちょっと…気になることがあって」

「どしたんすか？俺でよければ何か相談に乗りますぜ」

前世とか言われたら答えられないけど

「シンジ君はいつもポジティブで、明るい性格よね？」

でも…エヴァの操縦は神経接続によって精神も汚染されかねないほどリスクが高いのに…

レイや赤木博士と毎日楽しそうに話せる…何か秘訣とかあるのか…気になって」

マヤさんらしいメンタル的な事だな。

「むしろ辛い状況を楽しむ！これ鉄則よ」

「楽しむ？辛い事を？」

「そう、要するにマゾになれ」

「ままっマゾ!？」

「いや、そういう意味じゃなくて、辛い事を楽しむくらい広く、柔らかな心を持つ事。」

つまり、一度や二度失敗したくらいでくよくよせず、何度でもリベンジする。



人間らしい前向きな考え方をするんですよ」

どう？俺いい事言ったよね？

「へえ〜…中学生とは思えない考え方ねえ…」

だって大学生だもん

「まあそついうことですよ。勉強ばっかで思いつめず、少しは娯楽にも目を向けてみなさい。

張り詰めた心をケアするのも、仕事の一部ですよ。じゃっ俺はそろそろ家に帰りますね〜」

エヴァの格納庫から離れ、俺は帰路に着いた。

Next Day

「レイ！受け取るのだ！」

今日も元気に目玉焼きを放り投げる。

「はっ……」

今日もうまく皿に収まったようだ。

しかし今回は若干厚みを犠牲にしまったな。畜生。

「くぬぬ……ローソンで買って来るか……いや……ありあわせで何かを作るべきか……」

「……何やってるの？」

レイは特に気にしていないようだ……だが……流石に目玉焼きだけと言うのは駄目だ。

しかしもう作るべき飯はない……どうする……！

「しゃーねえ。レイ、俺の飯も食っていいぞ」

「いい、パンとコーンスープじゃ栄養が足りないもの」

「何？貴様パンとコーンスープのありがたみを分らんか？」

「ええ」

なんと……パンとコーンスープのありがたみを知らんとは……人生9割損してるぞ。

「これは重症だ」

「朝食を流し込んでるだけの碇君よりかはマシだと思う」

「ぐぬぬ……」

そして今日もパンを押し込んでコーンスープを流し込むと、襖が開く。

「ぶふうう！！」

「……？」

「……くぁ？」

「おはよう」

いつものはっちゃけた服ではなく、正装かつ真面目なミサトだった。

「お前：なんか悪いものでも食ったのか！？だからあれほど拾い食いをするなと……」

「何でそうなるのよ！！」

「何を食べたんだ！？魔法のキノコか！？だからあの森のキノコは駄目と言ったではないか！！」

それともなんだ？ゴムゴムの実か！？腕が伸びるようになってしまったのか！？

「あんなねえ……せっかく人が真面目にモチベーションあげようと努力してるのに」

いきなりそれはないでしょう！？私が真面目にしちゃ駄目なの！？

「あつ……ヘッドロックはらめえ……」

開始3秒でKOしてしまった。

「じゃあレイ、帰りは遅くなるから、その屍に何か作ってもらって」

「…はい」

「じゃあ」

自動ドアが閉まり、家には一人だけになる。  
しばらくして俺は目覚めた。

「あっそうか…今日はJAか」

「JA？」

「農業協同組合のことさ」

「そう」

今日はミサトストーカーは来なかった。

故に昨日のような満身創痍にならなくて済んだということだ。いいことである。う。

「よし、行くか」

「ええ」

コンフォードなんたらマンションから出て、学校まで歩く。

相変わらずのスーパー無言タイム。

無言で歩く二人を毎日のように降り注ぐ直射日光が暖める。  
勘弁してくれ、太陽に当たると気化してしまうのだよ…

「あーあ……大学時代に戻りてえ……」

「？」

「おっと…なんでもない」

最近独り言が多いような…まあ別にいいか。

とかどうとか考えている間にまた学校についた。

また数年前にやった授業の繰り返しか。

次の使徒戦で消し飛ばせば授業もなくなるかな？

「じゃあ何で消し飛ばすか…マスパは駄目。なら純粹に踏み潰せばいいか」

「……」

レイの視線が怖い…

「まあ消し飛ばしたら青空教室になってしまうのがオチだ。やめとこっ」

「……」

よろしいと言わんばかりにレイの視線が戻る。

しかし…今日JAを止めに行くとは…これまた面倒な話で…

いや…俺とは限らんか、初号機はボロボロだからな…

レイが行くのか？

「レイ…初号機ってもう治ってるの？」

「いいえ、健在なのは零号機だけ。初号機の修理は少なくともあと20日はかかるわ」

「そりゃ…結構な時間ですな」

「……」

だから睨むな睨むなw

「後よ、ドイツから弐号機が輸送されているそうな」

「ええ」

「なんかマダオヤジから情報ある？」

アスカの情報はレイに届いているのか？ちと気になったから聞いてみる事にした。

「パイロットの名前は、惣流・アスカ・ラングレー、14歳。

アメリカ国籍のドイツ人と日本人のクォーター。英才教育を受けているらしいわ」

あのツンデレ…かなり美化されてるな。当然の事だが…

しかしレイにパイロット情報が届くとは、結構レイも偉い地位に居るんだな。

「なるほどねえ…惣流・アスカ・ラングレー…なっがい名前だな」

「ドイツ人だから…当然でしょう」

「まあな。英才教育か…」

道理で後半辺りから自信をなくすはずだ。

訓練なしでいきなりシンクロしたシンジに抜かれるからな…  
だが俺は現地点で90%越えは可能だ。どんな顔するかねえ…

「おk、よく分かった。行こうぜ」

「ええ」





17・日常くらいはしっかり楽しみましょ。 (後書き)

こぼれ話

アスカ「あんたがあたしのものにならないって言っんなら…

あたし…何もいらない」

シンジ「じゃあ飯抜きな」

18・初号機はJAが来るまでに直すようにしましょう

昼、俺の携帯とレイの携帯、両方に電話が届いた。

「JAって…あの農業協同組合のか？…ああ、分かった」

「…はい、分かりました。碓君」

「農業協同組合の耕運機が暴走したんだろ？」

「違う。ジェットアーロンが暴走、零号機が食い止めるらしいわ。碓君は待ってて」

あ、そうだった。初号機はポッコボコ。つまり大破している状態だ。

だから代わりにレイが行くのね…

「おk。行ってらっしゃーい」

「ええ…」

数時間後…

「おっせくなあ…」

家で寝転がりながらクーラーに当たっていると、ふと旧劇場版を思い出した。

でっかいレイ、精神崩壊するシンジ、みんなオレンジジュース…

「あれはバッドエンドだよなあ…で、その続きと言われるのが序…その続きが破…」

そういえばQも気になるよなあ…もう元の世界では上映されてるのか？

まあ破を知ってるって事でも結構な利点だからいいか。

「レイが帰ってきたら次はアスカ…こいつが結構サードインパクトのキーポイントでもあるねえ」

レイは遠まわしに使徒だからキーとしては当然のこと。

しかしアスカが精神崩壊するか否かでシンジ（俺）の心の云々がどうかなるわけで…

いや、正直言って破でアスカ死にかけてなんかすっぱー心が痛んだ。

そんなのが俺の目の前で精神崩壊してみる…一生立ち直れんぞ？

「だから最初辺りであのツンデレを何とかしてヤンデレにならないように調節すべきだね。うん」

ふーむ…ならばどうするべきか。9月のミニッツ級空母襲来まで  
そこまで時間がない。

あともう一つ気になるんだが…本当に太平洋艦隊経由で弐号機は  
来るのか？

もしかしたらこれ破なんじゃないのか？

「本当に大丈夫なのか？これで大丈夫なのか俺!？」

駄目だ…もう何も分からん。その場しのぎで何とかしなければ。

「とりあえずアスカと仲良くなるう。これが第一目標だ。……………」  
寝よう

ソファに寝転がり、寝る事にした。

明日から本気出す。

誰かに頬を引っ張られている。  
そして引っ張られた頬がいきなり離され、俺の顔に戻る。  
その繰り返し。

「……みい……みゆっ」  
「……碇君……」  
「……みゆう……うにゆ……」  
「……くすっ……」  
「……にゆう……みよん……」  
「……」

目を開けると、俺の頬を引っ張って戻していながら

微笑んで見下ろしているレイがいた。

「えっと……何をしているのだね？」

「碇君の顔……やわらかい」

いや、そういうことを聞いているのではないのだよ。

「うにゅにゅにゅ……にゅん！……やめたまえ！そんなみよんなことにゅにゅう〜……」

「……」

すこししゅんとした表情になり、すごすごとテレビを見始めた。  
いや……普通男の頬を引つ張るようなまねは誰もしないだろ……

「うーむ……」

「……何？」

「レイってさ、いつもその服なの？」

「ええ……」

毎日毎日同じような服、それも中学の制服なのである。  
ちなみに俺は紺色のTシャツに黒い半ズボン。決しているいい格好ではないが涼しげである。

それに対してレイはどうだろうか、……言うまでもない、制服だ。

あの少し厚着っぽいブラウスやらスカート。

それを真夏に着ているのだ。パジャマは別だが……

365日いつもそれでは見てるこっちも暑苦しい。

「だーめだだめだ。女の子なんだから少しはファッションに気を配らないと」

「ふあっしょん？」

「重症だコレ」

マダオヤジはどこまで無能かつ無知なんだ？女子おなこにファッションを教えないとは…

まあかくいう俺もファッションは大嫌いだけどな！

「つまり…服を着て、マシな格好をするって事。おk？」

ちなみに「おk？」これは他の人から聞くと「OK？」と聞こえる。豆知識な。

「分かったわ」

「おし、ならば明日か明後日、服屋にでも行くか？」

「問題ないわ」

「あっても俺の目の前では無力。なんたって俺は、アメリカ合衆国大統領だからだ！

もとい碇ゲンドウ（と書いてマダオヤジと読む）の息子だからだ  
！！」

まあ今日は何もしないがな。

次の日 商店街内の服屋。

なんか……服屋って色々と静かだし好きにはなれないよなあ……

しかも白をメインとした壁紙、そして壁に貼っている誰かも分からんモデル。

いや、元の世界じゃ著名のアイドルとか貼ってたけど、俺はアイドル全般が大嫌いだ。

だから服屋は嫌なんだよ畜生が。

「……」

「お前は……こういう雰囲気が好きかい？」

「……ええ」

まあ本人が楽しんでるなら、それでいいかね。

そうです、私たちは今服屋に来ています。



レイは相変わらず無表情です。  
私は雰囲気嫌いだから不機嫌です。  
初号機があつたら踏み潰しています。

「じゃあ、選ぶか」

「どうやって?」

「俺も知らん」

「じゃあ選べない」

「ですよー」

「……」

「……」

え?何この無言。

「……俺が選べと?」

レイは こくこくと うなずいた!

「お前は?」

レイは ふるふると くびをふった!

「そうですね」

結局俺が選ぶ羽目になった。

レディースのコーナーに立ち、女物の服を選ぶ。  
Sサイズだよ……とりあえずこれにするか。

「レイ」

「？」

「これ着てみな」

俺が渡したのはまあなんと普通な白い半袖のTシャツとクリー  
ム色のズボンだ。

「…地味」

「お前に言われたかない」

「……買う」

「マジ？まだ試着もしてねえじゃん」

「……駄目？」

「いや、別に」

何一つ変わったことなく会計を済ませ、外に出た。

「…帰るの？」

「いや、ちよつと…バトルをしないと」

「ばとる？」

「あれを見る」

俺が指差した場所にレイも視線を向ける。

指を差した場所は一軒のスーパー。その看板には

「キャベツ一玉80円…この意味分かるな？」

「タイムセール…」

「行くぞ！レイ！！」

「え…きゃっ…！！？」

俺たちは戦いの場へと向かった。

タイムセールある限り…僕たちは戦う。

「俺たちの戦いはこれからだああああ！！！！」

「あの…碇君？」

「（愛読ありがとうございます）（嘘）」

18・初号機はJ Aが来るまでに直すようにしましょう(後書き)

こぼれ話

客「キャベツは俺のものだああああ!!!!!!」

客「ぐおあああ!!!!」

客「デユナメス、バックアップ」

客「会いたかったぞ!! キャベツ!!」

シ「今の私は阿修羅すら凌駕する存在だああ!!!!!!」

客「キャベツ、借りてくぜ、いつ返すか分からないがな」

店員「持って行かないで」

客「このキャベツを買わないと!! 幽 様が!! 暴走してしまう!!」

客「買わないか」

客「うっほ!! いいキャベツ」

客「オラオラオラオラオラ!!」

客「俺が!! 俺たちが!! キャベツだ!!!!」

客「僕は自分の信じたキャベツを買う!! がむしゃらなまでに!!」

客「キャベツ! 買ったどおおおお!!」

レ「.....」

殺戮とした雰囲気にとだだ呆然とするしかないレイであった。

19・加持さんは人の鏡です。アスカはガラスのガラスの心です

9月20日、やっとアスカが来る日になったらしい。

故に俺はレイとミサトと一緒にへりに乗っている。

ケンスケとトウジは気に入らないから置いてきた。なぜかって？  
むさ苦しいんだよ。

あと今日は確かマダオヤジにアダムが来る日でもあるんだよな…

「輸送へり…これはすげえもん引つ張り出してきたなあミサト」

「そうねえ、式号機のソケットを積んでるんだから」

「……碇く（ばたばたばた）……」

こんな感じで俺たちは空母オーバー・ザ・レインボウに着艦したのであった。

心なしかレイが不機嫌だが…なんかあったのか？

空母に初めて足をつけることになる。これはなんとというか…新鮮な感じだ。

そして四方を囲むスホーイ戦闘機…くううう！…これはすごい！！

漢なら喚起する状況だぜええ！！

「海風かあゝこりやいいねえ〜」

「でしょあゝしつかしこんな老朽艦がよく浮いてられるわね」

「馬鹿者、男のロマンの塊、空母。しかもミニッツ級と来た。

これが老朽艦に見える貴様は頭がババロアだ」

「んな！？なんですってええ！？」

「…海か（びゅううううううう）…もう（びゅううううううう）嫌…」

「さて、例のセカンドチルドレンさんはどこかいな？」

「こつちよ…あら？レイどうしたの？」

俺たちがレイを見ると、空母の片隅でしょんぼりとしゃがんでいた。

「海風で声が届か（びゅううううう）…」

「あー…」「あー…」

「へ口オ〜〜ミサト！元気してた？」

俺たちがしょぼりしているレイを引きずっていると、

むさ苦しい空気を破壊するようなテンションの高い声が聞こえた。  
これは…アスカ！…これは…この気持ちは…まさしく愛だ！！！！

「これはこれはセカンドチルドレン様」

「こんにちは（びゅううううう）」

「まあね〜あなたも背のびたんじゃない？」

「そ、他のところもちゃんと女らしくなっただわよ」

「あなたがセカンドチルド（びゅおおおおおおおおお）」

するとひととき大きな風が吹き、レイとアスカのスカートがめくれ上がる。

つまり…

アスカのターン ベシッ

レイのターン ゴキッ メキッ メコッ ゲギギギギギ

「やめろおおお！！関節技はらめええええ！！！！」

「見物料」

「レイ！貴様完全にぼったくってるだろ！！ぼったくってるな！そ  
うだろ！！」

「放せ！！放せ！！H A N A S E！！！！」

数分後、しょうがないといわんばかりに開放された。

何をそんなに怒っているのだ？全く…

「まあ…いいわ。で？噂のサードチルドレンは？」

「その満身創痍の少年よ」

「やあ」

「ふーん……さえないわね」

これが…さえない？お前の目は初期タイプのセンサーか？

「サードチルドレンの碇シンジ、童貞だ」

「だからなんでそこから話す」

「どどっ……レディに向かってなんて事言っつものよスケベ！！」

鉄拳制裁が俺の顔面に向かって飛んできた。相当なパワーだ。さすが…訓練した女…パワーが違っぜパワーが…

「わ（びゅうつうつう）私は！あや（びゅうつうつう）

私は綾波レイ！！ファーストチルドレン！！」

普段では考えられないほどの大声で自己紹介をした。

終始顔が真っ赤だが…恥ずかしいのか？

「へえ〜こいつがファーストねえ…無口なのはよくないわよ」

「ごめんなさい！！」

「そのくらい声を張ったほうがいいに決まってるじゃない」

「ちげえねえな」

そんな感じで俺たちはブリッジに向かった。



スホーイ…もうちっと思たかったなあ…

「おやおや、家族連れのお母さんかと思いきや、それはこちらの見当違いだったようだ」

「ご理解いただけですわ。艦長」

「いやいや、私の方こそ、久しぶりに子供たちのお守りができて、幸せだよ」

久々のミサト真面目モード。ってかこの艦長、

リアルにほとんど目が日陰に隠れて見えないんですね。

てつきり製作者の手抜き（ピチューン）

「このたびはエヴァ弐号機の輸送援助、ありがとうございます。

こちらが非常用電源ソケットの仕様書です、どうかサインを」

「フン、大体この海の上であるの人形を動かす要請なんぞ、聞いちゃ

おれん」

おや？なんかよくない雰囲気ですね…まあB型装備ヘーシツクで海に入るなど普通ありえんからな。しかも遠まわしに海軍は役立たずと来た。

怒るのも無理ないわな。

「万ーに備え…とでも言いましょうか」

「その万ーの事態に備えて、われわれ太平洋艦隊が護衛しておる！いつから国連軍は宅配屋に転職したのかね！」

「某組織が結成された後だと、記憶しておりますが」

「では、この書類にサインを」

「まだだ」

「ああ？」

ミサトー！顔！顔！

「エヴァ弐号機および同操縦者は、ドイツの第3支部より本艦隊が預かっている。

君らの勝手は許さん！」

「ならいつ引渡しを？」

「新横須賀に陸揚げしてからとなります」

横須賀か…横須賀ってどこ？

「分かりました、しかし有事の場合は我々の指揮権が最優先となることをお忘れなく」

なるほど、突然の使徒襲来に備えての釘挿しか。

ミサとも中々考える奴だな。そんな頭があるならもっとマシな作

戦を考えて欲しいが…

「相変わらず凜々しいなあ、葛城…おや？チルドレンも勢ぞろいか？」

突然軽い声が聞こえ、俺たちは振り向く。

そこにいたのは水色の服を着た、あの加持リョウジさんだ。

「なっ」

「…？」

「おお…」

「加持先輩！！」

「どもっ」

「加持君！君をブリッジに招待した覚えはないぞ！！」

「そいつは失礼」

そんな雰囲気であれはブリッジから出た。

すっ…すげえ…アスカに加持さん…

まさかこの短時間で重要キャラが二人も…

「何でアンタがここにいるのよ」

以外にもすつきりとしたエレベーター内。  
まあレイと俺とアスカが小柄なだけだな。  
トウジとケンスケを呼ばなくて正解だった。

「彼女の同伴でね、ドイツから出張さ」

「迂闊だったなミサト、お前の苦手な相手さんかい？」

「当たり前でしょ!!」

「…暑苦しい…」

食堂内、俺たちは休憩代わりに食堂に行く事になった。  
なんかぼんぼんと場面が変わるが気にしない。

「そっぴゃあ、アスカ？だっけか。やっぱ訓練とかしてたのか？」  
「あつたりまえでしょ！七光りのアンタとは違うのよ！」

あ…やっぱ毛嫌いされてるのね俺  
なら俺も少し罵ってやるかww

「訓練してやつと70%台とは…おまえ才能ないんじゃないの？」  
「なあんですってえええ！！！」

「俺は初戦では90%ですが何か？」

「初期コンタクトでは30%台でしょうが！！！」

「ふふん…ATフィールドを射出できるのは俺だけだぜ……」

「なっ…何よ！もう知らない！！！」

机を叩いてアスカは立ち去った。ちと言い過ぎたか？

「シンジ君…女の子にデリカシーがないぞ〜」

加持さんが俺の背中を叩きながら励ましているのか、すこしにや  
けている。

……加持さんなら…俺の事分かってくれるのかな…

「加持さん、でしたよね？ちょっと…話に付き合ってくれませんか  
？」

「ん？どうしたんだ？まあ俺は別にかまわないさ」

加持さん、アンタは人の鏡や…

「後、ミサトの寝相、寝癖、いびきは酷いもんですよ」

「ははっそれは酷いな」

「なななななななな！…何を言うのよシンジ君！…」

「……不潔、碇君、私も行く」

え…まあいいか。この際レイにもわかってもらおうか。

「レイイイイ！…！アンタだけは信じてくれると思ったのにいい！  
！…！」

仲間を失ったウサギは寂しくて死ぬのだよ。

覚えていなさい。セーラームーン。

19・加持さんは人の鏡です。アスカはガラスのガラスの心です（後書き）

こぼれ話

シ「MAGIに俺の事を検索してみるか」

M「解析不能」

シ「（、・、・、）」

20・違うのはカラーリングだけじゃありません。多分

加持さんとレイとで人気のない場所に向かっているとき、俺は思ったのだ。

俺が別世界の人だといって何になる？言っても仕方ないでしょうが。

うん…やっぱりやめとこ。適当に相談して帰るか。

甲板

「加持さん、初号機が大破しました。俺の才能がないんですか？」

さっきの言葉と矛盾してるとかは禁句な。

「やはり君にも自信がないんだな。少し失敗しただけじゃないか。くよくよするんじゃない

って…それだけかい？」

「YES」



「……来て損した」  
「うるせえ」

大体今正体明かしても…いや、二度とバカなことは考えねえ。  
下手すりゃ暗殺だ。

「サード！ファースト！」

「はい！？」

「？」

突然扉の後ろから声が聞こえた。

振り向くとそこには腕組みをしたアスカが立っていた。

「ちよつと付き合つて」

「恋愛的な意味で？」

「違う！！いいから！来るのよ！！！」

俺はアスカに手を引かれ、レイは俺が無意識に掴んで引きずられて行った。

「うおいおい！なんだってんだよ！」

「碇君…！離して…！」

俺たちはエヴァ二号機が乗っている場所に移動した。  
そしてすぐさまアスカは式号機を見て、俺たちを入らせる。

「赤い…」

「シヤア…」

「（しゃあ？）違うのはカラーリングだけじゃないわ。

初戦零号機や初号機は、開発過程のプロトタイプとテストタイプ」

アスカはエヴァの背中部分の突起に乗り、見せびらかすように言う。  
う。

いや完全に見せびらかしている。

「でもこの式号機は違うわ！これこそ実践用に作られた

世界初の本物のエヴァンゲリオンなのよ！正式タイプのね！」

「でもお高いんでしょう？」

「心配ありません！今なら送料込みで…って何言わせんのよ！！！」

すると突然、船体が揺れ、足場がずれる。

「水中衝撃波…爆発が近いわ…これは…」

レイがとつさに感知し、布の外に出る

俺たちも外に出て、海を見る。

「んな!？」

一隻の戦艦が轟沈し、空母へと向かうのを確認した。  
水柱の大きさから見て、確実にクジラ以上、スピードはマグロ以上だ。

こりゃさばいたらうまそうだねえ…ガギエル君。

つとぶぎけるのはこれくらいにして…

「また使徒かよ、しつこいね」

「あれが…本物の!？」

そして水柱が上がる。半端じゃねえな…

スケールが違うよスケールが…

「碓君…すぐに葛城一尉のところへ…」

「そうするか」

「……チャーンズ…」

オイアスカ、貴様何をたくらんでいる。

と突然、アスカがレイの腕を取って船内に入る。

「ファースト! ちょっと来なさい!」

「え…? あの…?」

「サードはこれを着て!」

「ふえ?」

俺が受け取ったものは、女物のプラグスーツ。

しかもアスカの式号機専用のプラグスーツだ。ちょっとオークシ

ョンに…

「つてまさか……俺とレイとアスカで乗るつもりか！？  
でたらめだ！（艦長風）」

「とりあえず見る奴なんていねえからな……よいこらせつと」

アスカたちがいなくなったのを確認して、俺は女物のスーツを着る。

なぜか胸に開放感が……いや、胸が小さいから当たり前か。

「ふむ……悪くはない」

「あの……どうして私まで……？」

セカンドは人気のない階段を見つけ、私の手を引く。  
初めての感触……でも嫌じゃない。

「ここで着替えるわよ」

「……」

「返事は」

「はっ…はい！」

強引……でも碇君とは違っ…

アメリカ国籍のドイツ人は皆こつなの…？

「……」

「それにしてもアンタ本当に無頓着ねえ……」

「…どうしてそついう事言つつの…？」

「アンタ馬鹿め？コミュニケーションもとれずにどつちやってエエウマとシンクロすんのよ？」

「……」

「……調子狂つわね」

「そつ」

……この人はやはり苦手……

着替え終わった俺たちは再びエヴァに戻り、エントリープラグが顔を出す。

「しゃーねえ…乗るか。」

「勝った後で許可を貰うか…はあ…」

「他人のエントリープラグ……」

「さ、あたしの見事な操縦、目の前で見せてあげるわ！ただし、ジヤマはしないでね？」

エントリープラグが注水され、シンクロが開始される。

ドイツ語だったよな……たしか

「L.C.L. Fulllung, Anfang der Bewegung Anfang des Nervenschlusses. Ausulossung von Rinkscheidung. Synchrono-Start」

L.C.L. "Fu"llung, Anfang der B  
wegung Anfang des Nervenansc  
hlusses. "Ausul"sung von Rinks  
kleidung. Synchron-Startと...

しかし俺の華麗なドイツ語を披露したというのにエラーが表示さ  
れる。

なぜだ？アスカのシンクロを完全コピーしたというのに！

「バグ…どうして？」

「思考ノイズ！邪魔しないでって言ったでしょ！」

なんだレイがミスったのか。

「ごめんなさい…」

「アンタ日本語で考えてるでしょ！ちゃんとドイツ語で考えて！」

「……………」

「馬鹿！！いいわもつ！！思考言語切り替え！日本語をベーシッ  
ク！…起動！」

ノイズが戻り、エヴァが起動した。全く…3人も乗せるから。

キョウコさんも大変ですな。

『呼んだ？』

まだ呼んでません。おとなしくしてください。

………つて…キョウコさん！？なんで意識があるんですか！？

『やっぱりシンジ君…ではないわね…大学生君。今はアスカをよる

しく』

え…ええ…はっ…はい。じゃっ。

うかつだった…キョウウさんにまで俺の存在がばれてるとは…  
まあいい。とりあえずいくか

「行くぞ、弐号機」

「行くわよ…アスカ」

「……私は碇君を守る」



20・違うのはカラーリングだけじゃありません。多分（後書き）

こぼれ話

ア「今度はあたし」

M「惣流・アスカ・ラングレー、自意識過剰な性格には親の…

そして惣流・キョウコ・ツエッペリンの精神崩壊…

自分のことをエヴァに乗ることで…」

ア「嫌あああああああ！！！！あたしの心を覗かないでえええええ  
！！！！」

21・ガギエル戦はさほど重要ではありません。いや本当に

やくれやれ…まさかキョウコさんにまで目をつけられてるとは…  
まあいい、今は現状を何とかすべきだろう。

「どこ!?!」

「…あっち」

「まずやるべきことがあるでしょ? ほら、電源」

「あと58秒…ミサト! 非常用の外部電源を甲板に用意して!」

『分かったわ!』

『何をするつもりだ!?!』

「さあ、飛ぶわよ!」

アスカが操縦桿を引き、弐号機が飛び上がる。

ちよっGが…

「う…」

「吐くなよ、レイ」

「そんな汚い事はしないわ…」

そして放物線を描いて飛び上がった弐号機は色々と太平洋艦隊様  
にご迷惑をおかけしながら

空母に向けて一直線に落下する。

「エヴァ弐号機! 着艦しまーす!」

「スホーイイイ!?!?! 避けるオオオオ!?!?!」

「もう降りたい…」

俺の悲痛な叫びは届かず、SU-33シーフランカーかと思われる機体は海に沈んだ。

くそ…シュトリゴン隊…すまない。仇はとるぞ…

「……左舷九時方向、敵接近」

「外部電源に切り替え！」

背中にケーブルが接続され、活動限界のカウントが停止する。

シーフランカー…シーフランカー…うわあああああ！！！！フランカーたああん！！

「切り替え終了」

「武装がないわ…」

「わはくならそこらに転がってるスホーイでも投げるのか」

「碇君…！？どうしたの…！？」

「馬鹿はほっときなさい！！プログナイフ装備！！」

「スホーイは食べてもいい…ダニイ！？プログナイフだと…？」

正気に戻ったとたん、モニター前方にあの赤いプログナイフが映る。

これは……ロマン！！まさしくロマンだ！！

「来るわ…」

「でっかい魚！消し去ってしまえ！」

「黙って……今よ！！」

アスカのタイミングどおり、ガギエル君は空母にダイブし、弐号機もろとも飲み込もうとする。

しかし流石はエリート、プログナイフは落としたもののしっかりと彼を受け止める事に成功した。

『アスカよく止めた!』

『冗談じゃない!飛行甲板が滅茶苦茶じゃないか!』

全く持つてその意見には同意である。って…ん?ちょっと待て…

そこは航空機用エレベーター…

「待て!!そこに足を乗せるな!!」

「へ?」

「?」

時既に遅し、エヴァの重さに耐えられなかったエレベーターは支えを崩し、壊れる。

そして片足だけとなった弐号機はバランスを崩し

「嫌ああ!」

「あゝめ〜ま〜」

「…っ!」

海へと沈んだのであった。

『アスカ！水中戦はB型装備じゃ無理よ！！』

「シャア専用ズゴックじゃないと動きもしないですよ、惣流さん」  
「世間の常識…」

「そんなのやってみないと分からないでしょ？」

オイオイ…気は確かか？現に今物凄いガギエル君に引きずられて  
るではないか。

ってか離さないようにしがみついているだけだろうが…  
ええい…こいつに任せてられん。

「飛鳥時代」

「誰が飛鳥時代よ！」

「その手を離していったん落ち着け、きつといい事がある」

「え？うん…」

「もらったああ…！」

アスカを跳ね飛ばし、操縦席を独占する。

「きゃっ！？何すんのよこの馬鹿…！」

「うるせーだまれ」

目を瞑り、シンクロを同化させる。ふひゃひゃ…アスカの操縦桿…  
むふふふふ…っと…なんでニヤニヤしてんだ俺。落ち着け落ち着

け。

冷静になるんだ…そう、ツンデレツンデ…いかんいかん…

うーん…やはり他人の母親だとシンクロは難しいか？

あれだキョウコさん、友達だと思ってシンクロしてみなさい。

『そうしたいけど…中々難しいのよっ…このっ！（ガッツ！あ、出来たわ』

おい今何した、何叩いた。

『ちょっと自分に激を入れようかと』

明らかに金属音だよな！？……ええいまあいいい。

「よし…行くぜよ」

「あたしの式号機勝手に動かさないでよー！！」

「いででででで」

「……」

操縦桿を握り、意識を集中させる。………駄目だ。かめはめ波で潰すとか考えられない。

いや…魔貫光殺砲…まかんこうころぼこれ出来るかな？いや、こんな汚い技…アスカが認めるわけがない。

しかし早くしないとそろそろケーブルの長さが限界になる。ええいなりふり構ってられん！！

「ほいやっ」

「…!?」

弐号機がガギエル君から離れ、水中で額に手を当てるような動作をする。

「ATフィールド全開!!!」

『りょうかい』

キョウコさんの声と共に弐号機がオレンジ色の光を指先に集中させ、臨界まで溜める。

「サード！来るわ!!!」

アスカの声に反応して、ガギエル君を見ると、口をぽっかりとつちに迫ってくる。

ふむ、不健康極まりない歯、膨張したのどちん……いや、コアか。

「口…あの中にコアがあるわ…」

「ほう、口の中にコアか。レイ、今日の晩飯は使徒の串焼きだ」

「…嫌」

「えー…じゃあ海中投棄な（バシユッ）」

【ぎゃあおおおおお!!!…!!!…!!!…!!!】

さくつとATフィールド魔貫光殺砲でひねつといた。こんなラミちゃんに比べたら八エみみたいなもんだ。

「なんか…本当に使徒倒したのかしら…あたしたち…」

「さて、ミサトー弐号機水揚げおねが〜い」

『さっすがシンちゃん、仕事が速いのね』

食われたら痛いしね。って…アスカの視線が何故か怖い。

視線を翻訳すると……あたしの式号機をそんな風に使うな……か。  
いまから遅い。

そんなこんなで同日、司令室にて

「いやはや……波乱に満ちた船旅でしたよ……といっても……  
この司令室のほうに波乱に満ちていますがね……」



加持が見渡す風景、それは赤い絨毯一本でできた司令室。その両サイドにはアマゾン（レイ提供）やクロネコヤマト（シンジ提供）などのダンボールだ。ちなみにシンジはレイの同居を認めてもらった後、3日後に供給を再開していた。

そんな司令室は他者から見れば正に「ダンボール司令室」である。

「司令室は問題ないはずだ、おい、それに触れるな」

「…まさか司令室の4分の3がダンボールで埋められているとは…これもシナリオの一部ですか？」

「違う」

「まっ良しとしましょう。艦隊を襲った使徒の原因…やはりこれですか？」

そういつて加持が窮屈そうに取り出した物は、一個のアタッシュケース。

それもかなり嚴重なセキュリティで保護されたものだ。

それを加持がパスワードを入力し、ケースを開けると赤い硬化ベークライトで固められた物体が姿を現す。

「既にここまで復元されています。硬化ベークライトで固めてありますが…生きています…」

これが人類補完計画の要ですね？」

「ふっ…そうだ。最初の人間…『アダム』だよ」

「なるほどね…」

すこし伸びをしながらダンボールにもたれかかってしまった。

「いかん!!!」

「え？」

とき既に遅し、積み重なっていたダンボールは一気に崩れ、司令室を埋める。

「ぬおおおおおおおおおおおおお………」

22・アスカの入学は特に気にせず、とりあえず日常を楽しみましょう

9月21日、つまり弐号機到着から1日後。

俺たちはまた目玉焼きを投げて学校に向かった。

NERVの職員宿舎に泊まっているアスカも今日転校か。

昨日の弐号機イベントに同席していないトウジとケンスケの反応は歓喜：だろうな。

「レイ」

「…何？」

「アスカとは仲良くしなさいよ」

「ええ」

物分りのいい子は助かるよ本当に。

大学時代の近所のクソガキは殴ろうが蹴ろうが言うことを聞かない奴だったな…

まああれほど注意したのに道路のど真ん中で遊んでてバイクに跳ねられてたが……

「あれはざまあとしか言いようがない」

「？」

「なんでもないさ」

また独り言か…最近増えたよなあ……反省はしていない。

教室、転校生の話題で無防備なトウジの股間を蹴り、ケンスケと話す。

「おつ碇！式号機は届いたのか？」

「無論、赤いぞ」

「赤かあ！それはすっごいんだろうなあ…パイロットは誰？男？女？中間？」

「中間はない。女だ、恐らく今日転校してくるだろうな」

「へえ…」

「皆さん、席についてください…」

根府川先生…つまりあのセカンドインパクトの先生の声が聞こえ、俺たちは席に着く。こういうのに素直なクラスは大好きだ。

「今日は転校生を紹介します、惣流さん、入ってください」

軽く「はい」という返事が聞こえ、アスカが入ってきて、黒板にドイツ語で名前を書く。

惣流・アスカ・ラングレー…俺と同レベルの字だな…

「惣流・アスカ・ラングレーです！よろしく！」

「……………おおおおおおお！……………」

「」

男子勢の歓声が轟く。その歓声に何故かアスカはどや顔…いやホントになんぞ？

「さっ先生、私はどこに座るのかしら？」

「そうですね……それではあの席でよろしいかな？」

先生が指差した場所は原作と同じ場所、ふむ変更点はレイだけか。

「かまわないわ」

何様だお前は……とか考えていると、授業という名の催眠術が始まった。

……………むにゅう……………ねみい……………

「むう……………らふらがががが…」

「寝ては駄目」

教科書片手にレイが俺の頬をつねる。地味に痛いんだよこれ。

「えーきょうは…連立方程式の…学習を…します…」

スローペースな数学の先生だ。言葉の一区切りにかんりの間がある。

そのせいか生徒の大半が寝ている。いや…寝すぎだろ…!

「連立か…結構簡単だよなレ…寝てるよ」

「……………」

寝てるというより…死んでないか?大丈夫だよな…大丈夫なんだよな?

先生助けて!綾波さんが息してないの!あつ…駄目だ…おれも…  
…ねむ…………

「ふむふむふむふむ…」

「……………」

こやつ…寝ながら頬をつねるか!!出来る…!

「分かった…分かったからもつつねるな。地味に痛いって」  
「……………」

ゆっくりと頬から手を離す。今だ…!

ゴスツ

「イデオン!!??」

目を伏せた瞬間何か重いもので殴られたような感覚が頭を襲う。  
とつさにレイのほうを見ると、怒った顔のレイが広辞苑を持って  
こつちを見ていた。

お前まさかそれで殴ったのか？

「…寝ては駄目といったはず…」

「はいすみませんでしたレイ様」

やはり起きてたか…騙まし討ちとはやるではないか…

頭にでっかいこぶを作って数学の授業を受けることになった。

「レイ、お前角で殴っただろ」

「……（コクコク）」

「下手したら死ぬからやめてくれ頼むから」

「なら寝なければいい」

「さっきまで寝てたお前が何を言う」

「う…」

とかどうとか話してたらチャイムが鳴り、授業が終了した。  
委員長の洞木ヒカリが元気よく号令をかけ、休み時間となる。

二時間目、先ほどよりも強い催眠術を持った先生が登場し、生徒全員が寝ることになった。

無論ヒカリもアスカもレイもだ。教科は国語。しかも一番大事なところだったような…

シンジ「神は言っている……ここで死ぬと……ぐうぐう……」

レイ「すう……すう」

アスカ「……ううくん……らめえ……」



西に傾いた太陽の光が、自分に直に当たるのを実感する。

ああ…なんだろ…何か暖かいものに包まれている…

ってこれリアルに暖かくて…春眠暁を覚えず…あれ？今夏だよ？

「……………んなっ！？爆睡しちまった！！」

「…(びくっ)！」

教室には誰も居ない、居るのは今まさに俺の頬をつまもつとせんとする綾波レイ一人である。

お前のその性格は碇シンジ育成計画か？そこだけシンジ育成計画のレイか？

「全く…で？その他のギャラリーは？」

「……………帰ったわ」

「あそ、じゃあ俺らも帰るか」

「…ええ」

俺たちは特に寄り道もせず、帰路に着くことになった。

22・アスカの入学は特に気にせず、とりあえず日常を楽しみましょう（後書き

アスカ「あたしの出番はどこに行ったのよ」

マチユ「この小説レイとシンジの物語だから」

アスカ「屋上行きましょう……久々にキレちゃったわ……」

23・使徒は使途でも名前が覚えられない使徒は何ですか？（前書き）

イスラフェルです。

### 23・使徒は使途でも名前が覚えられない使徒は何ですか？

数日後、今日は俺が寝坊しレイは先に学校に行った。  
流石にこれ以上成績を下げるのは駄目らしい。  
俺も急いで学校に向かい、歩道橋に着いた。

「シンジ！ゲートルモルゲン！」

「よう、佐竹・オスカ・クラックス君」

「惣流・アスカ・ラングレー！！誰よそれ！！」

「俺の友人の親戚の娘の弟だ」

「全く関係ないじゃない！！」

朝から不機嫌にして、少し雑談を始める。

「あんたの初号機、修理中ですって？」

「ああ、ちとこの間の使徒でしくじってたな」

「ふん、所詮あんたの実力じゃそんなもんよね、訓練もロクにしてないんだから」

「ははっ違いないな、ん？………ってかエヴァの訓練ってどんななの？」

「そついえばハードな訓練ハードな訓練聞いてるが…実際の訓練ってどんな訓練なんだ？」

「設定集やらそういうのは一切読まないが、実際どんな訓練なんだろうか。」

「アンタ馬鹿あ？そんなことも知らないの？」

「悪かったな」

しびしび「仕方ないわね」と言わんばかりに自説を語り始める。  
長すぎるから歩きながらその自慢を聞いていた。

「それで、そのときの最高シンクロ率が80%！どう？アンタには到底無理な話よ」

「ほう、訓練つてシンクロ率がそんなに上がるものなのか？」

「当ったり前じゃない」

「ふむ……つまり俺も訓練すれば強くなれるのか……」

「まあ、そうね」

「しかしビリー隊長のエクササイズに勝るものは何も無い、失礼する」

ワンモアセツ！と言わんばかりに歩道橋を駆け下りた。

「え……ちょっと待ちなさいよ！」

それに続いてアスカも歩道橋を駆け下りた。

同日、ネルフ本部。ここに居るのは金髪の赤木リッコ、賭博好きではない。

そして今彼女は、殲滅後の用途の分析をしている…が、パイロット碇シンジが

使徒の原形を残さず跡形もなく消し去ってしまうので、あまり芳しくはない。

故に今は彼のシンクロー率の増減の現象の解析をしている。

「彼のシンクロー率が上がるのは…彼の気持ちの左右に…ん…」

突然の出来事に声を漏らし、その手が誰のものかを判断する。

「少し痩せたかな？」

手の主、加持リョウジが口説き文句を言う。

その手の言葉は彼にはお手の物だ。

「そう…?」

「悲しい恋をしているからだ」

「どうして…そんなことが分かるの？」

そう聞くと、加持はリッコの加を似指を置き続ける。

「涙の通り道にほくろがあるヒトは…一生泣き続ける運命にあるからだよ…」

「これから口説くつもり…でも駄目よ、怖いお姉さんが見ているわ」

加持とリッコが正面を見ると、

ガラス板に顔をべったりとはり付けて鼻息を荒くしている葛城ミサトが見ていた。

鼻息で白くなったガラスに映るその姿は正に怖いお姉さんである。

「なんであんたがここにいるのよ！！」

「お久しぶり、加持君」

「やつしばらく」

顔を真っ赤にしたミサトをよそに二人は軽い挨拶をする。

「あんた弐号機の引渡し済んだんならさっさと帰りなさいよ！！」

「出向の辞令が届いてね、ここに居続けさ…また二人でつるめるな昔みたいに」

「誰がアンタなんかと！！……っ！？」

突然レッドアラートが響き、使徒襲来を告げる。

「敵襲！？」

「おや？アスカの日本初舞台か」

「どうせシンジ君に殲滅されるのがオチよ、リッコ！シンジ君とアスカを呼んで！」

「信用されてるな、シンジ君」

「んじゃ失礼」と軽く手を振って加持は部屋を出て行った。

「ああん！？今授業中だ！後にしやがれこの三十路！！」  
『授業より地球よ！さっさと来なさい！！この中坊！！！！』



「三十路が中坊馬鹿にすんじゃないやねえ!!!三十路のほづが1000倍偉いわボケエ!!!」

ああ!?!この害虫繁殖機が!!!昨日もお前の部屋にゴキブリ繁殖しやがって!!!」

『じっ……教室のど真ん中で何言ってるのよ!!!』

授業中にもかかわらず俺は電話で怒鳴り散らす。  
アスカは一言了解といい、そのまま教室を出た。

「大体お前ぐぶおあ!?!」

「うるさい、早く行って」

結局俺はレイに世界一厚い本、『ミス・マーブル選集』で殴られ、ネルフへ向かうこととなった。

ってかなんでそんなもの持ち歩いている……

『総員！第一種戦闘配置！』

「爺さん、無理するなよ」

『なんだと…？』

「やべっ」

エヴァの中で爺さんこと冬月副指令の甲高い（笑）声を聞く。

冬月自体は嫌いじゃないが言いたかったただけだ。

通信が切れ、続いてミサトの通信が入る。

隣の式号機も同じように通信を聞く。

『先の戦闘で、第三新東京市の迎撃システムが壊滅的な被害を受け、現在の普及率は0.89%』

『それ…つまり0%じゃないの？』

それを言うなアスカ。

『どこかの誰かさんのせいでね、したがって上陸寸前の目標を…水  
際で一気に叩く』

――

だとさユイさん。

【シンジ…できそう？お母さんすっごく心配なんだけど…  
また壊されそうな気がしてならないんだけど…】

そんなに心配しなくても、コアは残しますよ。

【……少なくとも海に突き刺さるのだけは勘弁してね…私泳げないから】

エヴァが泳いだら逆に怖いです。

――  
――

「おいつしゃ！任せろ！」

『シンジ君…初号機は、大事に扱いなさいよ』

「……うーむ……」

『【考えるな！！】』

「わかったよ」

まあいい。今回は犬神家で終了だからそれでいいとして、  
とりあえず俺たちはビーチで待機だな。

『あーあ…日本でのデビュー戦だったのに、どーしてあたし一人に  
任せてくれないの？』

アスカの愚痴がオープン回線で響く。

「まっいいんじゃないの？一気にフルボッコつても」

『言っとくけど！くれぐれも足手惑いにはならないでね！…』

「へいへい」

『ロック解除！エヴァ初号機、降下！！』

輸送機のパイロットがロックを外し、初号機は空を滑空する。  
え？こんなの訓練でやったことない…

「のわあああああああああ……！！！！！！」

バランスを失い、きりもみしながらビーチにまっさかさまに落ちる。

無論それで着地が出来るはずがなく、頭から落下した。

【いったあゝい……！！】

すみませんねw

23・使徒は使途でも名前が覚えられない使徒は何ですか？（後書き）

こぼれ話

ユイ 「シンジ……また母さん落とされたんだけど……」

シ（原作） 「あはは……なんで僕いるの？」

ユイ 「知らない」

シ（原作） 「じゃあ何で僕の体がシンジさんに取られてるの？」

ユイ 「それはね……えっと……ど忘れしちゃった」

シ（原作） 「駄目だこの母さん……」

シンジさん 「気にするでないよシンジ君」

シ（原作） 「あーそう……じゃあ少し、東方ネタ自重してくださいよ」

シンジさん 「なぜに」

シ（原作） 「快く思っていない読者さんもいるでしょうが、どこかに」

シンジさん 「ふーむ……あれ？なんでお前が東方知ってるの？」

シ（原作） 「そりゃ全ての人類を一緒にしたらその情報も入ってきますよ」

シンジさん「そうか……まあ……自重したら自由が束縛される……  
やめてシンジ君、ロンギヌスの槍向けないで  
やめてやめてやめてアッー！」

ユイ 「見事にお尻に刺さったわね……」

シ（原作） 「全く……」

## 24・レイとアスカとシンジが3人暮らしても一応問題ないです

「いつてて……」

『はあ…これだから素人は嫌になんどのよ』

「誰が素人じゃ」

そう言いながらアスカと俺はケーブルを繋ぐ。

そのケーブルがつながるのを待っていたかのように、イスラフェル姉妹が水面から顔を出した。

「おいでなすったようだな…」

『じゃっあたしから行くわ！援護してね！』

「はいはい」

命令に従い、ATフィールドで針のようなものを作り、イスラフェルに向かって撃ち出す。

流石に小さなフィールドごときが使徒一体分のフィールドを貫けるはずがなくてはじかれる。

こうですか？分かりません>><

『いける！』

「お？」

ソニックブレイブを持った弐号機が建物を足場にしてイスラフェルの真上にジャンプする。

あれは…シャア！？違う…フル・フロントル！？

『うらあああああ…！…！』

シヤア専用式号機がソニックブレイブを振り下ろし、イスラフェルを両断する。

『どう？サードチルドレン、戦いは無駄なく美しくよ！』

「通常の三倍に動けばいいってことですね？」

『そついうこと（ブツッ）』

突然閃光が俺たちを包み、意識が途切れた。

何があつたしw



『本日午前10時58分15秒、2体に分離した目標甲の攻撃を受けた初号機は、

駿河湾沖合い2キロの海上に水没、…同20秒、弐号機は目標乙の攻撃により活動停止。

この状況に対するE計画責任者のコメント『無様ねw』だそうです』

救助された俺たちは、作戦失敗の反省会的なことをしている。

スクリーン上には犬神家のエヴァが無様に映されている。

ってかいつの間に分離したんだイスラフェル姉妹さん…

全く周りが見えてなかったからなあ…

「もお！！あなたのせいでせつかくのデビュー戦が滅茶苦茶になっ  
たじゃない！！」

いきなりアスカが俺の胸倉を掴み、怒鳴る。

あーもうそんなに怒鳴るなよ…頭痛いつてのに…

「まあいいんじゃないの？次がんばろうぜ、次」

とりあえず適当に励ましながらなだめる。

そうポジティブポジティブ。

そんなに怒っても何にもなんねえっての。

「次がんばるう！？どうして足手惑いのアンタがそんなこといえる  
のよ！図々しいわね！！」

「落ち着かんか、終わった事怒っても何もならんわい」

「ただATフィールド放射しただけで援護になると思ったら大間違

いなよ！このバカシンジ！！」

『国連第2方面軍に指揮権を譲渡』

「まったく恥をかかせおつて！」

冬月先生もご立腹のようだ。やっぱりシンクロ高くても戦術がなつてなかったらどうにもならんわな。

『同5分、N2爆雷により目標を攻撃』

マヤさんが映像を変更し、N2爆雷の爆発範囲を表示する。

「こりゃ…日本地図の形が変わるな…」

「やったの？」

「足止めに過ぎん！再度侵攻は時間の問題だ」

「まっ建て直しの時間が稼げただけでも設けもんっすよ」

気楽だな…加持さん。俺もだが。

一通り報告が終わり、冬月が一呼吸置いて喋り始める。  
恐らく説教だろ…

「いいか君たち！君たちは何のためにエヴァに乗っているのかね？」

「エヴァの操縦」「使徒を叩き潰す」

「アスカ、シンジ君の言う通りだ。このような醜態を晒すために我々ネルフが存在しているのではない！そのためには君たちが協力し合つて」

「何でこんな奴と！！」「はい！喜んで！！！」

「はあ…もういい」

あきれた冬月が退室した。

アスカエ…そこはしつかり大人の言う事を聞くべきだと思っぞ…  
大体ここでお前と仲良くならないと後々面倒だろうが…

「どうしてみんなすぐに怒るの？」

「大人は恥をかきたくないのさ」

「ミサトは…後始末か。手伝ってやるか」

俺が席を立とうとすると加持さんがそれを止める。

「責任者は責任を取るためにいるものさ」

やべえ加持さんそっけない台詞なのに無駄にかっけえ…

と、そんなこんなで俺は自宅に帰る。

「ああ……づがれだ……俺……家に帰ったらベッドに寝転がるんだ……」

いつも通り家の扉が開き、靴を脱いで家に入る。

「んなつ……なんぞこれええええええ!??」

俺が見た光景は、なんとも滑稽……いや、なんとも大掛かりな荷物だ。

廊下を埋め尽くすダンボール……これは司令室司令室行きだな……

「失礼ね、あたしの荷物よ」

「あ……」

そうだ、今日からユニゾンでアスカと同居か。すっかり忘れてた。ちよつと待て……レイはともかく俺はどこに住むんだ？

「つまり俺とお前が同居？レイはどうすんだよ」

「ファースト？あたしと一緒に住むけど」

「オイ待て、じゃあ俺はマダオヤジと同レベルの暮らしになるってか!??」

「ん……まーそうじゃないの?」

そんなバナナ……俺がホームレスだと……俺がダンボールハウス

だと…

「しっかしどうして日本の部屋ってこう狭いのかしら？荷物が半分も入らないじゃない！」

「にも…っておいしい！？？」

俺の荷物は無造作に一個のダンボールに詰め込まれ、廊下の放り出されていた。

「貴様俺の荷物を！！なんて真似しやがるコルアアア！！！」

「おまけに、日本人でどうしてこう危機感足りないのかしら？」

よくこんな鍵のない部屋で暮らせるわね。信じられない」

「無視かよ！！おれの意見は無視かよ！！俺がホームレスなんて絶対によだぞ！！」

せめてネットカフェ用意してくれよオイ！！」

「ああ！もううっさいわねえ！！さっさと出て行きなさいよ！！！」

「…何やってるの？」

「どしたのレイ…あらおかえり」

取っ組み合いを見てポカンとしているレイとミサトが巨大なコンビニ袋を抱えて帰宅した。

…またパーツとやるのか？まあどうせ俺はお払い箱だろうがな…

「ミサト…レイ…私はどこに暮らせばいいんですか…どうやって生きていけばいいんですか…」

「ああ、今度の作戦準備のため、諜報部に物置部屋を急遽片付けてもらったわ。

そこをシンちゃんの部屋にすればいいんじゃないかしら」

お前…俺をハリー・ポッターかなんかと勘違いしてるんじゃないか？

「まっ…寝床と電気があれば問題ないか…」

そういえば葛城家の物置なんか見た事ないが…Gとか繁殖してないよな…

恐る恐るシンちゃんのお部屋とプレートが張られた扉を開ける。

「うおっ………」

そこまで狭くはない。むしろ前の部屋よりでかい窓があって好都合な場所ではないか。

そして古びたクーラーも完備されている。中々よき部屋である。

「さて………どっから片付けるかね………」

引越センター  
諜報部の活躍により、ベッドとダンスがベストな場所に設置されている。

後は…他のインテリアだな。

「まあそれといった物はないが………」

えーつとF・22メビウス1カラーは机に…ガンダム試作式号機は本棚…

その隣にノイエ・ジールとグラハム様のフィギュア…

フランク・ウエストのフィギュア忘れちゃいかんぞ。

その他にも第三新秋葉原から取り寄せた木彫りのチャック・グリンの置き像。

そして最後にアイザック・クラークのフィギュアを棚に置いた。

「ふう…あれ…一気にオタク臭くなったな…まあいいか」

その後、レイとアスカが俺の部屋を見てどん引きしたのは言うまでもない。





24・レイとアスカとシンジが3人暮らしても一応問題ないです(後書き)

こぼれ話

ア「ファースト、バカシンジ、何やってんのよ」

レ「金剛力士像を作ってる…」

シ「俺は千手観音」

ア「(。。。)」

25・ユニゾンも楽ではありません。心して戦いましょ(前書き)

こわれwはwひwどwい。

## 25・ユニゾンも楽ではありません。心して戦いましょう

「第七使徒の弱点は一つ！分離中のコアに対する二点同時の荷重攻撃！これしかないわ！！」

つまり、エヴァ二体が完璧にタイミングを合わせて同時に攻撃することが大切なのだ。

そのためには3人の協調、完璧なユのゾーンが必要なのだ。

レイとシンジ君は心が通じ合っているようなものだから問題はな  
いけれど。

そ・こ・で！これからアスカも一緒に暮らしてもらおうことにする  
わ

ん…？ちよつと待て。

「待てぬ、なぜその同時攻撃を俺とレイでやらせないんだ？」

「零号機は改修作業中で性能がいまひとつ発揮できないの」

「それなら零号機は出さなければいいのではないだろうか」

「まっとりあえず多い事に悪い事は無いでしょ！」

コイツを作戦部長にした奴ちよつと出て来い。前歯全部折ってやる。  
る。

第一作業中にそれを戦場に出す馬鹿がどこの世界に存在する。

お前らはテイターズか、整備不良で出すなんざ。

「ふーむ…まあ別に俺は問題ないが「嫌よー！！」やっぱ問題あるらしい」

「昔から男女七歳から同衾せずってね！」

「使徒は現在自己修復中。第2波は6日後、時間がないの」

「そんな無茶な〜…」

がつくしと頭を下げる。ふむ…このミサトの皆無に等しい説得力で納得するのか…

「そこで無茶を可能にする方法」

ドラえもんの道具のような効果音になり、ミサトが一本のCDっぽい奴を取り出す。

「この曲に合わせた攻撃パターンを体で覚えこむのよ、今から再生するわね」

そういつて、CDデッキから音楽を再生する。

曲は、原作同様のユニゾンBGM。

「なかなかいい曲じゃない」

「…」

「まあ…」

いつも通りって感じですか…さて、ここからどうするべきか。

「で？今日はどうすんべ？」

「とりあえず…明日も諜報部引越しセンターがくるし、今日は休みましょ」

本当にそれでいいのかネルフさん…

N e x t   d a y

朝から学校を休み、トレーニングに明け暮れる地獄が始まる。

早朝から引越してセンター諜報部がトレーニング機材となるマットを運んでいる。

剣崎さんご苦労様です。

「これって…ダンスダンスレポリユーション？」  
「違う…ユニゾン用のトレーニング装置…『光って！ユニゾンマッ  
ト』赤木博士が開発した」

レイが大真面目に説明書を読む。ああ…そういえば…  
リッコって最悪のネーミングセンスだったな。すっかり忘れてた  
が…

「ちょっと楽オクに売り飛ばしてくる」

「バカシンジ、パソコン借りるわよ」

「碓君、ダンボールはこれでいい…？」

「3人とも待ちなさい！！まずは傷がついてないかチェックする  
のよ！！」

「…あ、そうだった」「」

その後、諜報部が飛んできて売り飛ばしは中止になった。剣崎さ  
んご苦労様です。

「さて…日本人は形から入るものよ。とりあえずこれ着なさい」

専用の服…ペアルックかよ……まあいいか。

俺たちは各自自室で音符がプリントされたシャツを着る。

「うっわ…タイツなのかこれ…パツツパツじゃねえか…」

「うおっなんだこのヘッドホンみたいな奴…ヘッドセットか？」

うじうじ文句言っても仕方ない。やるか！

## ROUND 1 VSレイ

ポー…パー…ビー！

「ちっ…」

ポー…ビー！

「なっ！？」

ビー！

「何！？」

「碇君、いい加減にして。全く進まない」

「れっレイ！待て！俺は…」

英和辞典で殴られKO。

ROUND 2 VS アスカ

ビー！

「んな！？」



ビー！びー！BEE！

「なっ…馬鹿な！？」

Be！ビィ！B！！

「orz」

ア「いい加減にしないでよ」んのパカシンジー…！」

「貴様もかアツー…！！」

「ぐえあ！？」

窓から投げ落とされKO。奇跡的に下に「ウジがいたから無傷ですんだ。

### ROUND 3 VSレイ

「碓君、次間違えたら…：：：LCLにするから」

「遠まわしに殺すって意味ですか…：：」

「ええ」

oh…レイさん鬼畜w

「よし…はじめるぞ」

「ええ」

ビー…ビー…ビービービー…！

「碇君…」

「すまぎゃあああああ…！！！！！！」

窓から投げ落とされ、その上から植木鉢を落とされた。  
しかしトウジが下にいたから助かった。





25・ユニゾンも楽ではありません。心して戦いましょう。(後書き)

こぼれ話

レイ・シンジ「ぶーっせつまーかーはんじゃーはーらーみーたーしんぎょー」

無駄にユニゾンしている二人であった。

26・トレーニングといっても一緒に暮らしてりゃどっつてことではないです。

数日後…

「はあぁ…トウジは入院…結局僕だけが碇のお見舞いか…  
しっかし背骨がイカれるってどんなことしたんだよ」

そう愚痴をたれながらコンフォートなんとかに向かう相田ケンス  
ケ。

股間は昨日のトレーニングの巻き添えになり、全治3日の入院と  
なった。

同じく、真希波・マリ・イラストリアスもしばらくその場で立て  
なかったとか…

…そんなことはどうでもいい。

そう言っただけはインターホンを押してしばらく待つ。  
しばらくすると…出てきてしまった

「はいはい」「はい…なんだ股間の片割れじゃねえか」「…相  
田君？」

「……………」

それが相田の中の碇のイメージが崩落した瞬間であった。

「ペッペアルック!? いや…ユニホーム!? どっちにしてもいや〜んな感じ…」

「待て相田、これには深い訳があるのだよ」

「訳も何も! 綾波を同居させときながら…惣流さんまで手玉に取るのか君は!」

「おい!?! なんか俺が金持ちの女買いみたいになってるぞ!」

「そういう関係じゃねえってんだろが!?! なんで俺がわざわざペアルック着る必要性がある!」

「じゃあどういふ関係なんだよ!?! 美人2人と同居なんてうらやましすぎるろう!」

「あら〜いらっしゃーい」

ミサトの登場により、俺たちは救われた

「ミサトさああああん!?! (バタツ…)」

「大丈夫…？相田君」  
「そこらに捨てとけ」

「さてっ！今日は本格的な攻撃パターンを決定するわよ！！」

「…はい」

「おk」

「分かったわ！」

あれ…？委員長とトウジは？…まあいいか。

「で…この曲に合わせた攻撃パターンを今から考えて欲しいの」

「あんだよ、お前決めてねえのかよ」

「だって…シンジ君の攻撃スキルとアスカとレイのスキルの差があ



りすぎるもの。

「どこの馬鹿がATフィールドを射出するのよ」

男のロマンパワーさ。毎日ブラックコーヒーを10杯飲めばつくぞ。

「ったく…わーたよ」

「はい…」

「えー…めんどくさいの…」

と言う訳で今日は攻撃パターン決めをすることになった。といっても一瞬で終わったが…

「じゃあここはこうでこれはこうやって、トロとサバ。

で、そこはああやって、シメはしようがな。

ほいでおあいそは最後の飯を食った後に押す。これでいいな？」

「問題ないわ」

「ふーん…それで何とかなるんじゃない？」

「分かった。じゃあとりあえずこれを何とかするために

今日は私生活からユニゾンするようにしようぜ」

原作シンジもアスカと一緒にほぼ同じ行動をとっていた。

つまりトイレのタイミングも音楽のリズム取り、そして寝る寝相も一緒にすればいい。

これ、兵法の初歩の初歩なり。

「つまりだ、買い物も一緒、寝る時間も一緒。無論部屋もだ」  
「嫌よ！」

「じゃあ負けるか？」

「ぐっ……」

「私は異議はないわ」

「うーん…アスカア、これに異議をつけるのは難しいわよ」

『アスカ！ファイトファイト！』

おめーは黙ってる忒号機。

「ええいやってやるわよ！！幸せになるチャンスはどこにでもあるわよ！！」

『呼ばれた気がして』

帰れ初号機。

「…決まりね」

「ほとんどヤケクソに近いがな」

こうして俺たちのユニゾン生活は始まった。

なんだろう…エヴァ二機からすくく注目されてるような…

とりあえず俺はカレンダーに攻撃の日10月11日に印をつけ。  
宣言する。

「俺らがやらなきゃユニゾンはどうにもならねえ。やるぞーお前ら

！！！」

「ええ」

「熱いわねえ」

「さすがシンちゃん！やるときゃやる男ね！！」

『いよっ！日本ー！！』

だから帰れ、どさくさ紛れに俺の心に話しかけるな初号機。

N e x t   D a y

朝

チルドレンの朝は早い。今日も俺たちはいつもどおりの時間に起床し、

目玉焼きを焼き、投げるといふ作業をする。

ペンペンの分は常に焼き魚。常識である。

「くらええ！！レイイ！！」

そしていつものようにレイイに向けて半熟卵を投げる。

「はっ…」

「ナイスキャツ…焼けたぞアスカア!!」

しかし今回はアスカもいるので勝手が違う。

アスカの分は手加減無用で投げつける。

本気でな。

「んなっ!?!? (ぐちゃっ)」

「おいおい…不意打ちにも対応できる体にならんといかんぜよ」  
「…くすっ」

このような中でも仲間との交友を云々があるのである。

昼

ここからは本格的なユニゾン特訓である。

ユニゾンというのは複数の人間が同じ旋律をうたうことを言う。  
つまり、互いの息が同調しなければならぬということだ。

だから…

「…もしもし、日本直販ですか? ダンボールを50個ほど用意して欲しいのですが…」

ええ、ネルフ本部司令室宛でお願いします。じゃあ「」

父親にも協力してもらわないといけないのだ。

夜

激しいチャンネル争いの時間である。

「このっ！よみうりテレビは私のものよ！！」

今回のチャンネル主導権争いは俺とレイとアスカ。  
チルドレンの争いである。ちなみにアスカが来るまではチャンネル争いなどなかった。

つまりアスカの頑固さのせいでレイまでそれに影響され、  
チャンネル争いという文化が生まれたのである。

「貴様！！関西テレビを無視するとはけしからんぞ！！！」

「駄目、NHK教育を見せなさい……」

「よみうり！！！」

「関テレエエ！！！」

「教育テレビ……！！！」

「あーら何やってるの？さて……とアニメ見ましょ……」

「「「！？」」「」」

テレビ東京に決定。ミサトの勝利。

アニメも悪くはないが……まあ……いいか。

あれ？マット使ってないか？まあいいか。

26・トレーニングといっても一緒に暮らしてりゃどっぴんとどっぴんはないです。

こぼれ話

シンクロテスト中

初号機「それで〜うちの馬鹿亭主、なんていったと思う?」

弐号機「なんていったの?」

初号機「『何故私を拒絶する、ユイ』ですって!」

弐号機「そんなもん、偽物ぶち込まれて喜ぶ馬鹿はいないっての!」

初号機「きゃはは!」

弐号機「ほんつと!ばっかみたい!」

初号機「掃除も出来ない料理も出来ない、本当に馬鹿な夫よ。」

その上私に会いたいからに人類一つにまとめるですって  
本当に馬鹿ね。何であんな馬鹿と結婚しようとしたのかし

ら

弐号機「シンジ君が生まれなかつたらただの変態じゃないそれ」

初号機「全くよ...」

シンジ「お前らひでえな...」

27・原作とは違う展開も十分にありえるので注意しましょう。(前書き)

今回は原作と大きく外れた話です。

嫌悪感を覚える方はブラウザバック！おk？



27・原作とは違う展開も十分にありえるので注意しましょう。

日々の行いというものは色々変わるものである。

例えば野球選手がトレーニングを怠るとすぐに二軍やBチームに落とされる。

サッカーでも少しでもトレーニングを怠れば控えにも入れなくなる。

デブが運動を怠ればさらに太る。

「つまり俺が何をいいたいかというところ」

毎日のトレーニングは怠らない事。

それは重要なことである。

「さて…明日は攻撃の日だ。今日もやるぞ」

「ええ」

「……あれ？アスカは？」

そついえばアスカがいない。

まあいいか。

「つてよくねえよ！！探すぞレイ」

「…了解」

トレーニングは中断。え？前置きの話？あれは嘘だ。

「つたく…あの野郎どこ行ったんだよ…」

「碓君の傲慢なトレーニングに嫌気が差したのだと思っわ」

「遠まわしに俺のせいだよw」

「ええ」

最近感情がさらに成長したのはいいが何故か段々ひねくれてる気がする。

べつに俺はその辺のストライクゾーンは広いほうだからいいけど。

「で？お前の勘ではどこだと思っ？」

「知らないわ」

「知っつけよ」

「無理よ」

「はあ…まあいいか。とりあえず一通りのローソンを回るぞ」

「何故ローソン…？」

「なんとなく。ローソンにいなかったらファミリーマートだ」

「…（何故…？とてつもなく嫌な予感がする…）」

俺たちは日本中のローソンを駆け巡った。  
途中オレンジ色の髪の毛の中学生かつエヴァパイロットの奴が見  
えたがきにし

「碓君…止まって…」

「まだあそこにローソンが……あれ？」

俺が見つけたのは何故か路地でトラ柄の服を着た男に声をかけら  
れているアスカ…

ヘッドセットでもう分かるが、真正正銘のアスカがいた。

あんなところで何やってるんだ…？

「惣流さんがいる…どうする？」

「その場で声をかけるべし」

「ちよつと待つ…」

「待たん！アスカ！！」

俺は一人で路地の中に入った。

悪い男はお兄さんが成敗しちやる！

「「「ああん!?!?!」」」

どうやら無謀だったようだ。

たちまちごついオッサン3人に囲まれ…やばっ

「バカシンジ!?!」

アスカも俺に気づいたのか、

「おまんは何の用じゃ?」

「けっけけ…俺たちにけんか売るのかい?」

「ひゃ〜彼女助けるためか?ユーカンだねえw」

一人は拳もう一人は小刀…いわゆるドスだ。そしてもう一人は…  
…チエーンソー…

俺死にました。

「あ…あはは…出来れば惣流さんを解放してもらえればいいんで

すが……」

「カツカツカ！何寝言言つてんだボウズ！」

「ほーら、この小刀が怖くないのかい？」

「お前も木みてえに切り裂かれたいのかい？」

oh…お前はデットライジングの主人公か？

というより本気で怖い。今にもシヨンベンちびりそうだ。

ええい……ヤケだ！！

「レイ！！後は任せます！！」

「碇君！？」

戦術的撤退！！！！

「待たんかワレええ！！」

「逃げんなこりやああああ！！」

「追ええええ！！」

「レイ！！アスカつれて逃げろおお！！間に合わなくなっても知らんぞおお！！！！」

「…了解！惣流さん！早く！！」

「バカシンジ！！！！早く逃げて！！」

「逃げてますうつうつうつうつ……」

俺の叫び声は遠くなり、レイはアスカを連れてネルフ本部へと向かった。

俺はゴミ箱を倒し、道を塞ぎながら大通りに出るために全力疾走した。

この辺りの道は全く持って分からない。

だがとりあえず走る。メロスの如く走る、走る、走る、走る、オレータ  
ーチー！！

「はあ… ぜああ！！逃げます逃げますにげえます！！」

オッサンに負けるほどの足ではないはずだ。

だが本気を出したオッサンの足はすさまじく、  
もう既に背中から切り傷が出来ている

「くそつたれええ！！誰のおかげで人類が存在してると思ってるんだよおお！！！！」

俺の悲痛な叫びは届くことはなくチェーンソーが背中を切りつける。

クゾジジイ！！ガキになんてことを！！

「ぎゃああああ！？いてえええ？！」

足がもつれ、地面に崩れ落ちる。

チェーンソー持って走るなんざ化け物がこいつら…

「けっけっ…さて辞世の句を聞いてやるよ」

「いてて…なんでアス力を？」

「いい女だからだよw」

やべえ相当なクズだ。

そろそろ失血状態になって意識が朦朧としてきた。助けを呼ぶにもここは狭い路地。誰も気づかない。

「じゃあ…やさしくしてね…？」

「「「きめえw」「」」

まあ後の展開は、殴られ刺され蹴られryである。

「おま……ドスはなしだろ……ぐぶ……」

「わりいな、ガキンチョ、そこで野垂れ死にな」

「さてと、いい女探しに行きますかいなw」

「さとりんみたいなおにゃのこがいいねえ」

安心しろ、さとり様はお前みたいなの奴は見向きもしねえ。

失血通り越してもう顔が青くなってきたような気がするが気のせいだった。



だが白い制服が真っ赤になるところを見るとこの辺で潮時だろつ。

「ひゃっは〜……死んだら幻想入りしちゃるう〜……」

ゴミ袋に背中を預けて俺は息を引き取らなかった。  
数発の銃声が聞こえ、誰かの叫び声とサイレン音、  
そして注射を打ったような痛みと共に意識を手放した。

俺カッコ悪い…

27・原作とは違う展開も十分にありえるので注意しましょう。(後書き)

こぼれ話

シ「う……おれあ死んだのか？」

？「……………あ、おきた」

シ「おエ…マジで？」

28・シンジ君がいなくても何とかなることもしばしばあります(前書き)

活動報告でアンケートも募集しています。

ちよっと協力してチヨ

28 シンジ君がいなくても何とかなることもしばしばあります

あ…あの…私を氷付けにしてどうするつもりですか？

え？その蛙みたいに遊ぶ？いや…セカンドインパクト後の世界に蛙がいるとは…

え？河童も天狗もいる？いやいや待てよw天狗なんぞ…

ちよっ…もうやるの？チルノさん？チルノさん！！

「ぎゃあああああああ！！？？？てあれ…？」

目が覚めた場所は知っている天井、というよりもう見慣れた天井だ。

そして胸の辺りにきつく巻かれた包帯、右腕には栄養供給のための点滴が吊り下げられている。

もう既に心電図が外れているのはすごい。ドスやらチエーンソーやらいっぱい貰ったのに。

そうかい…俺が幻想入りするのは早すぎるのか…八雲さん。

ほいじゃ少年が神話になってからもう一度幻想入りを望むか。

「軽いトラウマですよありゃあ…へたすりゃ死んでたもん」

しかしアスカエ…なんたつてあんなところにいるんですかいな。  
大体プライドの高いアスカが簡単にトレーニングごときで逃げ出すのがおかしい。  
後なんで護衛がいなかったしw

「オヤジ関連か…もしくはゼーレの計画か……」

オヤジが簡単にパイロットである俺を殺そうとするのはまずありえない。

ダンボール攻撃に流石にキレたつて言うこともありそうな気がするが、

……いや…あいつならやりかねん。

じゃあ何故に護衛をつけずにチルドレンが勝手に外出できたんだ？  
まずアスカがDQNに声をかけられた地点で剣崎さんと愉快な仲間たちがフルボッコにしてたたる。

まさか…圧倒的な実戦経験不足なのか？大丈夫なのか諜報部。

剣崎さん

「考えても仕方がないですな。リツコかミサトに聞くしかない」

ゆっくりと起き上がり、床に足をつけ、フラフラとした足取りで  
発令所へ向かった。

全く、病院のにおいは嫌いだ……。

## 指令室

「よかったのか碇」

「ああ、かまわん。これ以上ダンボールを送られては部屋に入れなくなる」

「そうではない。セカンドチルドレンを洗脳し、碇シンジ君に間接的な危害を加えたことだ。

実の息子をヤクザに危害を加えさせるとは…なんとも思わないのかね」

「計画の妨げになるのなら問題はない」

決してその事を言っているわけではない…

パイロットを洗脳した事により、アスカ君に神経異常が出ないか…  
そして被害者である碇シンジ君…彼の碇ゲンドウに対する恨みを  
持たないかだよ…

「冬月、古紙回収はまだか？」

「もう来ているよ……」

彼…碇シンジは全てを知っているのかもしれん…。

人類補完計画、ゼーレ、そして碇ユイ君がどこにいるのかも…



発令所…まあアニメでよくあるあれのことだ。

「……いてて……」

俺はその部屋の前に足を踏み出し、自動ドアを開けた。  
まさかの誰も気づいてくれないパターンか。ひでえやい。

「目標は、強羅絶対防衛線を突破」

「来たわね……レイ！アスカ！シンジ君がいないけど背に腹は抱えられないわ！いいわね！？」

『……了解！！』 『了解』

ああ……そうか、今日はユニゾンの本番だったってわけか。  
それなら誰も気づかないのは納得できるな。

だがアスカ元気がないな……昨日の件か……ここは俺が一つ激を入れるか？

いやしかしここで激を入れたとしても……ええい迷ったらやれ！！

「ミツサトさーん！！」

「っ！？」

「シンジ君！？」

『バカシンジ！？』 『碇君……！』

ミサトとリツコが振り向き驚いた顔をする。

それにつられて他のネルフ職員も一斉に俺を見た。

その指揮系統の一時的な混乱に乗じてミサトのマイクを奪う。

「どーしたアスカ！元気がないぞ？シャキッとせんかシャキッと！」  
『う……うるさい！！大体あんた何やってんのよ！！』  
「いや、アスカのマヌケ面を見ようかと思いましたが。いや、それにしても不良に囲まれた時の涙目！」

非常に笑わせてもらいましたよw大体ドスやらチエーンソーごときで人は死ぬかつーの」

『普通死ぬわよ！！』

「まあそれはいいとしてだ。作戦はちゃんとしてんのか？」

『レイがシンジの代役をすることになったわよ。アンタが馬鹿な真似するから……』

『碓君……大丈夫……？顔色……』

「俺は大丈夫……あーもう辛気臭い。じゃあ俺は傍観させてもらいますよ」

俺は通信機を切り、めまいに襲われる。

「シンジ君！」

「あー病み上がりはきついわ。ちょっと椅子的なものある？」

「どうしてそこまで」

「ユニゾンをシヌホドガンバツテキタカラヤ！！」

吉本新喜劇のあの人並みに訛って返事をした。

おいそこのオペレーター三人組、引くな。

「……分かったわその代わり作戦が終わったらすぐに帰りなさい。命令よ」

「とりあえず……最期に……一回は……」

「不吉な事を言わないでシンジ君」

「サーセンw」

「目標は山間部に進入」

『いいわね！最初からフル稼働！最大戦速で行くわよ！！』

『分かったわ、6.2秒で撃破する……』

「目標、ゼロ地点に到達」

「外電源パージ！」

ミサトの指示の後、ケージ内でケーブルが外される。

後ろ側の音響の皆さんが音楽再生のタイミングを合わせるべくモニターを観測している。

裏方さんパネエ…

「発進」

音楽が流れ、改修中の零号機と弐号機が同時に射出される。

零号機…ガタが出なきゃいいがな。

「……」

え…ちよつと待てよ。俺の考えた奴って俺のシンクロ率に合わせて作ったものなんだが…

レイとアスカじゃ荷が重過ぎるぞオイ。

『どっりゃあああ……!!』  
『……!!』

しかし期待はなかなかいい感じで裏切られることとなった。

レイとアスカは若干のずれがあるものの、ほぼずれがない。

そして何よりも驚くべきところは、台本でも俺一人が撃つ筈だった『ATフィールドゴッドフィンガー』をエヴァ2機のフィールドを合成して撃つ事が

できるようになっているのだ、これにはマジビビった。

『レイ!!』 『アスカ…お願い…』

「オイオイ…冗談だろ…」

『『爆熱!!!ゴッドフィンガアアアア!!!!!!』』

ドモンのゴッドフィンガーと全く同じ。しかもスケール違いの強化varだ。

しかし叫び声に張りがいない…ってそんなことはどうでもいい。そして二機の腕が二つのコアにめり込み、そのまま上に上げる。

『『ヒート!!!エンド!!!!!!』』

レイの貴重な叫び声とアスカの独特なドイツ語のヒートエンドにより、

イスラフェルは爆発四散した。

「え…エヴァ両機…確認」

シゲルの報告と共に映像が回復する。

そこには内臓電池が切れ、右腕を高々と上げた状態で沈黙した弐号機と零号機がいた。

「改修中の零号機…精神異常のあるアスカの弐号機でここまで出来るなんて…」

その光景にリツコは思わず眩く。確かにまあ…スペックの違いもあるが。

「まああれじゃね？うん、あれだ」

「どれよ」

「俺も知らん」

モニターを見ると、エヴァのプラグから2人が出てきて、公衆電話のようなものを取って俺に通信を持ちかける。

「なんじ『ちよつとバカシンジ！何なのよあの技！』『ゴッドフィンガーさ』」

『恥ずかしかった』

「まあいいんじゃないの？かつこよかったし」

『え…そうなの？ならいいかも…ってそうじゃない！…！』

何で叫ばなきゃいけないのよ！…神の指なんてかつこ悪いわよ！』

「貴様ああ！…！全国のゴッドフィンガーファンに土下座しやがれええ！…！」

『碇君…その技のファンは今のところ一人だと思っ…』

ああ…なんて事だ…これは忌々しき事態だ…

「お前らに分かるほどゴッドフィンガーは甘いものではない…！俺は先に部屋に帰るぞ…！」

あ…ヤクザの件聞くの忘れてた。

まあいいか。明日で。



「アスカの洗脳による精神汚染を戦いの中でねじ伏せさせるか…  
碇指令…シンジ君は一筋縄ではいきませんよ…」

歡喜に包まれた発令所の片隅でひっそりと呟く加持リョウジの声は  
誰にも届く事はなく、安堵の空気に消えていくのであった。

28・シンジ君がいなくても何とかなることもしばしばあります(後書き)

こぼれ話 in 紫・藍

九尾「…………紫様…一体あれは」

賢者「使徒…………外の世界の人間の敵よ、覚えておきなさい」

九尾「いや、あれほど巨大な生物…誰が太刀打ちできるのですか？」

賢者「来るわ…人間の希望が…」

シ「ひゃあつはあああ!!」

呼ばれて飛び出てジャジャジャアアア!!

エヴァンゲリオン初号機様の登場じゃああい!!」

初号機【ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!  
!】

九尾「すみません紫様、おなか痛いので帰ります」

賢者「私も帰るわ」

29・修学旅行に行っちゃ駄目？行って何になるんですか？（前書き）

活動報告アンケートは締め切りが29日の午後9時か  
作者の気分次第です。

早めにw

## 29・修学旅行に行っちゃ駄目？行って何になるんですか？

数日後、今日は早々とアスカがおしゃれをしてどこかに出て行った。

「うおーいアスカどこ行くんだ？」

「加持さんとショッピング！大丈夫よ悪い人にはついていけないから」

「本当だな？チエーンソーは勘弁だぞ」

「ふん、勝手にしゃしゃり出て勝手に死にかけたんでしょ、知ったこっちゃないわ」

「たく……真っ先に死んでもらったらかつちが鬱になるっての。まあ今回は加持さんが護衛してくれるから問題はないだろうが。」

「んじゃ、行って来いよ」

「じゃね〜」

何買いに行くんだらうかね……

しばらくしてパジャマ姿のレイが俺の肩に手を置く

「……………行ったの？」

「ん？ああ」

「体……………大丈夫……………？」

「俺かい？まだ脇腹が痛むが……………」

「……………」

何だこの気まずさ……………俺たちは黙って机に座る。

とりあえず黙っているのはあれなので

俺が話を切り出そうとする。

「レイ」

「何」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………？」

「…なんだっけ…」  
「え……………」

思いつめたようなレイの顔が一気にきよとんとした顔になる。  
ゲンドウとの会話ではまず話を切り出す奴が内容を忘れることなどなかったんだろう。

「いや〜何話そうとしたんだっけかなあ〜？」

「…忘れたの？」

「すまん。忘れちゃった」

「…やっぱり碓君は変……………」

少し空気が和んだな。それでよいそれで。

「碓君」

「ん？」

「早く…食事……………」

あ…そうだった。

「すまぬ。では作らせて貰う」

俺はキッチンに立っていつもどおりの目玉焼きを作る。

そしてキッチンから目玉焼きを投げて、レイが受け取る。

「そおりゃー!!」

「ほっ……」

「俺は…食ったか」

「そう……」

だが流石にミサトも居ないところで一人で食わせるのは可哀想だ。  
というより気分的にだな、可哀想だ。

「……おいしい……」

「そか？まあ俺は投げる専門だから」

「料理は投げるものなの？」

「大半はそうだな……味噌汁も、寿司も投げるなそういえば」

「そう……料理って…スポーツ？」

「まあそんなところだ。から揚げだって油に手を突っ込んで投げる

のがメジャーだからな……」

本当の料理はそのまま食うのが真の料理だな！

「怖い……でも……食べてみたい」

「だが悲しい事にファミレスじゃ料理を投げなくなっている……」

コンビニだってそうだ……置いてある食べ物をカゴに投げ込むだけ……

料理は投げるものなのに……」

「……可哀想……投げられない料理が……可哀想……」

ってか……なんだこれ……



夜

「ええええ？！修学旅行に行っちゃ駄目！？」

「そりゃそうだな」

「……………」

俺はミサトに修学旅行終了のお知らせを聞かされた。  
まあ沖縄つても暑いだけだし海だつて塩辛いだけだろ？  
大体なんでビキニでスキューバやるんだよ。

「どうして!?!」

「戦闘待機だもの」

「そんなの聞いてないわよ!?!」

「ミサトが今言ったに決まってるだろ、頭に蛆でも湧いてんのか」  
「誰が決めたのよ!?!」

「作戦担当者：つまり葛城一尉：」

まあこうなる事は予想済みだ。

原作知らなかったらミサトに勝負を仕掛けて返り討ちにあつのが  
オチだが。

「あんたたち!!なんでミサト側にいんのよ!?!」

「修学旅行なんざクソ喰らえだ。あんなドロドロしたクソ旅行に誰  
が行きたがんだよ」

「私はいい……仕事だから」

「な」

「……何この敗北感……」

「アスカ、気持ちは分かるけど……あなたたちが修学旅行に行つて  
る間に」

使徒の攻撃があるかもしれないでしょ?そのための待機」

まあ……かもしれない運転は大事ですよ。

運転免許でも、使徒殲滅でも。

「いつもいつも待機待機……いつ来るかも分からない敵に守ることは

つかし！！

たまには敵の居場所を突き止めて攻めに行ったらどうなの！？」

「それが出来たら苦労しないわよ……」

「アスカ…少しは考えて……」

「ほんつと…考えもなしに行動する奴は困るねえ……」

「「「お前が言うな」「」」

全くだ。いいツツコミだよ君たち。

「まっアスカ、これをいい機会だと思って勉強しなさい」

「え……」

「知らないとも思っただの？」

おいおい…アスカは漢字が読めないだけだつて。

「見せなきゃばれないと思ったら大間違いよ。

シンジ君、レイ共に成績はほぼ満点…アスカは…言わないであげるけど。」

アスカが何点取ったかなんて筒抜けなのよ」

そりゃ俺は一応大学入学したし。レイはリリスの分身だしなんか頭よさそう。

ってかいつも思うけどネルフ怖ええ…下手したら国家予算も筒抜けなんじゃね？

「はっ…ばっかみたい！学校の成績が何よ」

「使徒全部倒したらお前もマダオヤジの仲間入りだな」

「日本に慣れない外国人……それほど哀れな人はいないわ」

「郷にいれば郷に従え。日本の学校にもなれて頂戴」

「いーだ!!!」

「飯田さんがどうかしたか？」

第三新東京市にあるとある空港、公共で使う空港だからかかなりざわついている。

「すみません……アメリカの国際便はどこでしょうか?」「関空じゃないのかここは!?!」

「おつみやげおみやげ……」「あーあ……飛行機行っちゃったぜ……飛んでいくか」

「この飛行機が飛ぶと人類は滅亡するんだ!!」「なっなんだってー!!」

俺たちは見送るあのよく引つかかるゲートの前まで見送った。レイは拒んでいたようだがとりあえずつれてきた。



29・修学旅行に行っちゃ駄目？行って何になるんですか？（後書き）

こぼれ話

レ「碓君」

シ「ん？」

レ「私…宇宙人なの」

シ「は？」

レ「宇宙人なの…」

シンジ思考回路全開中……………

シ「…お前…まさか…宇宙人かつヒューマノイドなのか!？」

レ「そうかもしれない…」

シ「……………」

レ「……………」

シ「SOS団に入団なさい」

レ「そうするわ」

**30・身体異常のある方は入水をお控えください。(前書き)**

ちよつと感覚的に短いかもしれません。  
その上内容が薄いのでご注意ください。



30・身体異常のある方は入水をお控えください。

場所変わってネルフ内にあるプール。

ここは職員たちが気分転換と運動の意も込めて作られた癒しの場である。

俺にはよく分からんが貸切というものは気持ちのいいものだ。

現在プールの中に居るのはレイだけだ。

まあ怪我しててテラスに居る俺には全く関係のないことだがな。

「……」

アス力は何故か居ない。どこに行ったのかとそこらに居る男性職員に聞くと

模擬戦装置をリッコの監視の下で使い、実戦に向けて練習しているそうだ。

「俺も行くか……」

模擬戦って…あれか？使徒早倒しとかか。

とりあえず行ってみる価値はあるな。

模擬戦装置、式号機専用の奴だ。  
初号機用、零号機用、式号機用とっつこにはある。  
参号機が配備されればそれも追加されるそうな。

「熱心ね…アスカ」

「でも…なんでいきなりアスカが？」

リツコが呟くとマヤが少し疑問を投げかける。

「他人に負けたくない、自分が一番でいたい、それが彼女を動かしているのかもしれないわね」

「おい…それって自意識過剰なだけじゃねえのか？」

「…シンジ君!？」

そのシンジ君!？をやめなさい。なんで驚かれなきゃならん。

「大体何の練習してんだ?あいつ」

「これを見れば一目瞭然よ」

俺はリツコのパソコンの映像を見る。

エヴァ弐号機の後姿だ。

「これはさっきやった演習の一部分よ。」

アスカは第3の使徒を50体、どれほどのスピードで倒せるかの  
実戦訓練の映像よ。

記録は11分34秒。シンジ君には程遠いけれど、MAGIの  
スピードを超えているわ。

インダクシオンモードの射撃は使用弾数200発中168発命中。  
ベーシック装備によるプログナイフの命中率は78%。

標準ポジトロンライフルでは陽電子使用率40%で8体の敵を撃  
破。

研究中のサンダースピアもしっかりと使いこなし」

「ありがとう、もう大丈夫だよリツコ君」

「そう?」

こいつ…いつまで話すつもりだったんだよ。

「で…今アスカは何をやっているんだ?」

「今アスカはシンクロ率上昇のために意識を集中させてるの。  
それが一番効率がいいらしいわ」

マヤさんが簡潔かつ丁寧に説明してくれた。  
本当に彼女の声は聞き取りやすいよ。

「テンションでシンクロ率左右できる俺って一体……」

「シンジ君は才能があるんじゃないの？」

「天才と呼べるべき人種なのかもしれないわ、それが単に馬鹿なだけか」

「なにそれひどい」

と雑談を交わしていると放送が響く。

『赤木リツコ博士、伊吹マヤ二尉、至急発令所まで来てください』  
「お断り「するな馬鹿者」はい」「」

すごすごと発令所に行く二人であった。

「……………はあ」

俺も帰るか。

葛城ミサト宅、俺は早々と帰宅し、パソコンを開いて2ch的なスレを見る。

ふむ…第3新東京市に関するスレが多いな。まあ馬鹿な勘違いスレが多いがw

「ははっエヴァのパイロットが萌えキャラ?……大正解だよヴォケ」

やっぱり不快になるのがオチだから閉じてテレビを見ることにした。

「あ？神隠しついに100万人越え？腑抜けたカルト番組だな……」

テレビも消し、自暴自棄といわんばかりに倒れこむ。

あーあーあーああーあーあーあーあーあーあーあーあーあーあアッ

！……！

何もやる事がないですよおおおおおお！……！

「マグマダイバー早く来いよおおおおお！……！……」

ひたすら壁を殴り続け、頭を打ちつける。

というより、もはや壁に穴を開けている。

「暇なんだよおおおお！……！……」

ペンペンがどん引きしているがそんなことは全く気にしない。

とりあえず日頃の鬱憤晴らしにひたすら頭を打ちつける。

「……ただい………碇君！……？……？」

帰宅したレイにヘッドロックを頂き、なんとか落ち着くことに成功した。

「ぜはあー………ぜはあー……サンキューレイ」

「いい……仕事だから」

いや明らかに仕事じゃないです。

「それよりも…召集。行きましょう」

「暇つぶしか」

「そう、暇つぶし」

再び手を引かれ、ネルフ本部へと向かった。  
そして特別車両に乗り、アスカと合流。  
なんとら研究所に向かった。

浅間山地震研究所、そこで作戦を聞く。  
床のパネルに、ミサトが撮ったサンダルフォンの胎児を見る。  
うむ、実にリアルだな。

「こいつが生まれる前の使徒って奴か」

「そうね、まだ完全体ではないわ」

「使途のサナギ…？」

「平たく言えばね」



「分かったわ、で？」

アスカがせかすとリツコは続ける。

「今回の作戦は使途の捕獲を最優先とします。出来うる限り生きて  
まま捕獲する事」

「出来なかったときはどうすんだ？」

「即時殲滅、いいわね？」

「へいへい」

「…はい」

「はい」

「それでは、今回の作戦担当者は」

「ハイハイー！！あたしが潜る！！」

アスカが元気よく手を上げた。この後膨らむのも知らずにねえ…  
リスクも考えない馬鹿は嫌われるぞ？

「じゃあアスカは弐号機で担当して」

「はいー！！」

まあここまでは原作どおりか。じゃあ…

「俺は？」

「初号機はパイロットの身体状況を考えると、外でマグマの観測以  
外ないわ」

「…たく…」

まあそうだろうな。簡単にマグマには入りたくないし。

じゃあ零号機はどうなるんだ？

「レイはどうすんだ？」

「零号機は改修作業がもうすぐ終わるから、テストもかねて外で同じく観測」

マヤが資料を基に説明をする。

へえ、零号機も出るのか。

「A-17（用途への積極攻撃態勢）が発令された以上、すぐに出てもらうわ。準備して」

「了解」「」

さてと…頑張って観測しますかね！！

30・身体異常のある方は入水をお控えください。(後書き)

こぼれ話

渚「歌はいいね…歌は」

シ「…ツラ？」

渚「ツラじゃない!!…渚だ!!」

シ「ぐふあああ!？」

渚「はっ!？僕は何を…!？」

31・マグマに飛び込んだらしばらく待ちましょ(前書き)

この話自体には特に進展はないです。

31・マグマに飛び込んだらしばらく待ちましよう

着替えているとアスカの悲鳴が聞こえた。

どうやら膨らんだんだろう。プラグスーツが。

「いやー…やらないでよかったなうん」

俺も着替えてケイジに向かう。

D型とB型では格納庫が違う。

だが起動はD型の式号機のほうが早い。

「ちと見学に行くか」

スーツ内の空気を抜き、D型装備を見に行く。

あれ案外格好いいんだよな…白いボトムズみたいな感じ。

というより宇宙服みたいなずんぐりむっくりな奴に男のロマンを感じないかね？

「かつけえ…」

「……そう?」

「いやああああ!! なのよ!! コレエエ!!!」

貴様:これが気に入らんのか?

許せんな。

「耐熱・耐圧・耐核防護服、局地戦用のD型装備よ」

リッコがD型装備の足をコンコンと叩きながら説明する。

「ふむ……ロボットアームか。少し汎用性が足りないが……」

「あくまで極地用よ、それにシンジ君はいつも通りのB型装備の出撃よ」

「分かってるよ」

「これがあたしの式号機……? 嫌だ!! あたし降りる!! こつこつのはシンジのほうがお似合いよ!!」

「喜んで「無茶言わないで。シンジ君は怪我をしているのよ」ちっ……」

リッコは医者か? 人の健康ばっか気遣って……

仕方なしにいつも通りの第7ケイジに向かった。

「初号機もF型装備くらいつけてくれたらなあ……」

「F型…？…あのフライト装備…？」  
「いや…なんでもない」

我が儘はいえない。フルアーマーになるのはだいぶ先だろうな。  
つてかF型装備のFってなんだ？フルアーマーのFか？

…まあいい。そうなるのはずっと先の話だろう。

「じゃあ、いくか」  
「ええ」

俺たちはプラグの格納庫に向かった。  
座薬…にそっくりだよなあ…コレ。

後は発進準備をして輸送機で輸送してもらっただけか。

…ああ…眠い…寝よ。

『碇君』

「はい？」

『…どうして私も行くのかしら…？』

「…」

『…』

「…」

『…』

「…ZZZ…」

『…』

浅間山

「着いたか」

『3機はその場で待機。レーザーの撃ちこみとクレーンの準備を急いで』

「『了解』」

しばらく集音機から入る作業音と作業員の声を聞く。

しかしレーザーがもうここまで実用化されているとは以外だったな。

それにしてもでっかいクレーンだよなあ…300mはあるんじゃないか？

軽くホワイトベース以上のでかさだぞありゃあ。

「……男のロマンを激しく感じるな……ん？」

ふとモニターに映る輸送機以外の飛行機をズームして見る。

……あの機体…アメリカ空軍のB-2じゃねえか。

「リッコ、なんであんなところにアメ公が居るんだよ」

『UNの空軍が空中待機しているのよ』

「国連軍？後始末か？」



『そうね』

『後始末う？どういうことよ』

アスカが不満そうな顔で口を挟む。

『失敗したときの後始末用よ。使途にN2爆雷を投下して熱処理するのよ』

「俺たちを巻き込んだ」

『ひつどおーい！！』

これもマダオヤジの命令か。

あの馬鹿オヤジ何考えてんだよ。

と俺たちが話している間にレーザー打ち込みの作業が完了した。進路確保のためだろう。最近のクレーン半端じゃない。

『進路確保』

『D型装備異常なし』

『発進位置』

アスカの白ボトムズ…もとい式号機がクレーンに吊り下げられ、発進位置に入る。

ロボットアームには電磁柵が装備されており、いつでも準備万端って顔をしている。

どこに顔があるかは分からないがとりあえず準備万端なんだろう。彼曰く。

「危なくなったらすぐにパイプを切るんだぞ、アスカ」

『それは私に死ねって言うてるのかしら』

「YES！」

『…アンタ後で殺すから』

おーこわいこわい。

っと、おぶざけもこのくらいにしてだな。

『発進』

アスカが不機嫌になりながらもマグマの中に入っていった。  
プログナイフなしのロボットアームでどこまで戦えるかねえw

「さーて、アスカが戻るまで暇だねえ……………」

初号機を座らせ、アツガイのように三角座りをする。  
アギーたんかわいいよアギーたん。

『シンジ君、暇なの？』

マヤが呆然とした声を出す。

「YES、ケストレル」

『どうしよう…初号機がこんなに可愛く見えるなんて…』

『マヤ、今からでも遅くないわ。眼科に行きなさい』

『碓君の初号機…かわいい…私も…』

すると零号機も三角座りをしてその場で鎮座する。  
やべえ黄色だとなんか和む。

『何かしらこの光景…すごく和みます…』

『私もなぜか心が和むわ…』

『『和むわ〜…』』

管制室に居るものは皆、泉こなたのような目になって2機を見る。ちなみに管制室では限界深度をオーバーして騒がしくなっている。限界深度120オーバーでプログナイフを喪失した。

だが俺以外の奴らはみなこなっている。

「限界深度…そろそろか…」

そろそろ新生児サンダルちゃんの所へたどり着くはず。油断してはならんな。

『…はっ！深度、1780。目標予測修正地点です』

『……いたわ』

『目標を映像で確認』

『捕獲準備』

『捕獲準備……完了よ。次の指示を』

アスカの接触のチャンスは一度…まあ失敗するわけがないだろうがな。

しばらく無音になった。そして20秒くらいたったとき。

『電磁柵展開。異常なし。目標捕獲しました』

アスカが捕獲完了を知らせる。

すると周囲から安堵の声が漏れる。

『……さすがセカンドチルドレンね…』

「あれが天才って奴か。俺には出来ないな…」

『…ふう。捕獲作業終了。これより浮上します』

アスカが指示するとクレーンが動き出し、少しずつ引き上げていく。

ってかさ…もっと早く引き上げる事できないのかね？

『それにしてもこのスーツどうにかならないの？これじゃまるでサウナスーツよあ…』

「肌がすべすべになっていいんじゃないか？」

『汗もかかないただ熱いだけよ。熱いところに行けば肌がすべすべになるとでも思ってたんの？』

「もつともw」

「じゃつあとは引き上げられるだけだががんばれよ」

『…何をがんばるの？』

「レイ。彼女は苦労しているんだよ、とりあえずがんばれって言うわけ」

『アスカ…がんばって』

「がんばれアスカ!!」

『がんばって!アスカ!』

「そうだ!がんばるんだアスカ君!」

『アスカ!そう…がんばって!』

『もうやだこのパイロット……』

31・マグマに飛び込んだらしばらく待ちましょ(後書き)

こぼれ話

シ「冬月さん」

冬「なんだい」

シ「指令って…キャバクラ行っているらしいですよ」

冬「!?!」

32・サンダルフォンを倒したあとは結構な天国です(前書き)

一日すっぱかしてしまいました。ゴミンンw



やだな…

『早い！？……まずいわ…見失うなんて…おまけに視界は悪い。やたらと暑い。』

スーツがべったりしてて気持ち悪い…もう最低ね』

最低なのは分かったからお前は敵を探すのに集中してくれ。お前が失敗して爆撃機のお世話になるなんて洒落にならんぞ。

『アスカ、今のうちに零号機のナイフを落とすわ。受け取って。初号機はフィールド攻撃で援護して、下にアスカが居るから慎重にお願い！』

「お？…はいよ」

フィールドマスタースパークでぶっ潰せってか？  
何を無茶を…この浅間山もろとも吹っ飛ばすつもりかお主は。

『了解！』

『了解』

ってなに了解してるんだ貴様らは。

もう知らん。どうなってもおじさん一切責任を取りません！！

「碎けるい！！シャイニングフィンガーシユート！！」

『アスカ！受け取って！』

『ありが【ギアアアアアア！】え？』

『…え？』

ロンギヌスの槍と同じ原理だ。その気になりやすぐに終わるさ



…サンダルフォン程度なら。

「他愛もない。弐号機を引き上げる」  
『りよっ…了解!』

引き上げが加速し、弐号機が地上に出た。

「アスカ」

「…何よ」

「よくがんばったね。お兄さん見直したよ」  
「……………」

無視しやがったコイツ…

「アスカ…大丈夫…？」

「ファーストに心配されるほど落ちぶれちゃあいないわ。大丈夫よ」  
「そう……………」

えっと…とてもいづらい雰囲気です。

どうすればいいでしょうか？

【笑えばいいと思うよ】

なるほど



更衣を済ませ、ネルフ本部に戻ろうとするとミサトが温泉に行く  
と言い出した。

俺は別に反対しなかったしアスカもレイも反対しなかった。

そんなこんなでエヴァを整備員の皆さんに任せ、ネルフからワン  
ボックスタイプのバンを借りた。

ワンボックスだぞ？あの伝説のワンボックスタイプのバンだぞ？  
すごいんだぞ？

…とまあ冗談はこのくらいにして、アスカが先に乗ったと聞いた  
から俺は前席に座った。

「あー…今日何してたっけ…」

ふと呟いた。しかしぶつちやけ俺は何をしていたのか、それは神  
のみぞが知る事である。

俺も知らないしお前らも知らない。ただ俺は三角座りをしてシャ  
イニング（ry）を撃っただけだ。

…本気で何をしていたのだ？

「……………」

まあ考えていても仕方がない。世の中は結果論。

全員が無事で使途を殲滅できたのならそれでもいい。

「すう…すう…」

「…なんなのこの空気……………」

シートを倒し、天井を見上げる。

うん灰色だ。すがすがしいほど灰色だ。

とか考えているとミサトたちが来て出発することになった。

「ゴメンね〜シンちゃん」

相変わらずにたにたしている。

しかも無駄に腹が立つ顔だ。

「気にするでない」

「アスカは…？」

レイが後部座席から身を乗り出して俺に尋ねる。家族かw

「死んで「ふざけないで」後ろで寝てるぞ」

「…疲れていたの？」

「まあそうだろう。今日一番働いたのはアスカだからな」

「…私は？」

「ナイフ投げ込んだだけだろうが」

そういうとしゅんとした表情で後部座席に座る。

ミサトが「出発するわよ〜」と一言伝えてから地震研究所の駐車場を出た。

「ミサト」

「なーに？」

「零号機のプログナイフはマグマに封印されてしまっただけか？」

「そうね、またネルフ予算から天引きよ」

「葛城一尉…かわいそう」

「ざまあw」

「さーて…この車はどこにぶつけようかしら？」

「「「やめて!」」」  
「やめないわよお〜!」

静かな怒りをあらわにしたミサトを清めているといつの間にか近くの旅館『屋江近』に着いた。

どこだよwって言う奴はアニメ見る。リアルに屋江近って書いてあるから。

まずチェックイン的な手続きを…大丈夫だラブホテルじゃない。まあとりあえず部屋割りをしてもらう。

寝ていたアスカはミサトと一緒に部屋に。

俺とレイが一緒に部屋になることになった。

うっほ…フラグが立っているぞえ…

「風呂の準備が出来るまで部屋にいとけだとき。行くうか」  
「ええ…」

俺たちの部屋は二階の結構夜景が綺麗（先生キャラな女将談）な場所らしい。

なんかどこかで見ることがあるんだよな…あの弁当箱みたいな帽子…

ちなみに彼女曰く最近来た客で『がんだむ』と連呼する客を接待したそうなの。

最後は『とらんざむ』と叫んでどこか見知らぬ地へ走り去って行ったらしい。

疑惑 まさか他の奴もこっちに来てるんじゃない？

結論 寝言は寝て言え





「ほえ〜：綺麗な夜景ですなあ〜：」  
「まだ夕方」

「言い間違えたただだよ。言わせんな恥ずかしい」

しかし夜景：もとい景色は半端じゃないくらい綺麗な場所だった。  
インドア派で家の前と大学内しか行動範囲がなかった俺には絶景だ。

目の前に見える河川、少し傾く太陽をバツクにきらきらと光っている。

そして何よりも：速さがたり：浅間山が綺麗だ。  
ここまで綺麗なものなのか？修学旅行で富士山を見たがそれと比べていいくらい綺麗ではないか。

なんなのこれ：何か裏がありそうなくらい絶景じゃん。

「一生見ててもいいかも…」

「…それで一生を終えられたら女将の人も困る」

『ごめんくださーい、ネルフの人〜いますかあ〜？』

下の階から誰かの声が聞こえた。

ああクール宅急便か。

「サブちゃんか？はああい！！！」

「誰…？」

「ちよっど行ってくる」

少し急ぎ足で1階に降りた。

「ほいほい」

「ネルフ本部の加持リョウジからです」

「どうもご苦労さん」

軽くサインして、紙を宅配便の人に渡す。

「はいどうもありがとうございます！」

カカロットオオオオと走り去っていった。  
え？トラックはどうするんだ…？

「まあいいか……」

ベリベリとガムテープをはがすと、中からペンペンが出てきた。

「クワワワワワッ！クワワッ！クワッ！クワッ？」

「風呂は…女将さん湧いていますか？」

「湧いているぞ」

「ありがとうござえやす。ペンペン風呂はそっちを左だ。どうせなら一緒に入るか？」

「クワッ！！」

羽をばたつかせて喜んだ素振りを見せる。

「じゃあ行くか。こら女子共！！風呂沸いたぞコラ！！死にたくなかったら入れえ！！」

「そっ…それは明らかに口が悪すぎないか!？」

女将さん結構目立ってるな…いい人っぽい。

## 男風呂

露天風呂はいい…露天風呂は心を麗してくれる…リリンが生み出した文化の極みだ  
月からくしゃみが聞こえたような気がしたが気のせいだろう。

「これwはwテンション上がったきたwww」

風呂が…風呂が気持ちいいだ！？

もう何がなんだかわからねえ…温泉ってこんなにすごかったのか？

「あ…生きるの楽しいなチクショー…」

『シンジ君…聞こえる…？』

そんな気持ちいい状態をぶち壊す馬鹿が声をかけてきやがった

「誰だ貴様は！」

『ミサトよお…ボディシャンプー投げてくれる…？』

「ぼでーしゃんぷー？西洋の言葉は分かんぞえ…」

『ぶざけるのはやめて、寒いから早くして』

「はいはい…そおら！」

とりあえずそれっぽい奴を投げた。

ぼでーしゃんぷーなんざ知らん。

『きゃ！もつどこ投げてんのよへたくソ…ってこれローションじゃない…！』

『ローション！？』

『ローション…』

「ぬめぬめになっとけバーカ」

だが本当にぬめぬめになってもらっちゃ困るからボディシャンプーを投げた。

だがとき既に遅し。

『レイイイ！？何してんの！？何でローション体に塗ってんの！？』

『碓君がくれたものだから…』

『レイ！落ち着きなさい！命令よ…！すぐにそのぬめぬめしたものを落とみなさい…！』

「駄目……碇君がくれたの……アスカも……」

「やつ……嫌あ！！やだああ！！」

「ちよっレイ！やめなさい！！レイ！！！！」

……やっちまったZE

### 32・サンダルフォンを倒したあとは結構な天国です(後書き)

こぼれ話

シ「……………」

マリ「覚えてるかな？落下してきたネルフのわんこ君」

シ「……………間近で見たら結構可愛いなお前」

マリ「え…／／」

33・レイはダクトがお好きなようです。(前書き)

知っているかと思いますが

マトリエル戦の時の停電は誰かが故意にやったものです。  
決して使途の力ではありません。



### 33・レイはダクトがお好きなようです。

駄菓子屋の公衆電話、俺はタウンページを元にネルフに電話をかけた。

向こうから電話はよくかかってくるがこっちはかけたことがないんだなこれがw

で、さっき進路相談の面接でおとーさんに報告しとけだとき。

「オイオヤジ」

『何だ』

「何だとは何だ」

『だから何だというんだ』

「なんだというんだとは何だ」

『いい加減にしる』

「どうもありがとうございました」

『まっ待て！気になるではな（ブツッ）』

切りやがった……あり？テレホンカードが出てこない……

普通ならピピーツって音が鳴って機嫌が悪いかのように勢いよく飛び出すというのに……

「あ……たしか今日はマトリエルの日だっけな……通称ザトウムシ」

「ザトウムシ……？」

「そう、でっかいザトウムシ……って何でいるんだよ！！」

受話器を握りつぶしてあからさまに驚いた。…何だレイか。

いや、マジでビビルよこいつ。背後霊だよ背後レイ。

「近くにいたから、声をかけようと思った」

「そうか」

「シンジく、レイく何やってんの？」

アスカも鞆を持って駆け寄ってきた。

「ああ、レイの正体はでっかいザトウムシだったんだよ」

「なっ!?!」

「違うわ、私は綾波レイ。虫じゃない」

というような他愛のない話をしながらネルフ本部へと向かった。

しっかし今日も暑いなあ……いつも暑いが……どうやって米とか作ってんだろ。

「そういえばシンジ、何で電話してたの？明日の少年ジャンプの発売日の事？」

「ザトウムシの怖さ……？」

待て、なんで俺がそんなことで電話しなきゃいけないんだ。最近お前らの視点が明らかに変わってるぞ。大丈夫なのか？

「馬鹿者、進路相談の面接について云々だろうが。なんだその小学生みたいな会話」

「あんたならやりかねないわよ」

ネルフ本部に到着すると、いつも通りのゲートを見た。

電気がついていないのを2人が不思議そうな顔をして顔を見合わせていると

俺が「どけ」と言ってカードを通す。



しょうか」

アスカがニヤニヤしながら指を立てる。

「そうだな、じゃあそのリーダーを決めるグループのリーダーを決めようか」

「じゃあそのリーダーを決めるリーダーを……」

「そのリーダーを決めるリーダーも決めなきゃね……」

「で、そのリーダーのリーダー……それでそのリーダーを決めるリーダーも決めないと……」

リーダー決めに30分ほど要することになった。

結局69番目のリーダーが決まったところでアスカが我慢の限界となり

「あー……もうめんどくさいからリーダーはなし……リーダーがゲシユタルト崩壊しちゃうわ」

「こっちの第7ルートから下にいけるわ」

「そうだな、手動ドアは俺が開ける」

「……」

俺たちは第7ルートの薄暗い道を進むことになった。

「結局リーダーは誰だ？」

「何番目のリーダーよ」

「43番目」

「レイね」

と言っわけでレイが先導することになった。

こいつやっぱネクロモーフだ!!ダクトの中を通ってやがる!!  
と言わんばかりに先導しているレイが早すぎる。

「まっ…待ってくれレイ…お前が動く死体ってことはよく分かった  
から…」

後ろのアスカがもう見えないぞ、オイ聞いてんのか…」

「黙って、人の声よ」

『使徒!接近中!使徒!接近中!!使てゲホツゴホツ…ジド!ゼツ  
ギンジュウ!!』

「日向さん…」

とか言って前に進まんといて。

「シンジイ…レイイ…まってええええええええええ…」



「このダクトも破壊するわ」

「お前やっぱリネクロモーフだ、才能あるよ君」

「ありがとう」

「動く死体って意味だな」

「前言撤回」

「まってえ……」

「ここでレイがダクトの中で止まった。  
ふむ…白の水玉か。」

「どづした？」

「ここを降りるわ」

「何故に？エンジニアでもいるのか？」

「赤木博士がいる」

そう言うと、レイは床をがんと蹴り、床を落とす。

ちなみにその落ちた床の真上に私、碇シンジがいたわけでした…  
つまり私が言いたいのかと言いますと…

「レイイイ！！貴様あああああああぐびゃっ！！」

「よっ…「ふぎゅっ！！」…？」

「はあ…はあ…速過ぎなのよあんなたち…たっ「ふがっ！！」ん？

…何か踏んでる？」

「気のせいよ」

「そうね」

「あー…もうなんか気持ちよくなってきたからもういいや」

ちなみに俺が今昇天しそうになっている場所はリッコとマヤさんが仕切っている第7ケイジ。

いまマダオヤジとその他もろもろモブ作業員ががんばっているところだ。

「あんたたち「使途を…世界を…まか…せ…」シンジくー…  
ーん！！！！！！」

「シンジ君！活動限界です！予備も動きません！！」



33・レイはタクトがお好きなのですよ。(後書き)

こぼれ話

シ「俺の本名なんだっけ…」

34 人は闇を恐れる生き物：らしいです。(前書き)

少なくとも作者は闇のほうが好きです。

### 34 人は闇を恐れる生き物：らしいです。

「各機、エントリー準備！！」

「了解！手動でハッチ開け！！」

作業員がロープを引っ張ってエントリープラグのハッチを開く。ハッチが開いたのを確認すると、適当に人気のないところでプラグスーツに着替える。

ふむ…保冷が完璧だ。涼しいねえ。

さて……さつさと終わらせるか。さすがに今回は暑いから手加減不要でいいな？

プラグ挿入が完了し、LCLが注水される。

余談だがLCLはCDモニターの役割も果たす。

だから電源不要で周りの状況が分かるようにもなっている上に衝撃によるダメージ緩和にも役に立つ。  
だから羊水とも言われているのである。

つまりかがくのちからつてすげー！

「第一ロックボルト、外せ」

すると裏方の人が油圧ケーブルを斧で切断し、油圧ロックが解除される。

「圧力ゼロ、状況フリー」

「かまわん各機実力で拘束具を強制除去、出撃しろ」

集音機で指示を聞き取り、拘束具を叩き割った。

『シンジ』

「あ？」

『誰が壊せと言った』

「お前」

『強制除去だ。破壊とは言っていない』

「うっせーマダオヤジ。こうしたほうが手っ取り早いだろうが」

と言った痴話は置いて、ウェポンラックの後方に非常用バッテリーが接続された。

非常用バッテリーの搭載過程は見えていないから分からないが、エヴァサイズの機械の稼働時間を20分伸ばす高電圧のバッテリーだ。

相当なバッテリーだろう。

「出撃するのはいいが……武器はどうするよ」

初号機のウェポンラック内にはプログナイフが装備されている。しかし縦穴で戦うであろうマトリエル戦では使えない。

故に今回はATフィールドのみの戦闘だ。

先手必勝である。

式号機も同様にプログナイフのみだ。

しかもアスカでは使える技はゴッドフィンガーのみだろう。

悪く言えば今回はいらぬ子。

零号機はバレットライフルを装備。

A Tフィールドを中和すれば十分に役に立つ兵装だ。  
だが弱点は目標が溶解液を注水してからじゃないと攻撃できない。  
先制攻撃が失敗してからの補助要員だな。

まあ細かい事はやってみて考えるか。

『非常用バッテリー搭載完了!』

『よし、いけるわ! 発進!』

エヴァ3機がアイカメラを光らせ、動き出した。



電力が通っていないからでかいダクトの中をまた通る。  
やはりこの状況でもレイが一番早い。

「レイ」

『何』

「縦穴に出たら少し待機だ」

アニメ版のような失態は犯さない。

酸が来るのが分かっているのならもうこっちのものだ。

『どうして？』

「使途がもしその縦穴から攻撃してくるのなら対処のしようがない  
だろう？」

横断歩道を渡るときは右見て左見ての動作と同じ事だ」

『なるほどねえ…バカシンジにしてはまともな判断じゃない』

初めてアスカに褒められた。何かうれしいが今はそんなアホなことを考えている場合じゃない。

次は攻撃方法だ。暑いから手加減なし。じゃあ決まりだ。

「後はマスパで何とかする。おk？」

「まずはあ？何よそれ」

『初号機の最終兵器…そう考えるのが自然よ』

正式名称マスタースパーク、いわずと知れた某シューティングゲームの必殺技だ。

ドラゴンボールで言うかめはめ波。

ガンダムで言うツインバスターライフル見たいなものだ。

「それじゃあ、アスカ。縦穴に入るぞ」

『はいはい、でい！だあ！だりゃあ！！』

アスカの式号機が先頭に出て、壁を蹴り壊す。するとコロニーのような筒状の空間にでた。

「よし、30秒ほどここで待機だ」

『…ええ』

『分かったわ』

5秒ほど待つと、オレンジ色の強力な溶解液つばい液体が縦穴に降り注いだ。

「美味そうな蜂蜜だろ？」

『いや違うでしょ！！！』

『目標は強力な溶解液で、直接本部に侵攻を図るつもりね』

「信仰？使徒って神社所属だったのか？」

『その信仰じゃないわ、侵攻、攻め込む事よ』  
「わかつてるっつーのー!!」

縦穴に手を出してナイフを投げる。  
届かなかった。

『何無駄な事してんのよ! さっさとそのマスパとか言う技でしとめなさいよ!』

「ヤダ、そんなことしたら面白くないじゃん」

『『私たちは命を懸けて戦ってるのよ…?』』

「ひいいい!？」

一瞬ヤクザに見えた。主にレイの顔が。

流石にこれ以上ふざけたらフレンドリーファイヤでもれなくあの世行きだ。

「いいいつてきま〜す!」

しびしび縦穴を飛び降りて手を使途の目玉にむける。  
ところどころ顔面や脊髄部分に溶解液がかかる。

「いつ！……やはり酸はきついな……だが……」

地下深くで酸を受ける初号機が右腕を広げる。

この痛みさほど痛くはないが……1000倍にして返してやんよ。

「だらつせえええい！！酸などしやらくさいわああ！！！！！」

腕、足、全身に溶解液が降り注ぎ軽いシャワーの状態になってい

る。

まあATフィールドで防御しているからあまり関係ないがな。

「右京サンフランシスコアタアアック！！！！！！」

訳のわからない言葉を叫び、マトリエルのATフィールドにアタックをかける。

「どけろ！！」

片腕で軽くフィールドを千切り、左腕をマトリエルの目玉に当てる。

酸が直接手の平にかかり、激痛が襲う。

「とどめええ！！！！マスタースパーク！！！！！！」

星の出ないオレンジ色の極太ビームが用途を包み込んだ。

「ただいまー」

『おかえりなさい』

『……フン!』

バッテリーを使い切らないまま帰還した。

エレベーター内でちびつたミサトがマヤにマウントポジションで  
ポコポコにされていたのはまた別の話。

加持さんはエレベーターに乗り遅れたから心配ない。

その後、俺たちはプラグスーツのまま第3新東京市を見渡せる丘に登って星を眺めていた。

電気についていない町は意外にも綺麗なものだ。見えないけど。いわゆる星の観測に電気は不要。そういいたいわけだ。

「電気についていない町がここまで綺麗とは……皮肉とは思わないかね？」

「でも、明かりがついてないと人が住んでる感じがしなくてやだな」

俺が熱弁していると第3新東京市が徐々に光を取り戻し、ネオンが夜の街をともす。

「ほら、こっちのほうがちやくじゃない」

「人は闇を恐れ、火を使い、闇を削って生きてきたわ」

「てつつがくう」

「闇を削った生き物が俺たち人間ってわけだな……」

人間は特別な生き物だ。サルから人間に進化し、文明人へと発展したのだ。

人にはそれぞれ歴史を持ち、感情を持ち、2000年以上も繁殖し続ける。



科学を持った人間は一説では知恵の実を食べたアダム、そしてリスが人の始まりだ。

イチヂクの葉で体を隠し、その実を食べた2人は楽園を追い出される。

そしてリスとアダムの間にリリン…つまり人間が生まれた。んでもってなんやかんやで俺たちが生まれたのだ。

結論を言つと使徒が来るのは科学を持った俺たちを始末する神のヒヤッハー集団だ。

「まあ…敵は始末することに限る」

「使途を倒すのは私たちの使命だもの…」

「そーゆーこと！じゃっ帰りましょうか！」

「ああ」

こうして俺たちは光を取り戻したネルフに帰り、制服姿の3人は夜の街へと消えていった。



想で。

35・シンジの料理は世界一です。(前書き)

番外編を書こうとしたが保存ミスでおじゃん。  
結局ただの料理編となりましたw

### 35・シンジの料理は世界一です。

雨、それは雨である。当たり前であった。

一緒に帰っていたトウジとケンスケを雨宿りさせてくれというから股間を蹴ってお断りした。

家に帰ってボーっとしていると襖が開き、ミサトが正装で出てきた。

「お帰りシンジ君、今夜はハーモニクスのテストがあるから遅れないようにね」

「わーてる……あり？」

ふと襟の階級章を見る。…赤い逆三角に黒線が二本って…三佐か？

「ミサト昇進したのか？」

「ええそつよ、一尉から三佐に昇進。よく分かったわね」

俺が聞くとミサトが少しうれしそうに答える。

「ほう、おめでとつよ。お前は仕事か？」

「ええ、一緒に行く？アスカとレイは先に行ったけど」

「ああ、出来れば一緒に行かせて貰おう」

俺とミサトはルノーに乗り、ネルフ本部へと向かった。

さて…実力の違いを見せてやるうではないか、アスカよ。

## ハーモニクステスト管制室

「0番2番、共に汚染区域に隣接、限界です」

「1番にはまだまだ余裕があるわね、シンクロ率は？」

「168%をキープ…相変わらずとてつもない数値をたたき出しますね…」

「パイロットは？」

「携帯ゲームを楽しんでいるようです」

「……………」

「ちっ…また死んだ…」

ハーモニクステストが終了し、テスト用プラグが開く。

『3人ともお疲れ様。上がっていいわよ』

天井からタラップが降りてきて、管制室へと向かう。  
プラグ内は暗くて目が悪くなる。ちくせう。



「相変わらずのシンジ君がハーモニクスのトップ。前回より20ほど伸びているわ」

それはすごいのかどうかは謎であるが。

「よかったじゃない。お褒めの言葉を頂いて」

「さすがね、碇君」

ハーモニクスの意味を説明してくれたらなあ…

ついに俺に春がきたことをリリーさんが伝えてくれたのに

「それにシンジ君の最高シンク率は190%よ」

「我が世の春ですよおおおおおおおおおおおおお  
！……！！」

ついにシンク率150越えきたああああああ！！！！

ひゃあっはああああああ！！！！

「っ！？このバカシンジが……！？」

「ふっはははははははああああああ…さて…帰るか」

「今シンク率が落ちたのを視認出来たわ…すごい変化ね」

リッコの目が点になったがそんなのは関係ない。

さて…出世パーティーを開始しようかね。

## ミサト宅

「ふうふうははは！……揚がれ揚がれえええ！……どんどん揚がれえええ！！」

今俺はから揚げを油の中に投げ込んで料理している。  
油が跳ねるが春が着た俺の頭には関係ない。



YYYYYYYYYYYYY!!!!!!」

次はピザ生地を叩き付けてピザローラーで平らにする。  
ピザローラーって何ぞ？棒だよ。

こねた生地の上にアンチョビとトマトとチーズと根性をたたきつけ、

電子レンジに投げつける。

「無駄にテンションが高いわね……」

「これが料理……店の人はこうやって料理しているの……?」

「バカシンジに騙されたらバカになるわよ」

20分後、チンと音がなりアンチョビとトマトの根性ピザが出来た。

膨れているがそれがいい!

「これで終わり…？いいえ違います…今日はパーティ…ミサトの昇進パーティ…」

ところがどっこい夢ではありません…これが現実です…今からアイスケーキを作ります…」

「アイスケーキ…？」

レイが聞いたことがない名前に目を丸くしながら聞く。

「Exactly(その通りでございます)さあ作るぞ」

材料はバニラアイスとチョコアイス。何個でも買って来い、そしてクツキーとホイップクリーム。そしてデコレーション。それで十分だ…！

まずはバニラアイスとチョコアイスを用意…スーパーカップでいい。

次に型に溶かしたバニラアイスを入れるのだ…！そして冷凍しろ！早くしろ…！間に合わなくなっても知らんぞ…！

冷凍したな…！よし…！次にその上に砕いたクツキーを乗せる…！そして次は練ったチョコアイスをぎったぎたに注ぎ込んでやれ…！そしてまた冷凍だ…！

出来たか…！ならばその上に市販のホイップクリームをぐっちゃぐちゃに乗せる…！

アイスケーキの出来上がり…！あたいつたらさいきよ…！ね…！

おっといけねえ……デコレーションも忘れるんじゃないぜ

「ふっふっふっふっふ……はっははははは…！…！完成だ…！」

「無駄においしそうなものがまた腹が立つわね……」  
「料理は…強引…」

数分後、ミサトが帰ってきた。

「あらあ…すごいじゃない…」  
「お前が昇進したって言うから、わざわざ作ってやったんだ。感謝しろよ」

今回作った料理は、から揚げとポテトサラダ、ピザとアイスケー

キだ。

色は不格好だが味は保障しようではないか。  
だって本能は碇シンジそのものだもん。

「こつやって見ると…すごくおいしそうじゃない…」

「碇君の料理は魂が入ってるって家庭科の先生が言っていたわ…」

レイが微笑みながら俺を見る。ちよつときゅんと来た。

「どっ…どんな熱血先生だよwさあ食おうぜ」

4人がそれぞれの声でいただきますと言い。料理を食べた。

「これは…おいしい!？」

「自分で言うのもなんだが…美味いぞおおおお!!!!」

「おいしい…肉がこんなにおいしいなんて知らなかった…グスッ

…」

「不本意だけど…美味いじゃない…」

さすがシンジ…俺の皆無に等しい料理スキルをここまで高めると  
は……

常々そう思いながらレイは涙を流しながら、ミサトはえびちゅと  
一緒に。

アスカは悔しがりながら昇進パーティを終えた。

【僕の料理はこんなに強引じゃなあああい！……！……！】



### 35・シンジの料理は世界一です。(後書き)

こぼれ話

マチユ「レシピサイトとかを参考にしたか大丈夫か？」

魔理沙「大問題だと思っぜ」

マチユ「もうすぐ番外編に出すから静かにしてろ(ナデナデ)」

魔理沙「っな…/」

シンジ・その他男集「その空中都市、少し頭冷やそうか……」

### 36・番外編1です。本編とは関係ありません

? 注意?

この番外編は色々あれなことやあれなこと、そしてあれとあれがあるので

それについてあれな方は今すぐあれしてください。  
それであれなかたはあれと叫んであれしてください。

訳【この番外編は東方系のネタや東方キャラが出てしまいます。

そしてキャラ崩壊と独自設定があるので

それについて嫌悪感を覚える方は今すぐもどるボタンを押してください

それでおこな方はユニヴァアアアアアアアスと叫び続けながら  
読んでください】

---

### 34話のこぼれ話の続き

「いや……え?……コスプレとかじゃないよな……」  
「こすぶれ?なんだそれ……」

なん…だと?…明らかにこいつは…  
ジーパンに黒い服…ジーパンにはチェーンみたいなものがつい

ている。

頭髪は金髪で三つ編み。そして男言葉。

間違いない、魔理沙だ（ゲンドウ風）

「いや…コスプレイヤーならあの服で来るもんな…いや…あえて…」

「ん…やっぱり外の世界は変な奴が多いぜ…」

「ふむ、外の世界とはこの第3新東京市のことを言うのだろうか」

「ああそうだ。私は霧雨魔理沙、たしか…こんふおーど17まんしよんだよな？これが」

紙を見ながら俺の住んでいるマンションを指差す。ってマジの魔理沙かよ…

どうやら賃貸の住所を教える紙の様だ。

「ああ…そうだが。何故？」

「ここに住むことになった身だぜ…ん？」

そついうとまじまじと俺を見つめる。

なんなんだ…？コイツ…

「何だ…どうした？」

「いや…どこかで見ることがあるような…えーっと…たしか早苗の所に…」

早苗…？ああ東風谷さんか。

ロボオタとか聞いているが…フィギュアでも飾ってたか？

「誰だっけ「シンジさん！？」シンジ様じゃないですか！」「あ、早

苗

「な…なん…だと？」

俺が見た人物は巫女服ではなく第3新東京市立第壱中学校の制服を着た緑の髪の人物、

東風谷早苗である。ってか何故に俺のことを様呼びなんだよ。

「ついに会えましたよシンジ様！！私は東風谷早苗です！！」

「あ…ありがとうございます…早苗さん」

すげえ純潔な目で俺を見ているんですが……すっごい綺麗な目をしてるだろ？

ロボオタなんだぜ…この人。

「シンジ様！コンフォード17マンションはここですね！？」

「は……はい……」

「ああ、コイツがシンジって奴か……まあとりあえず新しい家を見るから一緒に来てくれ」

「嫌です！私はもっとシンジ様と居たいんです！！」

心の整理をしたいから離れてくださいお願いします。

「シンジ様って……ほら、引越しせんたーって奴も来るんだから行くぞ」

「あーんシンジ様……」

そういつて俺は早苗さんから解放された。

……何このカオス……

あーあ…酷い目にあつた…と言う訳で碇シンジです。  
いまテーブルに肘を着いてゲンドウポーズをしている。  
しかしまああんなところで別世界の方と出会ってしまうなんてね  
え…

「なあんであんなところに魔理沙が居るんだよ……」

最近訳のわからぬことが多い。

破にしか登場しない真希波まで登場したり、  
ゲンドウはダンボール詰めになって行方不明になったり  
指令室はアマゾンのダンボールの中からコジマ粒子があふれ出し  
たりと

色々不思議なことが起こる。そして今回は魔理沙と早苗の登場だ。

「ふむ…この忌々しき事態…何かわかる人はいないものか…」

まあ誰も分かるまい。

東方キャラが現代入り…いや第3新東京入りってか…？

「とりあえず…引越しセンターが来るとか言ってたな…」

という事はこのマンションの近所に住むってことになるのか。

…嫌な予感がするとつもなく嫌な予感がする。

あの状態では魔理沙は世間知らず、早苗は知りすぎという状態に

なる。

「魔理沙はともかく早苗は暗殺されるぞありゃ……」

とんだ拍子にネルフに侵入して奇跡を起こしてドグマにでも侵入してみる。

大惨事だぞ。

「奇跡の価値は……疑われるなあ……あいつが居たら」

えー…俺の嫁候補である方が引っ越しなされたのですが……  
どう考えても世界違いです。

ってかどういふ手順で引っ越してきたの？幻想郷は？

「考えれば考えるほど訳がわからん……」

だんだん頭が痛くなってきた。もう寝る。

「もう知らん」

明日から本気で調べる。

36 番外編1です。本編とは関係ありません(後書き)

魔理沙「早苗ええええ！待てええええ！！」

早苗「シンジさああああん！！！」

シンジ「やめてええええええ！！！！！」

アスカ「……………え…？」

レイ「あ…ありのまま起こったことを話すわ…」

私はリビングに行つて見たら女性二人が碇君を追いかけていた。

なつ何言ってるかわからないと思つけど私にも分からないわ…

頭がどうにかなりそうだった。

奇跡とか魔法とか言うけどそんなくだらないものじゃない。

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったわ…」



### 37 番外編2です、本編とは関係ないと思われる

「よし、落ち着いた。とりあえずあの2人が何故きたかをリアルに、そして繊細に考察だ」

まず2人の容姿…まあ早苗は分かるとして（コスプレ的な意味で）  
魔理沙がなぜ現代風の服を着ているのだ？

香霖堂では壊れた携帯やら懐中電灯とか、どこぞのチャック・グリーンが喜びそうな物しかない。

なら…どこで買ったのだ？

「これは直接本人に聞くしかないかな…」

次、なら何故あいつらがここにいる？

どう見てもスキマ妖怪の仕業です、本当にありがとうございまして…

といたいところだが、幻想郷でも結構重要な位置に立っている彼女らがこつちに来る理由は？

「霊夢が来てないって所に何か意味がありそうでないような…」

最後、ケロ子とガンキャノンは来ているのか。

言わずとしれているかは定かではないが…

諏訪子さんと神奈子さんは来ていらっしやるのだろうか？

もし来ているのならば神社はどうするんだ？

「現人神が来ている地点でもうおかしいがな」

さて…疑問ばかり叩き付けても何も進まぬ。

学校に行きますか。

「ミサトへ行きますゆえ」

「いつてらっしやっい」

アスカとレイは先に行った。  
今日は一人か。

学校

「なあ、シンジ。聞いたか？」

机に座っているとトウジが声をかけてきた。

「何を」

「転校生やんけ。どんな子やろうなあ……」

「転校生？誰が」

「噂によっちゃ金髪らしいねんて、ごつつ美人らしいで！」

美人…金髪……リツコ？

いや……まさかそれはない。30近いばあさんが来るわけねえだろいい加減にしろ。

「そつそうか……まあ楽しみだな。うん」

何か嫌な予感がする……頭の中で誰かがささやく。『だぜ』と。

「どうしたの…碓君…」

「レイ、激しく俺は嫌な予感を察知したのだ。何故だと思う？」

「金髪の…転校生…？たしか碓君が追いかけられていたときに居た子を連想するわ…」

レイも少し嫌な予感を察知したのか険しい顔つきになる。

それどころではない。冷や汗まで出ている。

「どつどうした？」

「大変よ碓君……転校生は2人居るらしいわ……」

それを信じたくないのか学校内で極秘文書と書かれたファイルを

堂々と見るレイ。

そして真実を見つけたのか今まででは考えられないほど驚いた顔でこつちを見る。

「転校生は…霧雨魔理沙…もう一人は…東風谷早苗…」

証拠として顔写真付きのファイルを俺に見せた。

こつちに来る前に撮ったのだろう。お互いのバックは紅魔館らしき赤い壁だ。

「なにそれこわい」

「この東風谷という人…一体何者なの…」

「あーあれだ、お前も分かるだろ」

「馬鹿？」

「正解」

「……」

「……」

しばらく見つめあい、共に手を握った。そして誓った。  
早苗こいつのようにはならない、と。

「えー本日は…転校生を紹介しますか？」  
「「「「「  
「知らねえよ!!!」」」」

と、くだらないギャグはこのくらいにして、と先生が転校生を紹介する。

俺とレイはゴクリとつばを飲み込み、早苗インパクトにそなえる。

「霧雨さん、まずは来て下さ」「シンジさああああん!!」「…東風谷さん…?」

ドアをぶち破らず窓を突き破って俺に抱きついてきた。  
その人物は変わらずと知れた早苗インパクトである

「（シンジ放心中）」

「（レイ絶望中）」

「ううゝんシンジ様はLCLの香りがしてとてもいい匂いです……」

「またアンタねえ!!シンジから離れなさいよ!!」

「アスカさん、これは私の問題です!私はレスではないので!!」

早苗に抱きつかれるのは特に問題はないのだよ!

しかし…場所をわきまえろおおおおお（ロラン風）

「分かった早苗さん!まずは離れて!!」

「ええゝ…シンジさんの頼みなら…」

ヤバイって…男子の目が今までにないほど怖いって…

ただでさえ学級アイドルであるレイとアスカを陣取ってるというのに…

「いいかい?落ち着くんだ。まずは落ち着いて自己紹介をするんだ」

制服を着た早苗の両肩を掴み、目と目を合わせる。って赤くなるな!!!

「はい！仰せのままに！」

「さすが碓君：人の扱いが上手いわ」

「おれも一時間目から人間同士とヘッドオンするとは思わなんだ。危うく唇を奪われる所だった…」

早苗相手ならまんざらでもないが。正直言うとキスをするなら魔理沙一択だ。

アリスやパチュリーにとられる前に俺が奪ってやる！！

「さ…：災難でしたね碓君、さあ霧雨さん、自己紹介を」

根府川先生が空気を変えるべく自己紹介を促す。

今にも俺に向かって走り出しそうな早苗の襟首を掴みながら自己紹介を始める。

「霧雨魔理沙、14歳の普通のまほ…：中学生だ、よろしくな！」

「「「「「おおおおおおおおおおお！！」「」「」「」

男子のとりこになった。すこし頬を赤らめた魔理沙が先生に席を聞く。

どうやら俺の班らしい、男子の目が突き刺さる…

「よろしくな、シンジ」

「ああ…早苗ストッパーさん…」

「それでは東風谷さん、自己紹介を…」

「東風谷早苗！15歳です！！好きなアニメは勇者王ガオガイガーです…！！」

早苗……いったん光になれ。

後何故か窓からも視線を感じるんだが……  
なんだろう……カエルとモビルスーツに常時ロックオンされている  
ような……

「もうやだこの都市……」

「碓君……がんばって」



37・番外編2です、本編とは関係ないと思われる（後書き）

シンジ「霊夢さん…っぽい人を確認したんだが」

霊夢「なんで私が箱の中に入っているのか説明して欲しいわ」

シンジ「それは箱じゃない、ダンボールだ」

霊夢「あっそ、で？なんで私がだんぼーるに入ってるのよ」

シンジ「あれだろ、捨て猫ならぬ捨て霊夢だろ」

霊夢「捨てられたのね…私…」

シンジ「昼ドラ見たいに言うな」

2-A組はマルドゥック機関に保護された云々はまたいずれ…

### 38・エヴァは何気に音速を超える乗り物です。

南極、そこは海が赤く染まり、死海と化した場所である。  
いかなる生命の存在を拒否し、どのような生物も死滅した場。

しかしその生命の無き浄化された世界に、国連軍の空母、そしてその護衛の戦艦が通っている。

空母の甲板上、飛行甲板には、一本の巨大な槍『ロンギヌス』が固定されている。

「いかなる生命の存在も許さない死の世界…南極、いや…地獄といふべきか」

「だが我々生命はここに立っている…生命として生きてままだ」

そう言うのは世間からマダオヤジとして知られる碇ゲンドウ、そしてマダオヤジの片割れとして知られている冬月コウゾウだ。  
なにやら気取って気難しい事をがんばって話している。

「科学の力で守られているからな」

「科学は人の力だよ」

「その傲慢さが、15年前のセカンドインパクトを引き起こしたのだ、

結果がこれだ…与えられた罰にしてはあまりにも大きすぎる」

『報告します。ネルフ本部より入電、インド洋上空衛星軌道に使用徒発見』

「また…天使の名を持つ生物か」

「だが私たちにもリリスの分身、エヴァ初号機、

そしてアダムより人の作りし物、エヴァを所持している。だから  
対抗しているのだ」

「原罪に抗う生物…それが人間かね」

「でっけえ使徒だな…」

作戦会議に、俺も同席している。

戦術的に強引な思考のほろがこの使徒の対処は困難だとミサトが  
判断したからだ。

今回の使徒はいわずと知れたサハクイエル先輩。

簡単に言えば落ちてくる使徒。

「使徒の一部を分離させて小個体とし、ATフィールドを展開して爆弾のように利用しているわ。」

初号機のマスタースパークと同じ程度の威力ね」

リツコが衛星写真を見せて破壊力を確認している。

山が吹き飛ばす威力…これは本当にマスパと互角か…

「誤差修正をしているところを見ると…学習していますなで、

落下エネルギーも加算されて…位置エネルギーパネエw本部が吹っ飛ばな」

位置エネルギーが大きければ大きいほど運動エネルギーも大きくなる。

今回は高さが衛星軌道上、大きさは恐らく山一個分。

あの小さい物の破壊力が山一個分……ここは神奈川の箱根…本体が落下してきたら…

うわぁ…神奈川県サヨナラだね。

「ミサト、どうするよ？誤差修正が終わったら本体ごと落ちてくるのがオチだぞ？」

「そうねえ…マギの判断は？」

「全会一致で撤退を推奨しています」

マヤさんがマギの報告書を読んで答える。

まあ科学的に止められるはずがないよなあ…

「…どうするの？今の責任者はあなたよ」

「そうね…よし！日本政府各所に通達、ネルフ権限における特別宣

言D - 17。

半径50キロ以内の全市民は直ちに避難。松代にはマギのバックアップを頼んで」

「ははっ思い切ってるねえ…さーて、お仕事に入りますか」

俺は発令所を出てプラグスーツに着替え始めた。

アスカとレイはもう既に着替えを終えて控え室で待っているらしい。

プラグスーツに着替えた俺はそこに向かった。

「シンジ、どうだった？」

「ああ…今回はちと苦労するかもな」

「苦労するって？」

「まっミサトに聞けよ」

放送がなり、俺たちは第7ケイジとは違うエヴァの配置作業場に向かった。

簡単に言えば『破』で作戦を聞いた場所だ。

「えええええ！？手で…受け止めるっ！？」

「だと思っただよ」

「……」

「そう、落下予測地点にエヴァを配置、ATフィールド最大で使徒を直接受け止めるの」

なんつー無茶な作戦…まあそれもそれで悪くはないが…

はたから見たら幼稚園が考えるような作戦だ

「使徒がコースを大きく外れたら…？」

「そのときはアウト」

「落下の衝撃に耐えられなかったら！？」

「そのときもアウト」

「山田さんが山本さんになったら？」

「アウト…なのかしら？」

とりあえず可能性はかなり低いという事。

「これで上手くいったら…まさに奇跡ね…」

「奇跡ってのは起こしてこそ価値があるものよ」

自発的に奇跡を起こす女子高生も居ますがね。

「他に方法はないのですか…？」

「作戦といえないわね…こんなの…だからいやなら辞退できるわ…シンジ君はさせないけど」

「何故に!？」

明らかに理不尽すぎるぞ今の台詞!!  
オイ貴様らなにニヤニヤしている。

「一応規則では、遺書を書くことが出来るけど、どうする?」

「別にいいわ、そんな必要ないもの」

「私もいいです」

「今書いたとしてもどこに届けるんだよ」

「……すまないわね、終わったらみんなにステーキおごるから!」

す…すてーき…だと…?

それは…最高ジャマイカ!!

「…わーい」

「え!? ホント!?!」

「っじゃあああああああ!!!!松坂牛だぞコラ!!!!悪くてもジョイフルじゃ!!!!ああ!?!」

「や…約束するわ…」

「こちらら毎日コンビニ弁当で外食なんざしたことねえんだぞ!!!!  
これ破ったらお前死んでもらうからな!!!!お前補完したるからな  
!!!!」

「(素で喜んでる…)」

ステーキってステキw



エントリープラグ内に入り、スタート位置につく  
俺のスタート位置はとあるダム近く。

……ユイさん…頼むぞ…

「お前ら、マギのデータが途中まで誘導する。あとはお前らの判断だ、いいな？」

『了解』

『わかってるわ』

具体的な分隊長的存在は作戦会議を聞いていた俺。

今の司令はミスだ、その情報を元に2人を誘導する。

「よし、外部電頭パージ」

『…』

3機のアンビリカルケーブルが外される。  
内臓電源が作動、タイマーが動き出す。

「スタート！！！！」

操縦桿を思い切り引き、一気に駆け出す。  
体に若干ながらGがかかり、シートに背中を押し付ける。

「一番近いルート……あそこか！！」

上空に映るオレンジ色の影、そいつはコースを外れることなくそのポイントに落ている。

あの落下速度ではたとえATフィールドを変質させたとしてもコース変更は不可能だ。

『目標のATフィールド変質！軌道が変わります！！』

『くっ…！』

「んな！？あの速度で…！？」

衛星軌道上から落下してくる物体が速度を減速させず大幅な軌道修正は不可能だ。

戦闘機が神風するだけでも相当速度が低くないと戦艦に突っ込むのは無理。

つまりATフィールドパネェ！！



オレンジ色の推進力アップ用のかめはめ波を真後ろに放つ。  
予想以上に極太で周りの町どころかネルフにつながる地面もえぐり取ってしまった。

『初号機！推進力大幅に上昇！シンクロ率197%！！』

『初号機の攻撃により第12装甲板まで融解！』

『その程度の損害なら大丈夫よ…』

『エヴァ初号機！使徒に接触します！！』

「止まらんかい！！」

【無茶言うな馬鹿息子！！！！】

初号機を強制的に止め、上を振り向く。

オレンジ色の目玉がこつちを睨みつける。  
つてかでかくね？

「まあいいか！ATフィールド全開！！！！」

全身にATフィールドを張り巡らせ、周りの家を吹き飛ばす。

周囲は紫色に変色し、改めて奴と対峙する。

そしてATフィールド同士がぶつかり合い、腕に尋常じゃない重み加わる。

「のっ…重っ！？だがまだまだ！っ！？」

目玉の中心から人のような奴が出てきた。

そいつが初号機の手を強く握る。

「こいつ…まさか！？」

その人のような奴の手が鋭く尖り初号機の腕を貫く。  
とんでもない痛みが手の平を襲った。

「ふぎやああああああああああああああああああああ……！！！！！！  
こんの……目玉野郎がああああ……！！！！！！」

『アスカ！フィールド全開！！』

『やってるって……！！シンジ……！！もう少し耐えて……！！』

耐えられませえん……！！

「3年どころか3秒も持たないし電池切れるよ……！！」

『あと40秒余裕があるわよ……！！』

「俺がもたねえんだよ……！！はよせんかい……！！」

初号機の腕の出血が限界まで達している。俺の精神も限界まで達している。

早くしてくれえい……

『アスカ！早く……！！』

そういつて零号機がプログナイフでサハクイエルのATフィールドを破る。

『こんのおおおおおおお……！！！！！！』

同じく弐号機もカッターの形をしたプログナイフを目玉にあるコ  
アにつきたてる。

それでよいのだよ……それで。

すると初号機の内臓電源が切れ、画面が真っ暗になる。

音でサハクイエルが崩れ落ちるのを確認し、安心した俺はそのままLCLの中で寝た。

手の平には大きな穴が開いていて、シンクロ率の高さ故に傷も相  
当なものだった。

『エヴァ3機の回収！急いで！！初号機の回収後、すぐに集中治療室へ！！』

『りよ…了解！！』

38・エウアは何気に音速を超える乗り物です。(後書き)

こぼれ話

早苗「計画通り……」

39・座っているだけでいいです。それ以上は望みません

「……んはっ!？」

俺は再び目を覚まし、辺りを見回す。

あたり一面が白い壁に覆われ、腕には点滴。

両腕には包帯がきつく巻かれている。

「一体何があつたんだ……」

痛みはない。しかし何故かむなしい気分。

……何でだ？俺は何を迷っている。

思考回路をめぐらせて俺は考える。

使徒を倒した。それはいいことだ。

怪我をした。日常茶飯事だ。

じゃあ何故……何で俺はこんなにむなしい……

「……くそっ……何で分からないんだ!!」

思わず片手をデコに当てて苦悩する。

何でだよ……何で俺はこんなにむなしいんだ!!……!!

そう苦悩しているとふと作戦開始前の言葉を思い出す。



『帰ったらステーキおごってあげるから!』

「……ステーキ食い損ねたんだ…」

数時間後、俺は退院し、いつもの手続きを済ませ、ネルフ本部を出た。

冷房が効かず、蒸し暑さが発汗を促し、同時にテンションを奪う。

「あじい〜…早いとこ電車に乗らんと死ぬぞ…」

アブラゼミとミンミンゼミの音がシンクロし、再び我が家に帰る。

って……ミンミンゼミの方がうるさいぞ、もっとがんばれアブラゼミ。」

「うへ！？あんの野郎！シヨンベンかけやがった！！！」

やはりゼミは大嫌いだ。だが逆らえんな…触れないし。

コンフォード何とかマンション。いい加減名前を覚えたい。

「あー暑かった〜つとなあ…」

「お帰り〜シンジい、もういいの？」

アスカが珍しく俺を出迎えた。

今日のご機嫌らしい。態度で分かる。

「おう、まだ手の平のどでかい穴は完全にふさがってないかなw」  
「そっか……」

「どした？」

靴を脱ぎ、リビングに入ってソファに寝転がりながら話を聞く。  
包帯は取れていないが傷口は消えかかっている。

医者曰く半端じゃない回復力らしい。

「あんたってよく怪我するわね」

「うっせ、エヴァのシンクロが高いと怪我しやすいんだよ」

「シンクロしすぎるのも考えものって奴かしらね」

マリがビーストモードに入ってる時に顔から血を流していたのも  
同じ事だ。

あれもプラグ深度が100をオーバーしていたからである。

プラグ深度とシンクロ率は似たようなもの。

つまり俺はシンクロ率100以上、つまり常にプラグ深度が深い  
のだ。どや？

「全くだ…で、今日の予定は？」

「今日はオートパイロットのテスト、シンジが退院したら実施されるっての」

「オートパイロット？」

「ダミーか…ダミーシステム、後の使徒、バルディエルを殲滅した  
システム。」

「貴機が俺と似たようなシンクロをし、初号機を操縦するシステム  
だ。」

「なんか、原作シンジが使い物にならなくなったときの保険  
だな。うん」

「楽できるな」

「そう？あたしはあんまりそういうの好きじゃないな」  
「ばっか、俺はこれ以上怪我するのは御免だぞ」

初戦のサキエル先輩では意識不明 シャム先輩でも意識不明 ラ  
ミちゃんは軽傷。

ガギエルは無傷だが、イスラフェル戦では重体、そのせいでサン  
ダルフォンはほぼ非参加。

マトリエルでは手の平に火傷、サハクイエルでは手に重傷だ。

どこまで怪我すれば気がすむんだ俺は。

「さて、馬鹿な話もこれくらいにして行きますか」

「そうね、レイは先に行ったらしいし」

「ふむ、あいつは5分前行動を知らないのだな？」

「あいつは2時間前行動が得意らしいわ」

「それにしてもあいつはいつも無頓着だな……」

「くしゅんっ……………?…?」

ネルフ本部、ここからは無菌空間、超クリーンルームと呼ばれる場所に向かうために清潔にする。

シャワー、下着取替え、シャワー、シャワー、下着取替え、シャワー、シャワー。

何か変な液体にもぐる、シャワー、変な液体、シャワー、ジョイ、シャワー。

フアブリーズ、変な液体、熱風、冷風、

「俺の体が不潔というあてつけかこれは」

『ここから先は、下着を脱いでもらうわよ』

「俺のマグナム『死にたいの？』ごめんなさい」

「ええ〜また脱ぐの〜!？」

『仕方ないわ、ここから先は超クリーンルーム、一切の雑菌の侵入を許さない場所よ』

無菌室ねえ、大学のキャンパスを思い出すよ。

「さつてと、俺の斬艦刀はむき出しだぜ？これからどうするよ」

「そんなことは言わなくていい」

「不潔……」

『では3人ともこの部屋を抜けてそのままエントリープラグに入って頂戴』

「おまえは何を言っているんだ」

「ええええええ!?!」

「……」

しぶしぶ俺たちは通路に出た。  
覗き、ダメ、ゼツタイ。

「テストか……本当に大丈夫なんだろうな。ウン大丈夫だ。少なくとも俺は」

そう信じ、俺は寝ることにした。  
寝ている間、何も変化はなく、ただ単に俺は寝ることだけに集中した。

寝るということは身体の疲労を解消し、心身ともに休めることだ。その間夢を見るが、それは自分の心を完全に落ち着かせている。つまり俺たちにはなんら関係ない。

「……と言うのは建前であって、素っ裸で寝るのはもはや不可能。全裸待機ならまだしも全裸睡眠なんぞはやったことはない」

なんたってダミー云々で素っ裸にならなければならんのだ。レイだけ用意しるっての。どうせパーソナルはレイだろ？ まさかオートパイロットってダミーのことじゃないのか？ なんか訳がわからん。

「じゃあ何故俺らを呼んだのだ……」

ぼそつとマイクにも感知されない声で呟く。

オートパイロットはエヴァに搭載されているのか？

となるとダミープラグの開発云々ではなく、オートパイロットと  
いう名の違うシステムか？

となると3機に共通するシステム……暴走か？それを擬似的に発  
生させる……となると……

「まあ……いいか」

考えても疲れるだけ。

面倒ごとはその場で解決するのが一番だ。

「さて……これからどうす（ブチッ）」

また舌をブチッ……！！



39・座っているだけでいいです。それ以上は望みません（後書き）

番外編2をややこしいところに配置してしまいすみませんでした。

皆様になんやかんやで迷惑かけたこと

なんやかんやでお詫び申し上げたいと思います。

まあ番外編なんて30分で考えた話ですし読む価値ないですけど  
ね！

40. ゲンドウ氏も苦労しているので優しくしましょう。(前書き)

3人称と1人称の区別がややこしいかもです。

40・ゲンドウ氏も苦労しているので優しくしましょう

」さて…ここからどう出ようか…」

素っ裸のまま1時間は閉じ込められ続けた。

結局出されたのは一番最後。

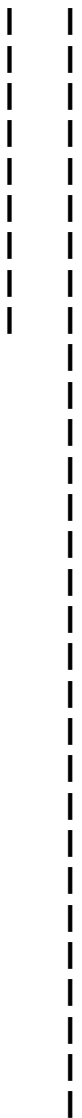
事が全て片付いて職員が一息ついた後に救出された。

ひでえやい。

ゼーレ会議場、作戦報告室。老人たちの会議所だ。

今ここでは先の先頭の戦果報告とそれによるゼーレのシナリオを修正すべきかを報告しあっている。

そこで中央のモニターらしきものからテキストと映像で報告を受ける。



時に西暦2015年。

第3の使徒サキエル、襲来

使徒による通常攻撃による効果は認められず、国連軍は作戦遂行を断念。

よって全責任権を特務機関『ネルフ』へ委譲。

当日接收されたサード・チルドレン『碇シンジ』

名前、年齢、住所は正確なもの、性格、学力不一致により別人と疑われる。

『碇ゲンドウ』、ホームレス疑惑浮上。本人は断固否定。

碇シンジ、搭乗を承諾。

エヴァンゲリオン初号機、初出撃。

ネルフ、初の実戦を経験。

エヴァ初号機からのATフィールドの展開を確認。

さらに搭乗者本人は初見であるATフィールドを自由に使いこなす、

使徒、殲滅

エヴァ初号機、損傷なし

パイロット意識不明。

4日後、パイロット退院。驚異的な回復力を有することを証明した。

第4の使徒 シャムシエル襲来。  
地上迎撃システム稼働率98%  
第二次直上決戦。

エヴァ初号機、内臓電源を自ら切り離し、  
シャムシエルに特攻。  
腹部を二箇所損傷するものの、使徒殲滅

パイロット重症。  
エヴァ初号機、小破

第5の使徒、ラミエル。

難攻不落の目標に対し、葛城一尉、  
ヤシマ作戦を提唱。承認される。  
ファーストチルドレン、綾波レイ、  
凍結解除されたエヴァ零号機  
で初出撃。

同深夜、使徒の一部、  
ジオフロントに侵入。

ネルフ、ヤシマ作戦を断行。

超長距離からの射撃を決行するも、失敗。

加粒子砲の射撃を受け、エヴァ初号機、右腕破損。

左腕のみで射撃を試みるも失敗。

零号機の防御を受けるが、失敗、エヴァ初号機、加粒子砲を受け  
る。

エヴァ初号機 暴走。

ATフィールドの射出により、目標殲滅。

エヴァ初号機、大破。

パイロットは無事生還。

---

「もういい、シナリオが大きく離れているな」

議長、キール・ローレンツが中止させる。

すると中央のモニターが消え、議員がキールに目を向ける。

「碇、これはどういうことだ」

「結果は全てシナリオ通りです」

「碇シンジの性格豹変、どう考えてもシナリオどおりじゃないです  
本当に（ry」

「これのどこがシナリオどおりって言うww」

「シナリオどおりです（キリッ）ではなかつ」

周りの議員が口々に文句を言い始める。



「では、ご苦労だったな、碇」  
「…はい」

モノリスが消え、一人になる。

「まずはシンジを止めなければ…」

山…重い山…時間をかけて変わるモノ…

空…蒼い空…目に見えないモノ…目に見えるモノ…

太陽…一つしかないモノ…



水…気持のいいモノ…碇司令…碇君…

花…同じモノがいっぱい…いらぬモノがいっぱい…

赤い色…赤い色は嫌い…流れる水…血…

料理…料理は投げる…投げて形作る…

街…ヒトが作り出したもの…エヴァ…

エヴァはヒトが作り出したもの…

ヒトは何？ヒトは神様が作り出した…

エントリープラグ…それは魂の座…

これは誰？『これは私』知っているわ…『じゃあ聞かないで』

私は自分、それ以上でも…それ以下でもない…

でも私は私でない感じ…とても変…心が一緒になるような感じ…

私の形が消えていく…私でないヒトがこの先にいる…誰？…碇君…

碇シンジ…この人知ってる…私を助けてくれるヒト…いつも犠牲になるヒト…少し馬鹿…

この人も知っている…惣流・アスカ・ラングレー…弐号機パイロット…私の家族…

でも碇君は何か違う……本物のはずなのに……別人と感じるときがある……

それは一人のとき……誰も居ないとき……碇君は一人……誰も居ない……

これは誰……違う学校……大学生……誰……

楽しそう……誰かと話している……楽しそう……でも碇君じゃない……

これは誰……？これはダレ……？コレハダレ……？

「っ！？」

エントリープラグの中、そこで綾波レイは目を開けた。

『どう、レイ？初めての初号機は』

『俺の初号機だ、乗り心地が悪いわけがなからう』

「ええ……とてもいい感じ……碇君のにおいがする」

『なるほど……』

シンジは少し考えた表情をする。

「どうしたの…?」

『……ん? ああ、なんでもない』

「そう…」

『レイ、テスト終了、あがっていいわよ』

機体交換テスト。

零号機のエントリープラグ内。

ヒエツハアアー!! 綾波の匂いがぶんぶんしやがるぜえーっ!!  
と言いたい所だが…これがレイのプラグね。

レイの記憶的なものがさっきから頭に入ってきてるんだが…

【あなたは碇君じゃない……あの時の碇君じゃない…】

物凄く拒絶されてるんです。

零号機の中のリリースさんが我が儘で。

そのおかげで原作みたいに取り込もうとするわけでもなく、テストは進んでいます。

暴走しようとしたらおれが力づくで食い止めるのみだよ。

『駄目ね…テスト終了、シンジ君。お疲れ様』

『やはり…レイのパーソナルデータで作るしかないですかね…』

『しっ！黙りなさいマヤ！』

思い切り聞こえたんですけど…

40・ゲンドウ氏も苦労しているので優しくしましょう(後書き)

こぼれ話

シ「レイ、部屋の掃除しといたぜ」

レ「……ありがとう」

シ「部屋ごとだが」

レ「……」

#### 41・墓前ではおとなしくしましょう。

掃除時間、それは男と男の戦いの場である。  
一人はチリトリと箒、もう一人は箒一本。  
その場での戦利品を調達し、戦う場である。

「ほらっ！さっさと避けねえと怪我すんぞ！！」  
「ちよっやめい！シンジい！！」

俺は箒一本でチリトリと箒を装備したトウジを翻弄している。  
武器は多ければいいというものではない。  
片手では箒をはじかれ、攻撃を受けるからである。

「こるあ！！男子い！！真面目に掃除しなさい！！」

結果はもちろん俺の勝ち。エヴァパイロットなめんなボケ。  
しかし明日はユイさんの墓参りか…  
まあ適当に手合わせとけば何とかなるよな。

シンクロテストを終え、エレベーターに乗る。  
扉を閉めようとしたらレイと一緒に乗って来た。

「明日、オヤジの墓参りか…「え…!？」間違えた、母上様の墓参りでした涙目にならないで」

「……そう」

「親父に何話せばいいかね」

「…世間話…?」

「親父のほう詳しいだろ」

「……分からない」

ですよねえ…しつかしまあ…あれだね。  
うん、あれだ。

「レイってあれだな……娯楽に目を向けないんだな」  
「興味がないもの……」

まあ自分の指示されたことしかやらないってのもどうかと思うが。  
その辺はどうでもいいとして…

「俺が帰ってきたら何か暇だしどっか行こうぜ。お前も暇だろ？」

「どうして分かるの…？」

「だって俺が遅く帰ってきたとき、お前いつも寝てるじゃねえか。  
知ってんだぞ、こないだお前新聞紙を頭にかぶせて寝てたろ。」

「どこのオッサンだよお前」

俺がレイの様子を見ると、家の新聞紙を部屋に持ってきて日よけ  
代わりにして頭に乗せていた。

ベッドの上で座っていたら日光が当たるからだろう。

そのまま寝たのか…？

「あ……あの時は……その……暑かったから…／／」

「そーなのかー。そういえば俺のアイスも消えてたのう…神隠しに  
でもあつたのかな？」

「…私じゃないわ」

冷や汗をかいて目を泳がせている。

「お前だな」

「ごめんなさい…でも碇君が抹茶アイスを買ってくれなかったから

…」



「それで俺のスイカバー…もとい萃香バーを食ったと？」  
「……萃香バーしかなかったから…本当はメロンバーがよかったけれど…」

我が儘を言うなこの馬鹿者。

と、少し不機嫌になりながらエレベーターが地上に着いた。  
エレベーターが開き、温風が俺たちを襲う。  
本気で暑いんだよなこれ…

「さて…抹茶アイスでも買うか」

「私も…ほしい…」

「自分で買え」

「……金欠」

むう、最近俺も金欠なんだよ…  
俺も金が欲しいんだよ。  
それほど余裕がないのよ俺ね…

「…駄目？」

そんなに目をうるませないでくれ。  
もう俺には10000円しかないんだ…  
アイス一個何円だと思っている…100円だぞ？  
あれ…？けっこうある…

「仕方ない。買ってやる」

「じゃあ行きましよう、早く」

服を引っ張られて近くのコンビニによるレイ。

微笑んで見せ付けられるハーゲンダッツを見て号泣する俺。  
いきなり泣き出されて慌てて俺を慰めるレイ。

いつも通りの光景であった。

「ハーゲンダッツは勘弁してええ……」

「い…碇君っ、こんなところで泣かないで…！」

「せめてスーパーカップにしてよう……」

「…分かった…だからもう泣かないで……」

結局抹茶のスーパーカップを買って解決した。

まんざらでもない様子でよかった。

これで不満があるならコンビニで自殺するところだったぜえ…

次の日、俺はマダオと一緒にユイさんの墓に向かった。

花東も何も無かったがなぜか本能的にそこに向かうことが出来た。  
これが原作シンジの記憶と俺の記憶の交差か。

「碇ユイ…ユイさんか…」

「3年ぶりだな、2人でここに来るのは」

俺の後ろにはマダオ、碇ゲンドウがいる。

無駄に眼鏡を光らせて何故か腹がたつ。

「俺は…まあ墓の場所自体あまり覚えてないからな。来てないと  
言うかこれない」

「ふ…そうだな…人は思い出を忘れる事で生きていける」

「しかし忘れちゃいけないこともあるんだろ？」

「そうだ、ユイはそのかけがえないことを教えてくれた」

今じゃエヴァの中でパワフルに生きているけどな。

なんたってあんなすごい女がこんなホームレスと一緒にあってん  
だよ…

「私はその確認をするためにここにきている」

「……………」

「シンジ」

「?.....うわえい!!?」

俺の後頭部に鉄のようなものが押し付けられている。拳銃だと…振り向くとそこにはリボルバー拳銃が額に向けられていた。

「何故だ、なぜお前はこうも変わったのだ」

「おいおい…墓前で何をしているんだよw」

「ダンボールを送るなど何度言ったらわかる!」

「しかもそつちかよ!」

「それだけではない、お前はシンジではないな…何者だ」

「oh」

流石にあせりまくっている。  
人間サイズの拳銃を見るのは初めて。  
しかもそれが俺に向けて突きつけられているのだ。

「隠すな、少なくとも私の知っているシンジは陽気ではない」  
「そーですね！」

「ここは森田一義アワーではない」

「そーですね！」

「……腹が立つな……」

拳銃から手の力が抜けるのを視認した。  
が、動けない。

事実怖いのである。

「まあ落ち着いてください。まずは取引と行こうではないですか」  
「取引だと？」

おれは一呼吸置いて話を始める。

「そう、取引だ」

「いいだろう、言ってみろ」

引っかかりやがったな。よし

「お前は俺に拳銃を渡せ。お前を撃つわけではない。その代わりに俺は正体を明かす。ok？」

簡単な取引だな、とゲンドウは眼鏡をくいと上げる。

「ふ…いいだろう」

そう言っつてゲンドウは俺に拳銃を渡した。  
俺は黙つてそれを受け取る。  
そして

「サックス」

弾を抜いて遠くへ投げた。  
そして

「あごめん、やっぱ取引キャンセルでおねげえしやす」  
「なっ…!？」

逃げた。

心理戦でもなんでもない。

とりあえず身の安全を確保するのが先である。

とりあえず走つて逃げまくつた。

途中そこらへんの腐女子を微笑みフェイスでヒッチハイクし、家に帰つた。

「あの銃…気に入っていたのだが…」

とぼとぼと帰還用のVTOLに乗って帰還した。



41・墓前ではおとなしくしましょう。(後書き)

こぼれ話

シンジ「本物シンジと思ったか!?俺だよ!!【まさにシンジ】」  
マチュ「…駄目だ、やっぱ描けねえわ」  
シンジ「オイオイ…お前は仮にも漫画家志望ではなかったのかね?」  
マチュ「10年以上前の話だが…」

自分は必死こいてシンジの絵を描いていますが…  
どう見てもたらちゃんです。誰か描ける人いないかな? (チラ)

## 42・寝坊には注意しましょう

夕方。ヒッチハイクを完了し、家に帰った。

「あゝ疲れたゝただいまゝとゝゝゝって誰も居ないか…レイゝいないのかゝ？」

「…すう…すう…」

リビングのソファの上ででかい保冷剤を抱いて幸せそうに寝ている。

「おいおい…風邪ひいても知らんぞ…よこせ」

そう呟いて保冷材をとろつとすると、それを察知したのか俺の保冷剤を強く握る。

「む…んうゝ…ん…」

「…分かりましたよ」

寝言はほとんど言わない。というより全く言わない。

その癖に寝ている間はニュータイプかといわんばかりに勘が鋭い。目を伏せながら俺を辞書で殴ったり、

ゲンドウの眼鏡をかけると寝ぼけ目をこすりながらコンパスを投げたり、

レイのアイスを食べおうとすると襖からプレッシャーをかけたりと。

「感情が豊かになっている証拠かな…」

「…すう…」

「…俺だって暑いんだようケチンボ」

その眩ぎが届いたのか部屋に行こうとした瞬間、保冷剤が飛んできた。

無論それに気づかず後頭部にかっちかちの保冷剤が直撃した。

「ぐばっ!!」

「クスッ……」

「……全く……素直じゃねえ奴だ」

少し微笑んで俺は自分の部屋に入った。

しかし今日はマジでやばかった。  
危うく正体がばれる上に撃ち殺されるところだった。

「まさか親父がここまでやるとは…そろそろ本気でヤヴァイかな…」  
いい加減俺が大学生である事がばれる。  
レイが初号機に乗った時もレイが何かを悟ったような目をしてい  
た。

モニター越しでわかったのは恐らく俺だけだろう。

「あのときにレイが昔の俺を見たのかどうか…それは誰にもわからないのであった、つづく」

というわけには行かない。

少なくとも俺が全てを終わらせてどうにかして戻るまでに正体を  
明かさなければ、

というか俺って昔の状態に戻れるのか？

何か不安になってきたぞ？

「まあどうなるうと成り行きに身を任せていれ「きゃああああ！？」  
何してんのよ！！」「ん？」

アスカの奇声が聞こえた。

どーせ保冷剤に驚いたんだろ、しらんしらん。

「寝る。明日から本気出す」

夜まで寝る事にした。

NEXT DAY

「永琳が毛穴から出てきたああ！！！！……ん？ぎゃああああ！！！！寝過ごしたアツー！！！！」

朝日が差し込むのを自分で確認してさらに12時を過ぎたことも確認したうえでの叫びだ。

激しく寝過ごした。激しくどころじゃない。壊滅的に寝過ごしてしまった。

この壊滅的な気持ちどう伝える……ってか何で誰も起こしてくれなかったんだアツー！！

……叫んでも仕方がない。昨日の重大なイベントを思い切りへし折ってしまったことは認めよう。

「よし、この後の重大イベントを消化するんだ。えーっと……」

この後、俺たちは……いや、加持さんとミサトのセツ……ではなくリスの見学会があるんだ。

ならドサクサ紛れに俺も行こうって。



警備やリッコを掻い潜って…と言う訳でやってきましたターミナルドグマ！

いや〜殺風景極まりないですね〜そして目の前にはUSPを構えたミサト。

いや〜怖いですね〜もうね、鬼かと。悪魔かと。

「やあ、二日酔いの調子はどうだ…!？」

やべっ加持さんにはれた。

「そのままつづけて(はあと)」とアイコンタクトを送る。

「おかげでさめたわ」

「そりゃどうも」

そのまま何の変化もなくミサトの尋問が続く。

こんな緊迫した状況でも加持さんは平常心を保つ。

これがプロか…

「これがあなたの本当の仕事…それともアルバイト？」

「どうかかな？」

「特務機関ネルフ特殊監査部所属加持リョウジ…」

そして同時に、日本政府内務省調査部所属、加持リョウジでもある…スパイって奴かしら？」

平たく言えばExactly(その通りでございます)

「ばれちゃってことか…」

「ネルフを甘く見ないで、これ以上バイトを続けると…死ぬわ」



じゃあ俺絶対バイトしない。

「ご忠告どうも、シンジ君、見ているかい？」

「ふえ！？」

あんのバ加持！言ってどうすんだ！！

「シンジ君っ！？」

「ほらっ！手を緩めちゃ駄目じゃないか！」

「くっ！？」

ミサトが後ろを振り向いた瞬間、加持さんが思い切り足を振り上げて拳銃をはじく。

無論蹴られた拳銃は吹き飛び、安全装置の外れた拳銃が暴発する。弾丸はだれにも当たらず、とんだ拳銃は俺の足元に転がる。

「こいつは…：すげえな」

思わず拳銃USPを拾い上げ、まじまじと見つめる。

「シンジ君！それを私に」

「断る」

「銃くれよお！」

「やーだよ」

訳のわからないくだりを終わらせ、再びミサトは加持に向きあつ。

「あなた…私にいくつ隠し事をしているつもりなの！？」

「ごめんよ葛城。だが碇司令やりっちゃんも、君に隠し事をしてい

る

「っ!？」

「それが、これさ!！」

そういつて加持さんは勢い良くカードキーをスラッシュする。

OPENとドアのモニターに表示され、巨大な扉が開く。

「……………これは!！」

「おやまあこれはまた大きな槍がずぶりと……」

「セカンドインパクトからその要であり、全ての始まりでもある、  
アダムだ」

アダム……いや、リリースか。ロンギヌスの槍が突き刺さっていて、  
足がない。

あしは槍によって封印されている。

その後ろからはリリースの体液でもあるLCLが流れている。

「あんだ……!こんなのをシンジ君に見せて……どうするつもりなの!」  
「？」

ミサトが俺の肩に両手を置いて怒鳴る。

やかましい。

「シンジ君なら知っているはずだ。このアダムがどういう存在なのか……」

「シンジ君……!?!」

え……俺？俺に聞いているのですか？

いや……こういうときに主人公に聞くのがよくあるアニメのテンプレだが……ええ……

俺かよう……

「……………だんまりいー？」

「真面目に答えなさい!」

「うっせ三十路。LLLLに叩き落すぞ」

「シンジ君、君はただの人間ではない事は百の承知だ。このことは内密にする。……言ってくれ」

加持さんにまで言われた。

ふむ……言う価値……いや、ここで言うわけにはいかん。

「俺は知らんぞ」

「……そうか」

「ただこれが半端じゃないくらい重要なものだってことは分かる」

「……そうね……確かにネルフは私が考えているほど……甘くないわね……」

「……でえ……と……ころでシンちゃん、学校は？」

「ごほん！…このあだむでっけーなー！…！すっごいおおきいなー  
！…！」

「そーねえ…！…とってもおっきいわねえ〜！私の親としてのしつけ  
の炎も大きいわあ〜！」

ベキツボキツ、ジャポーン

「がぶおぼぼぼ…！」

俺はLLLLの海の底へと沈んでいったのである。

42・寝坊には注意しましょう(後書き)

こぼれ話

ゲンドウ「これでダンボールは届く事はなかる」

ブルーシート60枚

ゲンドウ「or2」

43・レリエルのディラックの海はスキマではありません(前書き)

次回の更新は19日です。

お楽しみにしないで結構です。

### 43・レリエルのディラックの海はスキマではありません

数日後、シンクロテスト。

今日もシートに座ってじっとしている仕事が始まるお…

「……………シラスごはん……………」

なぜシラスごはんと呟いたのか。

それを考える。そうすると何故かシンクロ率が上昇する。

「……………眠い……………寝る」

結局しらすごはんの謎は解けないまま寝るのがいつもの事だが。

最近は寝ててもシンクロ率が維持できるようになってきたらしい。  
しかし通常より若干低くなるが。

しかし睡魔には勝てず、そのまま眠った。

『聞こえる？シンジ君』

「ん？ああ、どうだった？」

そういうと、前方にモニターが表示され、ミサトが親指を立てる。

『もちろん、あなたが一番上よ。睡眠時のシンクロ率では過去最高ね』

「ほう、当然の結果だ」

アスカのシンクロ率は97%。レイのシンクロ率は71%と、双方半端ではないシンクロだが、

俺の睡眠時のシンクロ率は159%と、きわめて高い数値だ。

感度良好なのはいいが、損傷したときのツケがあまりにもでかすぎるんだなこれが。



「最近シンジ寝すぎじゃない？」  
「…そう？」

着替えを終えたアスカとレイがシンジについて話す。  
最近居眠りが多いシンジを少しばかり心配しているのだ。

「なんかさ…シンクロテストのときも、授業中であろうと寝てるのよねえ…」

アಂತの班なんですよ？ちょっとは起こしてやりなさいよ」

「一応叩き起こしているつもりよ。それに最近は東風谷さんの関係で疲れているのかも…」

「…あの転校生か…霧雨が居るから何とかなってるけどねえ…」

「「はあ…」」

少しばかり同情のため息をつく2人であった。  
アスカがここまで明るいには理由がある。

理由は簡単である。

シンジとアスカの差は天と地ほどの差。

しかもシンジや周りからもそれなりに評価されているので（常識  
人的な意味で）

今の生活で満足しているのだ。

「さて、レイ、一緒に帰りましょ」

「そうね…アスカはどこか寄る…？」

「今日はまっすぐ帰るわ」

2人の仲も名前呼び合うほどになっている。

いわばヒカリ並みの友達である。

夜のバス。

エロい意味じゃないから安心しろ。

シンクロの調子がいつもよりいい感じだったからな、  
すこし気分が乗っている。

「……………うむ…磐石だ」

軽くガッツポーズをして、呟いた。

「バンジャク…?」「なんだそれ…」

前席のクソガキがべらべら喋っているが全く気にしない。

「…キシシシシ…」

「……………死ねクソガキ」

やっぱり腹立つ。

俺はロリコンではない。

ましてや妹属性にも興味がない。

俺の妹がこんなにryは別だが。

「まあいいとしよう」

家に最も近いバス停で降りた。

代金を払うのを忘れていたが運転手も気付いていない。

「さて、帰るか」

次の日、倍額の値段請求が指令室に来たのは別の話。

次の日、上空に丸いシマウマが現れた。

その丸いシマウマ、レリエルは使徒と認定されずパターンオレン

ジ。

つまり判断保留とされている。

そこで俺たちネルフはエヴァを3機出撃させて、待機している。

「あれがレリエル……ディラックの海……」

しばらくすると目標に対するデータが送られてきた。  
大体のことは不明となっている。  
分かるのは直径と、地上までの浮遊高度のみ。

「なんだこれ…何の役にもたたねえじゃねえか…」

『みんな聞こえる？目標のデータは送ったとおり、今はそれだけしか分からないわ…』

慎重に接近して反応をうかがいつつ、可能であれば市街地上空外への誘導もお願い』

『『了解』『』

今回の作戦は各自自由戦闘。

まどろっこしいことはやっていられないと、俺が提案したものだ。

この距離だと俺が一番近い。

しかし接近すれば向こうの攻撃に巻き込まれる。

「……どれが本体だ…？」

影が本体なのは分かる。

しかし表面上から撃つてもただ弾丸が海に飲み込まれるだけ。

だからといってむやみやたらにATフィールドを使うわけには行かない。

『零号機、攻撃します』

「オイ待てって！」

レイの零号機がライフルを撃ち、球状シマウマに当てる。が、当たる直前に一瞬で消えた。

『どうしたの!?!』

ミサトの慌てた声が聞こえる。

『パターン青！使徒発見！！初号機の直下です!!!!』

眼鏡の声と同時に初号機の足元に黒い影が現れる。

そのスピードはあまりにも速く、もう膝辺りまで飲み込まれていた。

492

「のわっ！おいおい…こりやもう駄目かもわからんね」

『馬鹿！！早く逃げなさいよ！！シンジ！！!!』

もう肩辺りまで飲み込まれている。

動けるような状態ではない。

とか考えている間に真っ白な空間に包まれた。

「みなさん、さよなら」

通信回路が全て切断された。

真っ白な空間、ディラックの海にダイブしてしまった証拠だ。

『アスカ！レイ！！初号機を救出！急いで！！』

「あんの馬鹿！なにがさよーならよ！！！！」

式号機が初号機のケーブルを掴んで引っ張りあげようとする。

しかしその先はなく、ケーブルの接続部だけが引き上げられた。

「っ……シンジ……」

『……』

モニターに映るレイの表情、そこはいつもの無表情だが、すこし曇っていた。

今のアスカの顔を鏡で見るとすると、レイと同じ表情だろう。

『アスカ、レイ、後退するわよ』

ミサトが後退命令を出す。

その言葉を聴いたアスカは反射的に返事をする。

「なに言ってるのよミサト！！まだシンジを助けてないじゃない！

！」

『葛城三佐……！！！！』

『命令よ…下がりなさい…』

「畜生…やられちゃった。こつも簡単に飲み込まれるたあ迂闊だった」

エヴァを動かすにしても動かない。  
周りを見るにしても真っ白。

「生命維持装置もあと4時間…」

もう、警報も止まっている、残っているのはプラグスーツの生命維持装置のみ。

もっとがんばれよ初号機。

「あーいかにかん、頭がボーっとする」

「……死ぬのかな…暴走しなかったら…」

こういうときに限ってだんまりを決め込むユイさん。  
本当に都合のいい女だな…。

「あ…あり…？なんか気が遠く…」



気がついたら俺は電車の中にいた。

精神世界だな……テレビ版、劇場版、序、破、全シリーズ通して  
皆勤賞の世界だ。

俺の目の前には俺と瓜二つの少年、碓シンジが居た。

「…シンジか」

『そう、僕は碓シンジ』

「そいつは俺の名だ」

『違うね、君の名前は君の名前で別の名前があるはずだ』

「お見通しか」

『そうだ。君の名は』

「それは言ってはならぬ、俺の名は大学生とでも呼べ」

『じゃあ大学生君、君は碓シンジだ。でも他人から見た碓シンジもいる。』

きみのその碓シンジの性格も、君から見た碓シンジの性格だ。

そして葛城ミサトからみた君の碓シンジ。

綾波レイから見た君の碓シンジ。

惣流・アスカ・ラングレーから』

「手短に話してくれ、俺には時間がないんだ」

『つまり、きみは他人から見た自分が怖いんだろ？』

「誰がそんな事言った」

『…』

「妄想乙、俺はただ単にレイとアスカを一緒に暮らさせて人類補完計画を阻止するだけだ」

『でも君は』

「大体他人からどう見られようが俺は俺。誰にも干渉させやしねえよ」

『君は怖いのか』

「怖いつて言つて欲しいのか？」

『そういつわけでは』

「はいはい怖いですよ。一番怖いのは早苗さんだが」

『その早苗』

「気安く呼ぶな、お前みたいなシマウマ使徒に早苗さんの名を呼ばせるとか反吐が出るわ」

『……………』

「終わりか？じゃあ失礼します」

『ちよっ…待って…』

「うっせ」

保温も酸素の循環も切れた…  
全身から寒気がする。

「うういゝ寒い……………これは……………洒落にならん」

スーツも限界。

「LLLLもはやただの血。

俺は眠い。

レリエルがやかましい。



「シンジ君！！シンジ君！！！！」

「碓君！！無事でよかった……」

「バカシンジ……心配したんだから……」

「……おまえらか……なんだ……俺生きてたのか……」

……あーすまん、今日はもう寝かせて

### 43・レリエルのディラックの海はスキマではありません（後書き）

こぼれ話

シ「このブルーシート、どこから手に入れたんだ？」

魔「香霖堂だぜ」

シ「ブランドもんじゃねえか。じゃあ俺はお前のミニ八卦炉をもら  
うぞ」

魔「どう考えても理不尽だぜー!!」

早「なら私は諏訪子様の帽子を……」

諏「おいばかやめろ」

44・シンジはギザギザした関係がお嫌いのようです(前書き)

ただしマダオは除く



#### 4.4 シンジはギザギザした関係がお嫌いのようです

「えー今日の欠席者は…いつもの綾波と相田か。では出席を取ります。」

赤井、阿南、碓、猪狩守、猪狩進、内山、上田、江藤、奥山、小野田、梶原、霧雨、久遠………」

今日も憂鬱な学校が始まる。今日の天気は快晴、気温は30度を軽く越している。

空調機があるのが唯一の救いだ。設定温度は19度、高校の時の温度調整とは大違いだ。

だがひとたび外に出ると、メガネをかけた奴は真っ白になり、廊下なのに陽炎が出来る。

異常気象は本当に辛い。季節感覚が全くと言っていいほどなくなってしまう。

冬の寒さが恋しい…

「…欠席者は2人ですか…皆さんも風邪には注意しましょう。以上」

ヒカリが号令をし、1時間目が始まる。

今日も連立方程式か…もう何ヶ月やってるんだ？

「碓君、帰りに綾波にプリントを渡すように」

「はいよ」

根府川先生の言葉に軽く返事をし、授業を受ける。と書いて寝ると読む。



4時間目の授業が終わり、先生が教室を出る。

今日はそこまで眠らずに、真面目に授業を受けることが出来る予定だった。

しかし現実はその甘くはない。ペン回しに夢中になっていると授業が終わったのだ。

ああ…なんとという非情…現実という世界はなんとという非情な世界なのだ。

とまあそれはそれとして、アスカの弁当を渡さなければ。

鞆から俺の弁当を取り出し、アスカを呼ぶ。

「おいアスカ……あり？」

鞆をあさるがアスカの弁当がない。

…作ったよな。そして鞆に入れたよな俺。

じゃあなぜないんだ？

「な…馬鹿な!？」

「何よ、早くお弁当渡しなさいよ」

そうだ、登校中に奥に埋まってしまったのだな。

そう考えて鞆を引っ掛けるフックから鞆を引っ張り出して確かめるもの、ない。

全てのポケットを引っ掻き回すが…ない。

「……アンタまさか……」

「うん、忘れた」

「アンタねえ……このあたしにお昼なしですごせってえの！？ええ！？」

顔を真っ赤にしてアスカが俺の胸倉を掴む。

昼飯一つでギヤーギヤー騒ぐでない。

「なんや、また夫婦喧嘩かいなぎやう！？」

「今なんつったコラ」

とりあえずニタニタしているトウジの股間を蹴ってアスカにトウジの飯を渡した。

「すまんナトウジ、代金ならネルフの指令室に請求してくれ」

「そろそろ……タマが死んでまうで……おうひゅー……ひゅー……」

「何よ改まって」

場所変わってリツコの執務室。

殺風景と言うわけでもなく、普通の部屋である。

変わった場所と言えば部屋に置いてある招き猫や猫のマグカップくらいだろう。

リツコは猫がすきなのだ。可哀想な目で見てあげなさい。

「…松代での参号機の起動実験、テストパイロットには四人目を使うわよ」

「四人目？フォースチルドレンが見つかったの？」

ミサトが少々驚いたような声を出す。

四人目、フォースチルドレン。

驚いたと同時に心配もある。まさか自分が世話をしろというのか

という不安だ。

「昨日、知らせが届いたの。正式な書類は明日届くわ」

「はあ…リツコ…また私に隠し事してるでしょ」

「別に」

「まあいいわ。で？そのテストパイロットって誰？」

そういうとリツコがパソコンを操作し、そのパイロットのデータを出す。

「…鈴原トウジ…シンジ君のクラスメイトじゃない!？」

「仕方ないわよ…候補者は集めて保護してあるのだから…」

「話し辛いわね…このこと」

「あら？そうでもないかもしれないわよ？」

レイモアスカもシンジ君も、快く受け入れてくれるはずよ？」

リツコが微笑んでミサトに告げるがミサトの表情は暗いままだ。と言っより何故か遠くを見たような目をしている。

「鈴原君に話しづらいのよ、実力の差があまりにも大きすぎるわよ…あの3人と比べたら」

「あー…それは…まあ…可哀想よね…でもシンジ君と居たら自然に実力は伸びるわよ、うん」

「股間を蹴られるのがオチよ」

「……」



授業が終わった俺とアスカは並んで帰路についている。  
うらやましい？ならお前も大学生になってからこっちに来るんだ  
な。

「アスカ、買い食いするか？」

「え？何で？」

「ほら、お前あんま昼飯食ってねえだろ？」

「トウジの奴ならがつつりいただいたわよ、シンジが」

「だからだよ、俺がおこってやるよ」「や、ネルフのシンジ君」おう  
マリ、でだ。どうする？」「

「そーね、じゃあおこってもらおうわ」

と言うわけでアスカの好物らしいカド屋のアイスクリームパンを



買ってやった。

このパンは非常に冷たく、夏の暑い日にはかなりの人気商品だ。ラスト3つだったところで買ったのだ。ちなみにあとの2つはマリが買って行った。

「さすがシンジ。いいの知ってるじゃない」

「そりゃな、仮にも同居人だし」

コイツと暮らし始めてもう1ヶ月か2ヶ月がたつ。

だが設定上の正確は知っているが、何か違う。

なんだろうね…デレてる？

つてか喜んで食いすぎだろ…笑顔がまぶしすぎるぞオイ。

「シンジがおごってくれてるって初めてよね」

「ん？そうだな」

「いつもレイがおごるからねえ…あいつ結構いい奴なのよ」

「あいつが？」

レイがアスカに餌付け…もといおごるのか。

だから金欠だったのか？

「いつも無言で店に入ってクリームパンと抹茶アイスを買って無言であたしに渡す。

ちよつと顔が赤かったけどね。照れてんのかな…」

「あいつは人のためにやることなんてほとんどないからな。唯一の親友がお前なんだろう」

「親友…あたしが？」

「そういうことだ。女同士の親友がお前とレイ、お前ら気付いてなかったのか？」

はたから見たらあんなに楽しそうに話ているのは他から見ても親友以外の何者でもない。

家が同じなだけの親友だ。

「でも…あなたはなんなのよ」

「俺はお前らの関係を作った立会人だ。なんでもない」

「立会人？」

「ユニゾンだよ。いいコンビだったぞお前ら」

ユニゾン。俺がフルボッコされて何も出来なかったがトモダチパワ―で使徒を殲滅したあれだ。

「ユニゾン…あの時シンジが死にかけてたのに、アンタって馬鹿ね」

「馬鹿ではない。ギザギザした関係は好きじゃないんだ」

そういうとアスカが下を向いて足を止めた。

「ん？」

「アンタってホント馬鹿ね…アンタがあの時あたしをほっといたらレイと一緒に居れたのに」

「馬鹿者、そこでお前が連れて行かれてみる、さらにギザギザすることになるだろうが」

「……」

アスカの青い瞳に涙が浮かんでいるのが分かる。

思いつめていたのかどうかは俺の知ったこっちゃないが。

まあ純粹に涙目のアスカは結構可愛い。

オレンジ色の髪の毛の上に手を乗せてもう一言伝える。

「ドスで刺されようがチェインソーで切られようが俺は死なんよ。  
犠牲になるのは俺だけで十分だ」

「……」

無言で俺の隣に立って手を差し出してきた。

「帰ろ、シンジ」

「あの…ネルフで仕事があるんだけど…」  
「……」

— 応手を繋いでネルフへ向かった。

#### 44・シンジはギザギザした関係がお嫌いの方です(後書き)

こぼれ話

シ「しつかし…ロンギヌスの槍って…なんでらせん状なんだ？」

使いづらいたるうに、エヴァに使わせるにももったいないし  
老人たちは何を考えているんだ？」

レ「それをどうして私に聞くの…？」

#### 45・起動実験と言うものは大体失敗します

夕焼けの夏の暑さが身にしみるジオフロントの中。

ここくらいは別に涼しくしてくれてもいいはずなのになあ…

「さて…俺はここで何をしに来たんだっけか」

実際は特に目的もなく、ただ単にジオフロントの中を歩き回って  
みようと思ったただけだ。

このところジオフロントはよく見るが実際に歩き回った事はない。  
だから口笛を吹きながらのんびり歩き回ってみようと思った。

「しっかし…ジオフロントと言えば…加持農園だな。どこにある  
んだろうか…」

色々探し回るものの、見当たらない。

本当にどこにあるんだ…？というか加持農園なんて本当にあるの  
か？

あるのか？ないのか？

「なんか心配になってきたぞ畜生」

夕日も段々暗くなり、夜を迎えようとしている。

半ば諦めかけていたが、そのときやっと見つけた。

ちようど加持さんも水やりをしている。

農業用語で灌水。かんすい

「お？シンジ君じゃないか。どうしたんだい？」

「いや、何も」

加持さんが水やりをしている作物はスイカ。  
大きいのもあれば小さいのもある。  
うむ…こついうのもロマンの一つだねえ。

「スイカか…」

「ああ、可愛いだろ？俺の趣味さ」

「そうですねえ…貴方があの伝説の密度を司る鬼とは思わなかったよ」

「そ…そうか。そりゃまた大層な…まあ何かを作る。何かを育てるのはいいぞ？

いろんなことが見えるし、分かってくる。楽しい事とかな」

「辛い事もな…しかし。しかし、辛い事を知る奴はそれほど人に優しくできるもんだ」

台詞の先読みおしいです。

「そうだな。しかし君…中学生とは思えない言葉を言っね。なんか大人っぽいな」

「ふふん、子供は背伸びをしたくなる生き物ですよとこころで…」

「ん？」

「これ全部ダンボール詰めにしてマダオヤジに押し付けていいっすか？」

「だつ駄目に決まってるじゃないか！…ってなんではさみを…おい！！切るな！！」

「ふむ…大きさは十分だ。サンキュー加持さん」

「持っていくな…！！！！」

翌日（CVキートン山田）

「な…なんだってー！どういうことだ！あのスイカ腐ってただと！？」

「なんですって！？松代で爆発事故！？トウジは！？？」

「参考機が…！？詳しく教えてください…！」

帰り道、3人の携帯に同時に連絡が入った。

松代の参考機の起動実験中に爆発事故が発生。

そして加持農園の詐欺疑惑。

ついでにトウジについて色々アスカに聞いた。

意外にもアスカとトウジは仲がよかつたりする、というより結構

フレンドリーなアスカだった。

「とりあえず警察に通報してから向かう」駄目、加持さんは悪くない。早く来て」「はいレイ様」

「ぐずぐずしないで早く行くわよ!」

ちゃっちゃと着替えてエントリープラグの中に入る。

しかしダミーシステム搭載型の黒をベースにしたプラグだ。

とりあえず「かけー」と言っておいたがいつ操縦系統がとられるか分からん。

しかし前に言ってたマヤさんの言葉によるとレイのパーソナルと  
か言ってたな。

つまりこれには例の魂が入ってる…まあ強情なユイさんならだ  
じょうぶっしょ。

【2度も失敗はしないわよ。さっさと拒否ればいいんでしょ?】



まあそついうことですがね…

【なら問題ないわよ！さあ今回も張り切って行きましょ！】

こないだはガン無視決め込んでたお前がよく言つよ…

【あときは眠かったの。気にしない】

気にしてくれ。死ぬ。

『エヴァンゲリオン、発進準備完了』

マヤの声が聞こえ、俺は操縦桿を握る。  
続いて親父がぼそつと呟く。

『発進』

「初号機！出るぞ！！」

『弐号機！発進します！！』

『零号機、発進』

コースを待つ城に最も近い場所に配置し、俺たち3機は出撃した。

零号機は山陰に待機。弐号機も同じ場所で待機。

俺は前線で先導することになった。

松代付近、田舎。ここでは自主的な避難により、住民の退避は完了している。

山には神社がある。なぜか神社から激しい視線を感じるが気にならない。

それ以外はほぼ見所は皆無に等しい。

その山ではケンスケがビデオを撮っているのが確認されている。

早苗さんとハイタッチをしているがそれもまたどうでもいい情報だ。

『まってましたあああああああ！！生の初号機の戦闘シーンだよ  
早苗ちゃん！！』

『来たあああああ！！！東風谷早苗一生の幸福！！』

この時が来るのを待ってたんですよ！！！初号機さん！！！シンジ  
様！！！！

ケンスケさん！私！貴方のご恩を一生忘れません！！！！』

やっばうるさい。

【元気な子供たちね…】

『目標を視認で確認！パターンは依然オレンジのまま。使徒とは認識されていません』

『現地点でエヴァ参号機は破棄している。やれ』

あくまでパイロットの安全は気にしないのか。

全く…あのオッサンも馬鹿だね。

どさくさ紛れに本部ぶっ壊してやるうか。

いや、別にオヤジ自体にうらみがあるわけじゃないから別にいいけどよ。

「まあいい。行くぞ。お前ら、十分に距離をとれ、おk?」

『いいわ。式号機、バックアップ』

『零号機もバックアップに回ります』

さて…目の前に居る参号機…コイツのプラグをどう引っこ抜くかがコツだよな…

『目標、初号機まで残り20』

『シンジ、近接戦闘は避ける……シンジ、ライフルはどうした』

「あー神社のサーセン箱に突っ込んであるぞ」

『なんだと…』

『バレットライフル、確認、賽銭箱に銃口が刺さった状態で保管されています』

『そのような報告はしないでいい…シンジ、どうするつもりだ?』

「っ…」

無視する。と言うより無視をしないとイケないほど強い殺気を感じた。

一瞬だった、使途との距離が10を切った瞬間、今までにないほどの殺気だった。

バルディエルは物に寄生する。つまり今のあいつの体は事実上参号機だ。

つまり自分とほぼ同じ大きさの化け物が目の前に居ると同じだ。

「くそ…手がプルプルしやがる…何を怖がっておるか…」

『目標腕部にエネルギー反応！ATフィールドです！！一部分に集中！膨張しています！！』

「魔法陣！？なんじゃとい！？」

反射的に横に側転をし、回避する。

するとさつきまで俺が居た場所は一瞬にして廃墟となった。

おいおい…冗談よせよ。

『今のATフィールド…初号機と同じ技か…』

『使徒が学習したか』

「お前らボソボソ喋ってないでなんか打開策を…おわっ！！」

ATフィールドの連射…ラミちゃんよりタチ悪いぞ。

だが避けられないわけではない。

いや、避けられない。

だがこっちは1万2000枚（推定）の特殊装甲とATフィールドがある。

「勝機はある！！アスカ！レイ！奴の股間に全弾叩き込め！！」

『そんな卑猥な事できるか！！！！』

『了解、ライフルを撃ちこみます』



「エントリープラグ射出か、ならば後は……この抜け殻だけだなんて……え？」

まだ動いてる……。って居なくなつた。何だ幻か

『碇君！後ろ！』

「なんですかぎゃぶ！！！」

顔面にとんでもない衝撃が襲つた。

殴つたね……

「誰が二度とエヴァなんかに乗ってやるものかぶあつ！！」

二度もぶつた！！親父にだつてぶたれたことないのに！！」

『碇、教育が甘いぞ』

『知らん！』





#### 46・母さんを怒らせたら怖いです

「この野郎！！二度も殴つたな！！3倍にして返してやんよ！！」

『6発しか殴らないの…？』

「あ間違えた！100倍にして返してやんよ！！ぐはっ！！いってえ！！こんちきしょう！！」

プラグなしで俺の首を絞めるだと？

中々やるではないか。

『シンジ、時間が惜しい。早くしとめる』

「ちよつと待て！すぐにおわらせ……………うべえ…」

首の締め付けが本気だ。マジタイ。クルシイ。

「くそ…何か状況を打破する方法は……………あーもう！痛いって言うてるでしょ！！」

『生命維持に支障発生！！パイロット！心拍数低下！！』

まずいまずいまずい…このまま行くと死ぬ。

間違いなく死ぬ、きつと死ぬ、多分死ぬ。

『こんのおお！！！！シンジから離れなさいよ！！』

後ろでアスカが参号機を羽交い絞めにする。

しかし止まらず……………いかなねえ、このままだとダミープラグが作動するぞ……………

そう考えた矢先、突然シンクロが切れた。痛みもなくなった。

「うづくぐ……のはぁ！！！！……ふう……ふええ……死ぬかと思った……ん？」

後ろから稼働音が聞こえ、操縦桿を握っていた手ががちり固定される。

そして目の前には D M Y S Y S と書かれた小型モニターが表示される。

ダミーシステム。発動しちゃったのかーそーなのかー

ん。  
って言ってる場合じゃないですよ。拒絶してくださいよユイさん。

【…駄目ね…体が貴方を否定しない】

何それエロい。

【そういう意味じゃない！！少しは真面目に考えて！！】

いやーそういわれましても、手がこの通りがっちり掴まれてねえ…  
俺じゃ動けないんですよ。てへっ もうどーにでもなーれ

【そうね、なるようになればいいわよ。じゃあ行くわよ、ダミープラグ】

もういい、寝よう。どうせトウジは助かったんだし…

【実際の戦闘パターンは零号機のコアに居るレイと同じ戦法ね  
あの子は怒るとすぐに気が荒くなるけど…制御してみるわ。  
山の2人にもいいところ見せてあげないとね】

アンタまぶしいよ。本当にまぶしい。

【ありがとう】

『ダミープラグ起動、攻撃開始』

【いちいち傲慢な男ねえ…それが…貴方の悪いところなの！！ゲン  
ドウさん！！】

とちよつと強めの語気でエルボーアタックを参号機の頭に叩き込  
む。

参号機に八つ当たりはやめたげて。頭へこんでるぞオイ。

【こちとらいつつもいつつも初号機の中で狭いつてのに!!】

ちよっ…腕千切れたぞ。大丈夫なのか参号機。

【この！私がどれほどゲンドウさんにこき使われてるか分かってんの!?!この!?!】

ゆっユイさん！それ以上はいけない!!

ダミープラグよりタチ悪いって!!

すごいよこの人!!数秒前の言葉一瞬で忘れたよこの人!!

え?何て言ったかかって?山の2人云々だよ!

ぐっちやくぐっちやくちゅぐちゅとグロテスクな音と映像が延々と流れる。

検索してはいけないワードを検索したような精神的ショックと苦痛だ。

女は怖い。

【はぁ……はぁ……あらやだ、つい怒っちゃった】

結局残ったのは血肉となった参号機と、零号機と弐号機に救出されたトウジだった。

この人と一緒に暮らしてたゲンドウって…意外とめっちゃ強いかもしれない…

おれちよっとなゲンドウなめてたわ…

ダミープラグも出番なしで機能が停止。

しかし発令所の中ではダミープラグがやったものだと驚愕している。

ダミープラグが停止し、操縦権が俺に戻った。  
もう夕日は沈みかけていて直視しても問題ない程度になっている。  
この辺りの夕日が一番綺麗なものである。

びっちゃびちゃの返り血がなければの話だが。

「あ…ははは…軽いトラウマだわコレ…あ、そうだ。トウジは！」  
【彼は無事に救出されたわ。生きているし、ちゃんと足も残っている】

「そうか。それはよかった」

とりあえず動きの停止したエヴァの中で待機する。  
するとレイとアスカから同時に通信が入ってきた。

『シンジ！』『碓君！』

双方酷くおびえた状況だが、レイの零号機の中にはトウジが居る。  
後ろの座席で意識を失っているが大丈夫だろう。

『碓君、大丈夫？』

「おう。心配ご無用。この通りぴんぴんしてますよ」

『そう…よかった。鈴原君は…あの部分から血が出ているだけで後は問題ないわ』

そりゃ砲弾とか銃弾とか受けまくってたからな。

血が出なかつたらゴッドティンポの称号を与えてるところだよ。

『じゃあ私は…鈴原君の救護で戻るから』

「おっ」



とりあえず弐号機は太陽の方向へ吹っ飛ばした。  
夕日に向かって飛べ！エヴァ弐号機！

「ふむ…コレは絵になるな」

『弐号機が流派東方不敗を習得したあ！？』

コレには流石の早苗も驚きであった。

所変わって夕焼けの電車の中。

…ってなんでいきなり俺はここに居るんだ？

どっという意図でここに行くと言っ結論がでたんだ？

何？また意識失ったの！？



「…碓君」

「へ？レイ！？どういうことだ？俺なんか悪い事したの？」

俺はただアスカを吹っ飛ばしただけだぞ？

「碓君は…この世界のことを分かっているの？」

「……は？」

「あなたは…私の心を分かってくれている。アスカも分かっている」  
「…うん、で？それでアスカに超級「いいから聞いて」「はい」

くそ…何をどう間違ってここに来た。超級霸王電影弾が駄目だったのか？

スマツシュボールをとってから吹っ飛ばしたほうがよかったのか？  
ってかこの世界から出たら俺はどこで目覚めるんだ？

「あなたは自分の本当の名を明かさうとしない。どうして？」

「……ごめんボーっとしてたもう一回言っつて」

「あなたは自分の本当の名を明かさうとしな」「トウジ…なのかなあれ…」「聞いて！」

「へ？」

「どうして、自分の名を」「……」「よそ見をしないで、ちゃんと私を見て話を聞いて」

「いやだって、あれどう見てもトウジだろ」

「鈴原君はどうでもいいの。今は自分のことを「あれ違うのかな…」いい加減にして」

「どうもありがとうございます」

「え？…あの、帰らないで…」

「なんやあれ…漫才の練習かいな」

「んは!?!?.....病室かよ.....」

目が覚めると、心電図の音が聞こえる病室だ。  
隣のベッドにはこか……トウジが寝ている。

「ったく……いくらなんでも無理やりすぎるだろ……よっこらせ」

首に包帯が巻かれているが難なく立つことができた。  
生命維持に支障が発生していたらしいが俺には関係ない。

生きてるんならその生命維持の異常、ねじ伏せるのみだ。へへ。

「う…シンジか？」

俺の背後から声が聞こえ、振り向く。大体誰かは分かるが。

「股間？まだねてるよ」

「股間ちゃう！！トウジヤ！！一文字もあつてへんやろ！！」  
「ナイス突っ込み。その元気があればすぐに治るさ」

とりあえず親指を立てて病室を出た。

が、入り口付近で待っていた袖を外したプラグスーツ姿のレイに  
尋問された

おせつかいだね。レイつて。

「お前確か電車の中で」

「電車の中…？」

覚えてなかったらしい。

「碇君はもう大丈夫なの？」

「俺が気絶ごときで入院すると思っているのか」  
「…くすつ…たしかにそうね…」

「妬ましいのう…シンジはホンマに」

『妬ましい妬ましい妬ましいパルパルパル……』

幻聴はとりあえず聞こえないフリをしておいた。



「また3人目…それに人格が別人か…大変だね…碇シンジ君。時  
が来るのは…」

「もうすぐだよ」「渚さん、豊姫様がお呼びです」「そうかい？すぐに  
行くっ」

46・母さんを怒らせたら怖いです(後書き)

こぼれ話

シンジ「でかい…上海人形だな…たしか…ゴリアテだっけ？」

アリス「貴方が魔理沙に引っ付いてる男ね？」

シンジ「お前がローゼンメイデンの目指す女か」

薔薇乙女「解せぬ」

47・ゼルエルは最強の使徒です。前座は女に任せましょう(前書き)

3人称に無駄に力を入れた結果がコレだよ！  
たいしたことがない文章だが気にするな！

47・ゼルエルは最強の使徒です。前座は女に任せましょう

「碇シンジ君だな？マ…司令がお会いになりたいそうだ」

家に帰ろうとした直前、諜報部に声をかけられた俺は半ば強制的に指令室に連行された。

何だ？また俺に銃を突きつけるのか？

「早く行け。これ以上世話を焼かせるな」

「へいへい」

とりあえず、指令室に向かった。

断る理由もないし断っても無駄だし。

「あ、それと一つ」

「何だ」

「マダオ呼ばわりした事チクつとくから」

「おいはかやめろ」



「失礼しない」

『失礼しろ』

「失礼する」

扉を開けるとブルーシートにくるまれたダンボールが雪崩のよう  
に落ちてきたが、

俺は全く気にしない。ちなみにブルーシートは魔理沙が香霖堂か  
ら盗んできたもの、

…を俺が貰ったもの（一枚目以降は盗品）

「よっこらせつと…相変わらず酷い部屋だねえ…」

「誰のせいだと思っている」

見渡す限りダンボールとブルーシート。ちなみにダンボールは主にアマゾンのダンボール。

わずかに残っている指令室の面影はデスクのみである。アニメの開放感ほ微塵にも残っていない。

「お前のしつこさには失望した。今すぐ先生のところへ帰れ」

「あの…オヤジ」

「何だ（イライラ）」

「先生って…誰？」

「なん…だと…？」

先生とは誰かは分かるが、姿、顔、声。全く覚えていない。記憶にございません。

「もういい、どこにでも行け。もう会うこともあるまい」

「いや、先生知らなかったら帰るところねえよ」

「資金は出す。ネルフのIDは抹消済みだ、

帰れ。そして二度とダンボールを送るな。いいな！分かったな！」

断る、と言いたいところだったが、予想以上に切羽詰った顔をしていたのでやめた。

ここはおとなしく出て行って、ゼルエル伯爵が来てからもう一度だ。

「分かった。出て行こう」

「…ふん。もう会うこともあるまい」

今日の分のダンボールを置いて出て行った。

「さり気に置いていく俺マジ天使」



次の日、俺は朝早くから出てネルフの車に乗って駅に着いた。  
そこでコジマ粒子ドリンクを買って喉を潤すと、今後の予定を考  
える。

「さて…アスカとレイには話をつけておいた…俺はどこへ行くべき  
か…」

駅に着いたからといってどこにでも行くわけではない。  
それに使徒の襲来はもうすぐだ。回りに迷惑をかけるわけには行  
かない。

と言っかわざわざ電車で行く必要もなかつ。  
しゃーねえ…ゲーセンで時間潰すか

「…いや、外じゃ外野がうるさい。つまり居場所なし」

やたらと暑い。休憩所なし。もう最悪だ。

「どうする…？このまま熱中症で死ぬか、それとも」

半ばorz状態になっていると、サイレンが第3新東京市を覆つ。

『只今、日本政府に基づき、非常事態が発令されました。』

速やかに最寄のシエルターに避難してください』

早いな。ってかシエルターってどこよ。

とりあえず避難って…

『総員第一種戦闘配置、地对空戦用意』

『目標補足、ラーズグリーズ隊、ガルド隊、メビウス隊、全機出撃

！！！』

『クオックス隊出撃、第3戦車大隊配置完了』

『第3新東京市完全武装状態移行完了、第3、第2、第1迎撃機銃  
準備完了』

『エヴァ式号機、零号機、発進準備』

発令所では通信音声で混戦している。

相手は第14使徒、ゼルエル。

強大なATフィールドと高い攻撃力を持った力を司る使徒だ。

『旧小田原防衛線を突破！目標は依然進行中！！』

『式号機は準備が整い次第発進！要塞都市全攻撃システム特化運用、  
わずかでもいい、食い止めるのよ！！シンジ君がいない今…私た  
ちが止めるしかないの！！』

先の爆発事故を奇跡的に生き延びた作戦課長、葛城ミサトが的確  
な指示を送る。

「航空ミサイル全弾発射！！総力戦よ！！」

モニターの映像から戦況を確認するものの、芳しくない状況だ。

と、次の瞬間、モニターの映像が途切れる。ジオフロントの最下層まで衝撃波が来る。

「どうしたの!?!」

「地表全装甲システム融解!!! 目標はジオフロント内の侵入を試みる模様!?!」

「D級作業員全員退避急いで! いずれここに来るわ!?!」

地表の特殊装甲は24層。それを一撃で破壊する能力だ。

ものの数発で全ての装甲が融解するだろうと判断した。

「N2誘導弾の第3波も許可する! 直援にまわせ!?!」

「目標! ジオフロント内に侵入!?!」

「弐号機、会敵します!?!」

「アスカ! 零号機をもうすぐ出すわ!?! その間… 食い止めて!」

『了解!?! シンジなんかいなかったって… あんなのあたし一人でお茶の子さいさいよ!?!』

モニターには全兵装を周りに置いた弐号機。

N2爆雷から、バレットライフルまで全てがそろっている。

まずそこからバレットライフルを2丁取り、ゼルエルに向けて乱射する。

『11のお…!?!』

しかし第5次の防衛線を一瞬で突破したほどの防御力のゼルエルには蚊が刺した程度だ。

弾丸は全てはじかれ、中和し損ねている何十層もあるATフィールドは少しずつ押し返す。

『駄目！ATフィールドが強すぎ！！遠距離兵装じゃ埒があかないわ！！』

そう言っつて、兵装コンテナからサンダースピアを取り、電磁刃を出す。

『これならっ！！いけるか！！』

「奴のATフィールドは強大ね…サンダースピアでいけるかしら…」  
『どおおりゃああああ！！！！』

一気に接近し、コア部分につきたてるが、ジオフロントの半分を覆うフィールドで防御される。

しかしそのようなことはアスカは百の承知だ。

『零距离…喰らいなさい！！』

両肩のウエポンラックからニードルスピアを全弾発射。  
しかしそれも防御される。

『なんて硬いのよお！！！！』

「アスカ！！すぐにそこから離れて！！」  
『っ！！！！』

ミサトの指示に従い、その場から遠くに離れる。

『く…！！こうなると…恥も忍ぶわよ！！！！』

「弐号機！右腕部にATフィールド展開！！」  
「リミッター外されていきます！！全て規格外です！！」

弐号機の肩、背中部分のリミッターがはずれ、4つのアイカメラ



が赤色に光る。

アスカの母親の魂が覚悟を認め、口を開く。

「シンク口率230%!!プラグ深度100をオーバー!!汚染区域ギリギリです!!」

「駄目よ!危険すぎるわ!!」

リッコの静止もかまわず、

『う…ぐぐ…うう!!…爆熱…!!!!』

アンビリカルケーブルを排除し、瞬間移動に等しい速度で移動する。

『ゴツド……フィンガああああああ!!!!』

ゼルエルのATフィールドが半分ほど破壊される。

極限の状態だと、根性論が勝つ。

シンジの無言の教育が生かされる時である。

『まだまだああ!!!!』

左腕部にもATフィールドを展開。

ほぼボクサーの連続パンチに等しい速度、

しかしハンマーで敵を殴るほどの威力でゼルエルのATフィールドを殴り続ける。

ちなみにこのシンク口率だと、自分の体の動きが連動されているようなものであり…

いまプラグ内でアスカがどんな動きをしているかは…考えないほ



《零号機、発進》

「零号機！？ライフルも持たずに！？」

零号機が所持しているものは大型のN2ミサイル。

『行きます！私が死んでも…いいえ…私は死にません！』

「やめなさいレイ！！あなたが死んだらシンジ君はっ！！」

通信を切り、ゼルエルに向かって直進する。

「早く！初号機はまだなの！？」

リッコが叫ぶ。

「だめです！！未だ起動せず！！」

「急がせて！！」

第7ケイジ。薄暗くい部屋で、初号機の起動を繰り返している。しかし先ほどから全くといっていいほど起動しない。

「プラグ位置、固定不能！」

「だめです！リセットが効きません！！」

強制的にダミープラグが排出され、初号機が拒絶するような叫び声を揚げる。

「続ける！もう一度308からやり直せ」

再度リスト308から起動をするがまたも失敗。

「…なぜだ…何故私を拒絶する！ユイ！！」

『そりゃお前が嫁さん追い掛け回してるから愛想尽かしたんだろう  
がマダオ』

この軽い声の主は……わたしです。

『…シンジ何故ここに居る。と言うかどこから入ってきた』

オヤジが驚いたような、しかし威厳は失わず俺を睨む。

「そりゃ…決まってるでしょ？俺の名を言ってみろ」

『碓シンジ』

「違うな」

すこし足を前に出して正しい答えを出す。

「俺は、エヴァンゲリオン初号機パイロット、碓シンジだ。

分かったか。分かったならさっさと初号機を出せホームレス中高年！…」

『……初号機、発進準備。有人搭乗だ』

『了解』

『乗るなら早くしろ…でなければ帰れ！親不孝者』

「望むところだ、クソ親父」

47・ゼルエルは最強の使徒です。前座は女に任せましょう(後書き)

こぼれ話

原作シンジ「最近こぼれ話のキャラが本編にまでこぼれてるんだよ

…」

マチユ 「こぼれ話だからこぼれて当たり前だろ」



48・使徒は美しいです(前書き)

明日から学校なのでちょっと文字数が少なくなるかもです。  
ご了承ください

## 48・使徒は美味いです

えーどうも、窮地に陥ったネルフ本部からこんにちは。大学生こと碇シンジです。

現在発進準備を開始し、ジオフロントに向けて一気に飛び立とうとしている3秒前です。

コジマ粒子おいしかったです。今度はGN粒子サイダーを飲みたいと思います。

「まあここでおふざけタイムは終了したいと思うが」

『シンジ君、来てくれたのね…よかった…今の状況は絶望的よ』  
「話に割り込むな三十路」

『その際はスルーします。とりあえず今特攻を仕掛けようとしているレイを止めて。』

そして代わりにあなたがあいつを倒すのよ』

「それは俺にシネと？」

『あなたが死んでも代わりは居るもの』

「やっぱ帰る」

『やめて！』

アンビリカルケーブルを接続している暇もない。

まあいい。とりあえず今はレイを守るのが先決だ。

そうでもないよ……まあ精神崩壊は必至だな。

『エヴァ初号機発進準備完了』

『いいわね…レイを頼んだわよ…発進！』

「………まってるよレ（ブチッ）」

舌をかんだのはまあいつものことだ。

キニスンナ!

ジオフロント、そこは…見る影なし。

辺りに兵装ビルの残骸が散乱している。そして見つけた弐号機の腕。

この状況から考えるにもう既にアスカはやられているだろう。くそう…守れなかったか。まあそれはそれとして…

今現在、N2ミサイルを抱えて突撃しているレイの姿が見える。

まだミサイルのガスが切れていなかったのかと逆に感心させられるがそれはどうでもいい。

「俺の回復力はコジマ粒子にあるのだよ！！ふはあははああ！！」

「碓君！？（いきなり何を言い出すの！？）」

「やあレイ！どうしたんだい？そんなに物騒なものを抱えて！」

「こつでもしないと…！あの使徒は倒せない！私が死んでも変わりはいくらでも…！！」

いねえよボケカス死ね。

「まあその辺は置いて……」

「！っ。」

「初号機の顔を見る。どういふ顔をしているか分かるか？」

「っ…！っ。」

そういつと零号機が振り向き、初号機を見る。

「初号機の顔…コイツはどんな顔をしているか分かるよな…。お前が今何をしているか…」

モニターに映っているレイがこくりと頷く。

『すごく…あぶられている』

「そうだ…熱いからどけてくれ。下手したら顔が焼け爛れるんだ」

『ごめんなさい…』

そう、何せ目の前でブースターを吹かしまくっておられるのだ。初号機の顔が焼け爛れて悲惨なことになるのも時間の問題だ。

「じゃあお前は戻ってる。跡は俺がちゃちゃっと片付けるので。

お前はそこに鎮座しているアスカでも持って帰ってくれ」

『了解』

そういつて、N2ミサイルをどこかに投げ捨て、  
式号機を担ぎ上げて急ぎ足で帰還していった。

【( )もゼルエルです。すごく空気を読んでいます】

「さて…危機は去った。そろそろ始めるか」  
【うん今日もおいしそうね。ゼルエル君】

初号機さんが不吉なことを申ししているがスルーしておこう。  
内臓電源の時間は残り2分弱。  
最近気付いたが内臓電源が切れても痛いのは感じる。  
さて…この窮地いかに脱すか…

「細かいことを考えても仕方がない！行くぞ！！！」

【おいしいところはとっといてね〜】

ビーストモードに等しき速度でゼルエルとの間合いを取る。  
当然ATフィールドは展開され、直接接触れることは出来ない。

「ちっ…ゴッドフィンガアアアアアア！！！」

ゴッドフィンガーを叩き込むも、何故か強力なATフィールドに  
よりはじかれる。

一点に全てのフィールドを集中させるか…！

『やはり使徒は学習しているわ…！シンジ君！もっと変則的な攻撃  
を！！』

「わかってらあ…！！」

変則的な技……まあいい。俺の技は全てこの世界にない技だ。  
とりあえずこの短い時間で倒すのは無理…。

とりあえずユイさんのお食事タイム魔でのお膳立てだな。

「とりあえず…っとうおわ！！？」

いきなりゼルエルの目が光り、その光をモロに食らった。

「うびやあえ…！！」

本能的なATフィールドのおかげでチリになるのは避けられた。  
やべえw超強いwバルディエルとは3倍も4倍も違うw

【シンジ！また…！！】

「おいおい再装填早すぎだろ！！」

間髪入れずに再び目を光らせる。

原作シンジはコレを圧倒してたのか……

いや…あれは不意打ちで得意の接近戦に持ち込んだからか。  
なら俺は正々堂々と戦おうではないか。

尻餅をついている初号機を立ち上がらせ、両腕をゼルエルに向ける。

【来るわ！】

「来るなら来やがれ！！3000倍にして返してやんよ！！」

両腕からオレンジ色の球体が現れる。

バチバチと音を立てながら少しずつ大きくなり、一つの巨大なエネルギー弾になる。

「出来たああ…！！！！」

【何が！？】

「知らんらんん！！ファイナルフラアアッシュ…！！！！！！」

【知ってるじゃない！！】

球体が極太の波動になって地面を大きくえぐる。

その瞬間、ゼルエルも直視できるほどの威力のビームを撃ち返す。





さっきのビームで意識を失ったのかユイさんの声が聞こえない。

いや…コイツ焦らしてるのか？それとも俺に苦痛を味合わせるがためにこんな意地悪を…

やべ…涙出てきた。なんか心なしかユイさんのムフフと言う声が…



【見せてもらおうか：映像部の演技力の性能とやらを】  
「ねえお前本当にユイさん？」

くそ…！さっきまでモロシリアスタイム突入だったのに…  
仕方がない。やらなきゃ殺される。物理的に。

うん…ゴホン…！

「動け！動け！動け！動け！動いてよ！！今動かなきゃ何にもならないんだ！！うあ！？」

衝撃と共に出血の音が聞こえる。モロアニメじゃん。ちなみにこの痛みも俺は感じている。

死にそうですが演技はやめない。



「さて……暴走してしまったエヴァを止めることは不可能だ。さっさとS2機関をよこせ。悪いようにするけどよこせ。ケーブルが邪魔すぎる」

しかしそれを断るかのようにビームを放つゼルエル。速い速い…避けられねってこれ!!

【何それ、そうめん？】

それをあざ笑うかのように片腕で止める初号機。

何この格差。『俺<<越えられない壁<<ゼルエル<未知の領域<<<<<ユイ』だなこりゃ。

「つたく……なんなんだよこの格差はあ!!!!!!」

操縦桿を思い切り引っ張る。すると5つの魔方陣が現れ、通常の5倍の太さのマスパがでる。

無論その光線はゼルエルの周りを覆い、ジオフロントの端まで吹き飛ばされる。

ジオフロントの端は、自動車用貨物列車となっていて、その外壁に突き飛ばされた。

「どこの世界でも努力は認められねえんよなあ!!努力なんてしてないけど!!」

どうせ神様は俺のこと嫌いなんだろう!?俺もお前が大っ嫌いだバカ!!」

たこ殴りにしてから、両腕を引きちぎり、ビーム発射口となる目を潰した。

そしてコアに向けてゴッドフィンガーの構えをする。

「ここにとどまってユイさんに喰われるか、今すぐ逃げてゴッドフィンガーの餌食となるか

…まあどっち道死ぬけどな。お前は冥界で永遠に階段を上り続けるべし……！」

あ、でもお前足ないんだった！じゃあ地獄に落ちろ……！あ、でもコイツキリスト所属だ！

………もういい、喰われる……！」

さつきからユイさんの鼻歌が聞こえる。

【もういいの？じゃあ………】

初号機が口の拘束具を強制除去して雄叫びを上げる。  
喰っちゃおうのね……

【食事の時間ね】

ゼルエルの腹の部分にかぶりついた。  
そして内蔵と思われる部分をむしゃむしゃと食べ始めた。

【この部分は牛でいうホルモンの部類に入るわね】

「あ………あの……味がモロに口の中に……」

【おいしいでしょ？】

「ん……そういわれてみれば結構……」

美味い。なんとというか珍味だ……。

内臓部分を喰い終わると、次は頭の骨の部分だ。

【ここは硬いけど、するめの様に噛めば噛むほど味が出てくるのよ】  
「意外にも美味しいな。喰ってないけど」

【食感はそのままでだけど、味はいいのよねえ…】

と、腕から足まで全てを食べた。

そして最後は

【コア：この中にS2機関があるわ。食べてみれば分かるけど、S2機関はかに味噌のようなもの。

子供が食べるといい味はしないかもしれないわね。だけどコア自体はマグロみたいな味よ】

メイデイツシユか。ふむ…美味そうだ。

【レイが入ってた状態のコアの味はどうだったのかしらね…】

「何不吉な事言ってたんだ、早く食おうぜ」

【そうね…ん？無駄に美味しいわね。いつもとは違う味】

「確かに、あれか？俺たち実は3週目なんじゃないの？」

【そうかも、お？あったあった、S2機関よ】

「お、なんかウニみたいな味だ」

【おいしいでしょ？】

「うめえじゃん」

俺たちは食事タイムを満喫し、元気に雄叫びを上げた。ごちそうさまでしたと。

そして、ゲテモノ食いのすごさを知った。

こんなにゲテモノが美味しいとは…

「ただしミサト、てめーはだめだ」



ちなみにこのとき、碇シンジはシンク口率500%。  
完全に同化していることに気づくのはまた後の話になる。

#### 48 使徒は美味しいです（後書き）

こぼれ話

カラル「都に侵入者？」

依姫「ええ、エヴァ6号機の建造をしている民からの連絡です」

カラル「そうか、その侵入者って誰だい？」

依姫「幻想郷からの使者です。困らしいですが……」

カラル「八意さんの手紙の通りか……」

カラル「ロケットは落とせばいいんだろう？怪我をさせない程度に」

依姫「出来るのですか？」

カラル「神を立ち退かすことが出来れば簡単さ。」

住吉三神、依姫さんも知っているだろう？

日本の航海の神。彼らの神力をATフィールドで干渉すれ

ば……

……終わったよ、豊かの海に行ってください。

月の微重力にしたがって落ちていくだけだから」

#### 豊かの海

依姫「渚さんの言う通りですね、住吉三神を立ち退かせると自然に落ちる」

カラル「そう、後は八意さんの言う通りのことをすればいい」

から

それじゃあ僕は失礼するよ。  
豊姫さんと一緒に幻想郷にも行かなきゃ行けないみたいだ

以上、霊夢の異常察知と海に突然落ちたロケットの原因考察でした。

49・精神世界、心の内は自分のものです（前書き）

ギャグ成分が少なかったのがちょっと残念…

#### 49・精神世界、心の内は自分のものです

「……使徒食ってたらシンクロ率がえらいことになってました。碇シンジです」

【そしてそれに気付かずいつの間にかシンジを取り込んでました。碇ユイです】

何だこのアホ親子は……目に見えるのはひたすら白い空間。

見えるのはただそれだけ。自分の体は見える、何故か制服姿だが。ユイさんの気配も感じない。聞こえるのは声だけ。

俺もない……って言うとなんか訳分からんな、プラグスーツ姿だった俺の姿が確認できない。

ＬＣＬに取り込まれたからだな。どっちにしる素っ裸じゃなくてよかった。

「で……ここは？」

【あなたの心の世界よ】

「精神世界か……もつときらきらしてるものだと思ってたが」

ガンダムの見すぎだな。自分の声にも何故かエコーがついている。だが何故か落ち着かない。

「何か落ち着かない場所だな」

【そりゃそうよ、あなたの体じゃないし、それにあなたは私の本当の息子じゃないんだから】

なるほどね……ん？

「なんだこれ……頭になんか変なのが……おいユイさん、これ……あれ

？意識が……あれ……？」

【あー始まったのね……じゃあしばらくお別れ。じゃねー  
「お……おい……まって……あれねえ……」

精神世界。

海？海だ……。しかし海っぽくない。

砂浜が変な色……紫……オレンジ……黄色……黄緑……

なんだこれ……訳分からん。スルースルー

こいつら……ってミサト？レイ、アスカ、オヤジ、ユイさん、  
リツコ、マヤさん、子安、メガネ、ケンスケ、トウジ、ヒカリ、  
早苗さん、魔理沙、  
カヲル、俺……みんな俺の知ってる人物……知識上の人間や、親しい  
人間。

俺の知っている人……俺の生きているときの支えになる人……あまり  
接点のない人。

もはや別世界の人、全て違うがすべて同じ人。

全てが死ぬとき、それは誰もが予測するが外れる予想。  
しかしここは俺の生きていた世界とは違う世界。  
つまり予測が本当になると言う事。

アダムの暴走によるセカンドインパクト、リリスの覚醒によるサードインパクト。

そして時は逆行し、もう一度やり直す世界、そして繰り返されるサードインパクト。

それをカヲルが止める。

そして引き継がれた俺……他の人間の技で使徒を倒した。

レイの心を開いた…アスカの精神を安定させてきた。レイとアスカの関係をよくした…

S2機関も手に入れた…

《それで正しいのか?》

正しいはずだ。俺のやっている事が全て正しいとは限らない。

俺がやってきたことが間違いだってんなら他の奴のやっていることを見てみたいよ。

俺マンセーで何が悪い。



《本当に正しかったのか？》

ああ。おれは胸を張って正しいと豪語してやるよ。  
豪語したところで誰が納得するかは知らんが。

《結局は自己満足なのでは？》

自己満足で悪いか？オタクの存在価値は自己満足だ。

《そんな世界で満足なのか？》

正直言って満足はしてない。

俺だってドラゴンボールとかガンダムの世界に行きたかったよ。  
幻想入りとかしてうはうはした世界に行きたいよ。

《しかし期待は出来ない》

元から期待なんてしてない。

敵……。使徒。

天使の名を持つ奴、俺たちの敵。

俺の世界ではアイドル視されている奴もいるが。大体は敵。

ミサトの親父の敵。俺がやらなきゃ俺が死ぬ。

だが何故俺が？

「あんたばかあ？あんたが信頼されてるからに決まってるじゃない

」！

「碓君が、信頼されているから」

お前らも働けニートが

だが…理由など必要ない。俺はこの世界を楽しんでる。

俺に不便はない。大学時代もオタクサークルでみんなとわいわい

やってた。

だが俺はむなしかった。家に帰ればなんともいえない虚無感に襲われてた。

俺は寂しかったのか？いやそんなことはない。

『よっ今日はどうする？』

『アニメイト帰りに寄ろうぜ』

『ねえ〜カラオケ行こうよ〜みんなでテーゼ歌おうよ〜』

前の状態でも女にも人気あったし、男友達と女友達も適当な数があった。

充実しているわけじゃない。リア充サークルとはまた違う感じだった。

大学ではよくある事だ。しかし男女みんな仲がよかった。

だが家に帰れば一人だ。

《人知れず寂しかった》

そうかもしれない。

だからこの世界で解放された生活をしているのかもかもしれない。

将来の夢がない俺はこの大学で漫画の研究者として居ると

オタクの男女仲間と誓い合った。

だが俺は今このエヴァの世界でカオスに楽しく生きていられる。

俺だって…寂しいときはある。  
未だにこの世界が信じられない。  
仲間のところに戻りたいと思ったこともしばしばある。  
だが俺は碇シンジ。  
使徒を倒し、生きていく存在。

そんなことが許されるはずはない

『お父さんの事…嫌いなの？』  
『俺は嫌いだ』  
『何故…そう思うの？』  
『人類を補完するために自分の嫁を利用して…息子を捨ててる』  
『その代わりが…私なの？』  
『お前には悪いがそうだな。レイがいるから俺が捨てられた…』

『自分から逃げ出したくせに』

『ちよっ！待て！！俺は逃げてないぞ！？逃げたのはシンジだって  
！！！！おぉおおい！！！！』

俺はエヴァを知ってた。そりゃそうだ。アニメで見たんだしシンジが逃げたことも知ってる。

それが大きな未来の変わりになり…今俺がこの生き方をしている…。

『寂しいって何…？』

孤独を覚え、恐怖を感じるからだ。

『幸せって何…？』

心が満たされ、自分が満足し、気分が高まることだ。

『やさしくしてくれる…？』

お前が望むなら。俺はお前に優しくする。

『他の人が』

…へ？

『他の人が、あなたに優しくしてくれる？』

俺はナルシストじゃないからよく分からないが…。今の状況を考えるとそうだと思う

『どっつして…』



俺が知るか。…と言いたいところだが。  
精神世界だから素直に答えよう。

俺がエヴァに乗るから。

おれが使徒と戦うから、世間に俺が貢献しているから…だと思つ。  
言わせんな恥ずかしい。

『乗って』

それは俺が決めることだ。だが俺はエヴァに乗って戦う。俺が決めたことだ。

『戦って』

無益な争いは好まないが、使徒が相手なら俺は喜んで戦う。

俺は誰かに褒められたいわけじゃない。

親父にほめられようが、知った事ではない。

レイとアスカに褒められたらまんざらじゃないが。

三十路とリツコとマヤさんにも褒められたらまんざらでもない。

…こんな俺が誰かに褒めてもらえるなんて夢にも思わなかったことだ。

それは認める。

だが誰かに優しくして欲しいってわけじゃない。

虐めにはなれてる。2人組みも全く出来なかった。

……誰かがそばにいてくれることがうれしい。

アスカやレイ……俺の家族にはなんて礼をしたらいいか分からない。きつく当たってるトウジもいい友達……軍事オタクのケンスケもいい奴。

たまにしか話さないが、レイとアスカと仲がいいヒカリも、感謝している。

魔理沙や早苗も今ではいい友達だ。

いつも外でロックオンしているカエルとモバイルスーツは……何をしているかは分らん。

マリは……まあたまに話すのが気前のいい人だ。

メガネも子安もマヤさんも陰で支えてくれている。

加持さんは……漢の中の漢だ

ユイさんはあんな性格だけど俺を助けてくれる。

リッコは……何してるんだろ……ドラゴンボールで言うヤムチャ的な存在。

ミサトは、いつも世話になっている。本当は礼を行っても足りないほどの恩だ。

親父は知らん。永久にダンボールの海を泳いどけ。

『ねえシンジ君、私と一つになりたい？心も体も一つになりたい？それは、とてもとても気持ちいいことなのよ。いいのよ、私はいつだっていいの』

いきなり何を言い出すか！？

ってかここどこ！？やっと思識が戻ったって言うのに何で俺は素っ裸…

え…：ちよっ…：やめろミサト！？俺は魔理沙で童貞を卒業すると決め…

ぎゃああああああ！…！

はあ…はあ…何かすごく大事なものを失ったような…  
ん…？あれはアスカ…ってなんであいつも！？

『シンジい？…私と一つになりたいの？心も体も一つになりたいの  
ね？

心は拒絶してても体は正直なのねえ…？こんなになっちゃってさ  
…』

みつ見るなあああ！！俺のハイパービームサーベルを見る…ア  
ツーーーー！！！！

もう…勘弁してくれ…

いくら美人が相手でも…あんなことされたら誰だって拒むわヴォ  
ケ…

とりあえず服を…ん？あれはレイ…

レイい…俺は一体どうなってるんだあ…？俺の服…ブハツ？！

『碓君、私と一つになりたい？それはとても気持ちいいこと  
なのよ。碓君』

いただきます。っと…セクスだめ！ゼツタイ！

『何を願うの…?』

『何を願うの?』

『…何を願うの…?』

『願う事?そーさな…とりあえず俺のキンタマを見てくれ。こいつをどっと思っ?』

『『『すじく…小さいです』』』

o r z

『冗談だ…うーん…』

とりあえず生身でATフィールドを張れるようになれたらうれし  
いかなーと…』

『『『そんなことでもいいの?』』』

『出来るの?』

ここで意識が途切れた。

俺が最後に見たものは…青く光る魂…その色が少しずつ赤くなり、  
赤い魂となって…再び青く光る…そしてまた赤くなる。

統一しろよめんどくさい。

コアの中からただいました俺は、すぐさま病室に運ばれた。  
病室の中ですごくゆすられてる。  
こそばゆい。誰だゆすってるのは。

「……！……碓君……」

レイだった。丸いすに座って俺を見ている。  
目を開けたとたん半端じゃないくらい驚いた目をしている。

「やあ、清く正しい碓シンジだよ……て……どした？」  
「碓君が……起きた……やっ……起きてくれた……」

突然俺のベッドに倒れこむように顔を押し付けた。  
丸いすが倒れ、カターンと音が鳴る。

「ううああ……う……ぐずつ……ああ……うあああ……」  
「……おやおや……」

寂しかったのですね。  
ですが…

ここでトイレ（大）に行きたいとは死んでもいえない……



「レイも積極的だね……今度はあたしが泣きついてやるんだから……」

49・精神世界、心の内は自分のものです（後書き）

こぼれ話

式号機、機体交換試験

シ「バアアアムクウウウヘン！！！！」

起動成功

50・番外編3です。もう本編関係でもいいや(前書き)

夏が終わったので肝試しです。

## 50・番外編3です。もう本編関係でもないや

ある日 街灯に照らされた夜の第3新東京市

「咲夜さんは胸が大きい…それは何故か!？」

「PADをつけているからである!!」

「正解!!」

珍しく俺と魔理沙と早苗さんが一緒に帰っている。

仕方ない。レイはダクトの真髓を求めて石村に行ってしまったし。アスカはアスカで指令室に行っただけ。行き方不明だし…恐らくコジマ粒子にナニカサレタヨウダ。

「シンジさんは本当にノリのいい人ですね」

「そりゃそうさ。ノリの悪い奴らはレイに首を千切られるからな」

「なんだそれ、あいつしとやかな顔して首を平気でちぎる女なのか?」

「ああそりゃもちろん…あいつのせいで何人死んだことか…」

あるときは俺がヘッドロックされてる所をリアルタイムにスケッチするし、

風でスカートがめくれたのを偶然俺が目撃すると、関節技。

故意にめくったときは、その人物は明日にはいなくなってる。

武勇伝として3年以上クスリのみで生活してきたそうなの…」

「怖っ!?!」

魔理沙と早苗さんは同時にほぼ予想通りの反応を示した。

何かうれしかった。

「そ…それが綾波の正体なのか…？」

「私の知ってる綾波さんとは違う…それ本当なんですか!？」

「残念ながら…事実だ…」

「世も末だな…幻想郷も外の世界も」

「認めたくないものですね…あれ?そういえば綾波さんは？」

「今はダクトの真髄を求めて宇宙に進出したよ…いい奴だったよあいつは」

「私は地球に居る」

「「「!？」」」

背中に突き刺さるような薄い声が聞こえ、3人は固まる。

そしてゆっくりさびたロボットのようにな後ろを振り返ると、

街灯に照らされ、青白く見える制服姿の綾波レイ。

しかも薄暗い周りの風景に、一人赤目の女が立っている。

もはやホラーである。

「碇君、遅「「「いやああああ出たあああ!!!」「」「あ…

あの!？」

「……お化け扱い…霧雨さんも東風谷さんも酷い……」

とぼとぼと、夜の通りに消えていったレイであった。

コンフォード17、正面道路。

体力の限り走り続け、何とか家の前にたどり着いた。

もう夜は更けて、街灯も節電で消えた。

魔理沙のミニ八卦炉（自称懐中電灯）で明かりをともしている。  
つてかそんな便利な懐中電灯があつてたまるか。

「はぁ…はぁ…真昼に見たら…可愛いけど…夜にいきなり現れたら…  
…はぁ…ホラーだな…」

「吸血鬼も亡霊も大丈夫なのに…はぁ…綾波はだめだ…ちょっと  
漏れた…」

「私の綾波さんがこんなに怖いわけがない…ふう…ふう…」

それぞれ色とりどりの髪の毛を汗で濡らしている、

ちなみに女2人は汗で制服が引っ付き、薄いシャツから青いブラ  
とピンクの…やめておこう。

「さて……帰るか。レイを怒らせたなら、手に隠し持ってる鎌で俺の首を掻つ切られ」

「お前も大変つてことを本気で実感したぜ……じゃなく今日はキノコそうめんだけ」

「綾波さんつて本当は怖かったんですね……それでは……お願いですから普通のそうめん作つて……」

キノコそうめん……？

一度食べてみたいが……

「まあいいか。俺も帰るか」

階段を上がつて、俺の部屋のカードキーをあける。すると玄関には誰もいない。電気もついていない。

「みんな寝たのかな……ただいまつと……」

「うらめしやー」

突然懐中電灯を自分の顔に向けたレイがレイの部屋から現れた。

「あぎゃああああああああああああああ……！！！！！！！！！！」

いきなりわけの分からん奴が出てきたら誰だつてこれくらいびびる。

レイじゃなかったら本気でちびつてるところだった。

「碇君……大丈夫？」

「腰が抜けた」

「……碓君が遅かったから……」

電気をつけてもらい、その場でレイがしゃがみこんで俺を心配した目で見える。

「……あれ？アスカは？」

「洞木さんのところで泊まり」

「ふーん……じゃあ俺たちも魔理沙たち呼んでこようぜ」

「……いいけど」

「がんばって」

「……碓君も」

「腰が抜けてるのに？」

「……」

黙って隣の部屋に行った。



「きゃあああああああああああああああああああああああ……！！

！レイさんだあああ……！！」

「待て……！来るな……！落ち着け……！いやだあああ……！こないでええ

……！！……！！」

『……………』

／（＾○＾）＼

50・番外編3です。もう本編関係でもいいや(後書き)

その後

シ「怖かった？」

魔「……シンジ……」

シ「？」

魔「一緒に寝て……お願い……怖いんだぜ……」

シ「……！」

魔「綾波が怖いんだぜ……一緒に寝てくれよお……」

シ「あの綾波と、明日も会うんだぞ」

魔「う……ウソダロ……」

## 51・加持さんは死を恐れませんか

学校の帰り道、レイと一緒に帰っていると、電話がかかってきた。子安からの電話だ。とりあえずとると、衝撃的な事実を告げられた。

「は？加持さんが拉致られた？んでミサトが換金されたのか！？」  
『加持さんじゃない！副指令だ！！それに金に換えられてない！！』  
「それで…どうして葛城三佐が…？…はい…わかりました…」

冗談はさておき、冬月が拉致られたらしい。

首謀者と疑われる加持さん、それでミサトがグルだと思われているらしい。

幸薄い女だ。

そういえばもうすぐ加持さんが殺されるな…

何とかして助けてやりたいものだが…

とりあえずスマホを切り、レイに話す。

「冬月か…とりあえず助けられるのを待つか」

「その前に葛城三佐が…とにかく連絡しましょう」

「ばっか、首謀者のグルと疑われてる奴と重要人物の俺らが話せるわけないだろ」

「でも…！それだと葛城三佐は…！」

「ミサトが俺たちを裏切るわけないだろ。少しは信じてやれ」

結局レイは家に帰るまで心配そうな表情をしていた。

目を泳がせたり、「葛城三佐じゃない…葛城三佐じゃない…」と呟き続けたりしていた。

落ち着けと言わんばかりに俺が肩に手を置くと、ビクツと肩を震わせ、俺を見る。

「まあ、加持さんとミサトは仲がいいからもしかしたらやりかねずベッ……！」

グーで殴られた。女の子がそんなことしちゃいけません！

マンションについた俺は、恐らく激怒しているであろうレイを慰めながら帰った。

しかしレイの怒りは収まらず、回転椅子に座ってイライラした表情で俺を睨んでいる。

ちなみに俺は正座。

「……………」

「あの……」

「……何よ」

「じめんなさい」

「謝るくらいなら最初から言わないで」

…この空気の重さ。…確かレイの機嫌を直すには…

えーっと…抱いた異例が機嫌を損ねる事なんてほとんどないから  
な…

…好物で釣るか…

「分かったよ…抹茶アイスおごってやるからそれで許してくれよ」  
「！」

赤い目を見開き、俺を凝視する。

しかしすぐに首をぶんぶんと振り、再び俺を睨む。

「…そんなもので私は釣られない」

「じゃあ萃香バーも付け足そうかな」

「！…！」

「ついでにお前がいらないうって言ってもアスカと俺で食うからな」  
「なっ！？」

声を漏らし、冷や汗を流す。そんなに好きなのかアイス。

「ちなみに俺は抹茶アイス食べる」

「！…！」

肩を震わせ、顔を真っ赤にする。テレビや映画では考えられない  
表情だ。

恐らくキャラ崩壊満載の学園エヴァでもこんな表情はしないだろ  
う。

「……2つ」

「？」

「碇君が酷いこと言ったから2つ買ってきて…抹茶アイス」

「最初からそう言えっの」

「ハーゲンダッツ」

「ちよつと死んでくる」

「だめ」

近所のローソン、空中都市と呼ばれる人物がバイトしているそう  
な。

「らっしやーしえー300円になります、ありあしたー」

「抹茶アイス二個と萃香バー一本。これでよしと」

と、帰るのも味気ないからとりあえずぶらぶらと町を歩くことに  
した。

アイスはドライアイスをいただいた。

これで持つだろう。

「ふーんふーんふーん…あいどのー？」

レイのアイスを片手に町を歩く。

もう既に空は夕焼け、とりあえず商店街をぶらぶらと歩く。

すると気になる施設を見つけた。どうやら廃工場のような、

そこに黒い車が止まっていて、その中から量産型剣崎さんがぞろぞろと出てくる。

「なんであんなところにネルフの奴らが……」

激しく気になったからとりあえず監視されていないか周りを見渡す。

監視されてたらその人に任せるまでだが。

「…いない。よし、行ってみるか」

量産型が居なくなつたところを見計らって、さささつと隠れながら入る。

中に入るとそこは広い空間だった。  
風でゆっくりとファンが回っていて、そのファンの隙間からは夕  
日が漏れている。

「なんだありや…何やってんだらうか…」

量産型が囲んでいる中心に居る人物を目を凝らしてよく見る。

……加持さんか…？ 一体なんたって……まさかここで殺されるの  
か…

確かテレビ版で死んだ空間もそうだった。



「よう、遅かったじゃないか」

加持さんがそういうと、量産型剣崎さんの一人が拳銃を向ける。  
やばいって…やばいやばい

「うわあああああああああ！！！！銃刀法違反だ銃刀法違反だ銃刀法違反だ！！！！」

ぎゃあああああああ！！わあああああああ！！ちんちんちんちん！！！！」

とっさに工場の外に向かって思い切り叫び散らす。  
そうすると、続々と野次馬が現れ、警察まで現れた。

「まずい！！ガキが垂れ込みやがった！！逃げるぞ！！」  
「「「お…おう！！」」」

どうやら量産型の剣崎さんがサングラスを取り、ウィッグもとる。  
そしてパンチパーマの頭を晒して、車に乗ってどこかへ走り去っていった。

その車をパトカーが追いかけていった。

「加持さん！大丈夫だったか？」

野次馬が居なくなると、俺はすぐに加持さんのところに駆け寄った。

すると、さっきまでタバコをすっていたタバコを床に落として微笑む。

「助かったよシンジ君。君には迷惑をかけたな」

「礼にはおよばん。というかなんで893がお前のところに？」

俺が聞くと、加持さんは少し真剣な顔をして俺に話す。

「車を用意してもらったんだ。副指令を救出した後、

俺は帰宅のために彼らを呼び出した。

それが間違이었다ったようだ。廃工場で待っているとわかれて待っていた結果がこれさ」

おいおい…ここからネルフの距離は結構あるぞ…

それに違和感を感じなかったのか？

「違和感は？」

「感じたさ、だが…今まで葛城に迷惑をかけてきた。殺されると覚悟はしていたさ。」

「何で逃げなかったの？」

「葛城たちに迷惑をかけた罪は重いと思って自分から死を選んださ。君も、誰かのために誰かが犠牲になるなら自分が犠牲になるのを選ぶだろう？」

「それと同じさ」

「だからって俺は死ぬのは選ばんぞ。」

「レイとアスカが死にそうになるんなら俺が真っ先に死ぬけど。」

「たかが一人の三十路に迷惑がかかって自分が死ぬなら俺が三十路殺すわ。」

「すごいねえ……さて、加持さんも一緒に帰るか？」

「そうだな、じゃあスイカでも買って帰るか」

「スイカか。夏の風物詩だな」

「俺と加持さんはスイカを買って、家に帰った。」

家に着くと、ミサトが家に帰ってた  
その後、アスカとレイが出てきた

「おかえ……加持……？」

「やあ……葛城」

「加っ持さーん……！」

「碓君、アイスは」

「はいよ」

51・加持さんは死を恐れませんか（後書き）

こぼれ話

シ「男は空を眺める事で生きていける」

加「今君が見上げているのはジオフロントの天井だ」

シ「

52・アスカのドイツ語は以外にも聞き取りやすいです(前書き)

しかし作者は高校生である

## 52・アスカのドイツ語は以外にも聞き取りやすいです

「アスカのシンクロ…いつも通りですね」

マヤがアスカのシンクロ率を見ながらリツコに呟く。シンクロ率  
98%。

レイを大きく上回り、

「そうね、シンジ君は相変わらず飛びぬけているけど」

「信じられませんね、その大切なパイロットを凍結する司令が信じ  
られませんよ…」

『……ZZZZ』

「それに寝てるんだから…腹が立つ事この上ないわ」

エレベーター付近の廊下。シンクロテストを終えた俺たちはエレベーターを待っていた。

アスカがトイレから帰ってくると「ゴメンゴメン」と謝りながらエレベーターに入った。

おいレイ、今アスカが来る前に扉閉めようとしただろ。

「はあ…はあ…ちょっとレイ！閉めんの早すぎなのよ…！」

「ごめんなさい…アイザックさんの教えでつい」

「誰よそれ…！」

「私の先輩」

アスカとレイが不毛な口げんかをする。

しかしすぐに2人に笑顔が戻った。

「あたしのシンクロ率が最近停滞期なのよねえ」

何だその体重みたいな言い方。

「心を開かなければエヴァは動かないわ」

「心を開く？」

「そう、エヴァには心があるの。アスカなら分かるはずよ」

「…心って？」

アスカが目をはちくりさせて聞き返す。

「そう、心」

「ニルヴァーシュ的なの？」

「エヴァを信じれば、シンクロ率は上がるわ。だからあなたも心を開くの」

「あなたと合体したい的なの？」



「「ちょっと黙って」」

俺に一喝してからレイは再び話し始める。  
「いまいち俺には理解できなかった。  
簡単に言えば「お前エヴァを人形としか考えてねえだろ」  
といった意味である。」

「そう…あたしがエヴァを信じてなかったのね？」

アスカが少ししょんぼりした表情になる。  
「流石に自分の考えが否定されたら気が沈むだろう。」

「エヴァもあなたも、人形ではないの。そう考えるだけでも大丈夫。  
気を落とさず駄目」

そう言ってレイがアスカの肩に手を置く。

「あなたは私より優れている。全てにおいて。私には何も無いもの」  
「……」

「あの…レイ」  
「何」

「さりげなく俺の財布から100円抜き出すな」  
「……むう……」

仕方なしに今日はアスカの分とレイの分の抹茶アイスを買った。  
あすかは初めて食べる日本風アイスに戸惑いながらも、口に入れた。

「にがあい…」

不評だったようだ。

「…そう?」

木のスプーンを加えながらレイがたずねる。

これほどレイが幸せそうな表情をするのは抹茶アイスを食べているときだけだ。

「アンタ良くこんな苦いの食べられるわね」

「このほろ苦さが…おいしいの（パクッ）」

「お前らうまい棒でガマンしてる俺のみにもなれよ…」

かつさかさのうまい棒。味は悪くないが…

真夏に食べるには致命的だ。

くれよ、といわんばかりに二人を見る。

「「あげないわよ」「」

「鬼畜…正に…鬼畜…」

伊藤家の食た…葛城家の食卓、

「シンジ、今日の晩御飯はー？」

俺がそうめんをなべに投げ込んでいるとアスカが近づいて腕にしがみついていた。

「ああ、今日？今日はそうめんにしようと思ってな」

「そめん？和食の？」

「洋食のそうめんがあるんなら食ってみてえよ」

ガスコンロを切って、お湯をざるにかける。

そしてそうめんを冷やして完成だ。

「後は…そーだな…ざるじゃなくてボールに移して…氷を入れたら完成だ」

「おいしそうじゃない」

「さーて、飯だ飯」

飯を食っているところで、一本の電話が入った。

先に食い終わったアスカがとる。

ドイツ語か…ちょっと翻訳するぞ。仮にもドイツ語専攻だったか  
ら。

「ハロー！ママ！ひっさしぶり！

うん、ありがと……ホント？」

中々空気がよさそうだな…

どんな会話なんだろうか。

「それって私が知ってる人？…そんなことないわよ。

あいつは頼りになる奴よ。ちゃんとあたしの面倒見てくれるし」

俺のことじゃないよな…

「女の子？あいつも喋らないけどいい奴よ。

うんうん、本当？そうなの？」

レイのことも話してるのか。

意外だったな。

しかし義理の母親…ねえ…あつちの世界のかーちゃんも元気かな。

「でさー。その女の子なんだけど。無口なのにすつごく人相がいいのよね」

あとこないだ言った男の子も、頼りになる熱い男って感じ？  
あたし好きになっちゃったかも！」

フツ、俺がドイツ語分からないと思ったら大間違いだぞ。  
リスニングはもう通訳レベルなんだよ、喋れないけどな。

3時間後

俺の翻訳スキルの持続時間は3分だ…  
もう翻訳する勇氣などない。

「Ich führe jetzt bald zu Bett  
gehen.  
Auf Wiederhören. Gute Nacht」

ぴつと電話を切って、俺に電話を渡す。

「随分と暖かい内容の電話だったな」

「何で分かるのよ!!」

「匂い」

「匂い!？」

流石にドイツ語専攻でした（笑）  
など言えるわけないだろ。

「ややこしいわね…ミサト。先にお風呂に入るわよ!」

「もー入ったわよ〜レイもね〜」

そりゃ3時間も電話してたらみんな入るわ。

ちなみに俺は家に帰ったら真っ先にシャワーを浴びる男ですから。  
風呂に入らなくても別に問題ない。

「まあいいわ。私が最後なのはちよつと癪に障るけど…」

と呟いてアスカは風呂場に向かった。

ミサトも自分の部屋に向かって、俺はレイと二人になった。

テレビを見ていると、レイが何故かふらふらし始めた。  
みぎにすう〜と倒れたかと思ったら、ぴくんとなって左に傾く。

「うー…んっ…んう…んっ…」

「…何やってんだこいつ…」

「ふぁ…んう…」

「なるほど眠いのか」

人は眠くなると体が傾くんだな。  
レイはなぜか振り子になるけど。

「んむう……………」

左に傾いた瞬間、口がちよつと開く。

「…にやっ」

冷蔵庫から梅干を取り出す。

もちろん寝ぼけたミサト用の特別すっぱい奴だ。

それを指でつまんでレイの後ろに立つ。

「んん…んん」

右に傾く。

「次だ」

「んん…ふっ…」

左に傾いた。

「ほいっ」

「うっ…ん！？んん…！！？何これ…すっぱ…」

「おはよう」

「……」

ギリギリギリギリギリギリ

「悪かったから無表情のヘッドロックは勘弁してください」

何とか開放された。しかしレイがさっきから水を飲みまくっている。



すっぱいのは嫌いなのか？

「そんなレイにCCレモンをあげよう」

まるでレイが投げたようにコップが飛んできた。漏れなく眉間に直撃した。

「ごめんなさいでした」

「……」



### 53 アスカの精神崩壊は必ず阻止しよう。

「使徒、映像で補足。最大望遠です」

「ほう、こりやまた…神々しい奴だな」

作戦自体には参加できないが、作戦会議には参加できる。

それに万が一に備えて俺自体も初号機に乗ることになっている。

「どうするんだ？俺の初号機は凍結中。零号機と弐号機だけの作戦だ。」

しかも向こうはポジットロンライフルの射程外、しかもATフィールドのおまけ付きだ。

レイとアスカ…信用できんとは言わんがすこし荷が重過ぎやしないか？」

ちょっとした意見を言う。

アスカの精神が崩壊してロンギヌスの槍を使われてみなさい。今までの努力が水泡と化すだろうが。

「……でも私たちは手段を選んでいるほど余裕がないのよ。」

今の戦力はあれが限界。凍結解除は碇司令の絶対命令だから」

そういうことね。マダオにダンボールをプレゼントしてやらないと。

「…分かったよ。ただ、弐号機に何かあったら本人の意思に問わず下ろせ。」

今あいつらを傷つけたら色々面倒だ」

パイロットのいのちをだいじに。  
今日はそむいてあげよう。

というわけでエントリープラグの中に入って、レーダーで戦況を  
確認する。

高高度にアラエル、地上に弐号機、離れたところに零号機か。

「さて…お手並み見せてもらおうか」

といって俺はLCLのなかでおにぎりを食べようとした。

しかしごはん粒が水によって分離してしまった。

そしてラップと一緒にLCLに溶けた。

【おいしいわね】

食べたのかよ。

第3新東京市、雨が降り、視界があまり利かない。  
しかし今回の敵は衛星軌道上。視界は関係ない。

「これを失敗したらレイやシンジに迷惑をかける…ミスは許されな  
いわよ…」

完成型のポジトロンライフルを取り、スコープをのぞく。  
しかし射程外にあるため、うまく照準が定まらない。

『目標：未だ射的距離外です』  
「じれったいわね…さっさと来なさいよ!!」

アスカがモニターを破壊せんばかりに苛立っていると  
突然スコープが真っ白になった。

「っ!?!」

式号機の周りが光に包まれ、ハレルヤの歌が響く。  
ちなみに1オクターブ音程が外れている。

『敵の指向性攻撃なの!?!』  
『いえ、熱エネルギー反応なし』  
『心理グラフが乱れています!!精神汚染が…!!』  
『バカが!!さっさと戻せ!!精神攻撃だろっが!!』

「あああああああああ！！！！！！！！！いやあああああああああ  
ああああ！！！！！！！！」

式号機がもがき、アスカの悲鳴が聞こえる。

それでもなお上空にポジトロンライフルを乱射し、アラエルに攻  
撃をする。

「だめです！陽電子消滅！射程距離外です！！」

「式号機！ライフル残弾0！！」

「アスカ！！早く戻って…！」

「いや…ああああ！！！！私の…私の心の中に入ってこないでええ！  
！！！！」

アスカの頭の中から過去のトラウマが掘り起こされる。  
ちなみにトラウマとはトラとウマの事ではない。

「痛い！！！！いやあ！！！！……つあ！！！！」

「アスカ！！戻れ！！！！」

シンジが撤退を促す。シンジも必死だった。

アスカがここでやられてはロンギヌスの槍を使わざるを得ない。  
というより彼が最も恐れているのはあれである。鬱になる。

「嫌よ！！これ以上アンタに迷惑をかけたくない！！これ以上レイ  
の足手惑いにはなりたくない！！」

「お前の心がズタズタにされてもか！？お前バカか！？もしくはア  
ホか！？」

「ボケでもカスでもいい！！あんたの恩は返したいのよ！！！！」



『いいから……』

ネルフ本部内に揺れが発生する。

『どうしたの！？』

ミサトが慌てた声を出す。

モニターが第7ケイジを表示した、

そこには今まさに動き出そうとする初号機の姿があった。

『初号機！！凍結を強制排除！！！拘束具が破壊されます！！！』

『シンジ君！？何をしているの！？やめなさい！！！』

「ちょっと黙ろつかミサトさん」

『シンジ君!?!』

『し…んじ…』

「アスカを死なせたら全国のアスカファンが激怒するだろうが…  
みやむーの迫真の演技を無駄にする気が貴様ら」

『おまえはなにをいつているんだ』』

右腕の拘束具をぶっ壊して、真上に向ける。

「右京左京上京下京西京マスタースパーク!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

毎度おなじみのATフィールドを射出する。

S2機関搭載というだけあって前回よりもかなり高出力だ。

右京? ああ、京都市の事だよ。

『第7ケイジ天井から地上第1装甲板まで融解！！！！！！』

『まずい！メインシャフトが丸見えだわ』

「ほいじゃあ行ってきますゆえ」

『いつてら…じゃない！！！シンジ君待ちなさい！！初号機は凍結中よ！？』

「お友達を見捨てるよりかはマシさ。懲戒免職でも何でもしなさいな」

穴を登り、ジオフロントに出て、ATフィールドを反発させてジャンプする。

そして再び穴を登る。まるで80m弱のスパイダーマンだ。

『しんじ…来ちゃだめ！！』

「そらいつと来て見たくなる罪な俺を許してくれアスカ」

『アスカ…！今助ける！！』

『零号機！ポジトロンライフル発射！！…だめです！エネルギーがまるで足りません！！』

「使徒相手に通常兵器では役に立たんよ」



地上に出た俺は、強力なATフィールドで指向性攻撃を防ぎ、活動を停止した式号機を担ぎ上げる。

「お前は良くやったよ。正直言うと毛ほどにも役に立ってないけど」「どつちなよ…」

モニターの中で涙をぼろぼろと流しているアスカが映し出される。いかん病んでいるのに可愛いと感じてしまった…

とつとりあえず、何か一言…

「事実はこちらだ。お前は世界一の努力家として認める。だから自分の心を汚された傷でも、努力して直せ、お前にはできる」

『無理よ…シンジ…私には出来ないわよ…』

あのさ…長時間ATフィールド張るの結構辛いから早く納得してくんない？

「ええいゴタゴタはいい！後で霧雨カウンセラーにつれてってやるから」

『それって…ウチの隣じゃない』

「いい友を持って幸せだろ？俺ら（うわーくせえ…さっさと帰れよ鬱陶しい」

『下心駄々漏れの顔してるわよあんた…』

「まあ過去の事より未来の事ばっか考えても足元すくわれるから今のこと考えていけ！おk？」

『…なによそれ……OKよ』

「ならよろしい（ばしゅっ」

【ああああああおおおおおおお……】

アラエル消滅。

そのあとアスカの式号機は自ら立ち上がって帰還した。帰還するときのアスカの顔は、心なしかすがすがしい顔をしていた。

というか笑っていた。俺もモニター越しだからわからんが。

『式号機、精神汚染回復…シンクロ率が元に戻ります』

『まさか！ありえないわ』

『いや……なんというか…あのバカシンジと居たら過去の事なんかどうでもよくなってきたわ…』

何かしらね…笑えてくるわ』

アスカの中で何かが吹っ切れたようだ。  
ちなみにレイはなにをしているかって？



『プラグ射出信号は』

『だめです！プラグ側からロックされています！』

『やめるんだレイ！自分がなにをやっているのか分かっているのか  
！.？.』

ペンペンを人質に浅間山で籠城しているレイ。



『一生懸命戦っていた私を放って……碇君はアスカといちゃいちゃ……  
そんな説得でこれ以上私を怒らせないで……』

53・アスカの精神崩壊は必ず阻止しましょう。(後書き)

こぼれ話

シ「早苗さん、魔理沙、アスカのカウンセリングを頼む」  
早・魔「任せてください」

数日後、アスカは第3新東京市を代表する奇跡の大泥棒と化した。

54・人が危ないときは自分が犠牲になることをお忘れなく

「アスカく朝らしいぞ……って今日は泊まりだったか」

今日はヒカリのところで泊まるそうな。

さて…俺はどうしようかね…

「シンちゃん」

「何だ三十路」

ミサトの部屋の襖が開き、麦藁帽子と軍手にジャージを着たミサトが立っていた。

「ちょっと加持の手伝いに行くから、レイと一緒に家の番お願いね」

「はいよ」

「はい」

返事をするミサトはにこりと微笑んで家を出た。  
不覚にも殺意を抱いた。

俺たちはパジャマから着替えて（部屋は別々）飯を投げた。  
うまくおにぎりをキャッチし、俺も向かい合わせに座る。

「……？どうして笑っているの？」

「まあ食ってみろや」

「……（何故……？とても嫌な予感がする……）」

レイが不安そうな表情をしながら、意を決したようにぱくりと食べる。

しかし一度口に入れたとたんに、破で初めて味噌汁を食べた後のような顔をする。

「……これは……かつおぶし？」

「そう、これが世に言うおかかお握りです。美味いだろ？」

「……おいしい……」

微笑みながら幸せそうにパクパクと食べる。

「ははっ 美味いか、どんどん食いな。俺も食べるか」

「ふふ……碓君の作るごはんはおいしい……」

「そういつていただけると恐縮です」

といった感じでおかか、ツナマヨ、博多の塩、の3種類を食べた。  
ちなみに最後の一つはレイが食べたがすぐにトイレに直行した。

「塩が……固体の塩が喉に……けほっ……！」

あらまw

ゼーレ

『初号機のS2機関取得、弐号機パイロットの精神維持…シナリオから大きく外れているな』

『あの碇シンジとか言うパイロット……我々の計画に感付いているのか』

ゼーレのモニリスが慌しく喋る。

碇ゲンドウは欠席。今ではただの予算貯金箱と化している。

『死海文書ももはや役に立たん。全てあの碇の息子に覆されている』

『転生者…という説もあるな』

『まさか、ファンタジー物語ではあるまい』

『だがこのシナリオの崩壊…そう簡単には覆せん』

『碇…ゼーレを裏切ったか』

使徒襲来。俺たちはすぐに召集を受け、家を飛び出した。

アスカも携帯で連絡を受け、ヒカリを避難させてからネルフへ向かう。

剣崎さんが俺たちを車に乗せ、すぐに本部に到達した。

アルミサエル……レイが死ぬ……それだけはさせん…

レイはいつぱい居るがそれは他人のレイ。

あのレイは一人。世界で一人だけの綾波レイだ。

「なんてなwレイが死んだら俺も死ぬだけさwwふっへww」

「どうして私が死ぬの？」

「鬱だ死のう」

「やめて」

初号機の凍結は強制解除した。

つまり俺も出撃可能。

というより拘束具を破壊した今初号機を止めることはできない。

「よし……行くぞ」

『零号機、弐号機、初号機、発進準備』

右腕の仮設拘束具が除去され、射出口へ送られる。

通信モニターからミサトの顔が映る。

『いい？目標のデータは不明、レイが先行して。アスカは遠距離からの攻撃。』

初号機は万が一の場合に備えてATフィールド攻撃。

近づきすぎたらいくらシンジ君でもやられるわよ』

やはりレイが先行するのは避けられないか。

まあいいだろう。近づけなければいい話だ。

『では…発進』

「初号機出る！！」

『弐号機！！発進します！！』

『零号機、発進』

いつもどおり……いつもどおり……井津茂通り。  
そうだ、レイが来たらちゃんと守るだけ……それでも緊張する……

「大丈夫、俺ならやれる……俺ならやれる。俺ならやれる……ん？やれる？……」

### 以下シンジ君の妄想

【碓君…ありがとう……もうあなたを離れない……】

【レイを助けてくれたのね…バカシンジの癖にやるじゃない……好きよ……】

【碓君…これは委員長として…委員長としてなのよ…】

【シンジ君…私の…清潔よね…？】

【シンジさん……やっぱり貴方はシンジさんでした……】

【やっぱりお前は最高な奴だぜ…ずっと一緒に居たい……いい……？】

「……んふふ」



ふへへへ…もう俺の周りはハーレム王国だ。  
ここでさらに評価を上げたらもうみんな俺のトリコだ。

『初号機！シンクロナ率上昇！』

「っしやあああああああ！…！！やったるわあああああ！…！！  
ふうははははは！…！」

『初号機パイロットにリビドー反応検知！…！増大していきます！  
』！』

『…不潔』

「ふう……よしやるう」

『あ、いえ……反応消滅しました……』

地上に出た俺たちはまず目の前に居るヒモ、アルミサエルを視認

する。

『なによあれ、わっか?』

『スパイダーマンの糸?』

『絞った雑巾…』

『目標は大涌谷上空にて滞空。定点回転を続けています』

さつきから全く動こうとせざるくると回っている。

…アルミサエル…回ってるね…

『未だ動く気配ありません』

『シンジ君、目標に後200接近して頂戴』

『km?』

『出来ればメートルでお願い』

『はいはい』

200mすすむ、するとアルミサエルの回転が止まり、一本のヒモになった。

すると、そのヒモがとんでもないスピードでこっちに向かってくる。

『シンジ君!! 応戦して』

『うわっち!?!』

『目標!! 初号機と物理的接触』

『うわっ!?!? おわわ!?!?』

俺の体から血管のような物がビキビキと浮かび上がる。

おかしいな…俺こんなに鍛えてたっけ…

『危険です！！初号機の生態部品が犯されて行きます！！』

「おいおい…筋トレは血管を鍛えるんじゃないって…」

『レイ！アスカ！初号機を救出して！！』

ミサトの無線が途切れ途切れに聞こえる。

【う…うあ…シンジ…】

「ユイさん、血管が増えてますけど俺大丈夫？」

【だ…大丈夫じゃな…いわよ…うあ！！】

「あれ…何か息苦しいんですけど…あれ？」

ＬＣＬの海の中、もう一人エントリープラグを着た俺が居た

「誰だよ」

【俺】

「オレオレ詐欺はお断りです」

【じゃあ俺じゃない】

「なら帰ってください。他人と話してるほど暇じゃない」

【え？…ああ…うん】

そしたら帰っていった。気のせいだったのかな…

そして所変わって再び初号機の中

【う…うぐうう…！！ああああああ…！！…！！…！！】  
「………そっいやああ…！！」

とりあえず血管が気持ち悪いからATフィールドで跳ね飛ばす。  
そうすると、急に体がすっきりした。

大丈夫だったのか俺…

『目標、初号機から離れます…！零号機へ向かっている模様』  
『レイ…！早く避けなさいよ…！！』

『っ…右!』

零号機が右へ側転する。

しかし少しも止まったそぶりを見せず、右に進路を変更するアルミサエル。

しかし俺はアルミサエルの体に目を向けていた、

「コアは……あれか!」

【シンジ…撃って!!!】

若干中心部分に赤く光る部分を発見した。

手の平にATフィールドを集中させ、インダクションモードで照準を合わせる

「ふうう……よし…ロックオン」

ATフィールドが少しずつ大きくなり、辺りをオレンジ色に照らす。

そしてエネルギーが最大になったのを確認してから叫ぶ

「インパクトボルト!!!!!!」

アルミサエルはその攻撃を察知し、上に上昇して避ける。

しかしそれは想定済み、落ちてくる落下地点に先回りし、もう一度手を構える。

『碇君!!!』

「レイは俺たちの家族だ。それを傷つけたものは死刑。おっけーね?」

アルミサエルの周りを球体のATフィールドが覆う。

「つまりあなたは死刑です」

ATフィールドが圧縮され、アルミサエルは圧死した。

54・人が危ないときは自分が犠牲になることをお忘れなく(後書き)

こぼれ話

シ「魔理沙ああ！？カップ焼きそば焼いてどうすんだああ！？」

魔「焼きそばなのになんでこんなに乾いてるんだ？変な箱に入って

…」

## 55. せつかくなので代わりにレイの破壊も阻止しましょう

「……は？ガードを解いた？何の」

『いいから、少し来て頂戴』

「いや、俺今、伊達政宗のフィギュア買つか織田信長のフィギュア買つか悩んでるから後で」

というわけでアニメイト第3新東京市支店で電話をしています。  
碇シンジです。

いや〜こういう非常事態でもスーパーやアニメイトやら、ちゃんと営業するんですね。

『……………』

「分かったよ…じゃあすいません、これください」

「はい、こち亀67巻ですね、130円です。アニメイトカードはお持ちでしょうか」

『全然関係ないじゃない！！！！』

「はいはい、終わりましたよ。それじゃ行きますよ」

『私の執務室で待っているわ。来て頂戴』

アニメイトから出て、タクシーを拾ってネルフ本部へ向かった。

運賃は全て指令室に請求させた。



リツコの執務室は遠い。

というかややこしい所にある。

入り口を左に曲がって第5ゲートをくぐって…その付近のB32  
通路を右に…

そしてエレベーターでF24階に下りて、A114通路をまっす  
ぐ。

「これも計画の内か…リツコエ…」

所要時間約30分、結局迷った拳句マヤさんに泣きついて案内し  
てもらったことになった。

立ち入り禁止区域、何で俺をまたここに呼び込んだのかは謎だ。  
リッコがパスワードを入力している。

「……………」

ひとしきりパスワードを入力した後、カードキーを通す。  
しかし、ぴぴぴっと音が鳴り、認識しない。

そしてリツコ（ヤムチャ）の背中にUSPが突きつけられる。U  
SP拳銃…ミサトか。

「……………」

『無駄だぞ、葛城のパスがないと』

『こんなところで何をやっているのかしら？リツコ』

「……………加持君が居たのね」

三十路と加持さんだ。

加持さんが生きてたら、カプセルなしでリツコのやることがわかる。  
それに加持さんは証人にもなるのか…何の証人かはピンと来ない

が。

「この秘密…りつちゃん…見せてくれるか」

「ええ、いいわよ、ただしこの子も一緒にね」

「？」

俺に視線が集まる。

何この重々しい空気…

「……………こんちわ」

「シンジ君か、いいぞ」

「……………いいわ」

クソ重々しい空気の中、立ち入り禁止区域に入った。

「この空気を誰かどうにかしてください。  
話せません。」

アルミサエルのようならせん状のエレベーターを果てしなく下り、  
人工進化研究所第3分室に到着した。

「人工進化研究所…って…たしか……………」

「シンジ君、知っているのかい？」

「あれだろ？人間からゾンビに変貌するみたいなの？」

「いや…シンちゃん、それは違うと思うわ…」

とりあえず人工進化研究所に入る。

入ったとたんそこは、むき出しコンクリート。  
粗末に捨てられたベッド、何年も放置されたビールカー、置きっぱなしの薬。

「まるでミサトの部屋みたいだ…」

「はあ!?!」

「葛城ミサトの部屋よ」

「ここが…葛城が生まれ育った場所…」

「ちよつつちよつと!?!」

なんと悲しくて、重々しい部屋…

これでは無理やり心を開いて明るく接するのも頷けるな…

「…間違えたわ、あまりにも似すぎていたものだから…」

ここは綾波レイが生まれた場所。レイの深層心理の光と水は、  
このイメージが強いのかもしれないわね」

光と水? しんそーしんり? 一体どうということだつてばよ。

「光と水…つて…レイのどの辺りにその光と水が?」

「りっちゃん、俺たちはこれを見に来た訳じゃない。分かるな?」

「おい、聞けよ」

「分かってるわよ、加持君」

「解せぬ」

再び俺たちは移動。広くて大きな部屋に出た。  
しかしあたりはかなり暗く、照らされているのは地面のみ。  
その地面には

「骨…だな」

「シンジ君、まず頭を見なさい」

「…骨ですが？」

「…本当だ、白骨化してる」

「これじゃただの骨ね」

「……一応エヴァよ。最初のね。シンジ君のお母さんが消えた場所  
でもあるわ」

お母さん？俺のかーちゃん消えたのか？  
わけわかめと首をかしげる。

「碓ユイ、碓シンジ君の母親よ」

なるほどそつちか、そういえばあいつ俺の母親だったな。

…ユイさん…俺はユイさん消える瞬間を見てたんだっけ？

「まあいい。たとえそれが事実だったとしてもどうでもいいや。次  
行こうぜ」

「いいのか…？」

「まー本人がいろいろってんならいいでしょ」

「行くわよ、真実を見せてあげる」

ダミープラグ研究室、ここはレイが入っていたカプセルだ。破でも少しだけ登場した部屋。パイプ部分が人の脳の形をしている。

「これがダミープラグの元だというの!？」

「…真実を見せてあげるわ」

そう言っけてリツコは、ポケットに持っていたPDAを取り出し、パネルをタッチする。

スマートフォンか？

とかどうか言う思考は、次の瞬間、かき消された。とつぜん、周りの壁がLCLのプランターに変わり、生まれたままの姿のレイが笑顔で泳いでいる。

「レイ…」

俺が呟くと、プランターの中のレイ全員が俺を見返した。

まずい…こつこつとき…どつどつ反応したらいいか分からないの…

「碇シンジだよ」

「……イカリシンジだよ」

俺が苦し紛れに言った言葉をプランターのレイがオウム返しのように



うに高い声で言い返した。  
まずい…非常にかわいい…

「私は綾波レイ」

「……ワタシハアヤナミレイ」「……」

おお、これは中々可愛いし面白いw

「そう、よかったわね」

「……ソウ、ヨカッタワネ」「……」

非常に楽しくなり、3時間ほど調教し続けた。  
すると、周りに集まっていたレイたちが集まり、俺の元に泳いできた。

「いいか？」

【イイカ？】

いっせいに鸚鵡返しをする。

輪唱で切るんじゃない？

「かーえーるーのーうーたーがー」

【かーえーるーのーうーたーがー】

見事に成功した。

これはできるな。

実にこれは可愛いレイだ、ひねくレイとは違う。

『シンジく』『しんじく』

「分かったって、順番に教えていくからまずは一列に並べ」

「シンジ君が…レイと同じものに魂を入れている…」

「訳わかんないこと言ってるんなら黄色い救急車呼ぶわよ」

「ここにあるレイはダミーのレイ…」

人は神を拾ったから喜んで手に入れようとした。

だからそれで神からの罰が当たった。

それが15年前のセカンドインパクト

つまりセカンドインパクトは神からの天罰。

それでせつかく拾った神様も消えた

でも今度は神様を自分たちで復活させようとしたの。それがアダム

そしてアダムから神様に似せて人間を作った。それがエヴァ（イ  
ヴ）

エヴァには人の魂が宿っているの……………あれ？」

「和むわね〜こんなにレイがいて、シンジ君の言葉に静かに耳を傾  
けてるなんて…」

「いま思えば今のレイちゃんも成長したもんだな〜」

「いいか？お前たちは、一人ひとりの人間なのだよ。だから同じ考  
えを持つちゃだめだ。」

「ちゃんと自分で考え、生きるんだぞ。」

【はい、シンジ】

「聞いてよー!!」

手に持ったPDAを投げつけ、踏み潰したりツコ。  
事実上プリンターのレイの破壊は不可能となったがそれも気にせず  
怒りをあらわにして帰っていった。

【シンジって面白い】 【シンジ〜】 【碇くん〜】

「楽しく生きるのが一番いいことだ。お前たちもその笑顔を忘れる  
なよ」

【はい、シンジ〜】

55・せつかなので代わりのレイの破壊も阻止しましょう(後書き)

シンジ「ただいまー」

レイ「おかえ……きゃあああああああああ……!?」

代わりのレイたち「」「」「シンジく」「」「」

シンジ「気がついたらハーレム状態だった」

56・カヲル君が来たみたいです（前書き）

というサブタイトルだがカヲル君の扱いがよく分からなかった今日のころ

## 56・カヲル君が来たみたいですよ

増える綾波ちゃんはとりあえず元のプランターでおとなしくしてもらおうことにした。

同じレイがいつせいに俺にぎゅーっとしてくるもんだから誰がどのレイかわからなかった。

しかも生まれたままの姿でまた会うのはあれなものだから  
ネルフの資金で約200人分のレイの服を買った。  
ちなみに好みは事前に聞いてある。

余談だがレイの区別がつかなくなって本物のレイもプランターに叩き込んだのは別の話。

無論その後、俺もプランターにぶち込まれた。

すっかり機嫌を損ねたレイ（本物）は先に帰ってしまい、俺は大きく穴の開いた湖に立っていた。  
そこには倒壊した建物や戦艦が沈んでいる。

「……トウジもペンペンも、みんな家の事情で他のところへ行ってしまった。

ヒカリは…ヒカリと呼べる人物は俺と喋らなくなった。いう事は全部「トウジの玉返して」…

綾波には会えない、会う理由がない。

アスカ…三十路さん…ユイさん…俺…どうすればいい?」

俺が途方にくれていると、誰かの声が聞こえる。

まあ分かるけど。どう考えてもカヲル君です本当にありがとうございました

『ふーんふーんふーんふーんふーんふーんふーんふーん  
ふーんふーんふーんふーんふーんふーんふーん』

とりあえずカヲルを探しているとカヲルが居た。

なんかやけに桃を抱え込んでいるようだが…

「歌はいいね」

「まずお前が何故桃を抱え込んでいるのかを問う」

「歌は心を潤してくれる。リリンが生み出した文化の極みだよ。そう感じないか? 碇シンジ君」

「ああ、歌はいい。だが何でお前は桃を抱えているんだ?」

「知らない事はないさ」

「だめだ…全く話が噛み合わない」

とりあえず桃の件は諦めよう。どうせ月の都にでも行って豊姫さんに貰ったんだろ。

しょうがなしに名前を聞く。

「お前の名前は」



「僕はカヲル渚カヲル。君と同じ仕組みられた子供…フィフスチルドレンさ」

「ヒヒスチルドレン？なんだそれ」

「フィフスチルドレン、5番目の適格者さ」

渚カヲル…ついに最後の使徒ね。

あーあ…もう俺コイツ潰したらエヴァに乗らなくてよくなるのか…しかしマーク6…エヴァ六号機は来ないのか。

つまりカヲルはただの予備パイロット。

それってゼーレが強制的に押し付けたって事だよな。

無理やり月面で叩き起こされて地球で予備になって来いか…

カヲルから見たら迷惑なことこの上ないな。

「…お前も大変だな」

「？」

とりあえず軽く雑談をして俺たちは帰るべき家に帰った。

無論一緒にトイレにも行っていない。

「じゃあ、またな」

「うん。今日は楽しかったよ」

これが初対面に対する口の聞き方がよ。

使徒は学ぶのが早いがその代わりどこか激しくずれてるんだよな…



次の日、俺たちはレイとアスカに起こされた

「どうしたんだ？学校はもうないぞ」

「……思い出を忘れないために……学校で大切だったものを……」

「思い出の品？で、なんでおれが起こされたんだ？」

「あんたも来なさいよ、一応アンタもクラスの一員なんだから。」

学校の思い出の品を保管しとくのが残ったあたしたちとしての債務でしょ？」

んな債務聞いた事ねえよ。

「……」

「早く」

「……分かったよ」

乗り気じゃないがとりあえず行くことにした。

第3新東京市第吉中学校。もはやこの学校は疎開によって廃校状

態だ。

今、この学校に居るのは俺とレイ、アスカだ。やることがないからここにきている。

真面目な生徒は先生の指示によって疎開した、そいつらは無事に生きていくだろうな。

しかし自主避難したヤンキー共は、行き場がなく、ストリートチルドレンと化している。

まあクソヤンキーは俺の知ったことではない。

「嘆かわしいものだ……この間まではここはにぎわってたんだがな……」

「……あいつらも……ヒカリも……皆あたしたちの身勝手にこんな……」

「……………鈴原君も、相田君も……」

まあ大丈夫だろう……大丈夫だろうな？

……ごたごたはいい。とりあえず今はカヲルが動くまで待つ。

そしてカヲルが動けば、俺たちが止める。それで計画はひと段落だ

ポジティブに行こうポジティブに。

と、考えているとレイが俺の服を引っ張って俺を教室の端に連れて行く。

「どした？」

「学級旗……碇君、これを持って帰りましょう」

「学級旗か……レイとヒカリが描いたんだっけ？」

「いいえ、洞木さんが下書きをして私は色を塗っただけ」

なるほどね、学級旗は確かに大切なものだ。

とりあえずそこらへんからダンボールを拾って形作ってダンボ―

ルに入れる。

「じゃあシンジ、賞状も持って帰ろ」

アスカが手に持っているのは、ベルマークコンテスト全国大会優勝記念賞状。

そして体育祭学年優勝の賞状。仮装大会優勝『優勝者 霧雨魔理沙』の賞状。

「そういえば仮装大会って文化祭の奴だっけ？あれめんどくさかったなあ……」

「そお？仮装大会面白かったじゃない、霧雨が魔法使いの服になっ

てさ」

アスカ、あれ普段着や。

まあいいか。とりあえずそれもダンボールに入れた。

「とりあえず持って帰るものはそろったか？」

「ええ」

「もちろん、あんたは？」

そうか、俺も持って帰らないとな。

……何を持って帰ればいいんだ？

とりあえずトウジの股間薬を持って、ネルフ本部へ向かった。

56・カヲル君が来たみたいです（後書き）

こぼれ話

シ「股間薬どうしよう」

数時間後、レイとアスカのパンツにトウジの股間役を塗り込んでいた

「洗剤を替えたのかしら…股間がスーすーする…」

「あーん！おまたすーすーするう！！」



## 57・カヲル君はシンジと話したいようです(前書き)

少し後半は東方成分が多く分泌されているので  
知らない方はご注意を。

## 57・カヲル君はシンジと話したいようです

ホモエル…もとい渚カヲルが正式にネルフのパイロットとなった。  
カヲルが乗る機体はエヴァ弐号機のサブパイロット。

インダクシヨンモードの練習から使徒殲滅のタイム計測まで俺と  
ほぼ同格。

しかし、カヲルが使うのは主に銃火器だ。

ATフィールドはあくまで防御要因として使う。

「なるほどね…マステマを使いこなすのは凄いな…」

『タイム計測結果、1分43秒』

「やるじゃねえか」

弐号機の使い方はアスカには劣る。

しかし素質は見えるな。

だが……6号機はどうする……タブハベースで作られているはずだ。

まあおいおい分かってくるだろう。

先に風呂に入って家に帰った。  
流石にホモと一緒に風呂に入るほどお人よしではない。

「しかし風呂というものは実にいいものだ」

「そうだね、ずっと浸っていたいものだよ、これもリリンの生み出した文化だね」

「そうだな〜……………ん？」

ふと横を見る。異常なし、カヲルが居るだけだ。

「……………ふふっ」

「ん？」

もう一度横を見る。異常なし。カヲルが居るだけ…

いやちよつと待て…カヲルが居る地点で異常なのか？異変なのか？

「……………まさかw」

「そうだね、僕は君に会う為に生まれてきたのかもしれない…」

「少なくとも俺はそうじゃないと信じたい」

「そういえば、他の女の子たちはどうしたんだい？」

女の子？……………ああレイとアスカか。

「あいつらか？あいつらは避難勧告を無視した魔理沙と早苗って奴の所に遊びに行ってるぞ。」

「いや……遊びに行くというより、遊びに家に呼んでいるといったほうが正しいか」

「（……彼女も来ているのか……）そうか、彼女は元気かい？」

突然カヲルの表情が何かを思い出したかのようにきよとんとした顔になった。

「どの彼女かはピンと来ないが……」

「？……まあ元気だな、うん元気すぎるくらいだ」

「そうかい、変わらないね。人という生き物は」

「やっぱりコイツおかしいよ。」

「使徒って分かってるけどどう考えてもおかしいですよカテジナさん！！！」

「さて、そろそろ帰るか。レイたちに飯も作ってやらないとな」

「飯……食事の事かい？」

「普通そうだと、脳みそにウジでも湧いてるのか」

「そっ……そうか……」

先に風呂から上がった。

全く、不思議キャラが2人も居ると流石に疲れるわ。

「ようやく時が来たようだね……………僕もそろそろ始めよう。  
大学生君、君は好意に値する人物だったよ。出会って間もないけ  
れど」

事実カヲルとシンジの交流時間は30分にも満たない。

ゼーレ井戸端会議場、ここではモノリスを使ってゼーレの老人が  
会議をしている。

なぜわざわざモノリスを使うのかは謎であるが…

『ネルフ、我々ゼーレの実行機関として結成された組織』  
『われらの計画を実行するために用意されたもの』

よぼよぼの老人の妄想をわざわざ実行するほど人はお人よしの組織ではなかるうに。

『だが今は一個人の古紙回収所と化している』  
『左様、われらの手で取り戻さねばならん』

元々人類はあんただけで占領するものじゃないことは確かだ。

『約束の日の前に』  
『ネルフとエヴァシリーズを本来の姿にしておかねばならん。碓、ゼーレへの背任、その責任は取ってもらおうぞ』

指令室、報われない苦労人の冬月と災難な父親、ゲンドウが今日もダンボールを運んでいる。

しかし指令室の限界を突破したダンボールとブルーシートが2人の行く手を阻む。

「冬月、アダムはどこへ行った」

「見当たらない、今やATフィールドを展開できるティツシュとなつているだろう」

「そうか、それでは満足に鼻もかめんな」

「最初の人類が人の鼻水で汚されると、拒絶するだろうな」

「当然だ、私でも拒絶する」

「ならダンボールも拒絶して欲しかったものだな」

『碓ゲンドウさんへお届けものでーす』

「……………」

今日もダンボールから這い出し、はんこを押すゲンドウであった。そしてダンボール料金を払う冬月。

……………どっちもどっちである。

次の日、俺は魔理沙の部屋に入ることにした明らかに不法侵入だが気にするな。

このためにカードキーまで拝借してきたんだ。少し気になることがあつてな。

とりあえずスラッシュして部屋を開ける。

ふむ……中々オサレな部屋ではないか。

あいつらが買物から帰ってくるのは恐らく30分後。

子の短時間で可能な限り調べるのだ。

といつてもそんなに重要なことではないが。

「カヲルがきよとんとした理由はなんだろうねえ

レイとアスカから聞いたが何も交友関係は認められず。

なら早苗さんか魔理沙のみということになるな」

明らかに個人的な追及心で法律違反を犯すが…キニスンナ！

どうせ捕まんないし、ばれても家隣だし、おすそ分け みたいな

感じで何とかなるだろ。

カードキーの拝借は言い訳不可能だが。



というわけでリビングに置かれていた薄いアルバムを取り出した。  
それを開くと、カラーの写真が何枚も貼られている。

……これかなりレアものじゃねえか？

「これって…傍月抄の…ん？」

真ん中に居るのは知ってる人は知っている博麗の巫女。

その右隣に映ってるのは魔理沙。

左側には吸血鬼のレミリアとPAD長と呼ばれる咲夜さんも居る。

後列には銃剣を持ったたくさんの人型ウサギがたくさん居る。

と言ったら知らない人が聞いたらなんのこっちゃ分からないだらうな。

簡単に言えばバニーガールだ。

そしてそのウサギの真ん中には双子っぽい人が映ってる。  
確か月の都市の姫だったな。豊姫って人と依姫って人。

「すっげーレアもんじゃんこれ…だが元の世界ではただのイラスト  
となるのがオチだろうが…」

で、だ…問題はそれじゃない。

その姫の中心に映っている人物だ。  
流石に目を疑った。

「……カヲル…だよなこれ…」

制服を着てにこりと微笑んでいる。

何度も目をこすった。だがその幻覚は消えない。

「……見なかったことにしよう。これ以上詮索する必要もあるまい」

目の前にある現実を逃避して無言で家に帰った。

あと、台所に置いてあったミニ八卦炉に似たものも拝借した。

本物だった。

57・カヲル君はシンジと話したいようです(後書き)

こぼれ話

ミサト「エヴァってなんなの…!?!」

リッコ「麻帆良学園本校女子中等部2 - A および3 - Aの生徒…吸  
血鬼よ」

## 58・カヲル君は全てを話したいようです

第7ケイジ、エヴァ弐号機格納庫

アスカの予備パイロットである渚カヲルが、その弐号機に手を差し伸べる。

「さぁ行こうか。惣流・キョウコ・ツエッペリン、アダムの分身、そしてリリンのしもべ」

【しもべ言っな、って言っても無駄ね。あなたの事だから】

「僕だつて強引な事はしたくないさ。僕は大学生君という存在に興味を持った、それだけさ」

【同感ね、さぁ行きましよう】

弐号機の4つの目が赤く光り、拘束具を破壊する。

それと同時に発令所に警報が響いた。

「エヴァ弐号機起動!!」  
「そんな馬鹿な!? アスカは!」

ミサトが突然の出来事に慌ててパイロットの確認をする。

「自宅でババ抜きをしている模様!!」

「じゃあ一体誰が!」

「無人です!! エントリープラグ未挿入!!」

ミサトとは遠隔操作を疑ったが、それはないと確信した。

事実エヴァに近づくことが可能なのは整備員、チルドレン、B  
A級作業員のみ。

そこで裏切り者を確認すると即座に抹殺される。

そのような状況下でエヴァに工作をするなど不可能な事だ。

「暴走…」

「いえ! セントラルドグマにATフィールドの発生を確認!!」

メガネがモニターを見て報告する。

「弐号機から!」

「いえ! パターン…青…間違いありません…使徒です!! 使徒による遠隔操作です!!」

「何ですって……！？……初号機パイロットは！？」

「更衣室、確認済みです」

何故更衣室に居るのか疑問に思ったがなりふり構ってられない。  
シンジに連絡を取り、初号機に向かわせる。

「なるほどね……Mark・06は使わず、弐号機を使うか」

恐らくあいつは俺の存在に気付いているな。

プラグスーツを密着させ、初号機のエントリープラグに入る。

『エントリープラグ挿入』

『S2機関、稼動開始』

『ATフィールド出力上昇』

「……生と死は同価値、だが……生きることと死ぬ事は全く違う意味だ」

操縦桿を強く握り、意識を集中させる。

初号機はいつもの射出ルートを進まずに、

特殊な通路を通じてロックボルトが外された。

目の前には大きな穴。これがセントラルドグマへと続く穴か…  
なんでこんなに分かりやすく作るんだよこのネルフ。



『いい、シンジ君。目標はこの真下に居るわ…出撃、いいわね?』  
「言うまでもない」  
『もうすぐレイを呼ぶわ、それまでなんとしてもアダムに接触させないで』  
「分かったって。念を押すな念を」  
『念を押さないと人類が滅びるのよ!!』

まあ実際はリリースだから滅びることはまずないだろうに。

「ほいじゃ、行ってきますよ」

『エヴァ初号機、降下開始!目標を追撃!!距離、約1200』

まあ大体ね、セントラルドグマに行くという地点で目標は見当違  
いなよ。

行くのならどうせなら指令室でしょ。

だが指令室はたとえ使徒であろうと入ることは不可能だ。  
そう、『ダンボール』というATフィールドを越える真の壁に阻  
まれて。

というか誰も近づかないだろう。

「お、居た居た」

式号機とカヲルが降下している。

さて…どう料理してくれようか…

「あ…いや待てよ、ユイさん」

【どしたの？】

「式号機のコアの中ってキョウウコさんだよな？」

【ええ】

「意識は？」

【ビンビン】

「式号機にプログナイフが刺さったら？」

【キョウウコさん痛い】

「どっしよ」

【知らない】

しばらく空中で静止して首をかしげる。

ちなみに初号機も首をかしげている。

『シンジ君は何をやっているんだ？』

【さあ…？】

少しの間考え続けて結論にたどり着いた。

「なるほど！カヲルを攻撃すればいいのか！！死ねやボケエエエエ

「……！」

プログナイフを装備し、カラルに向けて思い切り叩き込む。  
しかしATフィールドによって守られた。

「ATフィールドか！」

『そう、君たちリリ』『ギギギギッ！！』『領域心の』『ギイツイ  
イイイ！！！』

リリンも分かっているん』『ギギギヤギギギ！！！』『は誰もが持  
つ』『ギギイ！！！』

の』『ギギギギ！！！』『だと言つ事を』

ほとんど聞こえないんですけど……

「なんだって？」

『……そう！君たちリリンはそう呼んでいるね！！！何人にも犯さ  
れぬ聖なる領域！！』

心の光！！リリンも分かっているんだろう！！ATフィールドは  
誰もが持つ！！

心の壁だと言つ事を！！』

そりやそうだ、ATフィールドは絶対恐怖領域。

非常に高い防御性と攻撃力を持っているが、その元は人間が持  
つ拒絶心。

それを十分に活用できるのが使徒とエヴァだ。

「……うおっ！？キョウウコさん！？」

突然初号機の目の前をカタター状のプログナイフが横切った。

【大学生君！ゴミン！！】

「んな軽い心でプログナイフ振り回すな！！」

カヲルのATフィールドからプログナイフを引っこ抜き、  
弐号機のプログナイフにぶつけて力を相殺する。

一応弐号機の中身は女だ。女を傷つけるのは人道に反する。

【シンジ！キョウコさんを倒しなさい！！】

「お断りします」

【でも彼女は本気なのよ！？】

「俺は！！！！大切な仲間はずっと傷つけない！！」

皆で生きて！！平和な世の中を取り戻すんだよ！！」

『それが破滅を導く事だとしても？』

「……………お前は何故リリースに向かう！！」

なぜサードインパクトが起きないのにそこに向かう！！」

そういつと、カヲルが少し目を閉じて懐かしそうに話す。

『サキエルが企画した事だからね、里帰りだよ』

弐号機がプログナイフを離した。  
ついでに初号機も操縦権が失われた。

【えっ】

【えっ】

「えっ」

『？』

里帰り？

「…へ？里帰り？」

『そう、最初のころだったかな？』

久々にアダムに会いたいと思ってサキエルが行こうとした。

だがリリンにサキエルは阻止された。エヴァを使ってね。

そして次にシャムシエルもアダムに会いに行こうと思った。

しかしことごとく阻止された。

そのうち乗り気ではなかったラミエルも霧困気に負けて行くことになった。

そして次にアダムを見つけたガギエル。

ただマグマで寝ていただけのサンダルフォン。

それぞれ色々な方法で里帰りを決行したんだ』

…え？え？なにこのファミリーな使徒…

「何か和むなそれ」

『そうだろう？リリンが拒んでいなかったらすぐにアダムにいったんだけど…』

そして霧困気に負けた僕もアダムの居る、セントラルドグマに行つた。

でもそれはリリースだった』

アニメ版のあれか。

『別に僕はアダムの事をそこまで良く思っていないし、里帰りなんてどうでもよかったんだ。』

だから僕は好きなシンジ君と一緒にいるなら、とアダムのところ

へ行った。

でもリリースだった。失望したよ」

【リリースって確かレイの事よね？】

ユイさんがふと聞く。

気がつけばもう既にターミナルドグマまで侵入していた。

ターミナルドグマはあたり一面が塩の柱で覆われている。

何故塩なのか不明だ。

『そう、初号機に捕まれてふと上を見上げると3人目の綾波レイが僕を見下ろしていた。』

それは無表情ながらも、僕を同情する様な目で見ていたよ。』

【綾波レイ…】

【惣流家には全く関係のないことだけどね…】

「そーいう事言っつなよ」

ターミナルドグマで正座してカヲルの話を聞く初号機と弐号機。

「でもよ、2週目以降は何で？」

『…なんとなく…かな？暇だったからね』

「…色々突っ込みたいところがあるがまあいいとしよう。」

もう一つ、あのレイは一体何者なんだ？」

『知らないよ』

………は？

『最近リリースが行方不明になったと思ったら僕らより早くこっちの世界に来てたんだ。』

本当ならリリースは僕と一緒に月の都市に行くはずだったんだけど

……』



「……………お前らホントにファミリーな奴らだな」

『ほめても何もでないよ』

「ほめてねーよ」

しばらく俺たちは考えるように笑いあつた。

しかし里帰りで地球規模の被害って…

ファミリーな使徒だがパワフルな使徒だな…

『さあ…これで僕が言えることは最後だね、さあ…僕を消してくれ』  
嫌だ」

『え』

「人潰させるってお前どんだけグロいんだよ」

殺人などまっぴら御免被るわ。

と捨て台詞をはいてカヲルを掴んでお持ち帰りした。

「えーこちら初号機、第17使徒の説得したんだがどうすればいいですか？」



58・カヲル君は全てを話したいようです(後書き)

こぼれ話

シ「魔理沙とカヲルの関係って？」

カ「よき友人？」

魔「化け物と人間」

59・世界は終わりの時を迎えるのかは謎です(前書き)

ちょっと本気出してみた。

59・世界は終わりの時を迎えるのかは謎です

レゾンデードル 存在意義

ここにもいい理由

自分の生きていく意味

第1の少年 碇シンジの場合

最後の使徒は全てを話した。

少年は使徒を生かした。

なぜ生かした

「俺はただ人を殺すのが嫌だっただけさ」

自分たちとは違うのに？

「使徒だろうと人間だろうと同じ生き物としてこの世界に居るもの。全ての生物の価値は全て同じだ。ただし害虫と害獣は除く」

人類の敵なのに？

「いや、レイも同じ使徒だ。だがレイもカヲルも思考するということが出来ると出来る。」

そしてコミュニケーションをとることが出来る。だから言ってる奴は、言ってるからせる。やたらとデカイ聞かん坊はお仕置きするだけだ」

ライトで照らされる音が聞こえ、レイが姿を現す。

『だから他の子を殺したの？』

「……うん、レイ。なんでいきなり現れるの？「こごと」なの？」

『だから他の子を殺したの？』

「あー俺の意見は無視ですか、だって話しても聞かないじゃんあい  
つら」

『私と同じなのに』

「それ以上詮索したら抹茶アイス買ってあげないぞ」

ライトが消え、レイが消えた



《疑問》

分からん、実に分からん。  
分からんねえ…

人が生きる意思を持つことが人を生かすことにつながるのか。  
しかしこの世は生きる意思を失った人間も生かされる。  
自殺願望を強制的に封じられ、また生かされる。  
そして生かされた奴はそのまま精神を極限まで追い詰められ、破滅する。

人間が生きるという事は何につながるのか。  
企業や人のために働く機械になることが生きることなのか。  
はたまた全てを失い、自由にさまよい続けることが生きることな

のか。

何かを達成し、何かの壁にぶつかる、その何かを達成するために何かの壁を越える。

じゃあ生きるってなんなんだ？

カヲルは生きる意思を失った。だが俺はそいつを生かした。それは本当にメリットにつながる事なのか。

じゃあ使徒が生きる意味はなんなんだ。

知恵の実の実る楽園に迫る敵：リリンを追い出す。

それが何かのメリットにつながるのか。

知恵の実を食べられたことで何か損はあるのか。

人が何かを食べ、体を生かす。

それが本当にメリットにつながるのか？

死ぬということは本当に損なのか？

だが死ぬと言われたらそれは体が拒む。

だが生きるということでもそれがメリットにつながるとは考えられない。

《じゃあ生物はどうすればいいのか》

そもそも生物が生まれること自体が間違いなのかもしれない。

生物が生まれることによって地球という惑星を食い荒らす穢れが生まれた。

じゃあ俺たちは何をすればいい

何もしないほうがいい。

《自分は人を必要としている?》

俺は人を必要とする。

共に生きるパートナーが必要

共に生きる世界が必要

《それが他の人のためにならなくても》

俺は生きたい。

生きる人が居なければ俺は何も出来ない。  
俺以外何も無かったら何も出来ない。

何も見えない  
何も聞こえない

それは何も無い真っ白な空間に一人取り残されることだ。  
人は一人では生きられない。

《自己中心的》

…そうかもしれないな。

《何故エヴァに乗るのか》

俺は何かをするためにエヴァに乗るわけじゃない。  
人類を守るためでもない。  
レイを、アスカを守るためだ。

俺は結末を知っている、だからあんな結果にしたくない。

《だからエヴァに乗るのか》

それであいつらが笑って暮らしていけるなら俺はあいつらの為になら俺が犠牲になる。

《レイやアスカの、他の人のためにエヴァに乗るのか》

俺なんて自分の事しか考えられないちっぽけな存在だ。それが他の人のために役に立つなら命も放り投げる。

『嘘ね』

「なんだね？今度はアスカですか」

『そうやって強がっているけど、自分の命が失われるのを怖がってんじゃない』

「まあそうだろうな」

『自分が死ぬことで他の人が笑ってられるなんて、ありえないじゃない』

「そのことには激しく同意だ」

『自分が人に求められていることを知らないの？』

「知ってたさ」

『あたしは少なくともあんたを求めてるわ』

「愛の告白k t k r」

第2の少女、惣流・アスカ・ラングレー 彼女の場合

いつの間にか…エヴァに乗ってる……なんなのよこれは…  
何を信じればいいのか…どう信じればいいのかこのポンコツを…  
シンジもレイもあたしを信用してくれてるのに…  
あたしはその信頼に答えることなんて出来やしないのよ

『なーにマイナス思考になってんだ』

『他人の中の自分を必要としているのね…アスカは』

そうよ…あたしは寂しいのよ…  
誰かとは慣れるのはもう嫌なのよ…

『分離不安って奴だな』

『…他人と離れるのが怖いのね』

……

『お前の生きる糧としている物、お前の中に幸せがあれば、お前は  
大丈夫だ』

『自分を卑下することで成長することは出来ないわ』

『がんばれがんばれできる絶対できる!!!!!!って感じで。

おk?』

……あたしを見捨てないの？

『んなことするか馬鹿が』

『アスカは見捨てないわ』

……あたしはここにいてもいいの？

第3の少女 綾波レイの場合

私は誰：綾波レイ、あなたは誰？

『綾波レイ』

あなたも綾波レイなの？

『そう、綾波レイと呼ばれるもの、皆、綾波レイと呼ばれているもの』



どうして…皆私なの？

『他の人が、私を綾波レイと呼んでいるから』

『俺はガンダムだ』

あなたは関係ないわ、綾波レイと呼ばれるものは…私。

あなたは私じゃない、私は綾波レイ。

『偽りの心と体、その中身は綾波レイ。碓君に心を育てられた綾波レイ』

違う、私は私。それ以外は綾波レイと同じもの。私は私だもの

『あなたは人の真似をしている偽りの物体に過ぎないのよ。

ほら、何も見えない、何もわからない心があるでしょう。

本当のあなたがそこにいるの』

私は私、他の人とのふれあいの中で、私の心は作られたの。

何もなかった私を、碓君が心を育ててくれた。

誰とも触れ合えなかった私を、葛城三佐が触れ合わせてくれた。

そしてその私を、アスカが分かってくれた。

クラスメイトたちが私を迎え入れてくれた。

私は、もう人形じゃない。綾波レイという、一つの人物なの。

人形だった私はなくなった。もう、私は迷わない。

家族、友達、私の心の居場所はたくさんある。

何もなかった私じゃない。

《それが、絆》

『本当のあなたは他にいるのよ』

あの子達も、一人ひとり別の心を作った。  
碓君によって。これからは彼女たちも、一人ひとり心を持って生きるわ。

『自分が生きることが怖くないの？』

怖くないわ。家族が居るもの。

仲間が居るもの。

怖くて泣いたときも、誰かが助けてくれる。  
誰かの助けがないと人は生きられない。

『仲間：分からないわ』

仲間を知って、仲間を思いやるの。

心をわかって、心を思いやるの。

分からないの？

『分からないわ、私は死にたいの、無へと還りたいの』

生まれる前に還る事はできないわ。

死ぬことはすなわち何も出来ない。

何も感じることは出来ない。

そんな世界は、私は嫌。

…でもその日を願っていたのに。

私は怖い。今は、何もなくなるということが怖いの…

《そして…何故か人類の補完が始まる》

《終わる世界》

《Do you love me?》

「補完の前に腹減ったんだけど」

## 60・使徒も動揺するときには動揺します

「……………!!!」

補完が始まったと思ったら、いきなり意識が戻った。  
目が覚めた場所は、いつもの病室。

…謎だ。謎過ぎる。一体何が起こったんだ？  
一体みんな誰と戦っているんだ。

「碇君！」

「バカシンジ！！」

「気がついたかい？碇シンジ君」

3人の声が聞こえ、首を傾げる。

そこにはアスカとレイ、そしてカヲルが居た。  
すまない、ホモは帰ってくれないか。

「……………私は今まで何をやってたんだ」

「僕を持ち帰ったと思えば突然気を失ってしまったんだよ」

……………へ？

「なにになに何なの？どうということなのカヲル君」

「言葉の通りさ、気を失ってた」

「君がなにをいつているのかわからないよ」

「状況だよ、さあ、僕が起こしてあげるよ」

カヲルに背中を支えてもらい、とりあえず体を起こした。

一体何があつたのかをとりあえず皆で考えることにしよう。

「あたしたちが来たころにはもうカヲルを捕まえてたころだったわね？」

「ええ」

「……そつから何があつたっけ……」

「……知らないわ」

だめだこいつら……早く何とかしないと……

「簡単に言つと、僕を持ち帰つたと勝手に気を失つて、ここに運ばれたつてことさ」

「なるほど」

「ちなみに君は目を覚ましたら退院していいそうだよ」

「ふむ」

「あと、僕は葛城三佐のところまで暮らす事になつたよ」

「ほうほ……へ？」

空気がしばらく固まり、レイとアスカと俺は互いの顔を見合わせ、その後全員でカヲルを見た。そして再び顔を見合わせた。

「……そーなのか」「……」

「よろしく、みんな」

ちなみに里帰りの件は事前にレイたちにも話したそうだった。

レイは無表情だったが、アスカはorz状態だったそうだった。



というわけで何だかんだあって、帰り道。

鈴原が戻ってきたと聞いて帰り道に家に行った。

しかしそこにはユイレベルに美人な女性が居ただけだった。

……誰だっただらうかあの人。関西弁だったけど。

「……カヲル君…あなたは使徒だったの…？」

「昔の話だよ。里帰りをするにもアダムがティッシュユになってちゃ  
どうにもならないよ」

「テッシュユ？」

アスカが不思議そうに聞く。

「碓司令がアダムをなくしてしまったそうなんだ。

今や彼は指令室から出ることもままならないけれど…」

最初の人類が古紙回収所に行ってしまうのはいただけないと思う  
ね、良く思っていないけど」

里帰りが不可能となった今、カヲルはただの人型の使徒。

つまりただのチルドレンとなったのだ。いや、覗きをしたわけで  
はないが…」

「そういえばリリンは学校というものに行っているそうだね、僕も  
いけるのかい？」

「お前らの大帰省ラッシュユのせいで廃校になったよ」

「そうか、残念だね…」

ケンスケはまだ疎開中、ヒカリもか…何時になったら帰ってくる  
のかね…」



もう二度と帰ってこないかもしれないがな。  
まあ別にはした奴らだしどこに行こうが死のうがどうでもいいけど。

「大体さ、帰省阻止であたしたちが借り出されるなんて…ちゃんちやらおかしい話よ」

「でも…帰省を止めないと人類が減ぶのよ…」

「それもおかしいわよ、なんで使徒とアダムが一緒になったらサードインパクトが起こるのよ」

「こまけえこたあいいんだよ、俺たちの敵である使徒が来る理由もなくなつた

今はそれで何とかなるだろ。細かいことを気にしてたら身を滅ぼすぞ」

しばらく歩いて俺たちは廃墟となつた元々通学路だつたクレーターに立つ。

ここで俺たちはたまにだが学校に通つていた。場所。

カド屋のパン屋も焼け果てて今では見る影もない。

「戦いの傷跡は大きかったようだね……」

「いまじゃただの不の遺産だ」

「……………」

「……………」

今考えてみると、随分と大きな犠牲を出した（主に股間）。

トウジの言う通り下を向いて戦ったほうがよかったのかもしれない。

まあそんなことしてたら死ぬのがオチだが。

「まーあれだ。死者が出なかっただけ儲けもんだよ」

「…そうね。家をなくした人たちは…別だけど」

「帰る家…ホームがないとどうにもならない。リリンもそれは同じなんだね」

「カヲル……あなたは後悔していないの？」

レイがすこしカヲルを睨む。リリスとタブリスは仲が悪いのか？

「後悔…分からないね、使徒はあまり心理を深く学習することは出来ないから」

「…そう」

ふむ…使徒同士の会話はかなりぎこちない…と。

こいつらはこんな会話をするために里帰りをしようとしたのか。何かかわいそうに感じてきた…

「サキエルの神経を疑うなこりゃ…」

「あのだでかい使徒は何をどう考えて里帰りを企画したのかしら…」

「さあな、さて、帰るか。過去の事より現在の事だ」

俺たちは静かな言い争いをしている二人の襟首を掴んで引きずって家に帰った。

「きゃー！！！！！！カヲル様ああああ！！！！！！」

まあ俺の部屋に行くには避けては通れないルートを通ったのである。

何しろ女性に人気の高い渚カヲルである。彼女の被害を受けるのはしゃーない。

「なっ！何だ！？リリンは僕に対して性欲を感じているのか！？  
だめだ！この感情は異常だ！しっ…シンジ君！助けてくれないか  
！？」

「あー…やっちまったなあ…」

「東風谷の目の前を通ったのね…」

「使徒も慌てる…」

60・使徒も動揺するときには動揺します（後書き）

こぼれ話

魔理沙「カヲル…？おまえ何やってるんだ？」

早苗「カヲル様あくもう一生私は離れません」

カヲル「魔理沙さんか！お願いだから彼女を引き剥がしてくれないか！？」

魔理沙「まずおまえが何で地球に居るのかを聞かせて欲しいぜ」

レイ「？」

アスカ「は？」

シンジ「あーなるほどね…」

61・戦いときは近いです、覚悟していきましょ(前書き)

アンケートご協力感謝します。

結局 5と3、そして2が多数となったので採用します。

結論 幻想郷から援軍を送り込んでエヴァで戦自潰すから

ネルフの本気見せてやるよお!!!

## 61・戦いのときは近いですが、覚悟していきましよう

2016年

クレーターと化した町。第3新東京市はついにほぼ全員が避難した。

もうこの町も放棄されるだろう。だがライフラインの機能。最低限の食料保存のシステムはなっている。

人類補完計画、それはかけた心を持った人類を一つにする。もつと簡単に言うと、人類をLCLにしてしまおうぜ作戦。いわば自爆テロだ。

「……人類を消す…人類滅亡か…某動画を思い出すな……」

でーん！てつてつてつてつてつて…つてな。

「…はあ…戦自が来たら俺たちはどうなるのかね…」

さすがにネルフ内部の敵をエヴァで倒すことなんて出来ないからな。

何をするにもそれが質量の限界なんだよな…。

どつすりゃいいんかね…





コンフォード17

「はあ…どつすねばいいのかしら…」

シンジとアスカが着ていたユニゾンの服を着て、  
頬杖をついて悩

む緑髪の少女。

その少女の名は東風谷早苗。知る人ぞ知る世界、『幻想郷』に住まう少女である。

少女はシンジと同じ境遇に入った人間：いや、現人神である。

それ故に結末を知った東風谷は今ものすごく悩んでいるのである。

豆知識だが他人には敬語で話す、あと現人神と言ったが巫女でもある。

守矢神社つて場所に住んでるがこの際どうでもいい。

「どしたー？早苗」

黒いチエーン付きのドクロTシャツにジーパンとラフな服装の少女は

東風谷の友人であり、理解者である少女、霧雨魔理沙である。

シンジ、レイ、アスカとも交友関係がある少女で、色々と世話好きである。

ちなみにエヴァの結末は知らず、危機感がない。

ちなみに魔女である。

「なんか元気がないじゃないか、ついにシンジに振られたか？」

「魔理沙さんは危機感がなさ過ぎます！」

「は？」

「戦自がネルフに介入してくるんですよ！？ネルフが戦自にやられるんですよ！？」

「せんじ？……………」「考えるな！感じるんですよ！……………」最近お前なんか変だぞ……………」

と言うわけで東風谷が説明を始める。

戦自がどういう意図で出来上がったのか、どういった装備を使っているのか。

専門用語丸出しで説明をする。

「つまり！戦自が本気を出したらネルフは滅びちゃうんです！！」

「……………？……………ん……………まあ……………とりあえずその集団が本気を出したらネルフやられる、と？」

「そういうことです、やっと脳天気な魔理沙さんでも飲み込めたそうですね」

不思議と殺意が湧いた魔理沙であった。



俺は家に帰った。  
アスカとレイは昼寝中。  
相当な仲良しだな全く。

「カヲルは…あれ？居ない…」

カヲルの部屋を見るが居ない。  
机や押入れを探すがやっぱり居ない。

「どこいったんだ…」

机を開けると手紙が一通置いてあった。  
そこには『シンジ君江』と書いてあった。  
また分かりにくいところに…

とりあえずそれを手にとって読む。

最初の文章に愛しの…って書いてあるがそれはスルーしておこう。

『碇シンジ君、歌を歌いに行つて来ます。夜には帰ってくると思うのでご安心ください』

手紙はそこで終わっていた。

やさしい表情になって手紙を握りつぶした。

「そろそろ始めるぞ」

「しかし…老人たちが黙っていないぞ」

「手は打ってある」

ぱんっ

「…そうか、それでは始めるぞ」

「「ダンボール廃棄計画を」」

『えーこちらは、長門商事の古紙回収車です。  
只今長門商事は特務機関ネルフの貸切になっており…』

「時が来た、今こそ幽閉されたダンボールから開放されるとき」

「そして部屋の自由を、紙の壁を解き放つときがきたようだ」

「碓ゲンドウに自由を」

「冬月コウゾウに空間を」

「そして明るい指令室を取り戻すのだ」

『急いでくれませんか？』

「「あつすいません」



幽閉された部屋、しかしダンボールではなく、電子機器によって幽閉されている。

その部屋の温度は冷却機によって地上と比べて何倍も寒く、吐息が白くなるほどの温度である。

その寒い部屋の中で一人、一生懸命にパソコンを操作している女性が居た。

葛城ミサト。彼女はセカンドインパクトの真意を知るために操作していた。

「……………」

そのデータは、加持リョウジが渡したUSB端子によるものだ。

しかしそのUSBは暗号化されており、その解析はこの部屋でないと出来ないものだ。

「データの解析くらいもつと楽にやらせなさいよ」と愚痴りながらもパソコンを操作する。

「…来た」

USBのデータが表示される。

そのデータを読むためにパスワードを入力し、文字化けを改善する。

「へえ…これがセカンドインパクトの真意だったのね…」

すると、突然日本語化された文字が化け、赤い画面に変わる。

その赤い画面には埋め尽くさんばかりのDELETE（削除）と言っ文字。

「気付かれた!?!」

とつさにUSP拳銃を構え、辺りを見回す。

時刻は、6時00分。

「いえ…違うか………」

拳銃を下ろし、覚悟した表情をする。

加持から得た情報と同じ…

「始まるのね…」

第2東京からの法的保護の破棄… A - 801。

絶望のときである。



コンフォード17、そのベランダから俺は多数の機影を確認した。  
すぐさま付近の双眼鏡を覗く。

「…あれはVTOL…なるほど…MAGIの侵入なしにそのままぶ  
つ潰しに行くのか…」

もう補完計画もクソもないってわけね…だがどうするよ…」

VTOL機が近くに来るとなると…エヴァ2体の破壊。

完全にネルフを潰しにかかる。

と言うことは発令所も容赦なく潰す…

いや、今後の事を考えるとスーパーコンピューターのMAGIを

潰すのは考えられない。

つまりだ…

「本部占拠とエヴァの破壊…こりゃうかうかしてられねえな…」

レイとアスカは寝ている。

だが爆音でいすれ起きるだろう。

だがどうする…足がないぞ…

ミサトが迎えに来る可能性は低い…歩いていくか？いや、俺も排除目標だ。それは無理だ。

それどころかレイもアスカも排除目標…一番安全な場所はエヴァだけだ。

じゃあどうするべきか…。

「仕方ない…シンジは無免許だが…」

ミサトが予備で時々使うサイドカーバイク。

これに3人押し込んでいくしかない。

幸い大学時代は普通免許を取ってるから何とかなる。

とりあえず今はこれで本部に行くしかない。

「レイ！アスカ！ヤバイから起きろ！！すぐに本部に行くぞ！」

レイの部屋の扉を蹴りあけてレイとアスカを叩き起こした。

2人とも寝ぼけ目をこすりながら何を言っているのかわからないような表情をしたが気にしない。

バイクのキーを取り、レイを抱き上げてアスカをおんぶして1階

の駐輪場に降りる。

そして一番奥のサイドカーに乗ってキーを差し込む。  
レイとアスカは隣の席に押し込んだ。

「碓君！？無免許運転は……！」

「ばっか！何やってんのよ……！」

「今はそんなことしてる場合じゃないの……シンジ！行きまーす！  
！」

ウィリーをしてコンフォード17を飛び出した。

「つまり、黒い服の人を見つけたら時を止めて気絶させるか始末し  
てください」

「……分かりましたわ」

「貴女はこの写真の3人、そしてこの下に居る人間の運命を生きる方向に変えてください。」

願わくはその後に出てくる白いウナギの運命を死に変えてください」

「めんどくさいわねえ……」

「結局増員は2人だけか」

「…あの人が幻想郷の人物をそう簡単に渡すと思ってるんですか？」

「それもそうだな……」

61・戦いときは近いです、覚悟していきましょーう（後書き）

こぼれ話

エヴァ初号機が紅魔卿異変に挑戦したようです

初号機「ウヲヲヲヲヲヲヲヲヲオオオオ！！！！！！」

ガンガンガンぐしゃっガンガンガン……

結果 紅魔館は大きな足跡を残した（物理的な意味で）



## 62・戦自の介入はとにかく逃げましょう。

「風が気持ちいいな……」

「全然よくない」

バイクの燃料は十分。これなら定番の燃料切れは避けられる。後は俺の運転技術だな……二段階右折でてこずった俺だけ……

しかし……戦時の介入でネルフの直接占拠。

エヴァとリリスを融合させてサードインパクトを起こすなら……まずはレイを狙うはずだ。

ならなんでレイを狙わない……まさかゼーレの奴……死海文書あまり読んでないんじゃないのか？

「俺は読んだすらないからよく分からんが……」

とりあえず今は包囲網を避けるために裏道を使って……裏道がないいや、ないというのは使えないと言う意味でなく、物理的にない。そう、消滅しているのだ。俺の目の前にあるのは大きな広場。いわば更地である。更地の向こうでは何故かVTOLが落とされまくっている。

「戦闘……？VTOL機じゃない……」

「……使徒……いいえ、使徒じゃない……」

不自然にどんどん落ちていつている。

すぐさまサイドカーのシート部分を開けて何か覗けるものを探す。

「えーっと……何かないかな……と……お？財布発見、10万ほど入っ

てるな…これは貰ったところ。

でも…これは使わないから…おっと双眼鏡ハケーン」

古びた双眼鏡を覗いて、VTOL機を見る。ミサイルを地上に向かってバスバス撃っている。

その射線を見るが、地上に激しい爆発が起こっているだけで何も見えない。

「……………」

倍率を最大まで上げて、射線の到達点を見る。

ネルフ本部の入り口付近だな、あそこに対空迎撃砲なんてないはずだが…

しばらくすると、そこからかすかな光が見えた。

するとVTOL機が火を噴いた。

「何が起こってるってばよ…」

「とにかく本部へ急ぎましょう」

レイが急かして俺たちは本部へと急いだ。





とある山、指揮官車付近。

「どういうことだ！！これで既に40機も撃墜されているんだぞ！」

『メイデイ！！メイデイ！！グラバク1墜落！！繰り返す！！グラバク1！！……………』

指揮官は焦っていた。ネルフ本部自体に対空砲の設置数は少ないと言う情報。

そして、対人迎撃システムは皆無に等しいと言う情報がどちらも違っていたのだ。

「第1地上掃討部隊、本部の侵入を確認」

「第2地上掃討部隊、正体不明の人物により壊滅」

「第4、第5航空部隊、ネルフ地上レーダー迎撃成功」

「第61地上掃討部隊所属の赤西陸曹が、正体不明の空間を目撃したとの情報」

「第32地上掃討部隊、突入開始、エリアB-3から掃討開始せよ」

第2掃討部隊が壊滅…彼らは上層部直々のエリートのはず。

一個師団の全30%が正体不明の人物によるもの。

レーダーには5つのunknownの点が表示されている。

その5つのunknownは全て地上に配置されている。

しかしその配置列は素人が配置したようなもので

1つが屋内、後の4つはそれぞれ適当に駒を置いたようなところ。

死角をつくると簡単に本部の侵入は可能だ。

第1部隊と第2部隊のエリート達は迎撃に当たるが壊滅。

味方の航空部隊はほぼ全滅。レーダー施設の破壊に成功しただけ

もうけものだ。

「配置は滅茶苦茶だが戦闘力は大したもの…か」

「報告、第1層、完全に制圧、エヴァンゲリオン制圧部隊、正体不明人物により壊滅」

「待機中の第64部隊を制圧部隊に回せ、正体不明人物は発見次第射殺せよ、パイロットはどうか」

「現在、パイロットの自宅を捜索、未だ発見できておらず」

エヴァパイロットは未発見。

エヴァンゲリオン制圧部隊は壊滅。

正に予想外の状態である。

「……N2兵器の使用を許可する」



ネルフ本部、地下ダクト

俺達はサイドカーで事故って、ダクトを通っていくことになった。ちなみに事故ったときにレイにヘッドロックを喰らい、LCLになるところだった。

まあそんなことはどうでもいい。で…今ダクトの中を通っているのである。

「こつち、銃声の聞こえないところに行くわ」

「やっぱりダクトはネクロレイフに任せよう」

「待つてっばあ……」

幸い戦場でサイドカーに乗っている奴なんて急いでいると思っ  
てくれたのか

戦自から道を空けてくれた。最近の自衛隊は市民愛があるね。  
だが皆俺をゴミを見るような目でしか見てなかったのが気にな  
る。

「でも何故いきなり戦略自衛隊が…？」

「お前らの自己満足には耐えられねえよバーカって理由だろ」

「全く意味わかんないんだけど…」

『第2層は完全に制圧、送れ』

…？戦自の声だ…と言うことはここは第2層か。

俺達は足を止めて戦自の声を聞いた。



「第二層制圧…まずいわ…」

「なんなのよこれ…」

「こりゃうかうかしてられねえな…」

『非戦闘員の射殺も許可されたそうだが…』

『マジかよ…いくら俺でもそんな…』

そして非戦闘員の射殺許可。

ほぼ作戦通りか……

「急ぐぞい」

「了解」

「……ミサト……」

俺達は再びダクトの中を進み始めた。

早くしないとエヴァがベークライト詰めになっちまう。



第7ケイジ前、エヴァの制圧部隊が残り少ないながらも近づいている。

その強化装甲の前で白い服を着た集団が、サブマシンガンや拳銃を持って並んでいる。

ネルフの対人防衛部隊だ。

「……皆、これまではサードチルドレンを中心に俺達は楽をしてきた」

ネルフの対人防衛部隊の部隊長が隊員に話を始める。

しかし防衛部隊と言うものの、実際はC D級の作業員も混じって武器を取っている。

当初ならば退避する予定だが、一部の人物は自ら進んで残っていたのだ。

「だが、今となっては子供では相手にならない。内部に居る敵はエ





「おい…ここどこだ」

「ネルフの地下駐車場…もうここしか道はないわ」

俺とレイが出た場所は、ルノーが駐車してある駐車場。  
ミサトが車を止めている場所だ。

「…あれ？アスカは？」

「……！！！」

突然レイがあたふたした表情になって辺りを見回す。

…まさか……

「……… 忘れた… とか」

「……… (こくこく)」

「………」

とりあえず軽くゲンコツした。

「このアホ」

「…ごめんなさ」シンジ君！レイ！！…！！」

聞きなれた耳障りな声が聞こえた。  
俺とレイが振り向くと、そこには

「シンジ君…レイ…無事でよかった」

「シンジさん！綾波さん！」

「シンジ！綾波！無事だったのか！」





「……どのよ……シンジい〜レイ〜!!?!?!?…死体…」

アスカがダクトから出ると、死体にあふれた廊下に出た。  
トイレ付近の休憩所だ。

「戦自が介入って…本当だったの……?嘘でしょ……ん?」

戦自の死体に一本のナイフが刺さっている。タガータイプのナイフだ。

日本では珍しい西洋風のナイフ、それを恐る恐る死体から抜き取った。

「何でこんなものが……」

刃を見ると悪魔の羽のような紋章が描かれていた。

そしてその下に英語で文字が書かれている。血でぬれている部分を指でぬぐって読む。

「SAKUYA・IZAYOI……持ち主かな……」

兎にも角にもここにいるのは危険と察知したアスカはとりあえず女子便所に隠れることにした。

そこなら相当な変態でない限り誰も入ってこないだろうと考えたからだ。

「健全少年シンジ様の助けはないだろうけど……」

「アスカ…どこに行ったのかしら…」  
「女子トイレじゃね？」

62・戦自の介入はとにかく逃げましょう。(後書き)

こぼれ話

レミ「LCして意外にもおいしいのね」  
咲夜「おやめください!!!」

63・エウマに向かいました。出来れば早く(前書き)

話数が進むごとに作品の質が落ちてるが気にするな!

### 63・エヴァに向かいます。出来れば早く

「んゝまあ！とにかく行くわよ！乗って」

ミサトに手を引かれ、ルノーに乗る。

レイと早苗と魔理沙が後部座席、俺が助手席に座る。  
ギッチギチである。

時間は…13時半…ただ見ただけで何の意味もない。

N2兵器は何時使われるのか…ちよつと気になるじゃん。

「これがクルマか…始めて乗るぜ…」

「久々の車ですね…」

お前らここでは一般人なんだから貧乏人にしか思われないぞ、その発言。

「さ、行くわよ」

「アラホラサッサー」

エンジンをスタートさせてルノーがエンジンを吹かしながら走り出した。





「ここは…」

「ルート899。ここはまだ戦自の被害を受けていないわ」

今居る場所はターミナルドグマの第7層。

戦自の被害が最小限に食い止められている場所だ。

そのため、敵の数が比較的少ない…ってかほとんど居ない。

「さすがあいつと言ったところか、本当に一瞬で壊滅させやがった」

「紅魔館のメイドは伊達じゃないって奴ですね」

ん…なんか聞き捨てならん言葉が聞こえたが気にしないでおう。

「葛城さん…一体戦略自衛隊は何を…」

早苗さんが俺の頭を押し付けてミサトにたずねる。

「セカンドインパクト…って知ってるわね？」



「知ってます、アダ「違うぞ早苗さん」大質量の隕石の落下でしたよね？」

「せかんどいんぱくと…？」

「セカンドインパクト………悲しいもの…」

それぞれセカンドインパクトと言う言葉を呟く。

その言葉にミサとは溜息混じりで話し始める。

「セカンドインパクトは仕組みられたものだったの。

あなたたちは学校でセカンドインパクトは隕石によるものだったと言われていたはず。

しかし真相は違うわ…セカンドインパクトは人間に仕組みられたものだった。

でも、それは他の使徒が覚醒する前に、アダムを卵にまで還元することによって

被害を最小限に抑えるためだったの。…私達人間も

アダムと同じリリスと呼ばれる生命体の源から生まれた18番目の使徒なのよ。

他の使徒達は別の可能性だったの。ヒトの形を捨てた人類の…お互いを拒絶する

ことしかできなかった悲しい存在だったけど…同じ人間同士よ…戦自も私たちもね」

レイと魔理沙は意味が分からん、と首をかしげる。

俺と早苗は頷きながら聞く。

これが初期知識がある奴とない奴の格差である。

「俺たちは第18使徒リリンってか？」

「リリン…キリスト教では夢魔と呼ばれる悪魔ですね」

そこまで語らなくてよろしい。

「…レイ、シンジ君。サードインパクトはエヴァシリーズによって引き起こそうとしているの。」

だからあなたたちがエヴァシリーズを止めて、サードインパクトを止めるのよ。

人類が生き残る道はそれしかない。アスカも探していずれ出すから、それまでお願い」

相変わらず人任せな作戦だが事実それしかサードインパクトを食い止める方法がない。

俺とレイは無言で頷き、拳を握り締める。

「碇君……」

「……なんぞや」

「あなたは死なないわ…私が守るもの…！」

「じゃあお前も死なない、俺が守るからな」



駐車場で車を止め、すぐに非常用の第7ゲートに向かう。  
第7ゲートは赤十字が描かれたゲートと突き当たりの端と端に2  
つのゲートがある。

その真ん中のゲートが第7ケイジに行く道のみである。  
しかしまるで誰も居ないかのように敵がいない。  
するとすぐ近くで複数人の足音が聞こえた。  
ミサとはとっさにその場所に銃を向ける。

「……………伏せてて…」

「来るか…」

「葛城三佐…」

幻想二人組も八卦炉と棒のようなものを構える。

よくよく考えたらそんなもの構える奴って…相当な変じ（ピチユ  
ーン

「……………来た！」

『ぐあっ！！！？』

ミサトが誰も居ないところで気配を察知したかのように銃を撃つ。誰かの悲鳴が聞こえた。女の声…？

「咲夜さん!？」

「咲夜!！」

「咲夜…つてまさか…」

伏せてた俺とレイが通路の下を覗き込む。

レイは不思議そうな表情で、

俺は冷や汗満点で覗き込む。

まあそこには予想通り脇腹を撃たれた銀髪メイドが膝をついている光景が目に入った。

何で生きてるんだよ…最近のメイドすげえなw

「正体不明人物発見、排除する」

「…来るな!！」

「ぎゃあつ!！」

「ぐおつ!！」

ナイフを投げたのかどうかは知らんが、戦自の難は逃れたようだ。だがこの高い階から見ても分かるくらいの出血だ。だから何故死なない。

しかしミサト…ザ・ワールドさんを誤射するって…逆に凄いな。

「急に現れたのよ!そりゃ反射的に撃つに決まってんじゃない!！」

冷や汗にまみれてミサトが必死に弁解する。

「咲夜ああ！！大丈夫かああ！？」

「咲夜さーん！！」

「東風谷さん！霧雨さん！そんなところから飛び降りたら……！……飛んでる……？」

レイの中で物理法則が乱れたがそんなことを気にしている場合じゃない。

俺とレイとミサトは上から見る。

しばらくすると、赤いプラグスーツを身にまとった女と

ピンク色の服を着た翼女が咲夜さんに寄り添ってきた。

「俺の嫁とアスカ……おい……こりゃどんどんカオスになるぞオイ……」

「碇君は私の婿、渡さないわ」

「さり気に告白しんといて」

「も…申し訳ありません…私が撃たれた時のお嬢様の表情について鼻血が…うっ…」

鼻血は出ているがどこからどう見ても脇腹の血の方が出血が大きい。

いや…鼻血のほうが大きいのか…どちらも互角程度である。いや、若干鼻血が勝ってる。

彼女の忠誠心は鼻から出るのである。（もっともアスカとレミリ

アはどん引きだが)

「この程度の傷、どうということはありません…」

「まず鼻血を止めて、話はそれからよ」「」

「急ぎましよう、非想天測式号機が固められては彼女に申し訳が立ちません」「

「あたしのエヴァに変なあだ名つけないで…!!」



### 63・エヴァに向かひましよう。出来れば早く(後書き)

こぼれ話

早「非想天測が変なあだ名？それは偏見と呼ばれるものですね。

非想天測はともクリーンなロボット、そして安全性にも特化されています。

そして守矢研究所で地上の技術の粋を集め八百万の神の力を融合させた

魔神と呼ばれるロボットなのですよ？エヴァと一緒にされては困ります。

アメリカ海軍第7艦隊に匹敵する能力ですよ？第7艦隊！」

ア「使徒は太平洋艦隊を壊滅させたのよ？」

アスカの一言で早苗は黙ったのであった。

64・休憩代わりに番外編4もどうですか？（前書き）

ネタ切れで15分くらいで適当に書いた作品ですw  
明日から本気出す。

## 64・休憩代わりに番外編4もどうですか？

今朝、俺が目覚まして新聞を手に取ると…

「何だこの新聞……いつものとは違うな…」

いつもとってる第3新東京新聞とは違う。

何だこの感覚は……いつもと違う…これは…

「進研ゼミ中学講座……あの名作漫画がついに…」

いや、気のせいだった。

いつもどおり偏見記事と捏造丸出ししか書かない。

ま、俺には関係ないがな。

と今日も元気に乳酸菌飲料を飲んではずらつした。  
乳酸菌とってるう？

「さて…今日も元気に…あ、そつだ。学校はもうねえんだ…」

「おはよう…碇君」

レイが起きた。レイの分の乳酸菌飲料を投げつける。

それを慌しい手つきで掴んで、飲む。

「小さな物は取り辛いわ…」

「ヤクルトほどとりづらいものはない。しかしそれをとってこそ真の人間だ」

「そつ…霧雨さんは？」

あ、そうだ。きょうは魔理沙が俺の家で泊まっている。  
早苗とちよつとしたいざこざがあつて弾幕勝負に発展したが惨敗  
したそうだ。

昨日はレイを避けながら俺の部屋で泣き寝入りしてた。  
レイに対する恐怖感は抜けきつていない模様。

「あー…あいつはまだ寝てるぞ、朝起きたときになんか足にへんな  
感触がしたが」

「それって…踏んだ…」

「大丈夫だろ」

「大丈夫かしら…」

「大丈夫だろ」

なにやら変な雰囲気になりながらも俺たちは気晴らしに朝の散歩  
に出かけた。

玄関を出ると、隣の部屋から早苗さんが出てきた。

頭は寝癖なのかどうか知らないが枝毛が一本飛び出てて、顔は黒ずんでいる。

ってか純粹に若干焦げてる。どんだけ暴れまわったんだお前ら。

「あ…シンジさん、綾波さん…おはようございます…」

「…弾幕勝負って…互いを炙りあう戦いな…？」

「何だその世紀末弾幕ごっこ、怖えよ」

「だって霧雨さんも焦げてた」

「あれはだな…ステーキ焼いてて酒かけたら頭まで燃えたんだよ、ほっといてやれ

で…それでステーキがおじゃんになったらじゃ早苗がキレて魔理沙に弾幕を」

「霊夢さんじゃないんだからそんなことしません!!」

早苗さんが顔を真っ赤にして抗議する。

「じゃあなぜ喧嘩したしw」

「それは…シンジさんを侮辱したからで「ちよつと魔理沙殺してくる」やめて！」

他の奴を侮辱するのはかまわないが俺を侮辱するのは許さん。

まあそんなことはおいといて、何があつたんだ？

魔理沙と早苗さんは比較的中がいいほうだと妄想しているが…

「それで何があつたの…？」

レイがすこし真面目な表情になって早苗さんに聞き出す。

「それが…（モジモジ）…新しい同居人の宿泊に抗議した魔理沙さんに私が逆上してしまつて…」

同居人…？2柱？…それにしても顔を背けてモジモジする早苗さんは結構可愛い。

しかし同居人で魔理沙が抗議する人物…：あー…

「アリスとパチエか…」

「Exactly（その通りでございます）」

…？」

確かにそいつらなら抗議してもおかしくない。俺でも抗議する。誰でも抗議する。

だがアリマリは俺のジャスティス。

「まあ俺らは気晴らしに散歩に出かけるとするわ」

あ、魔理沙はまだ寝てるからその間に殺すなりなんなりとしたい  
て

ちなみにあいつは寝てるときはほぼ無防備だからナバス！「助平」  
すみませんレイ様」

とりあえず俺たちは涼しいうちに散歩に出かけた。  
ちなみに散歩中に気付いた事が数点ある。

レイは番犬を見るとすすす、と離れて俺の隣で少し服を引っ張る。

「どした？」

「……………」

静かに番犬の方に指を刺して、頬を赤らめながら呟く。

「怖いの」

「そうか」

実にすばらしい光景である。

無表情のレイの中でこういう光景を探すのも結構楽しい。

「まあ…何で俺が噛まれてるのは予想つかないが」  
「……………」

とりあえずレイがマジで心配そうな顔をしている。

頭から血をだらだら流しながらも親指を立てた。

「いつもの碇君」とか呟いたが気にしない。

まあ家に帰ろうか。

早苗さんと魔理沙さんの喧嘩も見ものだからな。



#### 64・休憩代わりに番外編4もどうですか？（後書き）

こぼれ話

シ「おい、マンションはどこだ」

紫「（ババーン）魔理沙が吹き飛ばしましたわ」

レ「！？あなた誰？」

シ「ああ、幻想郷の賢者タイムと呼ばれるババアだ（すぽっ）」

## 65・ネルフ内の敵は全滅したそうです

非常エレベーター付近でメイドと吸血鬼とセカンドの三人組は足を止める。

ちなみにメイドの方は未だに出血している（主に鼻）

無言でエレベーターに乗り、第7ケイジへと向かった。

ケイジは防衛部隊の活躍によってベークライトは注入されず、弐号機も無事であった。

ここで咲夜とレミリアの護衛任務は終了となる。

「それでは、ご健闘を祈りますわ、アスカ様」

「これで役目は終わりね。帰るわよ、咲夜」

軽く挨拶をして、2人はどこかへ飛んでいった。

無論物理の法則など無視している。

「……なんだったのかしらあいつら」

結局アスカは訳の分からないままエントリープラグに搭乗するこ  
とになった。

『エントリープラグ挿入完了』

『アスカ、いいわね？もうすぐ加持君から衛星からの電波で指示が出るけど、

恐らくエヴァシリーズ…量産型が来るはずよ。その前に戦略自衛隊の外部部隊を殲滅。

ケーブルの断線には注意してね』

リツコがミサトの代わりに指示を出す。





ズダンズダンと発砲音が聞こえる。そう、敵に見つかったのです。

現在俺はミサトにかばわれながらも非常用エレベーターに向かっ

て走っている。

なんでこんなに距離があるんだよ…いや、短いけどミサトが抑えてるから進めない。

と言うかミサトの背中から出たら撃たれる。

ミサトと俺の間に例が挟まっていて、俺は一番後ろでへばりつきながら

エレベーターに向かって歩いている。

え？何でこんなにゆっくり行ってるのに弾丸を喰らわないかって？主人公補正です。

「まあそういうわけですからミサトうぐっ…！」おいどーした？下痢か？」

突然ミサトが腹を押さえて膝をついた。

「葛城三佐!？」

「あれ…どうしたのかしらね…目がぼやけるわ…」

ミサトが拳銃を落として、そのまま倒れこんだ。致命傷ですかそうですか…って言ってる場合じゃないね。

「俺が敵の目をひきつけるんで」

「碓君には出来ない」

とりあえず拳銃を拾って、安全装置がかかっているルーキーにならないためにも

装置をチェックして照準を合わせる。

「よーし…いい子だ…」

と弾丸で銃をはじかれた。

「あ」

「素人が拳銃を使うな、危ないぞ。小僧」

「ごめんなさい……」

と、戦自の人に怒られながらも走り続ける。  
殺す予定なら教育するなよおおお！！！！

「わっ！うおっ！あぶっ！死ぬっ！！いてっちよっとかすった！」

「速い！速いぞあのボウズ！！！」

ライフル銃をルパンの如く避け、レイがミサトを引きずるのを確認する。

髪を掴むな。ミサトがハゲる。

あたり一面が弾痕まみれになりながらも一発も被弾していない。  
甘いな、俺は紅魔卿のEXステージで一度も被弾しなかった記録の持ち主だぞ。

え？知らない？そうですか。

と、逃げ回っているとレイが手招きしている。

終わったのか。

「うおらあああああいつてえ！！うぬおおお！！」

扉にダイビングし、俺が入った直後、扉が閉まった。  
ちなみに右腕に弾丸を貰ったが穿り出したらとれた。  
つばをつけたら痛みもなくなった。







「葛城三佐！葛城三佐あ！」

「大丈夫よ…レイ…大した事ないわ…」

「大した事あるだろ！頭いかれてんのかお前は！」

「怪我人に言う事じゃない…碇君！殴るのをやめて！！」

血だらけの床。

壁にもたれかかるミサト、その横で肩をゆすりながら泣きじゃくるレイ。

その情けないミサトを俺が殴り続ける。

「電源は生きてるわね…よかったわ…最期にシンジ君の役に立てて

…」

「だーもう！悲観するな！最初から死ぬ気でいるな！」

殴るのをやめ、壁にもたれかかっているミサトを強制的に起き上がらせ、襟首を掴む。

「お前は親に貰った命を銃弾ごときで無駄にする気か？」

「いいのよ…あなたが無事で居てくれるなら。私は」

流石にこのままだと完全に死にかねないな…ここで一喝入れとく

か。

「何甘ったれたことってんだポケエ!!!」

お前まだ生きてんだろうが!!! だったらしっかり生きて…それから死になさい……」

そして来たエレベーターに叩き込み、俺たちも乗った。

エレベーターが第7ケイジに向かう。

「三佐…葛城三佐……」

ふーむ…最初とは考えられないほど感情的になったな。

いい傾向だ、全く持って。だがもうその日々も終わりそうだ。

『第7ケイジです。ドアが開きます』

エヴァ初号機と零号機が格納されているケイジについた。

式号機はもう出てるか。俺たちも急がないとな。

「レイ、ミサトは」

「意識を失っているわ…」

ちっ…面倒だ。

こいつをどこに置いとくべきか…

「シンジさん！無事だったんですか!？」

目の前に巫女服姿の女が下りてきた。

全く…どこから現れるんだよこいつらは。

「おう、いいところに来たなストーカー。ミサトを頼む」

ストーカーこと東風谷早苗に意識を失ってうでをたらしめているミサトを投げつける。

事はできないからそのまま引き渡す。

「え…は…はい！任せてください！」

すいーっとミサトを抱えて不自然に空を飛ぶ早苗…うん怖い。

「行くか、レイ」

「ええ」

更衣室で着替え、エントリープラグに向かう。

……これで最後の力オスだな。



## 65・ネルフ内の敵は全滅したそうです（後書き）

こぼれ話

原作シンジ「東方とエヴァのつながりが見えないんだけど…」

マチユ 「…サボテンの花が…咲いている」

原作シンジ「逃げないでよ」



## 66・緊急クエスト『復活のフルフル』

『第3次冷却省略、頭蓋ゴイル回転開始、接続解除。冷却液緊急排水』

「いいから早く上げろってんだよ…めんどつちーな」

スーパーイライラタイムに入ってる俺。

アスカはもう既に発進している。レイもそろそろ発進準備に取り掛かっている。

「そついえばユイさん、N2は？」

【まだ使われてないみたいね…】

「待ち伏せ…もありえるな…」

【強制サルベージ的な？でも弐号機は無事よ？何で落とさないのかしら…】

『零号機、電源接続。初号機、S2機関起動。エヴァ両機射出口へ』

オペレーターがエヴァを射出口へ持っていく。

『碇君…準備は…』

「磐石だ」

『そつ…生きて帰る…いい？』

「まあちろんさ」

『エヴァ両機、射出ターミナルに接続。射出地点は地上ゼロ地点へ。進路クリア。発進』

モニター前部に発進OKの文字が出る。

「初号機！出るぞ！！」  
『零号機、発進します』

俺たちは最後の戦場（暫定）に出撃する事となった。

『アスカ、シンジ君とレイが出撃したわ。まだ持つてる?』  
「あつたりまえじゃない! ったく…遅いのよ…!!?」

式号機のモニター左に警告表示。

「警告!? 何で…」

真上を見る。そこには航空爆雷が投下されていた。  
その爆雷の側面には、『N2』と書かれている。

「N2爆雷!？」

どう対処すべきかを考える暇もなく、爆雷は空中で起爆。  
地表を大きくめぐり、ジオフロントは地面に露出する羽目になっ  
た。

ちなみに式号機は反射的にATフィールドを展開。  
難は逃れた。しかしケーブルは断線。兵装ビルもお亡くなりにな  
られた。

「危なっかしい事するわね…!!…ケーブルが!？」

式号機活動限界まで残り4分半。



「対岸の火事とはまさにこのことだな…相変わらず凄い爆発だよ全

く……」

遠くで射出された零号機と初号機。

もはやそこは町にあらず。既に大穴が開いた廃墟だ。

『アスカは……』

「ケーブルは焼き切れただろうな……」

『なら』

「多分4分弱でオワタ、になるだろうな。行きますぜ！」

『了解』

俺とレイは穴の中に飛び込んだ。地上の戦自は全滅。山の上の奴は役立たず。

つまり有効戦力はジオフロント内部に固められたらう。

「よっこらせ」

ジオフロントに降り立った俺たちは突然一斉射撃を受けた。

まあ降りてる最中から弾幕じゃんじゃん来てたから当然っちゃ当然だが。

「エヴァ相手に通常兵器は役に立たんよ」

『!……ケーブル断線……内臓電源に切り替えます』

「あらま」

遠くでアスカが暴れているのが分かる。

動きにメリハリが足りないな……。まあエヴァの重量じゃあれが限界かな。

『アンビリカルケーブルがなくなつたつてええええ!!!  
こちらら1万2000枚の特殊装甲と!!!ATフィールドがある  
んだからあああ!!!』

式号機が両手を前に出す。ATフィールドが手の平に集中し、球  
体となる。

『負けてらんないのよおおおお!!!アンタ達にいいいいい  
い!!!!!!』

その球体が波動となり、戦自のVTOLと戦車、もろとも消滅さ  
せた。

あの野郎、俺の技をことごとくコピーしやがる。

あいつはオリジナルティが足りない。

だめだねえ。実にだめだ。

「まあ俺も人の技の劣化コピーだがな。そおい!!!」

俺もATフィールドを横に伸ばして10機ほどのVTOL機に叩  
き込む。

するとそのフィールドにエンジン部分が引っかけり、火花を散ら  
して爆散した。

簡単に言えばアスカのフィールド攻撃と同じだ。

「全く…ハエ相手じゃ鬱憤晴らしにもならん」





『忌むべき存在のエヴァ』

『補完の道を閉ざした碇シンジ』

『またも我等の妨げとなるか』

『やはり毒は同じ毒を持って制すべきであるか』

ハエたたきをしていると、レーダーに大きな反応を検知した。  
上空、しかしかなり低高度だ。反応は9つ。

「ありやエヴァシリーズか？」

『エヴァシリーズ……』

『量産型！？完成していたの……！？』

ふらふらーっと量産型がグライダー形態になって俺たちの周りを  
旋回する。

【あの時私を食べておいしかったのかしらねえ】

【キョウウコさん、食べちゃおう？】

怖い事言わないでくださいお二人様。

そうこうしているうちにエヴァシリーズが地面に降り立った。  
放電とか突撃とかはしてこないだろうが厄介な相手だ。

「……ダミーか」

『ダミー……？』

レイが聞く。

「ありやダミープラグ採用型だな。」

俺がダミープラグを使わなかった時のプラグを複製した奴だろ」

現にプラグ挿入口から黒と緑の光が若干漏れている。

破のダミープラグを使用するとは…男のロマンだね、ゼーレのお偉いさんは。

「まあいい！クエスト開始！！目標はフルフル9匹の討伐じゃない！」

《制限時間は3分20秒です》

「だらあああああっしやああああああ!!!」

【!】

初号機が動き出したのを察知した量産型が諸刃の剣を横に振る。  
甘い、実に甘い。と、剣を受け止める。

「って痛ってえ!!!」

無理だった。脇腹に強くめり込んだ。痛い。まあその辺は主人公  
補正で何とかなかった。

【!?!】

両手がふさがった量産型が必死に剣を引き抜こうと腕を引っ張る。  
だが、その辺が機械的な動きしか出来ないダミープラグの悪いと  
ころだ。

「ったく、何を食うわけでもないのに涎なんか垂らすんじゃないよ

気持ち悪いな」

量産型を蹴飛ばし、諸刃の剣を奪い取る。

「へえ、コイツがロンギヌスのコピーか」

片手でそれを投げ、ロンギヌスの槍へと変化させる。  
もちろんそれは素手の量産型に直撃。機能停止した。

【ぐぎようあー！】

「…まだしつこく生きてるじゃねえか。」

死骸が若干ながら動いている。

劣化コピーとはいえロンギヌスの槍。それを受けてなお生きてい  
るとは驚き桃の木リンゴの木だ。

「痛いだろうに、さいなら」

【ぐぎやあおおお…】

ATフィールドを圧縮させ、射出する。すると量産型が粉々にな  
った。

《残り8匹です》

「ふーんふんふん 歌はいいねえ…歌は心を潤してくれる…」  
「だりやあああ!」…ん?」

なにやらさわがしいな、とカヲルが後ろを振り向くと、突然血の雨が降ってきた。

「最近の雨は赤いんだね…それに何か鉄臭い。しばらく見ない間に地球は変わったね」

そして、エヴァ量産型の破片も降ってきた。

「雨は血肉となる……………ん？…血肉…いけない！！！」

ようやく事の重大さに気付いたカヲルだった。N2の爆発で普通は気付くだろうに。

66・緊急クエスト『復活のフルフル』（後書き）

こぼれ話

アスカ「あんたを見てると！！イライラすんのよ！！！！！！」  
シンジ「スペランカーやってたらそりゃイライラするわな」



## 67・飛べない鳥が飛ぶと槍になります。

「っしやあ！まず一機！！」

だがな…数があまりにも多すぎる。一機減らしたからとはいえ、残りは8機。

これじゃアスカとレイが持たない。

アスカの本気でも第1回撃破が限界だ。量産型は少なくとも2回以上は撃破を必要とする。

レイは…戦力外通告しても別に害はない。つまりクソの役にも立たない。

「…………あれするか」

戦線を離脱してちよいと忘れ物をとりにいくことにした。

「シンジ！？…逃げたわねええええ！！！？？」

「……………」

「なーに、2時間程度で戻ってくる」

「はあ！？…………もう！あんた1回死になさいよ！！！！」

「…………バカシンジ…………」

コンフォード17付近。初号機が来るにはあまりにもみすぼらしい場所だ。

俺らのマンションが都会だと思ったか？田舎だよ！

まあ冗談はこれくらいにして、

「えーっ…と何か尖ったもの尖ったもの…あつたあつた」

『くわ？』

「ちよつと頑張ってくださいな。ペンペン」

『くう！？』

ペンペン、彼は温泉ペンギン。もう一人の同居人だ。

彼のくちばしはセカンドインパクト前からのトレードマーク。しかしそれは本来は口として使用し、護身用の武器ともなる。ふむ…いい鋭利さだ。これなら使える。

「よし、今日からお前の名は穴掘りシモンだ！」

『くわあ！？』

「相手が白けりゃ白いほど！俺も燃えるってもんだぜ！！根性入れるよシモン！！」

『く…クワツ！…クワア！？（う、うん！…ってなに！？）』

ペンペンをくちばしを先にして思い切り握り締める。

「喰らえ！！必殺！！！！」

ウィンドアップ、球種は…ライジングショットでいいか。碇だし。



伊吹マヤのおかげで。

『北西より！接近する物体1！』

子安がリーダーを確認して生きているカメラで何かを捕らえる。  
それはセカンドインパクト以前に生きていた子安も分からぬ事態  
だった。

「まさか…あれは…」

その光景はメガネにもすっかり捉えていた。  
彼も想像はできなかった。何せペンギンが飛翔しているのだから。  
ありえないことだ。

「動物…ペンギン！ペンギンです！！」

「ペンギンが…」

「空を…」

他のネルフ職員も同じ意見だ。

「って…あれミサトのところのペンギンじゃない…」

しかしリツコはそのペンギヌスの存在を知っていた。

あれは葛城一家で虐待という名の飼育をされている鳥。

あるときは人質にされ、

あるときは霧雨家で緑髪の少女に抱擁という名のプレスをされ（  
決して貧乳ではない）

あるときはミサトカレーの試食役をされる苦勞人。



「チワアアアッス！！三河屋でえええっす！！翔べええ！！ペンペンんんんん！！！！」

ペンペンのケツにATフィールドをぶち込んで、さらに加速させる。

一瞬ながら音速を超えた。

『ぐううわっああああああああああ！！！！！！』

『あれは！？』

『ペンギヌスの槍！？』

ゴオオオオオと生き物には不似合いな音を出しながらペンペンが量産型に突撃する。

いいぞ！そのまま貫通してしまえー！

『ぐぎぎやっ…』

「あ、刺さった」

俺の願いむなしく、ペンギヌスはATフィールドを貫いただけで終わってしまった。

しかしかなりのところにめり込み、S2機関まで到達している。これがペンギヌスだ。これテストに出るよ。

『ATフィールドを貫いた…』

『さすがペンペンねえ…』

「ほれ！後は任せるペンギヌス！！」

初号機を走らせ、真上に蹴ってからジャンプする。そして着地。  
意味がない。

右、左とまたも意味のないステップをしてから高度を上げバック  
ステップ。

一気に上上がり、足を振り下ろす。

「きゅうつきよおおおおおつく！！ゲシュペンスト！！！！キイ  
イツカアアアアアツス！！」

複数形？キニスンナ！両足でやったんだよ！

まあそんなわけで、究極ゲシュペンストキック。つまり相手ロボ  
ットミンチキック。

このフルフルをロボットと呼ぶべきなのは定かではないが…ま  
あいいだろう。

一方そのころ地上では

「相田さん！！初号機が！！初号機がゲシュペンストキックを！！！！撮ってましたか！？今の撮りましたよね！？」

「これはすごい！！まさに科学の結晶！！人間の力！！！！すごい！！！！すごすぎるう！！！！」

「これぞ先生の命令を無視してこっそり残った価値があったというもの！！！！」

「「すごい！！すごすぎるうううううううう！！！！」」

『ジェットアローン改、起動スタンバイ』

「「ジェットアローーーーーーン！！！！！！！！！！」」

NO・2とNO・3の馬鹿が騒いでいた。



67・飛べない鳥が飛ぶと槍になります。(後書き)

こぼれ話、というより初期設定のシンジさん(ボツネタ)

名前 碓シンジ(本名不詳)

性格 熱血、人思い

能力 なし

補足 無駄に熱い男。そしてアスカとレイを助けるため  
自ら量産型に単機突撃し、命を落とす。

仲間をこれでもか問いほど気遣い、最期の最期まで仲間を想  
っていた。

だが、ケンスケは苦手だったそうだ。

それがどうしてこうなった

名前 碓シンジ(本名不詳 年齢22歳)

性格 ただのアホ。中二病、アホ

能力 他人に心を開かせる（強制的に）

補足 シリアスをシリアルに変える男。

ちなみに作者は連載当初、鬱物を書こうとしていたそうだが、もう一度言おう、どうしてこうなった。

68・耕運機は暴れると操作しづらいです。(前書き)

小型農用トラクターほど扱いづらいものはないと断言します。

68・耕運機は暴れると操作しづらいです。

『ジェットアローン改、起動スタンバイ!』

地平線をずんずんと歩く大きな物体。

その姿はまさに、すさまじい破壊力を持ったロボットの兵隊。

農業協同組合の意地と執念の賜物。JA改だ。

『元日本重化学工業共同団体代表、時田シロウだ。配備計画は破棄されたが…』

この機体は私の、いや、団体の努力の結晶だ。君たちの役に立てたらいと思う。

パスワードは…あの言葉だ』

時田シロウ…だったよなこの人、JAを作って暴走させた人。

どや顔しているが迷惑極まりない人だったよなコイツ。

でえ、パスワードがわかる人…ミサトですね。意識不明の。

ミサトエ…だがここで俺が言うわけには行かん…色々怪しまれる。

まさか…ありえないわ! って言われる。

『……希望……』

「レイ?」

『葛城三佐が言っていたパスワード…… (ブツッ)』

レイとの通信がきれる。活動限界か。

旧式ゆえに零号機の動力は若干他と比べると弱い。

燃費が悪いのである。いや、低スペックです。

零号機、エントリープラグ内

「……………（がしゃ、がしゃ、がしゃ）……………動かないわ……………」

動かない。当然だ。活動限界になった機械を動かすのはほぼ不可能なのだから。

しかしレイはあきらめず、操縦桿を引き続ける。

「……………（がしゃ、がしゃ、がしゃ、がしゃ、ボキッ）…ボキ？」

操縦桿が折れた。

「……………」

大人しくエントリープラグから出た。

『レイ！…あたしも活動限界ね……（ぶつつ）』

それと同時に式号機からの通信も途切れる。

……まあいいとしよう。任務が増えた。

エヴァシリーズの全機撃破。およびネルフ本部防衛。

…俺防衛ミッション得意じゃないんだけどなあ…

【ぐうえ……】

【ぐうえあ……】

【ぐおえ】

【げえ】

【げうえ】

【ぐげう】

【ぎゃお〜】

6機がいつせいに俺を睨むような態度をとる。

ユイさんの声が聞こえたような気がしたが、まあ気のせいだ。

「えつと…お手柔らかにおねげしやす」

『ジェットアローン、起動！初号機の援護に回ります』

「ま、いざとなったら爆破するのみだがな」

『えつ』

N2搭載型は爆破するのが一番効率いいに決まってるだろうが。外道だろうがなんと言われようが俺はJA爆破に一票入れる。

「だがロマンの分かる人間は嫌いじゃない。やるぞ、名無しオペレーター！」

『子安！…！…じゃない！！青葉だ！…！』

「誰だよ」

『俺のキャラそんなに薄かったか…？』

「お前が想像している3倍は薄いと断定できる…つとー！」

【ギャッー！！！！】

量産型の懐にもぐりこんで股間を蹴り上げた。金属バットの音が鳴る。

その衝撃で背中のカバーらしきものを突き破って何か飛んでいった。

「お？」

緑と黒の色をしたプラグ：ダミープラグか：？と思ったら突然量産型が止まった。

流石にプラグなしではただのハリボテと化するか。

…まだ勝算はゼロじゃないってことね、よかった。

「……なるほど、いくら補完が行われるとしてもその魂の座がなければどうにもならん……」

なら魂の補完が行われる基盤を潰せば全ては終わる。そういうことだな……」

「JAハンマーですよ！！相田さああああんカメラ！！カメラア





「エヴァ6機目！機能停止！」

「残りは3機……全てS2期間搭載型だというのに……凄いわね……」

戦線から帰還した返り血まみれのマヤが状況報告する。

その報告に少々引いているリツコが賞賛の言葉をあげる。

「いいぞシンジ！そのままやっちまえ！！」

「発令所に民間人が入っちゃ駄目と言うのは都市伝説だったのかな

……（金髪？染めてるのか？）

「明らかに場違いな服装だよな……（金髪の少女が……くうくロックな女の子だ……）」

メガネと子安がジェットアローンの制御をしている。

その間の席でボクシングのコーチのような魔法使いがいるが関係ない。

「ジェットアローン、電極起動。エヴァシリーズをキャッチ」

「電流流せ！そくだ！シャイニングフィンガーである……！」

「……？」

「お？耕運フィンガーか。なら俺も……」

腕をATフィールドで光らせ、シャイニングフィンガーの体制を  
取る。

「『俺のこの手が光ってうなる！！！！エヴァーを倒せと輝き叫ぶ！  
』』」

何故か早苗の声が混じるが俺は全く気にしない。

「『ひっさあああっつ！！！！シャイニング！！フィンガアアアアア  
ア！！！！！！』』」

それと同時にジェットアローンもとんでもないスピードで動き始  
めた。

そして俺とジェットアローンは背中と腹部にフィンガーをぶつける。

ジェットアローンが敵を高々と持ち上げ、回し蹴りでプラグを引き抜いた。

コイツ本当にJ Aか？

まあそれはそれとして、俺は後ろに下がってトドメの準備をする。一列に並んだ量産型、いずれも意味深に笑っている。

「……………フンー!!」

『き…消え』

「てませんが何か!!」

エヴァシリーズの腹部にもぐりこんで、数発の重いパンチを浴びせる。

諸刃の剣を落としたのを横目で確認し、ミドルキックで真後ろのエヴァシリーズに激突させる。

2機が少しよろけた瞬間、背中にA Tフィールドを展開。反発による推力上昇で後ろに回りこむ。

「そおいや!!!!」

エヴァシリーズの背中を蹴り上げ、2機が若干宙に浮く。

そして体制を低くし、その2機に向かって飛ぶ。

「これで……………ラストオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
!……………!!」

右腕がオレンジ色に光り、エヴァのコアに向けて拳を叩き込む。



68・耕運機は暴れると操作しづらいです。(後書き)

こぼれ話。

カ「僕の出番…」

69・ほめられるのは悪くないはず。 (前書き)

次回！最終回予定です！

69・ほめられるのは悪くないはずです。

量産型、全て活動停止。

数分睨みつけたが、反応なし。

リーダーにも敵性反応なし。

「……………終わった…のか？」

『エヴァシリーズ…完全に沈黙！』

『再起動の危険性0…よくやったわ…シンジ君』

リツコと何故か血まみれのマヤがモニターに映った。

その後、モニター用のカメラが動きだし、発令所内が映し出される。

『ふうはははは！…わが世の春が来たああ…！…！』

『青葉さん！落ち着いて…！』

『さすがシンジ！早苗の目に狂いはなかったぜ…！』

背中から蝶の羽を出している子安。

それを抑えるメガネ。の隣でカメラに手を振っている魔理沙。

こいつらは何をやってたんだ。泥棒魔女が一番まともに見えるぞ

…。

『シンジ君…』

『シンジ君…！やったな…！』

『さすがシンジ君だな』

ネルフのほかの作業員もいっせいに通信機を取り合い、俺をたた



えてくれている。

…おかしいな。むねがほっこりする。昔おじいさんを助けたときの感謝の言葉みたいだ。

「…慣れないねえ…こつという雰囲気」

【悪くないでしょ？】

「悪くないが…ちと恥ずかしいなw」

【大人になれば…この喜びが味わえるはずよ】

「これでも一応成人した身ですが」

とりあえず俺はマヤさんが指示した帰還ポイントを通ってネルフ本部に帰還した。

しかし使徒もエヴァシリーズもなくなった今…俺はどうすればいいのかね？

ってかカヲルの奴どこ行きやがったんだ。

エントリープラグが排出されて、俺はエヴァを降りる。

エヴァを降りて、着替えると更衣室を出たところにアスカとレイ

がいた。

「碇君：大丈夫？」

「バカシンジ：」

「なーにかけた面してんだ。俺は大丈夫だよ。これで恐らく全てが終わるでしょ」

なんかまだ裏がありそうな気がするが事実上これでEOEは終わりだ。

序に行くような雰囲気でもないし。破に飛ぶようなイベントもない。

「終わったの…？全て…」

「終わったんだよ、多分。細かい事は知らぬ」

とりあえず今はゲッチュした平和に満足するとしましよう。で、これからどうなるんだろうか。

「……まあいい。帰るか、まだ家が残ってたらの話だが」

「待って、まだ葛城三佐は退院していないわ」

「葛城三佐云々よりお前ら腹減ってるだろ」

少なくとも俺は減ってる。弾丸の雨あられを避けまくり、エヴァシリーズ戦で神経をすり減らしている拳句今日は朝飯食ってないんだ。

しかも今は夜。これで腹が減らない人物、逆に問おう。居るのか？

「…（ぐう〜）……私は減ってないわ」

「口は嘘つきでも体は正直だぞ？」

「私は腹ペコね。でもどこかいくにしてもお店が開いてないじゃな

い

「ふ、甘い。貴様らは致命的な甘さが見られるな」

俺はレイとアスカの手を引いて、戦時が撤退したネルフ本部を出た。

外にも誰も居ない。終戦直後の日本のような風景の街を歩く。

せみがやかましくなる真夏の風景。ほぼ廃墟だ。

こりゃほとぼりが冷めたら第2新東京市に移植だな…。

「碓君…まだ…?」

後ろでフラフラと歩いてきたレイが根をあげる。

まるで最初のころの俺みたいだ。しかし住めば都。俺は慣れたぞ?

「俺たちや歩きだ。がまんしてくりゃれ」

「だって…もう2時間はずっと歩き続けて…もうだめ……」

とつぜんレイが俺の背中に倒れこむ。

「やれやれ…アスカは大丈夫か？」

「あたしをなめないで、虚弱児のレイとは違うのよ」

「何気に酷いなお前」

再び俺たちは終わりなき明日、ローソンに向かって足を運ぶ。

自宅最寄のローソンについた俺たち。

ローソンのスローガンには『避難命令があっても24時間営業！』と張られている。

どんな店だよ。

とりあえずそこから簡単な材料を買って、家に戻った。

「ただいまー…って誰も居ないか」

「お帰りなさい、碇シンジ君」

「お前だったのか」

家に帰ると普段着姿のカヲルが俺を出迎えてくれた。  
なんかしらんが腹が立った。まあいい。

とりあえずエアコンの聞いたレイの部屋でレイを寝かせる。  
アスカも「はあく疲れた〜」とか言っつてソファに寝転がると、そ  
のまま寝付いてしまった。

お前ら誰が一番働いたと思っつてるんだ…

「ったく……カヲルエ…これで俺は正しかったのかえ？」

俺はテーブルに座ってカヲルと向かい合って話す。

平和な世に戻ったとはいえ、傷跡は大きく、全てが全て正しく進んだとはいえない。

まあ別に俺はレイとアスカたちと楽しく暮らせるんならどうでもいいが。

「自分が決めることだよ、それはね」

「そうかね…」

頬杖をついていると、ふと何かを思い立った。

俺が冷蔵庫から取り出したのは酒、ミサと愛用のビール、えびちゆだ。

「シンジ君？それは…」

「失敬な、私は大学生だぞ。ビールの一つ飲ませろよ」

缶を開け、ビールを思い切り口に運ぶ。イッキ飲みは命にかかわるが別に問題ない。

だが本当にイッキ飲みはやばいから注意だぞ諸君。

「かあ〜っ！まつず!？」

「中学生の体だからね…」

「飲んで損した気分になったのは久々だ…」

だが安売り炭酸水を買った時の消失間は異常だ。

もはやただのしゅわしゅわシユワちゃんする水だからなあれ…

と、しばらくカヲルと雑談に興じているとカヲルが口を開く。

ちなみに俺は口直しに00コーラサワーを飲んでいる。

コーラ味が結構うまい。

「シンジ君」

「ん〜?」

「僕と一緒に月に行かないかい?」

「ブフううううう!？」

69・ほめられるのは悪くないはずです。(後書き)

こぼれ話

ユイ 「使徒が居なくなったら私たちはどうなるのかしら」  
シンジ 「廃棄じゃね？」

ユイ 「またまたご冗談を」

キョウコ 「いやあああああああああああああああ……………」

ユイ 「……………」

シンジ 「……………」



エピローグ・彼は大学生。普通の大学生です。

「うえぐ！ゲツホゴツホ…な…なんだってー！どういことだから君…！」

「言葉の通りさ、僕と一緒に月に行かないかい？」

「本音は？」

「一緒に月に行こう」

「かーらーのー？」

「月に行こう」

うん、聞き間違いじゃないようだ。俺も月に行くのかーそーなのか…

「阿呆、どうやって行けというのだ」

月に行くと言う地点でもはや眉唾ものだが、それ以前に移動時間、行く目的。

弱酸性のメリット。色々と心配事がある。

というか家に帰ってきて早々月に行かないか。とか言われたら誰だって引くわ。

よくて引く、悪くて卒倒だよ。

「ATフィールドが僕らを守るさ」

「ふざけんな。お前だけ守って俺だけ宇宙空間にポイするつもりか」

「君もATフィールドは張れるはずだよ？」

「俺は使徒じゃないぞ」

「使徒じゃなくてもだよ」

「使徒だからこそだろうが」

俺が反論するとカヲルがやれやれと溜息をついた。

「君の精神「40字以内でおk」ATフィールドを張りたいと望んだのは誰だい？」

「私だ」

「お前だったのか…じゃなくて…ああもう、じゃあ今日の夜までに準備していてくれないか？」

カヲルがイライラしながら俺に準備を促す。

そういえば俺も生身でATフィールドがはれるようになってるんだっただな。

初号機に取り込まれたときだっけ…

ってそつでなく！何で俺が月に行かなきゃならんだ！メリットを説明しろメリットを。

弱酸性だバーロー！！

「待て、とりあえず他の事は黙認しよう。まず何故俺が月に行かなきゃならんだ」

「僕の口からは答えられないよ」

カヲルが微笑みながら首を振る。

何故答えられない…って言ったら何かチンピラみたいになるからな。

まあ細かい事は気にしない。

「…俺にデメリットはありませんか？」

「少なくともそれはないよ。でもリリスやセカンドには会えなくなるね」

「…なん…だと…」



時空の流れは乱れてまた同じ場所でシンジ君は変わっていく。  
君はそのシンジ君という存在の一つの到達点なんだ。  
でもそのシンジ君がやり直すことでリセットされてしまつのは僕は嫌だ」

…訳分らん。

「…つまり俺はシンジの到達点で、その俺を残したいと？」

「そういうことだね」

「……………つまりやっぱ来いと？」

「そうだね」

「……………」

「……………（ニコニコ）」

「……………その無垢な微笑みやめてくんない？何か腹黒い」

結局俺は断る事ができず、荷物をまとめる事にした。

ミサトが入院してレイとアスカが寝ているこのときしかチャンスがない。

あと、テーブルに置手紙を置いておいた。

手紙の内容は

『シンジ、渚カヲル、月二出撃せり』

この一文だけだ。未練はちやっちやと取り払うことにした。

「いいのかい？ 挨拶なしで」

「かまわんよ。今更挨拶しても無駄なだけよ、あ、あとは…」

携帯でとある番号に電話した。

「あ、はい。いつもの奴を。え？ 量ですか？ じゃあその店にある奴全部で

料金の支払いは全部セルフ本部指令室で。着払いでお願いしまーす」

もちろんいつもの奴とは、ダンボールの事だ。

もうゲンドウにダンボールを送りつけることは出来ないだろう。だったらこれまでにない量を送りつけなければいい話だ。

「よし、これでOK。じゃあ…行きますか」

「そうだね、早く行かないと彼女らが起きてしまっからね。

さあ、僕の手を握ってくれ」

カヲルがベランダに立って、俺に手を差し出す。

おれはそれを無言で握り、共に目を瞑る。

「……………」

「……………」

「……………カヲル？」

…返事がない。集中してるのか？  
まあもっ少しだけ待っていようか。

……何も起きない

何でだ？と、目を開けると。

そこは暗い空、やたらと綺麗な星。  
見渡す限りの桃の木。

そして……

「……地球は……赤いじゃねえか……」

新劇の世界へと足を踏み入れた。

終劇

エピソード・彼は大学生。普通の大学生です。（後書き）

予告

ミサト「新劇の世界へと足を踏み入れた大学生。

自らの訪れた世界になれずに孤独になる。

渚カヲルの姿も見えず、独り身となった大学生。

そして開く次元のスキマ。

戸惑う彼。

そして彼が目覚めたその場所は…

次回「未定」

さーて！この次も！サービスサービスウ！」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3067u/>

---

目が覚めたらシンジになってた

2011年9月17日00時36分発行